

段に備へたりかくて其日の午の下刻はかりの事なるに佐々木勢和田和泉守を大將として磯野丹波守か備を目にかけ二千五百騎計宇曾川へさつと打入一文字に渡しける丹波守はかたきに川を越させてきはひをぬかして戦は、利有るへしと思ひ川より二町ばかり手前にひかへて居たりしかかたきに胃の鉢をうたる、まて矢も射出すへからすと下知したりければ敵一千計難なく川を越こなたの岸に打あかりおめきさけんて突掛る丹波守敵あひ五段計と見るより関をつくり突かくる和泉守は爰を先途と防けども丹波守喚叫て戦へは和泉守防兼て見ぬしか承禎は之を見て和泉うたすな味方の者共つ、けやものともと身をもたへて下知すれば進藤山城守平井加賀守後藤父子永原大炊助我一一と川を越て馳來る淺井此由見るよりも六番の備を崩して懸るへしと有ければ阿閉淡路守大野木土佐守三田村左衛門大夫野村兵庫頭同肥後守淺井玄蕃舍弟雅樂助其弟齋宮助など関を作り掛く突か、る又承禎方よりも子息義弼身をもんて宇曾川へ驅込は一萬計の人数一度に川へ驅入る味方の者共四方文字に働き一番に馳來り和田を川中へ追込平井進藤岸さかひにて踏と、まつて戦へは阿閉大野木野村か者とも一足も引す追立る義弼此よし見るより八千計の人数一度に備を崩して突掛る淺井此いきほひをぬかすなとて旗本を崩して切てか、る夫よりして川中にて戦ふもありこなたの岸にて戦ふもあり敵味方入みたれ半時か程は生死をわすれ黒煙を立て戦ふたりか、りける處に磯野丹波守阿閉淡路守二人首尾やよかりけん敵をさつと追散し川の向ひに打渡り横さまに割込戦へは江南勢なしかはたまるへき皆逃足に成けり新庄駿河守高宮三

河守中島宗左衛門は高宮に籠りしか高宮へは敵一人も向はされは一千計の勢にて味方の陣へかけ入少勢なれとも荒手なれば敵の馬手へ押廻す佐々木勢是を見て惣敗軍になりぬ長政は此競をぬかすなとて自ら川を渡り越しぬいや聲を立て追驅る承禎父子は味方ちり、に敗北すれば肥田の城へ取入る、事ならずして箕作さして退給ふ淺井は江南勢を思ひのま、に討取肥田の城へ押寄る高野瀬越中も防ぎ難くや思ひけん人質を出し降人となる既に其日も暮に及へは諸勢佐和山へ引取長政は十二日十三日兩日諸勢佐和山にて休息せしめ愛知川近邊仕置して小谷へ歸城し給ける其時皆人口すさみけるは武者は大將による者なり先年長政父久政は承禎に追立られしか又長政は江南勢を數日もへさるに悉追拂ひ敵に押領せられし地を切取犬上愛知の諸侍ふた、ひ歸參せし事は文武両道なるへしとて長政を感しける

美濃國齋藤か家臣日根野備中守淺井を美濃國へまねく事

かくて美濃國西方三人衆氏家常陸介稻葉伊豫守伊賀伊賀守此三人の者共織田上總介信長を引入此國のあるしとし面々の家長久に榮へきと評議相定信長卿へ忠節可仕旨内々手を入るよし風聞すれば日根野備中守此沙汰聞出し舍弟彌次右衛門尉を近付相談して申けるは西方三人の者共は信長を當國へ引入右兵衛佐龍興を討たてまつらんと相たくむのよし慥に聞出す是以て大將龍興の甲斐なく渡らせ給ふ故なり兎角龍興の體を見るに信長と一戦に及ぶともはか、しき事可有とも不覺又今まで頼む所の主君をかひなく討するも口惜かるへし當國は淺井に屬せし郡も多し其上右兵衛殿は本は淺井とも御一門なり今右兵衛殿御前

近江殿相果給ふといへとも淺井よも見はなたしいさや江州の淺井を當國へ引入先一戰をど
 けさせ其上にて永井隼人卷村牛之助丸毛兵庫頭など、相談して淺井と無事を繕ひ龍興を此
 國のかたはらに隱居させ備前守を稻葉にすへ其勢を以て我等兄弟さきかけし尾張の國へ亂
 れ入信長を討取當國ゆたかに可治はいかにと申ければ彌次右衛門尉承り宜しき御たくみ
 にて候いそき使者を遣し牒し合さるへきと申ける然は誰をか可遣と有しかはとかく家子
 日根野助右衛門を淺井方へ可遣とて助右衛門に手立の次第段々に申含め淺井玄蕃允方へ
 書札を相添江州へ遣しける日根野か使節小谷に到り玄蕃允に口上の趣申入れは玄蕃即長
 政にかくと申上る此儀評定すへきとて親にて渡らせ給ふ下野守久政を初めまいらせ淺井一
 家打寄如何可有との評議なりかゝりける所に赤尾美作守進み出て申ける此儀御家可榮
 吉兆なり先年祖父亮政公美濃國へ切入給ひ濃州まで過半切たかへ其上にて無事になり息
 女近江殿を龍興へ被遣しか今は此方の手下の者とも出仕もせず國境ひに罷在侍の分は御
 手下となり候へとも殘分は思ひくゝに押領す近江殿果給ひてより龍興殿通路もなしよき時
 分にて御座候其上日根野兄弟かく申上るよりしては濃州は早速御手に可入當國と濃州と
 の勢一つになり佐々木承禎を追拂ひ都へ切て入上るへき事何の子細候へき併日根野兄弟
 の心底堅め給ふへしと外を不恐申上る長政を初め一座各同心して日根野か使節に玄蕃私
 の使節を相添日根野許へ返しける備中守も彌次右衛門も玄蕃か使に對面して毛頭無偽旨
 深く誓紙を書きたゝめ玄蕃か使者に相渡すいそき罷歸り右の趣玄蕃に申玄蕃備前守殿へ誓

紙指上る長政を初近習外様の者までも悦はぬ者はなし

備前守長政美濃國へ出張の事

永祿六年三月中旬に淺井備前守長政は濃州へ可打立とて佐和山の城には醒々井權頭小蘆
 宮内大輔か息與一郎を籠置高宮には城主三河守に百々隱岐守相添籠置る肥田城には高野瀬
 越中守に與方二百人相添差置る小谷の城には父下野守に井口越前守千田采女正東左馬助横
 山和泉守をこめおき我身は其勢七千餘騎にて濃州表へ發向す先一番には磯野丹波守二番に
 三田村左衛門大夫野村肥後守同兵庫頭三番は堀遠江守四番は大野本土佐守五番は長政御旗
 本跡勢の大將には阿閉淡路守西野壹岐守なりかくて先勢はや垂井赤坂に着陣し近き在々所
 々を放火す稻葉山には此注進を聞よりも物頭共集りどやせんかくや有んと評議す中にも永
 井隼人進出申けるはどにもかくにも此國の滅亡今此時に究りぬ先足輕を出し淺井か勢の様
 子を見届其上にて長政と無事をつくるひ長政を同勢にして信長と無二の一戰とくへきなり
 いつれも如何と有ければ日根野元來心得ある事なれば尤と申けるされども國に歴々多き
 事なればいやく左様に候はす先一戰と望む者も多かりけり永井日向守重て申けるはいや
 其儀に候はす先年齋藤山城守殿と淺井の故備前守亮政と垂井赤坂にして度々合戦あれど
 も互に勝負なれば其上にて雙方中和をどけ今迄御家長久なり今度も一戰して其上にての
 儀なるへしと申ければ卷村牛之助道毛平左衛門同修理亮は是を聞尤宜き御たくみなり先勢
 を出すへしとて先一番に卷村野村二千餘騎にて馳向ふ二番に道毛平左衛門尉同修理亮千

五百餘騎にて相續てかけむかふ日根野兄弟は五百餘騎にて村の中に引かくす永井隼人二千餘騎にて同勢にて扣へたり淺井勢此由を見るよりも御影寺川の表へ人數操出し乗込んとせし時に赤尾美作守申様は山城殿の御家は宜き武勇の家なるを卒爾に大河を乗こえては如何なり先武者二三百乗越させ様子を見て其後川を打渡り一戰候へかしと申ければ長政聞給ひ使番を以磯野丹波守に右の旨被申付ければ丹波守承候とて若武者三百計川中へさつと打入御影寺の郷に陣を取る卷村此由見るよりも淺井か勢は河を越御影寺村に陣取と見えたり去なから川越たるは小勢なり跡に猛勢ひかへたり味方の手立を見て驅入せんと儀なるへし此方よりも先二三百出し合せ矢軍して其上にて人數を出し戦ふへしと有し處に永井甚之丞進み出申けるは味方の勢は二千餘騎なり敵の勢は漸二百には不可過先さきかけのやつはらを川中へ追込ん事何の子細有へきとて一番にすゝみければ卷村此由を聞貴殿の被甲所も候へとも我等存る子細あり先味方の若者二百はかり出合敵の振を見届くへしとて若武者二百計御影寺表へ押出す淺井勢は郷内をは不出矢鐵炮を放ちけり美濃勢郷きはまてのりかけく鐵炮をはなち入れ我もくく名乗れとも淺井方には一人もかけ出さすまつきつて居たりける永井甚之丞此由見るよりも淺井か勢は臆したり此方より勢を出して淺井か先手の者共を川中へ追込討取給へと有ければ卷村も野村も實にもとや思ひけん勢を崩して押よする磯野此よし見るよりも味方うたせて叶ふましと我等は河を乗越可申御備を近々よせられ候へと旗本へ一左右して一千餘騎にて川ひたくとうち渡り向ふの岸にさつ

と打あけ鬨の聲をそあけにける御影寺の郷の内に取籠る先勢の者共二百計面もふらす突掛る齋藤か勢も開き合て戦ふたりかゝりける處に磯野丹波守と名乗かけいさみにいさんて切てかゝる卷村野村も爰を先途と切結ふ磯野か兵強くして齋藤か兵共引色に見えし處を淺井か者共能時分と心得て堀遠江守三田村左衛門大夫大野木土佐守野村肥後守此四人の者共我先にと川を越おめきさけんで突かゝる卷村野村は之を見て人數引つれ一町計さつと引道毛平左衛門尉は備をたて向ふ敵を待居たり丹波守此由を見るよりも能き引取時分とれもひ敵をやうく追拂ひ勝鬨と作り首七八十計取勢をまどふて引にけり濃州勢も日も漸暮合に及へは稻葉山へそ引にける淺井か勢は御影寺村へ取籠り陣取て居たり斯て翌日二十日の未明に先勢を引つれ稻葉山の近所まで押よせ備をたて敵の強弱を見立注進すへしと磯野丹波守に被申付ければ承候とて御影寺村を打立江戸の川を前にあて備を立て居たりける大野木三田村堀野村も同じく人數段々に備へたり備前守も川を越御影寺村に本陣をすゆる去程に稻葉山には寄手の陣取し其次第を見て卒爾に軍す可らすとて卷村牛之助野村も稻葉山より討て出江戸川を前にあて陣取て居たりける道毛日根野も同じく後陣に扣へたり永井隼人は稻山葉より十町計此方に人數深々とそなへ置互に足輕二百三百つゝ出合川を隔て矢軍して對陣數日をふれば日根野は永井に近付中和の首尾を取繕ひ見申度と申ければ隼人承りよろしく候はん間御邊内縁を以て此段淺井方へ御肝煎候へと申せば日根野大に悦ひ淺井か陣所へ使をたて此由かくと申越ぬれば淺井か一家是を聞悦ふ事は限りなしかくて長政の

をみ給ふには家老共の子共を人質に取へきと日根野か方へ被申遣ければ相心得たりとて人質を渡す者もあり心得さると申者も有て一日くこのひにけり

佐々木承禎佐和山表へ働出る事

佐々木入道は先年肥田表にして淺井の若者に追立られ無念たくひなくおもひ其後勢をかりもよほしけれども終に味方すまねは首尾窺ふて居たりしに備前守長政は濃州へ働出佐和山の城主磯野丹波守も長政か供して今は彼城無勢なり是天のあたふる幸なりと思ひ子息義弼を近付相談たたまへは尤宜き仰なり此方より江北へ度々切入といへとも佐和山の城味方の御手に入申さるゆへ所々の小城たもちかたし丹波守も長政かとも仕なは城中無勢なるへし高宮の城を押置佐和山を攻取其いきほひを以て小谷へ押寄下野守に腹切せ年來のいきとをり散せはやくと申けるさあらは人数驅催しの手筈すへしとて家老の面々召集此儀如何と評議す中にも永原新左衛門進出て申けるは談合も事により候此時淺井を討とらすんはいつの時にか討へきそやはやく打立申さんと言葉をおらけて申けり此儀列座一同して永祿七年三月二十三日に永原安藝守同新左衛門尉山本將監小倉將監柏木左衛門大夫三井修理亮三雲親左衛門目賀多攝津守和田和泉守進藤山城守後藤但馬守伊庭美濃守河合の何某吉田出雲守かれらを宗徒の大將として一萬餘騎本道を打てをしよする高宮川原より柏木左衛門大夫山本將監永原新左衛門落合此四人其勢二千高宮と肥田の城を襲ふへしと引わけ先へ打せけるかくて江南勢佐和山の城へをしよせ関を嚙とあければ城中の者共少々関の聲

を合せ四方を堅めて防ける故城中不勢なりといへとも要害はよしとやく可落とも見えすされとも多勢取巻晝夜のさかひなく攻ければ小谷へ後巻せらるへしとて注進再三に及へり下野守は我此勢を以て後巻はかなひかたし兎角越前は縁ある國なれば加勢を乞へしとて同姓福壽庵を越前へさしこさる越前にいたり朝倉家老にたより此旨かくと頼ければ家老共集り此儀いかと思案をなす式部大輔申やうは淺井いかにたのむとも卒爾に數人を出しても取入事かなひかたかるへし然らば重て此國の大事たるへし先淺井には重て加勢可出との返事可然と申ければ列座同音に尤とを申ける福壽庵は力不及して小谷に歸り野州にかくと返事す野州越前の旨趣を聞是非に及はぬ次第なり此上なれば佐和山の城の落ぬ間に備前守を呼とれとて濃州へ使節を遣し先太尾へ勢を打あけ佐和山の味方の者共に力を可付とて山口越前守東野左馬助其勢都合七百にて太尾の古城へ取のほり向陣を張かくて備前守長政は此注進を聞給ひ如何に美濃國手に入とも佐和山を敵方へ乗取られ小谷落城に及ひなはなにを便に可働いかせん有ければ物頭の面々承御意尤に候此表を片時も早く御引取可然と同音に申ければさあらは江州へ人数を可入なりとつはらひは誰にかいひ付へきと面々異見を請給へは大野木三田村堀野村此四人の者共口を揃て申けるは磯野か勢は先かけにて再三骨を折候間今度は我々四人に被仰付候へ段々に人数を立くり引にのくへしと申せば長政聞給てよろしきとつはらひの次第をや去ながら此國は軍に功有者共多し殊に前後に大河をかへてあり赤尾美作守はいにしへより度々物馴たる老武者なれば今度は跡

に残り殿の下知を差給へど有しかは畏り候今度の殿の儀御安心おほしめし急き御人數引取給ふへし四人の衆に我等差加りなは恐くは可防とて五百餘騎の勢を引具し浮武者となり居たりけり

淺井三代記第十一終

淺井三代記第十二

淺井備前守江州へ引取事

去程に備前守長政は御影寺川へ馬をさつと乗入れは齋藤か勢の内卷村牛之助野村越中守などは中和の事少も同心せさりしか今淺井江州へ勢を引入るを幸と思ひ若武者二十三つ、弓鐵炮をはなちかけ我もくくと進みけり三田村左衛門大夫其勢五百計鶴翼に備へて居けるか敵近付は追拂ひ二三度計も討拂ひけるか卷村是を見てすはや時分はよきと思ひ一千計の勢を以て突驅れば三田村ははしはさへしか卷田野村に被追立大野木か備へさつと引大野木か手にて追つ返しつ火花をちらして戦ふたり美濃勢は鎧ふすまを作り面も不振切掛る大野木爰を先途と防け共いさみに勇む美濃勢なれば卷村肥後守か備へ引取ぬ美濃勢上村野村は此由を見て采拜を取て掛れくくと下知すれば先陣はすまねと後陣に勇める事なれば相共にみたれ入火出る程戦ふたり肥後守か備も色めけは美作守遊軍となつて居たりしか両備にて其間七八町餘も引取れば爰にては今一引ひきとらせたく思ひて居たりしか肥後か跡に扣し堀か勢うら崩して色めけは濃州勢はいよくいさみて突驅る美作守引かへて待てども如何なりと思ひ肥後か勢に馳加りて肥後殿も兵庫殿も討死したまへといひすて、鎧ふんはり立あかり荒言して名乗けるは只今かく名乗者はいかなる者と思ふらん淺井か内にて人々に見知れし赤尾美作といふ者なり卷村殿野村殿に見參と名乗かけおめきさけんで切てかゝる大野木も三田村も同じく名乗て切かゝる卷田野村は是を見て淺井殿の御内にさる

者ありとは聞及ふそあますなもらすな討取と下知すれば卷村か勢は今朝より度々の戦ひなれば草臥たり肥後美作か勢は荒手なればむらかる敵を突返すか斯ける處に敵方より蜂屋甚八郎と名乗かけ鎧をよこたへ取て返し美作に渡り合はしか程は戦しか赤尾か長刀を受はつし二つに成てそ死たりける赤尾か郎等飛かゝりやかて首を取たりける稻葉助七郎と名乗面も不振突かゝりしか肥後を見て此者をは某にたひ候へ赤尾殿と言すて、雙方の中へ飛入稻葉と鎧を合せたり稻葉上鎧に成て肥後か馬手の肩先を突けれ共肥後事ともせず十文字にて突たはし鎧を捨て飛驅り難なく首を討取ぬかゝりける處に犬塚次郎四郎と名乗肥後を討んと引返す赤尾美作守嫡子新兵衛尉と名乗かけ互に鎧を合ける新兵衛か郎等上水源次といふ者二人か中へわけ入て次郎四郎に切て掛る次郎四郎鎧をすて腰の刀を引ぬき両股切て落しける新兵衛は郎等をうたせ無念に思ひ走りかゝり次郎四郎と鎧を合新兵衛討勝次郎四郎か首を取肥後甥野村頼母助才次郎等も無比類はたらきし肥後眞先にて討死す江州勢それよりさつとかけてはさつと引段々引にける美濃勢も心はたけくいさめとも一日の戦ひに草臥たる勢なり味方の陣所へ引ければ江州勢跡をたはんどいさみしを赤尾大音わけ此いきはひに引取れとて御影寺川まで引取敵此由見るよりも川際まで追驅て討取とて荒手を入替したひ来る赤尾大野木三田村に向ひ申けるは敵合いまた杳なるそ此間に川を越よとて二千四百の兵川ひたゝと討渡りこなたの岸に驅著備を立てをくれし味方を待請る敵川際まで追驅跡にをくれし者共を十五六騎討取けるされとも敵川を越されは味方の勢を

打連れ駒をはやめて長政の本陣へ引取る今日の殿に濃州勢五六十騎討取は味方八九十も討れにけりかくて備前守長政けふのまつはらひの次第を聞給ひ今にはしめぬ事なれと赤尾父子か勸肥後守勸不淺事なりとて感悦にこそ預けれ敵もいなはに人數を打入ければ長政も江州さしていろかせける誠に今度美濃國にての次第は殘多き事共なりとにもかくにも長政の家運の程こそつたなければかくて磯野丹波守員正は備前守より先へ美濃路を打立佐和山へこゝろさし息をもつかす急きけるかはや先勢すり針時旗を上げれば佐々木勢は是を見て備前守こそ美濃の軍に討勝歸陣すと見ゆるを取込られてはかなふましとて上を下へと騒動す承禎父子は味方の體を見て淺井か多勢に討かこまれなは悪かりなん引取れ物頭共といひ捨て一番に引れば佐々木か者共佐和山の城を打捨て摠引に引取ける磯野は此由見るよりも駒をはやめて急けともはや悉く引取れば跡におくれし者共三十餘騎討取て備前守に注進す備前守聞給ひ今少はやくかけ付なは彼臆病もの、承禎を討取へきとのたまひて喧といふてを笑ひける

織田信長卿淺井長政縁者に望給ふ事

信長卿家老の者共を近付軍評定などして打より給ふ事侍りしか潜に宣ひけるやうは某近年數度敵と相戦ふに勝利を不得といふ事なし當國ははや平均に治め美濃國をも過半手に入たりといへとも江州の淺井長政美濃國へ働出内通する者有と聞又武將となる身の望なれば一度は帝都に旗を立てきと思ふなり面々も随分粉骨を抽て武畧智略をめぐらし給へ萬事は各

頼むとそなたまひけるかゝる處に佐久間右衛門尉進出て申けるは御誼尤にて御座候武將と
 しては一度は天下を平均に治め給ひてこそ御名末代にも残るへけれと申上れば信長卿重て
 被仰出けるは都までの道筋江州に佐々木六角承禎彼者の甥に義秀觀音城に侍る是は軍に
 ふき者と聞其上家中思ひ合す同國江北に淺井備前守長政此もの年若しといへども軍の器量
 に相當りたると聞ゆ當春も濃州御影寺にて齋藤右兵衛と合戦して右兵衛佐か人持家老共と
 内意有と聞ゆ美濃國に惣して淺井に屬したる兵共多し江州へ亂入攻といふとも年を重ねず
 は早速手に入かたかるへし此儀淺井をかたらひなは美濃國は早速手間入へからす京都への
 路次案内といひ何とそ此者を引入るに智略あるへし聞及に長政父むすひ置承禎か家老平井
 加賀守聲にて有しか此者十六の年妻を平井か方へ送り返し物頭共といひ合父を追込佐和山
 表へ勢を催し江南勢と野良田といふ所にして取合彼者共を悉追拂ひ押領の地を取返しける
 と聞此者祖父亮政は世に隠れなき弓取なれば定て今に能者あまた付たかひて有へし備前
 守を敵にしては早速上洛の儀いかゝなり未だ此者妻なきと聞よき折からに候へは備前守を
 聲に取らばやと思ふなり去なから淺井か家中に可然縁もなし面々の其中に便あらはよき
 にはからへとそ仰ける家老の者共承宜き御巧みにて御座候備前守に先驅させ御上洛可然
 とそ申けるかゝる處に不破河内守進出て申やうは我等少子細御座候て安養寺三郎左衛門と
 申者に只今に至まで不絶念比仕候間此者にたより首尾取持候て見可申と云ければ信長被
 聞召それは一段の儀なり急き此事可繕と仰られければ不破河内守江州小谷に到り安養寺

に此旨かくと内談す安養寺下野守久政に申上ければ久政は一門家老召集め此儀いかゝ有へ
 きと了簡を請給へは各申上けるは一段宜き御事なり去なから能々被爲示合御尤たるへし
 と同音に申上る先初てなれば重て相談可仕とて河内守をかへしける河内守此旨信長卿へ
 申上ければ信長卿宣ひけるは扱は淺井も同心と見えたれとも我等か存分引見んと思ふとや
 急又彼地へ立越首尾かたむへしとて不破河内守に内藤庄助を相添て差越る其時信長卿の仰
 には此方より縁者に望む上は我身の上をいにては何にても違背候まし美濃國の儀は此方
 より間近く渡り候へは我等切取へし是非所望候は、切取候とも可遣自今以後は諸事相
 談すへしとて只今は下野守方へ直に被仰越ければ二人の者共は江州に來り安養寺に此
 旨委申入ける安養寺やかて同道して登城し下野守に右の旨申ける備前守長政をはしめ一
 家不殘同心す下野守久政被申けるは美濃國の儀は此方の手下さへかまひなくは別の子
 細候まし信長定て當國へ亂入佐々木一家を追拂ひ近國なれば越前をも攻らるへし其時長
 政に先手など、有へきなり彼越前國は數年當國となし合殊に亮政代に役に立給ふ家なれ
 は今かく信長とむすひあは、いにしへの忠功をも忘れたるなど、越前朝倉に思はれなん
 も口惜かるへしいかゝあらんと申されける木村日向守進出申けるは仰尤にて御座候去な
 ら其段能々相斷御同心にて候は、姫君むかへ給ふへしと申ければ此儀可然とて信長の兩
 使に安養寺三郎左衛門川毛三河守中島宗左衛門三人相添信長卿の許へ遣しける信長對面し
 て某方より相望候縁者になる上は何にても相談次第と被仰ければ安養寺申上けるは長政

か親久政は年罷寄候へは義深き事を望候只今御前の鍵にては天下は早速御手に入候へし其時越前の朝倉淺井か家へ少子細御座候間越前の國の儀は御かまひなく立おかせられ候は、辱可存と申ける信長卿は聞給ひ尤なる被_レ申儀かないにしへの恩を被_レ存出事神妙なり越前の義景か儀は少も手さしすましきと心やすかれと被_レ仰ける安養寺重て申上けるは有難き御誼なり恐れながら其段御書一通可_レ被_レ下置と申上ければ信長やかて誓紙をなされ淺井か使節に被_レ下御暇給はる色々の馳走其外太刀など申請小谷に歸り淺井か父子に誓紙に口上の趣申上ければ殘る所なき首尾なりとて喜悅の眉をひらきけるそれより信長美濃國へ討入美濃一國も平均に治め其翌年の春信長卿の御妹おいち殿を娘分になされ家老には藤掛三河守を相添られ御興添には不破河内守内藤庄助を相付岐阜の城より出さる、御迎には安養寺三郎左衛門川毛三河守中島宗左衛門尉垂井まで罷越小谷へ御興入にけり此おいち殿は其比天下に隠れなき御生付と聞えける其後備前守長政岐阜へ參着いたし御禮可_レ申上と度々申遣けれども信長卿江州へ來り長政と相談をどくへき事有之間先々此方より一左右あるまで可_レ爲無用旨に付長政信長への對面は延引せり

義昭公江北矢島に移り給ふ事

こゝに足利義昭公は南都を落給ひて江南佐々木義秀は御一門の事なれば御頼被_レ成天下御再興可_レ被_レ成と思召甲賀郡和田和泉か許へは便りよきによりて先御移被_レ成ける此義秀は佐々木の嫡家なれとも二代以前より若年にて打つゝき早世せしゆへ定頼に國を預置又其子義

賢入道承禎おのつから我國となし政事をとりおこなひける承禎父子三好か一家に内意をかよはしけるよし義昭公供奉の細川兵部大輔藤孝聞出し和田か方にも滞在成かたくていか、あらんと案しけるか爰に江北小谷に居城する淺井は代々武勇の家なり此者御頼被_レ成三好一家の逆徒等を御退治可_レ被_レ遊とて先いにしへを思召出されけるか京極武藏守高秀卿(近江守ト不審)の許へ御書被_レ成下ければ此旨淺井に高秀卿被_レ仰ければ畏り存候とてやかて御迎に伺候し小谷の麓矢島野の救外寺にかりに御座をうつし奉る翌日より晝夜のさかひもなく御館普請を仕り淺井も則小谷より下り人數打圍て警固申奉り御馳走尤つくされける又近國より心ある衆は御見廻として馳走す時の御慰として木の本地藏上人罷出連歌など興行し御心をなくさめけるかくて翌年にもなりて御くしもとりにかゝりければ御髪を取わけさせ給ひ三好一家の逆徒を亡し給ひたく思召供奉の面々に相談をとけ給へとも江南の悪徒等何方へもつかすして國をさしふささければ天下の御大事を淺井引請申上るも身不肖恐れありと思ひけるか義昭公へ申上けるは越前國朝倉を御頼被_レ遊可_レ然と申上ければ尤なりと思召先御一門なれば若狭武田かもとへ御船にて藤孝はかり御供にて御越あり一ヶ月程ありて矢島へ御歸被_レ成永祿十年八月中旬に諸勢を前へ引取被_レ成ける其時淺井長政も越前への御案内として御供仕る其夜は越前今庄の宿に着座被_レ遊備前守は義景の許へ此段注進申ければ御迎に罷出則一乗の内安養寺と申寺へ御座をうつし奉り尊崇するといへとも天下の御大事の御役に立へきとも見えさりけりかくて義昭公越前に御座被_レ成候とてはかゝしき事有

へからすと思召其上卜筮をわけられ織田信長卿を御頼可被遊に事決定して細川兵部大輔藤孝上野中務大輔清信に御教書を添られ信長卿へ被遣ければ不斜悦ひて御請申上させ給ふ其後信長卿より義昭公御迎として不破河内守さしこさるゝ又路次の便りよければとて淺井備前守方へも義昭公御迎に差越候條其方よりもよきにはからふへしと有ければ淺井も同姓玄蕃允木村日向守同喜内助を不破河内守に相添て差遣しける去程に義昭公越前國一乗の谷を御立被遊同國今庄に一宿被遊翌日江州木の本地藏の寺に御着座被成地藏に御祈願や有けん參詣を被爲成三條定近の太刀一振鳥目等を佛前に備へ給ふ淺井備前守も罷出御供申上救外寺へ御座をうつし奉り父子共に罷出御馳走は限なし救外寺に兩日御滞留被成ける備前守御餞別として貞宗の太刀一振銀子五十枚鹿毛馬一疋奉る供の人々にもそれくの餞別して當國のさかひ藤川まで一千餘騎にて御供仕る信長卿より江州境まで菅屋九右衛門尉内藤庄助柴田修理亮を御迎に被越ける備前守それより御暇申上小谷へ歸り給ひける

右の次第信長記に詳なり少々の相違を書きし申候

淺井三代記第十二終

淺井三代記第十三

信長卿江州佐和山に來長政と初て對面の事

永正十一年七月二十八日に信長卿より淺井備前守方へ使節を以申させ給ふは貴殿數年我等と對面の儀を被申越けれとも路次のたよりもいかと思ひ堅く留置候相談を遂へき儀候條來る八日に犬上郡佐和山の城にして對面可申候間内々左様に心得給へと被仰越ければ備前守は佐和山の城主磯野丹波守か方へ被申越けるは信長はしめて當地へ被越事なれば隨分掃除等とりつくるふへしとありければ丹波守畏候とて其催をそしたりける備前守は一門家老召連れ佐和山へ罷越相圖の日限にはすり針峠まで迎に罷出て待たまふかくて信長卿は小性馬廻纒二百四五十騎にて出させ給ふ備前守御迎に是迄被出る事不淺とて御感悦不斜先へ被參候へと被仰けるに付長政は佐和山へ信長卿もそれより佐和山の城へ御着座あり備前守には一文字宗吉の御太刀並に鍵百本ちちら百端具足一領御馬一疋を引給ふ父久政には黄金五十枚御太刀一振を給はる淺井か家老一門不殘御禮申上ければそれくに引出物を賜はる中にも磯野丹波守には銀子三十枚祐光の太刀一振御馬を給はる三田村大野木淺井玄蕃二人には御太刀馬代をひかれけるかくて備前守不斜に悦ひ善をつくし美をつくし御馳走申はかりはなかりけり御酒宴數獻めくり幾十歳と舞うたふ翌日小谷の御前にも久しく對面不被成候故御逢被成度と被仰則小谷より迎よせ信長も與へ御入なされむつましく語らせ給ふ其の夜信長被仰けるは備前守長政は義深き仁にて候へは某か方へも可參など

おもはるへし只天下の御大事をかへて置なからあなたと日をついやすもいかなり明朝は當城をかり爰にて禮をうくへきと被仰ければ長政辭退す信長達て被仰に付其御請を申ける扱其夜は信長長政兩人奥へ御入被成夜中密談し給ふ後に承るに箕作攻手の事三好退治の御談合諸事義昭公の御上洛の御相談とぞ聞えける翌朝は長政父子を信長卿佐和山の城にて御振舞なり其時長政は家重代の備前兼光の太刀名を石わりといふ一腰近江綿二百把同しく國の名物布百疋月毛の馬一匹定家卿の藤川にて被遊し近江名所つくしの歌書二冊進上して御禮申上る父下野守久政は太刀折紙にて常ある通のさけ物一門家老をひかれける今度信長卿へ進上せらる備前の兼光の太刀は亮政秘藏せし打物なり備前守より備前兼光を信長へ送られしは備前守長政信長の爲に滅亡せられし前表なりとは後にぞ思ひまられたるかくて信長卿は濃州より兼てたくまれし事なればさまの珍物を相とへの其日終日のもてなしにて残る所もなかりしうへに信長卿長政の家老共に宣ふは面々よくきかれよ長政かく某か子分に罷成上は日本國中は兩旗にて可治隨分粉骨を抽てらるへしさもあらは各を大名に取立へしとさもありけに仰られけるかくて翌日十一日には佐和山浦にて大綱をおろし御馳走有しに鯉鮒其外の魚類夥し信長卿御感尤甚しくして美濃にしては如此なくさみはあるへからすことさら當國の名物なれば御歸城にもたせらるへきとぞのたまひける其夜備前守と内談ありて翌日佐々木一家の者共方へ先心をうかひ見はやと

て義昭公の御使節に信長私の使相添申入給ふは京都の逆徒三好を追罰被成度思召に付某其仰承候て此地迄罷越候御味方に參るへし本意をとけらるゝにおひては無二の忠節たるへき旨申入させ給へとも曾以御請申さすお返し返し三度被遣けれども終に承引せされは重て軍勢を率し攻へし長政も勢をもよほし出張せらるへき旨堅く契約ましゝて十日あまり御滞留被成同しく二十日に岐阜へ御歸座可被成と有ければ御名残の酒宴數刻に及し故に其日は柏原の常菩提院に御一宿と相定て長政もすり針峠迄御送り申されしとなり領分の事なれば御馳走にて遠藤喜右衛門尉淺井縫殿助中島九郎次郎三人承りにて彼御宿所に馳參し御座の用意をつくるひける

遠藤喜右衛門尉小谷へ馳歸る事

かくて信長卿は常菩提院へ御入被成此地は長政領知なれば御心安くおほしめさるゝとて御供の侍共は町屋に置給ひて御近習の小性衆當番役の共者はかりにておはします去程に遠藤喜右衛門尉は馬にむち打もろ鎧にて小谷へ馳歸り長政に逢ひ一間所にて申けるは此中信長卿の様體見奉るに物毎に御氣をつけらるゝ事誠に猿猴の梢をつたふか如し發明なる事鏡に影のうつるか如くなる大將なり御前行末まで信長卿の御氣にあはせ給ふ事なりかたかるへし所詮只今此地にて御討被成事御尤と存るなり信長卿はいかにも打解させ給ひて馬廻の面々も皆宿々へ返し給ひて御傍には小姓當番役十四五人ならてはこれなし御同心にて御座候はゞ私一人として討奉るへし急ぎ思召立給ひ御人數被出二百餘騎の侍共悉討取其い

きはひに濃州岐阜へ押寄する物ならは大将はうたれ給ふなり残る武士共は皆味方に可參然らば尾張國も早速に御手に入可申其いきほひを以て佐々木一家を追拂ひ都に旗をあけ給ひ三好を追討に被成に何の子細の候へきと一口に申上ければ長政は聞給ひ遠藤か詞も用ゐすのたまひけるは信長我等を心安く打とけ親子の如くにおもはるゝ故人數もめしつれすして當國に永々滯留したまふなり是非可討と存なは此中佐和山にして一刀にさしころすへきは安けれど武將となる身の心得あり謀を以て打は是をゆるす頼みて來るを打事是をゆるさす今信長のことくに御心もおかせ給はずして居給ふを打なは一旦利有とも終には天のせめをかうふるへしと宣ひて少も同心し給はねは遠藤は承り後には御悔み草ともなるへきなりよく御思案被成よとて又引返し柏原に懸つけさちぬ體にて御馳走申上翌日關ヶ原まで見送り奉る

信長卿朝井長政入洛附江南落城の事

備前守長政は信長卿より御入洛の日限兼て示合せし事なれば留主中國中の仕置申付永祿十一年九月六日に佐和山の城にいたり信長卿を相待處に江南所々の城主共淺井方へ通して信長卿の御味方可仕といふもの多し其比江南には承禎子息義弼事の子細候て後藤父子を討し故家中我かちになり箕作をうとみはてたる故淺井を頼み來たる者數をしらすされとも家老分は義を守る故か三好に心をかよはしけるゆへにか降參すへき氣色もなしかくて信長卿は御入洛有へきの間加勢可被成の段被仰遣ければ家康卿より小笠原與八郎に二千餘騎の

勢を相添上せらる信長卿も尾州濃州三州の三ヶ國の勢をかりもよほし同しく八日居城岐阜を御立有ければ先勢は江州醒か井柏原に着陣すれとも後陣は濃州地をはなれす人數みちたり急き給へは其夜は江州淺井の領内常菩提院に本陣をすへ給ふ翌日佐和山の城へ打入給ひ人數くはりを淺井と相談ある淺井當國の事なれば兼て案内殘所なし一々御指圖申上らる重て信長卿のたまひけるは長政は觀音城の押へを可被仕と有ければ畏存候併我等の者共は爰許の案内よく鍛練仕候間攻手を一方被仰付候へかしと申上られければ信長卿觀音城のおさへ大事と淺井存する故如此申と思ひ給ふか其儀に候は、箕作を攻らるへしとぞ仰ける淺井其時の内意は佐々木六角の家には代々久敷當國に任せし家又は只今信長と縁者によりさへきつて働とおもはれんもいかゝと思ひ給ふゆへなり一には一戰おはりなは中和をつくらふへきとの所存なり度々此承禎とは相戰ふといへとも同國なれば情深くをおもはれける

箕作落居の次第信長記にあらまし出申候ゆへ畧仕候

淺井江南の路次の押へに箕作の城に籠る事

かくて信長卿箕作の城觀音寺の城長光寺の城八幡山の城を初め打破り通り給へとも承禎は愛知郡鯉江の城に楯籠る其外所々山々に楯籠る所の城主其數を不知茲かりといへとも信長都へ御急き被成故先道筋計を追拂ひ同しく二十三日迄觀音城に逗留ありて長政に被仰けるは承禎父子の逆徒三好と兼て何事を計置もなれざるなり其上義昭公の御供仕某上洛せ

は近所なれば相坂邊へ馳集り前後を可_レ包と計置もなれされは貴殿は箕作の城觀音城兩城の留主を頼なり跡に残り江南の城持共を味方にまねくへしと被_レ仰ければ長政承り被_レ申けるは仰は尤にて御坐候へとも今度の御大事の供にはつれ申事残多し是非上洛を望給へとも信長達て仰けるは當國の殘徒所々に楯籠る間無_レ心許存るなり偏に頼とおほせければ長政は其勢六千餘騎にて箕作の城觀音城兩城に楯籠り佐々木か殘黨をまねき寄るかくて信長卿は京都制法事故なく取行ひ給ひ其年の霜月下旬に歸國したまふ又觀音城に入たまひ一日滯留被_レ成長光寺の城に柴田修理美作の城に木下藤吉郎に與力數多相添入かへられ淺井は本城小谷へと被_レ歸ける

長政上洛附二條喧嘩の事

斯て京都本國寺におはします義昭公の許へ三好か一家正月三日に押込て急難にあはせ給ふ旨岐阜へ注進有しかは信長聞かけに馳上り給ふ淺井も聞よりはやく上らるゝ間信長卿より一日先へ打て參着すされとも將軍恙も渡らせ給はすして寄手悉敗軍する故長政は清水寺成就院を宿坊と定めて居給ひける信長卿も同じく十日の日御上着被_レ成一條妙覺寺を御宿坊と被_レ遊けるに洛中の名人等我もくゝと縁を取御目見申上る信長卿御前へ召出され對面し給ひ被_レ仰けるば清水寺に着坐する淺井備前守長政は我等か大切に存するむこなり彼者か方へも見まはれよと被_レ仰ければ淺井威勢はつものりけりかくて信長卿將軍義昭公へ被_レ仰上げるは今度の急難に被_レ爲_レ逢候事も偏に御坐所あしき故なり今度は本の御所を普請可_レ仕

と被_レ仰上則畿内近國の人歩を入二條の御所をは四方へ一町つゝひろけ可_レ申との評議なり御普請は信長卿と長政と兩將として請取給ひける則信長卿の奉行には佐久間右衛門尉柴田修理亮森三左衛門に弓鐵炮者相添らる淺井方の奉行には三田村左衛門大夫大野木土佐守野村肥後守三人に申付らるかくて去年淺井箕作の城の攻手の時働にふく候故信長卿の弓鐵炮の者共淺井足輕共を内々雜言す又奉行に付居る者共も是を聞内々無念におもひしに佐久間右衛門尉丁場より三田村左衛門大夫か丁場へ水をかへ込候處に左衛門大夫か侍是を見て某か丁場へ水をかへ入る筈にて候や子細可_レ承と申ければ佐久間か侍共申けるは其方の請取の丁場へすすして何方へ持はこふへき何淺井のぬる若か者共といよゝゝ水をかへこめは淺井か足輕共は聞かねて三百計一度に簀の棒をはつし佐久間か者共とたゝき合けるか淺井か者共つよくして佐久間か者共を追立るそれよりして森佐久間柴田見かね打物のさやはすしかゝれゝと下知をする淺井方にも兼て無念に思へば三田村大野木野村三人一度に切てかゝる追つ返しつすはたにて戦ふたりかゝりける處に淺井か侍共聞かけに集り森柴田を立賣堀川迄追立る又信長の物頭共にも聞かけに出合淺井か勢を二條迄追下す又淺井か荒手二百計馳來り信長の者共を立賣迄追立雙方相引にのきにけり其時兩方にて討るゝ者百五十とそ申ける野合の合戦にもか程多くは討るましきにかく大きな喧嘩は候はしと京中にての評議也森柴田は信長卿の御前に伺候して右の次第を申上淺井に御目見せよきゆへ如此の狼藉仕候間今度は淺井に一入付可_レ申と御訴訟申上る信長卿喧嘩の次第一々御吟味被_レ成

被仰けるは去年箕作を攻る時淺井かふりにふきゆへ汝等か者共雜言かな申つらん淺井か家は弓矢取てはまれあるをかさねてもかまへてくかさつなる事申かけ不覺を取なと被仰てさらぬ體にておはしましければ森柴田も信長卿取上させ給はねはいきはひか、つて居たりし者共もせん方なくて居たりける淺井此喧嘩の旨を聞自然信長方より人數を可寄かどて清水寺に人數の手あてをして居たりける翌日に公方より信長淺井兩人か者共和睦可申付とて御宿坊に被仰付各和睦したりけるかくて普請成就して公方御座をうつされける公方わたまし信長記に詳なり

淺井備前守心替りの事

徳川家康卿年始に御上洛ましませは御同心なされ越前國へ發向有へきと内談し給へは森三左衛門尉坂井右近と申上けるは御誼の通尤には奉存候へとも此由淺井に御しらせ候て其上にて御進發可然御坐候はんと申上る信長聞召淺井にまらせなはよし越前を攻よと申さし其上朝倉のぬく若は我等方へ使節をも越されはよも此信長に屬せんとは申ましとかく淺井か方には案内なしに越前を攻る事勝手よかるへしとて被仰ける森柴田重て申けるは淺井恨はいか、と申上ければ我等とは親子の間なれはいかて思ひかへんとて元龜元年四月二十日諸卒引具し西近江路にか、つて若狭路に出させ給ひ手筒金崎の城を攻給ふかくて此旨淺井下野守久政聞付子息長政の館へ行近習外様の者迄もよひよせ申されけるは今度信長此方へ一言の案内にも不及して越前へ攻入手筒の城を攻取たると聞えたりといふをいつ

れも其段聞つらん越前を攻取其引足にて定て當國へみたれ入一門顔にて當城へ馳來り可攻との事なるへしとかく越前の國の堅固なる間に越前と一味して信長を可討なりと申出されたり子息備前守をはしめまいらせなみ居たる面々とかくの言語もなくまづかへつて居たりける久政重て申されけるは信長の輕薄者は先年長政縁者になる時に天下平均におさむるとも越前の國の儀は淺井か指圖にまかすへきと堅く誓紙をかゝるれとそれをも事としたまはす越前へ踏込て今かく攻らるゝ人なれば頼かひはあるへからざるを備前守と申されける長政心に思ひ給ふは今かく信長は國多く攻取虎狼の勢をもあさむく程の威なるに義景と同心して信長を可討とも不覺とかくの返事もまはねは遠藤喜右衛門尉進み出て申けるは長政公の御意なきことは道理なれ雙方御背被成かたき所なり併信長卿は最早只今は美濃尾張三河伊勢若狹當國丹後五畿内の主として發明なる大將なり越前勢と此方の御勢を以て信長を討奉らん事憚多き事なれとも越前は先代に恩ある國の事なれば誰なりとも人持衆に御人數相添られ一千計も御加勢候て其上にて無事を御つくるひ可然と推參申す野州此旨を聞大に立腹して申されけるは汝等末坐の侍として推參申様かなとあらゝかに怒り座敷を立てて被歸ける長政も家の子も此儀いか、と案しける赤尾美作守下野守方へ行申されけるは只今信長の越前を攻給ふ事は尤なりゆへはいかんとなれば信長上洛度々なるに義景より一度も使節なし近國悉信長御手に入候に我々は構なきとおもひ其禮儀もなき事立腹したまひ攻らるゝ物にて御坐あるへし遠藤か申如く磯野丹波守に被仰付信長へ萬事

の御かまひなく御見廻に被遣此越前國は淺井か家に恩ある國にて御坐候間其表へ罷出不申候と被仰遣尤と申ければ久政立腹して汝等迄も左様に義の違ひたる事申か所詮此年寄にまは腹切との事なるへしとて身をもたえ怒ける中にも淺井石見守木村日向守などは久政の御意ある旨も尤なり信長に付奉るも行末頼母子くも不覺候間越前へ使者を立よく喋し合せらるへきと同音に申せは久政も時の急を逃るへきと、かく天運の末と思ひ切其儀にて候は、長政の仰にはまたかひ可申上候へども此朝倉はかくしく働出る事なるへき人と不_レ思候間諸事對陣の義は此方指圖可仕候間あしかるに驅引せらるへき旨久政公よりよく被_レ仰遣可然と宣へは久政やかて同姓福壽庵木村喜内助を越前一乗谷朝倉の許へ申遣されける兩使越前にいたり義景へ書札相渡しかくと申ければ義景大に喜悅して一門家老近付淺井書札の通よみ給ひ誠に淺井父子の心底は金鐵ともいつへし先代の恩を思ひ出て現在縁者の信長をそむき某に組すへきと申さる事古今稀なる弓取かなと満坐一同に感悅す其後兩使朝倉へ申入けるは信長此表を引取給は、江州小谷へ取かけらるへし其時節早速御出馬被_レ成矢鳥野にして無二の一戦を被_レ成信長を討取御分別肝要にて御座候と申ければ何時なりとも一左右次第即時に馳付可申とを申ける淺井兩使左様に思召候は、誓紙を一通可給と望みければ義景も此際に候へは望所の幸と被_レ存長政父子指圖に違背候はしとてやかて誓紙を出されけるそれより兩使小谷に歸り義景一家の誓紙をさし出す久政父子一門家老よろこひは限なしかくて長政申されけるは先年信長と縁者になる時誓紙越され候

なり明日爲_レ持候て返すへし其者に引つ、き山中道を差ふさき越前勢と近江勢として前後を取切包討に可討とありければ久政此由を聞いやく其儀に非ず義景と相談しよきつはへをひきよせ心靜に可討なり此度人數出す事堅く無用と制しければ長政力及はすして信長卿より内室の家老として付越さる、藤掛三河守熊谷忠兵衛を相添信長卿の許へを遣しけるか、りける處に信長卿の御前には淺井謀叛の旨取々評議すれども長政やはか心替せしと御承引をもまたまはねは御前なる人々慥に左様に申など、いひもはてさるに藤掛三河守熊谷忠兵衛兩人右件之誓紙を返上申上淺井口上の趣申上ければ信長卿をはしめ宗徒の人々上を下へと周章き十方にくれておはします信長既に御腹めさるへきとて御身をもませらる、處に徳川家康卿信長卿の御前に進み出させ被_レ仰けるは無_レ勿體御事なり命を全して敵をはるはすこそ良將ともいふへけれ御腹なさるへきとはあさましき御心底なりと忠諫をなし給へは信長卿は聞給ひ御邊仰らる、事はさる事なれども我等足永に出張し敵の中に居るといひ難所は前後にか、へつ淺井か方より人數を出し切所のつまりく、に立置鳥も通ふ事なるへからず當國勢につ、まれ賤敷者の手にか、らんよりは心まつかに腹切へしとて御手に汗を握り給ふ家康卿重て被_レ仰けるは今度の議は某次第に可_レ被_レ遊先某若狭路より西近江路へ懸とほり様子を見候へし某難なく通りなは敵なきと思召追付引取給ふへし若江州山中邊に敵出合なは其所より一左右可仕其時は御分別次第になさるへしと被_レ仰ければともかくも御邊次第とのたまへは路次中の事かたく手筈を御申合越前敦賀を御立被_レ成若狭路へ懸り

それより江州山中を過給へ共敵一人も出されは舟木の浦へ着給ひ其村の長多羅尾治郎大夫を深く頼ませそれより御舟にめされ南近江津磨浦へ上らせ給ひそれより千種越に濃州つやせいしへ出三州岡崎に歸城したまひける

越前敦賀表まつはらひの次第信長卿歸國の次第以前信長記の抜書にまゐるし差上申候條畧仕候

淺井朝倉を呼出すに不被出事付重て使を遣す事

かくて淺井備前守長政は物頭共をよひ集め軍評議して申けるは信長越前を引取京都に逗留と聞えたり就其江南佐々本承禎も所々の味方を驅催し信長歸國を相待といふ是よき幸なり越前の朝倉左衛門大夫義景をよひ出し彼を同勢として濃州へ切入岐阜を即時に切落し申へし其時信長馳歸可被申江州路へ被來ものならは佐和山表にて可戰伊勢路へかゝりなは濃州の内おこし洲の股にて可戰此儀利有へしと相談をこはれけるに一座同音に尤と請たりける左候は、越前へ一左右すへしとて川毛三河守淺井福壽庵を指越さる兩使越前に至り義景へ軍の段々申入れは義景も一門家老打寄評定とりなりや、あつて家老共申けるはいかに信長留守なりともはるく美濃路へのり出し敵に跡先をつまればなはいかにたけくはやるとも利有へきともおほえすよく御思案可被成と口々に申ければ義景もけにもとおもはれける中にも魚住玄蕃山崎長門守進み出て申様には何も家老中の御分別尤には候へとも軍と申ものは昔より今に至る迄手されたる事候はては勝利すくなき物にて御座候と

聞及び申候其上淺井信長に敵をし味方に組せし事頼もしき心底なり是非思召立給ひ淺井と示合一戰とのそめとも残る人々は少も承引なかりける故淺井方への返事には信長定て貴殿の御居城小谷へ押寄らるへし其時當國より大軍を率し二手に分ち中道上道雙方へ押し後巻をすへきなり其時城中より切て出切所へ敵を引うけ攻戰は、勝利これに過しと被申越出張はやみにけり淺井か兩使小谷に歸此段を申せは長政は聞給ひ義景の心底もまれたるかくのひくゝに捨をかは信長の物はやき大將に討勝事は十か一も不覺父の仰といひながらよしなき人と組せし事家運のつくる所なりと立腹かきりはなかりけり其後又木村喜内助と赤尾兵庫を以て義景の方へ申されけるは信長下着被申候は、追付當國へ可亂入候條加勢可給國境に要害を拵入置關ヶ原表にて相さへ可申と申遣しければ其時は淺井使の趣尤なりと思ひけん朝倉式部大輔三千餘騎にて小谷へ来るやかて江州と美濃の國のさかひ長久山菊安に要害を拵越前勢三千朝倉式部大輔大將にて籠置る同しく今洲口長亭軒の要害をかまへ堀次郎を籠置る此次郎父の遠江守病死して次郎當年八歳なれば家老の樋口三郎兵衛兼益と多良右近楯籠る多良も堀か家臣なり近所本郷の城は黒田長兵衛尉を入置たまふ右の城の根城として横山の城には三田村左衛門大夫秀俊大野木土佐守國定野村肥後守貞元同兵庫頭直次彼等四人を籠置濃州より江北への通路をさしふさきてを置給ふ

淺井三代記第十三終

淺井三代記第十四

堀か家臣樋口三郎兵衛謀叛の事

信長卿は京都より歸國の道すから所々にて難逢といへども御運天命に助けらるゝか恙も
わたらせ給はず岐阜に歸坐まし〜て諸勢を去はらくやすめ給ふある時木下藤吉郎秀吉を
召て宣ひけるは淺井籠城をかまへ當國と江北のさかひに要害多くかまへ置當國より切入事
たやすくかなひかたし我つら〜思案するに長亭軒に楯籠る堀次郎は未だ幼少たる故樋口
三郎兵衛万事はからひたるへ〜と思ふなり此樋口は淺井内にては又者なりといへども大剛
の者なり此者を何とぞ才覺をいたし味方へ引入たきとおもふなり竹中半兵衛尉と相談を
くへし此竹中は國を隔たりといへどもいにしへは淺井に屬せし者なり其上堀か住城門根と
菩提は其間近ければ定て樋口とも其間むつましかるへしよ〜思慮をめぐらすへしと内
意種々被仰ければ秀吉承り候とて同國菩提へ來り竹中に逢ひ此由かくと語れば内々申通
ては候へども樋口と申者義理の深き者にて御座候間御味方に參り可申とは不存候されど
も信長卿の御意に候へは随分かたらひ見可申とて秀吉を岐阜の城へそかへしけるかくて
竹中以書札樋口に申入けるは貴殿に少々相談をとけたきこと候條御透に候は、罷越へき
旨申送りければ樋口返事には日比は去たしく申通候へども此節は互に參會はなり申ましき
由を返事す其後竹中より二三度も使節を差越けれども樋口終に對面せず竹中心よ思ふ様は
されはとよ義深き者なるを此度は直に我等參是非とも對面して此段委しく可申入と思ひ

竹中菩提を立長亭軒に至り三郎兵衛か方へ行半兵衛是へ參候と申入ければ三郎兵衛も立出
柵を隔て對面す半兵衛申けるは久敷對面不申候只今は剩去たしき中も敵味方と引別るゝ
明日の命も去らされは名殘を今一度可申入と存來り候なりと有ければ三郎兵衛半兵衛を
一間所へ引入互に世間を語りけるかや、あつて半兵衛語り出しけるは信長卿御邊を味方に
頼度と種々様々の仰なり能々思案ありて堀殿の御家長久に守立給ひ可然候はんとぞ申け
る樋口初の間は中々承引せさりしか竹中理をつくして申せしゆへ樋口同心し左様に候は、
多良右近など、相談し重て御請可申上とて竹中をこそかへしけるさてそれより樋口多良
に近付右のあらましを語りければ多良もいか〜と思案をす樋口重て申けるは信長に付奉る
ども行末頼もしくは候ましけれども次郎殿若年なれば是にて唯今うたれんより逆心をいた
し五三年も命をのへ次郎殿を守立成人いたさせ其後はともかくも天運にまかせ候はんや此
二ツに一ツを各分別可有とぞ申けるいづれも家老の者共承て如仰信長とて末頼もしく
はあるへからすされども當城へ數萬の勢を引請討死をとけんより信長へ同心して今日の命
をのへ給ひて若殿の御成人を可待なりと同音に一統して心替に決定し則樋口は男子もた
されは女子一人多良は男子を差上るとて竹中か方へ申遣しければ竹中出合やかて兩家老か
人質等を請取木下藤吉郎秀吉の方へ右の通注進す秀吉は竹中を引連信長の御前に罷出一々
次第を申上られければ汝等か智畧不淺とて喜悅限りはなかりけり竹中に時の褒美として
御よろひ一領太刀一振黄金等を給はる江北謀叛の人樋口多良兩人竹中か許へ來り信長に御

申上と有ければ則同心して秀吉に引渡す信長へ斯と申給へはやかて對面有て種々御馳走禮可被成江北の城取嶮難の地一々御尋被成御感不斜して則堀には本領安堵の御教書被下兩人の者には先時の褒美として黄金五十兩つゝ太刀を相添られてを被下ける堀か城へ信長卿よりも木下藤吉郎に弓鐵炮の者五十人つゝ相副へられ樋口にそへて籠置るかくて長亭軒近所長久菟安兩城に楯籠る越前よりの加勢朝倉式部大輔堀逆心して信長勢引入るとおもひ淺井には一言の案内にもおよはずして三千餘騎引具し元龜元年六月八日の夜中越前國さして落にけり淺井樋口か次第を聞又は越前の加勢の者共の落けるを聞立腹限りなし既に人數を出し堀か居城を可攻と評議したまへとも信長より堀か加勢に秀吉を籠置れければたやすくは落へからず城の落さる内に信長後卷せは取入らるゝ事いかゝと思案して延引す

信長卿江北進發の事

去程に信長卿は物頭共召集め宣ひけるは内々江北淺井父子の者どもを攻へきと思案すれども國さかひの要害とも切所を引請楯籠りければたやすく江北へふみ入候事かなひかたくして居たりける處に木下藤吉郎竹中半兵衛調略として堀次郎か家臣兩人味方に引入ければ付城の面々要害を夜中に開退のよし堀か居城本郷より注進す然れば江北進發にたよりよし諸勢に支度を觸まはすへしとて六月十二日ふれまはし同十八日に數萬騎を引牽し江北小田村に本陣をすへ給ふ翌日十九日御小姓衆只五六人はかりめしつれられ近所横山の城の様體攻口等一々巡見被遊此城は先押置淺井に一しは付可申とて横山の城のおさへには今度味

方に參候堀か人數と水野下野守織田上野介丹羽五郎左衛門尉を殘し置諸勢小谷表へおし出し給ふへきとて一番に坂井右近森三左衛門尉兩先手二番に柴田修理亮佐々内藏助前田又左衛門尉齋藤新五三番と市橋九郎左衛門尉佐藤六左衛門尉塚本小大膳不破河内守丸毛兵庫頭四番佐久間右衛門尉蜂屋築田出羽守中條將監五番に御旗本と定められ人數段々に組み佐野今庄上野にまはらく陣取小谷の様子を御覽被成けれと人數も出さゝると見て平押におし來り在々所々一字も不殘放火し給ひける長政此よしを見て物頭面々を近付申されけるは信長定て當城へ押寄町表を打破り様子により取巻攻めらるゝ事も有へしとあらんにおひては城中ひそかに持堅め町屋をも破らせ手の透を窺ひ城中より眞黒につきかゝりなは田川近邊は難所なり即時に引取かたかるへし明日は無二の一戦をどくへきなり面々も其支度可仕と申されければ家の子共それはよからぬ御手立かな寄手人數を一段くゝに組み備へまよりによする猛勢を味方わつかの小勢にて城中より切て出るとも何ぞ勝利を得へきや先此度は城中堅固に持かため義景出陣を待うけもみ合て戦ひなは勝利是に過しとて家老の者共同心せされは長政も其分を差置れけるかくて信長卿は兼て手筈を仰付おかれければ先小谷山の西雲雀山へは佐藤六左衛門尉坂井右近齋藤新五市橋九郎左衛門尉塚本小大膳不破河内守丸毛兵庫頭其勢八千餘騎にて取上り人數を立置小谷山の西尊照寺表へは柴田修理亮内藤庄助佐々内藏助前田又左衛門尉林新三郎など押寄る小谷の東木野尾表へは森三左衛門菅屋丸右衛門尉福富平左衛門尉築田出羽守木下藤吉郎押寄らる信長卿本陣は虎御前山にすへさ

せ右の手分の軍兵共小谷の麓へ亂入町表を打破り懸をり放火せしかども城中には少もかまはすまつまりかへつて居たりける西は馬上東は雨立迄焼立ける諸勢其夜は矢鳥野に野陣を張て居たりけるかくて備前守長政申されけるは明日二十二日の未明より寄手人數を横山表へひき取へしその勢半分程矢鳥表を過る時分に當城より淺見大學を大將にして若者二三百人はと出し弓鐵炮を打込へし味方小勢なれば寄手かまはず引取へし其時一千餘騎を相添淺井玄蕃を大將にて出し跡をたふへし定てまつはらひは森柴田にて有へし此者共軍に功ある者共なればよき圖にとつて返すへし其時味方の勢敗北すへし又我等二三千の勢を引具しまつはらひにひしとつき戦ふ物ならは寄手は退したる勢なれば踏と、まる事なるへからす惣していにしへより大軍退立ふみとむる事あらされは當城より横山表迄は五十町の所なれば横山邊迄追立へし其時所々の付城の者共も出合なは定て信長も可討取なり若寄手つよくして味方敗軍せば我等運命是迄なりとおもひ討死をとくへきを各も供してたへと申されけり家老の面々承御手立は尤よろしく可有御座候へとも越前朝倉殿近日此表へ出給へは只今味方小勢にてあやうき事を思召立給はんより暫またせ給へとも再三にとむる長政重て申させ給ふは義景早速に出らるゝ物ならは面々か申所も候へとも義景の此程の當國への返事を聞にはかゝしき事は有まじ信長は手早き人なれば横山城を攻落し當城へ押よせ幾重ともなく取まかれなは味方の勇氣次第くによはるへし其時いかに悔とも益あらし明日の軍は圖にあたり候へは十分勝有へしとて一筋に思ひ切止へき氣色もなかりければ木村日向

守川毛三河守中島宗左衛門など下野守久政の館に行右の次第一々申上る久政聞もあへす長政の館へ來り長政をはしめ家老物頭共に對面して申されけるは明日味方より勢を出し可戰との評議ありと聞信長數萬の猛勢味方小勢にて切て出る物ならは信長味方を追込付入に此城をどらん事案の内なり今少相待義景を同心せば勢の三萬も有へし其勢に此方の勢を打合一戰可然とを申されける長政承御意御尤にては候へとも義景早速に出られ申まじきなり是非明日は一戰の勝負とけ運命を天に任すへしと有ければ久政重て申されけるは汝かいふ所もあるへけれとも先此度は我等にまかせ置るへし義景も家の年寄とも、我身の大事の事をしらすぬ事はよもあらし一兩日の其内に定て出張有へきをそしはらく相待へきとをどめ給ふかゝる處に遠藤喜右衛門尉外をは、からす罷出申けるはとて義景の出張はあるまじき物ゆへに軍の圖を抜すものならは弓矢神にもはなたれ申へしとかく長政公の仰こそよろしく御座候へ信長引のかは引つゝき追討にするならは何の子細か候へき悉討取へしと詞を放て申ける久政此旨を聞大きに怒て遠藤を追立らるそれよりして長政も父の命にそむきかたく軍評議はやみにけりされとも淺井か遠待の若黨とも寄合評定して申けるは今日は寄手に思ふまゝに城本まで焼立させ剩久政と家老の共者の大腰ぬけに長政背きかたくして明日の軍を止給ふ事口惜くおはしめさるへし我々も無念に存するなり先年箕作の城を攻むる時味方の内意ありて働きにふかりきそれを度々雜言する故二條御普請の時も言分として濃州勢を追立けれとも其後もやゝともすれば雜言す明日は大將ゆるし給はずとも我々友達とも

といひ合せ形計なりとも軍して信長勢にねふりをさますへし若軍法を破るなど、後日の難に被仰付なはそれ迄の事と思ひ一またひしたふへしと其ひきくといひ合せける程に究竟の若者二百計同心す此事味方の内にも堅く秘すへしとて密談してそかたまりけるかくて信長卿は小谷山より八九町西南虎御前山に陣取て居給ひしか物頭の面々を近付給ひて小谷を攻らるへきかと思見をこひ給ふに佐久間右衛門尉信盛すゝみ出て申けるは攻落し可申はたやすかるへけれとも味方の御人數多く損し候はん又越前義景も走參るへし此近所みな敵の圍中なれば敵四方にまはりて味方のうしろ切可仕も計り難し御人數横山へ引とらせらるへしと申上ければ信長卿に尤と思ひたまひ翌二十二日に諸軍勢横山表へ引入るへしとてまつはらひには佐々内藏助築田出羽守中條將監に鐵炮の者五百弓の者五十騎相副られ則信長卿も引取むつかしくや思召けん矢島の南の野に御小姓衆二百騎計にてひかへ給ふ森柴田兩人はまつはらひの者共を見合てのくへしとて大寄野の西の方に立置諸勢引入ける處に淺井方の若者阿閉彦六郎千田新次郎西野彌次郎上坂五助同主馬助磯野新右衛門同與右衛門山田所之助雨森次左衛門千田新三郎細江久兵衛八田助七田那部久六など初として二百人計皆歩立にて築田か勢にひしと付能く案内は知つ弓鐵炮を射かけ打かけければのきかねてこそ見えにける佐々中條かけつかへしつ戦ひはしか間はさへけり其時阿閉彦六郎千田新八郎細江久兵衛八田助七田那部久六山田所之助など比類なき働し敵數多討取其身も討死とけたりけり

此しつはらひの次第信長記にあり相違はかりしるし進上申候

信長卿横山の城を攻給ふ事附家康卿へ加勢をこはるゝ事

信長卿は小谷表を同二十二日に引とりたまひ横山の城を攻へしとて諸軍勢攻手を仰付られまつ觀音坂の口へは柴田修理亮梁田出羽守市橋九郎左衛門尉織田上野介同九郎殿に仰付られ同山北犬飼坂へは森三庄衛門尉不破河内守菅屋九右衛門尉西表は木下藤吉郎秀吉氏家常陸介伊賀伊賀守稻葉伊豫守等なり本陣は四方見分成さるへくとて龍鼻の出先の山に居へたまふかくて濃州勢三萬五千餘騎鬨をとつとつくり稻麻竹葦のこどくひしとて取巻おめきさけて攻登る城中兼て覺悟のとなればおのれくか持口に立出て命もおします防きけり城中の大將大野木土佐守秀俊三田村左衛門大夫國定野村肥後守貞元同兵庫頭直次勇氣をはけまし走り廻りて下知すれば敵大軍にて攻と雖もたやすく落へき共おほえすされども晝夜のさかひなく寄手四方より攻ければ始終は叶ひかたしとて小谷へ申越急き後卷せらるへしとこふ備前守長政もかねて越前義景の許へ出張せらるへき旨注進再三に及ひけれども只今に至るまで出張なければ家老の者どもを近付宣ひけるは越前義景を相待にいま來らす又敵陣取をかためつれば手勢ばかりにては所詮後卷かなひかたしいかゝあらんと申されければ家老の者共案し煩ひて居たりけるか横山の城の者共よりは急き後卷なされ候は、今兩日は當城も抱て見申へく候へともさなくは追村落城に及ふへしと申越ければ横山の味方に先力を付へしとて長政は手勢八千餘騎にて同二十五日に小谷を出て大寄山へ打上るかゝ

りける處に越前よりは朝倉義景は出陣これなく同勢孫三郎に其勢一萬餘騎同二十六日に着陣す長政孫三郎に對面して尤義景殿におどるべきにはあらされも貴殿はかりを差越され候事手ぬるき軍の次第なりとて祝着のけしきはなかりけり又信長卿も此度の軍は大事とや思ひ給ひけん三州徳川殿へ御加勢給はり候へと申越れければ家康卿手勢五千餘騎を引率し三州岡崎の城を二十五日に御出陣なされ二十六日暮申の下一刻はかりに江北坂田郡に御着陣なされ本多平八郎内藤三左衛門彼等二人召連れられ淺井か陣取大寄山朝倉孫三郎か陣足掛り嶮難の地等よく御見立夫より信長の本陣へ相越さる信長卿大ひに悦ひ給ひて御邊と我等と兩旗を以て淺井朝倉は即時に追討すへしとて御悦ひは限りなし然るに横山の城の寄手の者どもは淺井朝倉か軍勢近つかさる内に城をもみ落すへしとておめきさけんて攻ければ城中こらへかたくや思ひけん同二十七日には長政殿味方近々と勢をよせられすんは城を開き渡し可申など、申越ければ淺井此由を聞尤と思ひ明日は是非無二の一戦すへしとて軍評議をしたまひ申けるは大寄山より信長卿の本陣龍ヶ鼻へは五十町の場所なればすくにかつて軍せは人馬ともに疲れぬへし明朝野村三田村へ陣をうつし二十九日の拂曉に彼の本陣へ切か、り透間もあらせす一當あつる程ならばよも敗軍せぬ事は候ましと申されければいつれも尤と申しける中に淺井半助といひし者は先年美濃國不破郡の仕置申付鳥江城に住しけるか近年は又小谷へ引越て居たりけるか進出て申けるは我等近年美濃國に罷在信長卿の軍立を見候に手はやき人にて御座候へは明日野村三田村までやすくは陣取せ

候まし猿猴の梢をつたふことくなる武將なれば勝利を得させ給はん事十に一二とこそ存候へ今しはらく軍の様子を御うか、ひ御覽せよかしと申ければ遠藤喜右衛門尉進み出ていや、長政公のはからせ給ふ處をこそ宜しく存候へ只一戦して勝負を決せんにはしかし其上我敵陣にまきれいり信長と引組討はたす程ならば味方の勝利何の疑ひ候へきと申にこそ軍評議はきはまりけり同しく二十七日の夜も漸更過ければ上下支度す越前勢は大路村三田村へ陣をうつさるへし淺井勢は主計村野村へ陣を移すへしとてひしめきけりかくて信長卿案のこどく半助か申せしに少もたかはす信長卿は近習衆に宣ひけるは終日敵陣に火を燒は朝合戦にかゝり來ることあるへし家康卿佐久間柴田木下丹羽森等はそれになきかどのたまへは管屋九右衛門尉承て何れも是に候と申上る右の人々を近付評議し宣ひけるは敵は明日朝合戦に來へきにはきはめたるそ是好む所の幸なりいかにと仰ければ徳川家康卿進み出させ給ひ仰られけるは夜も更申候間とく、軍の御手立有て合戦の備其次第等いそぎ御定め可然候はんやと有ければさあらは戦の次第をさるし定むへしとて右筆武井肥後守に被仰付一々其次第をしるしけるに家康卿仰られけるは今度敵死生をきはめて懸り來るへし朝倉勢か淺井勢か一方某に請取申度と被仰ければ信長卿仰には越前勢に向へ給ひ誰をかさし加へ可申哉と給ふ家康卿さらは稻葉伊豫守を召加へてたひ候へとこのみ給へは信長卿聞たまひかやうの望にあひぬる事名譽の事をかし伊豫守加つて軍功いたし候へとのたまひければ伊豫守申上げるは仰にては御座候へとも我勢はわつか一千騎はかりなり何として

家康卿の御跡をくろめ可申やと辭し申ければ家康卿の仰には我存する子細あり同心し候て給はれと有ければ一旦は如此にて御座候此上はいかなる天魔破旬かおそひ來るともと存る間御安くおほしめされ候へとあさ笑てを立たりける

淺井三代記卷十四終

淺井三代記卷第十五

姊川合戦の事

斯くて越前勢の手當は徳川家康卿に決定す淺井か勢に向ふ信長卿の先陣は坂井右近二番には池田庄三郎三番は木下藤吉郎四番は柴田修理亮五番は中條將監築田出羽守惣して信長卿の本陣迄は十三段なり横山の押へには氏家常陸介入道卜全伊賀伊賀守丹羽五郎左衛門尉を立置る如此人數定めし給へは五更の天にそ及ひける合戦の次第御使番を以て仰觸られければ先衆は横山の東北をおもてむきにおしまはす家康卿の勢は西北むきにおしまはすかくて淺井か先勢磯野丹波守員正に山崎源八郎高宮三河守大宇大和守赤田信濃守蓮臺寺を相副られ其勢一千五百餘騎二番は淺井玄蕃允舍弟雅樂助三男齋宮助四男木工助上坂備中同刑部舍弟五助其弟彌太郎三番阿閉淡路守子息萬五郎西野壹岐守四番新庄駿河守今井十兵衛田那部式部神田修理亮五番東野左馬助月ヶ瀬若狭守世上坊六番淺見對馬守同大學助七番は旗本と相定め段々に可相働と定め置摠して淺井か勢八千餘騎なり越前の手には朝倉九郎次郎景紀黒坂備中守豊原平泉寺の法師武者氣比の社人先勢三千なり越前勢は一萬三千騎とぞ申ける如此段々相定め大路村三田村へ陣をうつすかゝりける處に家康卿の先勢すきまもなく弓鐵炮を射かけ打かけせめかけく討入ければ朝倉か勢案に相違しけるに寄手の勢我もくゝと進みけるを見て平泉寺の法師武者いさ追拂はんどいふまゝにひしゝと討出徳川殿の先勢にひしと取合姊川を打越追つ返しつ討つ打れつ火出る程戦ひしか家康卿の先手の者

とも進みかねて見えければ越前勢勝にのりいきはひかゝつて川をむかひへ打あかる淺井か先勢磯野是を見て越前勢ははや鎧を入たるを我勢をもち入んとて敵を西南向ひに見ておめきさけんで押出す處に右近は一軍はしたなくして大將軍に見せ申さはやと存すればひかへて待かけたるに丹波千五百にて面もふらす右近か二千餘騎にてひかへたる備の中へ討入らんとせしを右近姉川をこさせしとさへける磯野か勢強くして川を追越さんくゝに戦ひ右近か勢を追拂ふ右近か一族同苗の者とも口惜くや思ひけん百餘騎引返し戦ひしか枕をならへて討死し残り少なくなりければ猶かなはずして退かんとしけるに嫡子坂井久藏いまた十六歳容顏美麗人にすくれ心もゆうにやさしかりつるか引返しむかふ敵と渡り合せ切つきられつ追なひけまはらく戦ひけるか終にうたれて失にけり郎等可兒彦右衛門坂井彦八郎なとも枕をならへて討死す父の右近は夢ばかりも是を知らずしてのきにけりそれより丹波守きをひ二番にひかへたる池田か勢も追立る淺井か勢とも是を見て摠懸りにかゝるへしと淺井玄蕃兄弟四人阿閉新庄月々瀬上坂西野東野を宗徒の初として七千餘騎一足もひかしと突懸る程に信長の備給ふ十三段の勢を十一段迄切崩す信長卿は手に汗をにきり御腹めさるへきとの覺悟なりかゝりける處に西の方朝倉か勢一萬三千餘騎に家康卿の勢わつか五千餘騎にてむかはせ給ひける先手酒井左衛門尉其外小笠原與八郎東三河の兵共二千餘騎馬を一面に立ならへ鎧をそろへ面もふらす進みける敵の先陣は千餘騎鎧をを作り突かゝる東西に開き合せ南北に追なひけさんくゝに戦ひけるか越前勢つよくして味方少引退けるに酒井小笠

原いく度か返し合せくゝ向ふ敵數十人撞伏せ切伏せさへければ越前勢は淺井か手討勝と見て猛勢にて喚叫てぞ追來れば家康卿も信長卿の本陣既にあやうく見えしかは本多豊前守松平左近將監に向つて東西を見るに味方すてに利を失ふと見えたり此上は我旗本をくつしかゝれど御身をもんて下知し給へは聞もあへす本多平八郎馬上に鎧曳さけ面もふらす只一人朝倉か一万餘騎にてひかへたる中へめきさけんで馳向ふ豊後守左近將監も本多うたすな平八うたすなどて手つから鎧おつどりくゝ老武者若武者二千餘騎の兵共我おどらしと懸むかふ二陣にひかへたる稻葉も一千計とて朝倉か勢の中へ懸込鎧を合せければ敵も爰を先途と防ぎ戦ふ家康卿の勢一足も不退首を取もありとらるゝもあり十文字にかけやふり巴の字に追廻し太刀の鏝をど矢さけひの音天地にひゞきて攻戦ふ家康卿の御近習の兵共左右に立関を撞と作りかけ鎧を入れれば敵已に引色に成て見えける處を猶大音聲をあけて爰をもめや兵共と士卒の機を勵し透間もなく下知し給へは皆まころをかたふけ爰を先途と戦ふほどにさしも競ひかゝつたる朝倉勢もかなひかたくや思ひけん徳川殿に追立られ蛛の子をちらすか如く落行けるを三川村田川邊迄追討にうつ程に眞柄十郎左衛門父子三人前波新八郎舍弟新太郎小林瑞周軒魚住龍門寺黒坂備中守などいふ兵とも敵に總角を見せしどや思ひけん引返し手柄を盡討死す中にも眞柄は大力無雙の剛の者なれば五尺三寸の大太刀を眞向にさしかさし取て返し四方八面に切て廻りければ四五十間四方は小田をすき返したる如くにそなりにける彼に渡し合せ是に渡し合せ追詰追廻し十四五人切伏せ是と眞柄

十郎左衛門といふ者なり心さしの者あらは引組て勝負をせぬかといふ聲を聞て是は徳川か郎等句坂式部といふ者なり参りあはんどいふまゝに手鎧ひつさけ渡し合せしはらく戦ひ草摺のはつれ一鎧突たりけるをものゝかすともせず大太刀を以て打拂ひ拂ひ切に切たれば句坂か胃のふきかへしを打碎きあまる太刀にて持たる鎧を打おとしたるに式部か弟句坂五郎次郎たすけ来て真柄に渡し合せ戦ひけるか餘りにつよく打程に蜻蜓にうけなかつ所をおかみ切に切て句坂か太刀をはき本よりすんと切ておとしあまる太刀にて弓手の股をなきすへたる太刀の柄はかり持て既にあやうく見えける處を句坂六郎五郎是を見付て透間もなく助來るに郎等の山田宗六我主を討せしとや思ひけん太刀を真向にかさし進み來る真柄きつと見て心さしの奴原おしくは候へといて物見せんといふまゝに持たる太刀を取直しえいやと打たればから竹わりに討わり弓手馬手へそひらきける六郎五郎得たりとて十文字の鎧にて駆たるを真柄いと、打物は達者なればははらくうけなかつ戦ひしか終にかけたをされけるに最期こそ神妙なれおきあかり今は是まてなり真柄か首取ておのこの名譽にせよといひたりければ六郎五郎は式部に向ひてはしめ鎧付られしは御邊なり首取て大將に見参に入よといひたりけるか式部ふりあをのき真柄か太刀にてかく胃を碎かれ薄手少々負たれば相かなはざるを汝取てまいらせよと辭しければ走かゝり首を討おとしてけり真柄か嫡子十郎も返し合せ戦ひけるか郎等馳來り父はかく討れ給ふと告たれば涙をこぼし打太刀もよはれども敵を討はらひ父はいつれの邊にてうたれ給ひけん同じくは一所にともとめ行處に青木加

賀右衛門尉か嫡男所右衛門尉引付て音に聞えし真柄殿いつくへにけ給ふそや引返し勝負あれとよははりかけし處に十郎逃るとは何事をにくきおのこの言葉かないて物見せんと打向ひ父にはおどろし太刀なれ共受て見よといふまゝに四尺三寸氷の如くなるを打振て懸りしに青木か郎等馳ふさかりて戦ひしを太刀振上るより早く細頸中に討落しいさみにいさんて競ひかゝる所右衛門尉是を見て十郎に渡し合せ鎌鎧を打かけたるに運こそ盡て有けるか十郎か馬手の肘を切落され今はかうとや思ひけん尋常に首をうけたるに我は青木の某といひも果す首を討おとしてけりかくて淺井か手は信長卿の御勢を十一段まで切崩し森か手にてまはしさゝへけれども備前守長政勝にのり旗本をくつしか、れと下知せられければ信長卿の御旗本大に騒動す信長卿も既にあやうく見えしに家康卿稻葉伊豫守朝倉勢を追捨て淺井か勢の真中へ馬煙を立て横鎧に驅入せ給ひ喚叫て戦ひ給ふ淺井か勢横鎧に驚き色めき引足になるかゝりし處に横山の押へに置れし氏家常陸介入道ト全伊賀伊賀守三千餘騎にて馳來る家康卿御勢と雙方よりもみ合て戦へは淺井か兵共爰を大事と命も不惜火花をちらして戦へと家康卿の横鎧にかけちらされ氏家伊賀にもみ合され味方搦敗軍にそなりにける淺井玄蕃磯野丹波阿閉淡路は取てかへしけれども敵猛勢きそひすゝんてつきかゝる中にも忠左衛門安藤右衛門佐桑原平兵衛今枝彌八森九兵衛稻葉刑部少輔同土佐古江加兵衛豊瀨與十郎といふ者共も面もふらす切てかゝれば玄蕃淡路もとより戦ひつかれて引しりそく磯野丹波守員政は立歸後をきつと見けるに味方まはらに敗北すればかなはしと思ひ我預り置し佐和

山の城心許なしとて打ちらしたる手勢少々とひわつか三百計にて敵のむらがる真中を討破りかけ通り佐和山の城へこそ引取ける此所より佐和山迄其間四里餘あり此丹波守の働感せぬ者こそなかりけるかくて淺井雅樂助舎弟齋宮助加納次郎左衛門尉同次郎兵衛安養寺甚八郎舎弟彦六郎細江左馬助早崎吉兵衛上坂五助舎弟彌太郎同次右衛門は爰を先途と相戦ひ居たりしか味方ちりくゝに敗北すれば討死と思ひ切各手柄あくまでつくし敵あまた討取終に討死なしたりける上坂刑部ははるかに退きて居たりしか郎等にあひて二人の兄弟の者共はいかに彌太郎何と成行候やと尋ければ何れも敵の中へ驅入討死とけ給ふと申さらは漸て追付へし兄弟の者共といふより早く乗返し敵の中へかけ入よき武者を忽突たをし先へすゝんてかけ入本望をとけ討死をそゑたりけり此者共は軍功あまたある剛の者なり中にも物のあはれをどゞめしは淺井雅樂助兄弟をかし先年野良田合戦御影寺合戦終て後朋輩ともどもよりあひ味方の働の僉議など侍れば齋宮助申けるはたれくゝと申ども我等か祖父大和守働又は兄玄蕃などか働ふりに越たる者家中には候はしと申ければ兄雅樂助大に怒てかほと歴々多き中よて其荒言は無益なりとはちしめければ齋宮助は歴々の中にて諫言せらるゝ事奇怪なりとてそれより近年中をたかひて居たりけるか二十七日の亥の刻はかりに兄の雅樂助齋宮助か陣所へ行て明日討死とけん事は一定なるへし今は遺恨もよしなし名殘の盃をのむへしとて父尊靈を見たくは互の顔を見よとて目と目を見合せはしか程は物をもいはす有けるか雅樂助酒をこひ出し久しき郎等ともに出てのめやとて盃をめぐらしたるはあはれにも

覺えたり勇士たらん者は斯こそあらまほしけれといはぬ人こそなかりけれかゝりける處に遠藤喜右衛門尉首を提け寄手の勢にまきれ入信長卿に近付刺違へんと心かけ御大將は何方におはしますそやといひまはり行程に信長卿の居給ふ所へ其間十間程近よりけるに折しも竹中久作是を見付味方にては候はし脇目多く遣ふとて名乗懸て引組上を下へと返しけるか久作遂に打勝て遠藤か首をそ討たりける兼て遠藤か首を取へき者をと申せしか剛の者の心さは恐ろしかりける事どもなり遠藤か郎等富田才八といひし者五六町引退けるか喜右衛門尉討れたるとき、何をか期すへきとて取て返しさんくゝに太刀打して爰を最期と戦ひしか終に討れてうせにけり弓削六郎左衛門尉今井掃部助も遠藤か次第を聞同し道にゆかはやとて大勢の中へ驅入是も比類なき働さして討死す斯て散々に敗北せしかは寄手は勝に乗り追打に打程に矢鳥の郷尊照寺田川迄追たりけるに備前守長政も小谷をさして逃入ぬかゝりける處に安養寺三郎左衛門は兄弟の者共討ければ今は何處までと思ひて敵の中へ驅入よき武者と引組首を取立上らんとせしに信長卿の小走の者四五人落重り生捕にせられて信長卿の御前に引すゆる信長卿は御覽して安養寺久敷と被仰ければ兎角の御返事も不申上日比の御恩實にどくくゝ首をはねられ可被下旨申上ればそは何事を汝は子細あるもの、事なり先若者共の取たる首を見せよやと仰ければ織田おなあ持來る首安養寺見て是は私の弟甚八郎と申者にて御座候と申又織田おきく持來る首是も私弟彦六と申者にて御座候と申上ればさてくゝ不便の次第なり汝か心底さそやと被仰竹中久作か取たる首を見すれば是

は遠藤喜右衛門尉にて御座候と申上る其外首數三十計見せ給へは一々に名付をそしたりける安養寺重ねて申上るは早時刻も移り申候間御暇被下首をはねられ可被下と申上ればいやとよ汝は一度備前守か用に立命を捨たり今日よりは此信長か命なり小谷に歸り無二の忠義致すへし我等も随分加恩を可行なり先汝に問へき子細あり此ま、押寄小谷を可攻と思ふなり其故は今日の軍に働きたる淺井か兵は何の役にも立可らず候間小谷は即時に可落と宣へは安養寺申上けるは備前守長政か親下野守久政か手勢一千騎も御坐候長政か城番井の口越前守か勢五百餘騎千田采女正と西野入道か勢も少々二三百餘騎も御坐候へは荒手の勢の千七八百餘騎は堅く御坐候間早速は落申まじきかと申上ければ信長卿聞召安養寺か申所尤なり其上我等か勢も今日數刻の戦につかるへし重て小谷を可攻なり其時は忠節をはけますへしとて安養寺は不破河内守に預け給ひ小谷へ歸し給ひけるか、りける處に木下藤吉郎秀吉馳來り何とてそれに緩々と被成御坐あるを小谷へ勢を押寄乗取給へと申ければ爰にて安養寺と相談するに城中に残る兵多く有といへは早速には落へからす先此度は味方の勢を可入と被仰ければ秀吉重ての給ひけるは此競に攻なは即時に可乗取ものをと申給へとも信長卿被仰けるは今に初めぬ藤吉郎の大腹をいふと笑せ給ふ此時信長攻給は、小谷は即時に落へきなり留守居の老武者二百餘騎とそきこえける安養寺かはかりし故其後三ヶ年はか、はりけりかくて其日味方へ討取首八百餘うたる、兵千七百なり今日の軍に家康卿の横鍵暫時の間をそかりせは信長卿を討取へきものをと今に至る迄人皆申あひにけり

横山の城没落附佐和山の城を攻給ふ事

かくて信長卿の諸勢姊川表の合戦其日の辰の刻にはしまり未の刻に終りければそれよりして木下藤吉郎柴田修理亮森三左衛門尉三人か勢横山の城を取巻ければ大野木土佐守三田村左衛門大夫野村肥後守同兵庫守彼等四人の者共相談して此分にては當城か、はりかたし其上今日の一戦に味方大きに利を失ふ事なればはか、しき事あるへからす城を開て小谷へ退き可申と談合して敵陣へ申遣しけるは命さへたすけおかる、に於ては當城を開渡し可申といひ遣しければ信長卿は城中開渡すにおいては可令助命と仰ければ其夜彼四人の者共は城を開渡し小谷へ引入る斯て信長卿は横山の城には木下藤吉郎竹中半兵衛兩人に加勢三百騎相副られ横山の城に籠置翌日二十九日に我身は三萬五千餘騎の軍兵を率し犬上郡佐和山の城へ押寄給ふ磯野丹波守は兼て心得たる事なれば若者共二百計左右にして鳥井本表へ打て出信長卿の先勢に弓鐵炮を少々打かけ化粧軍して城の中へ引入城を丈夫にかたむれば信長卿は諸勢手分して幾重ともなく取巻攻させ給へとも城中少もひるます磯野丹波守高宮三河守勇氣を勵し戦へは此城はたやすく可落とも見えされははり番を置へしとて鳥井本口百々屋敷に向ひ城を拵丹羽五郎左衛門尉を入れたる北の方尾すへ山の城には市橋左衛門尉南の方佐渡根山には水野下野守西の方彦根山には河尻與兵衛定番にすへおかる如此とまり、に勢を入おかれければ誠に鳥ならてはかけりかたかるへしと見えたりける斯て所々の仕置を被仰付ける中にも横山の城に籠をかれける木下殿には随分今度智畧を

はけまし淺井が物頭其所々の城主を味方に可引入しからは淺井の郡を重ては可被下との御契約を聞えける信長卿は七月六日に御馬廻小姓計にて御上洛有て室町殿へ今度の合戦の次第はしく被仰土追付歸國したまひける

淺井越前朝倉を呼出す事

淺井備前守長政は去ぬる六月二十八日の姊川合戦に信長卿を毫髪のかかひにて不討取事も朝倉勢家康卿に引取られし故我勢迄のさはりとなり殘多き事いふはかりなし其時に當りて信長卿攝州大坂表にて日々夜々の取合にて難儀に及ひ給ふ旨承り越前へ福壽庵木村喜之助を以て被申けるは今度信長攝州大坂表へ出張し日々夜々の取合にて難儀に及ふの由其え候然らば此時義景長政兩旗にて西近江へ發向し所々の敵方打破都に旗をなひかせ野田福聞島の者共と言合せ途中にて相戦は、勝利有へく候間御一國の御人數をかり催され出張へしと申遣しければ義景も家老もけにも同心して越前國一乘をは來る九月十三日に出張せしむへき旨堅く約諾して両使は小谷へ歸りけり長政に此由かくと申せば大さによろこひさあらは當國の勢をも催すへしとて其勢八千餘騎にて同九月十三日小谷を打立鹽津越にをし出す同十七日に高島郡伊黒の城に着陣して朝倉を待てる居給ひける斯て期倉義景は國中二万餘騎を引率し元龜元年九月十三日には越前一乘の谷を出同十六日には高島郡伊黒の城にそ着給ふそれより朝倉淺井軍評定して比叡辻八王寺に陣取けり

坂本合戦附森三左衛門尉討死の事

あくれば九月十八日淺井朝倉が勢の中よりも物なれたる若武者二三百騎すくり皆歩立となり宇佐山の取出に信長卿より織田九郎森三左衛門尉を籠をかれしか城際へ押寄る三左衛門尉是を見て敵既に足輕を懸ては卒爾に軍すへからず味方のあしらひを見て猛勢を出し城を乗取へきどのたくみそかし定め置候持口を堅め少も働くへからず我等が小勢にて討て出て敵の様子を計ひ見んとて一二百の勢をつれ町はつれへ出ふかくと勢をかくし二三十騎出し弓鐵炮を射かけ打かけたり北國勢も五六十騎立出矢軍をはしめ後には鎧をつと突かれば三左衛門尉が勢も鎧を合せけれ共大勢なれば引かへす北國勢も引退く三左衛門尉兼ていひ合てや置つらん百騎計かたかけの木の間引かくし百騎計をつれ又町はなれまて懸出れば味方も二百計の歩立の者共を打入面もふらす戦ひけるか城中よりひた冑二百計打て出る北國勢少引退き跡の勢と一つになる三左衛門尉も我勢を引つれ城の中へ驅入ける其時敵十八騎討取れば味方も十二騎討れにけり其日三左衛門尉が勢はかり隠し置し色を味方見知て人數を出さるこの評定なり翌日十九日の未明に朝倉勢は穴太村より押寄る淺井勢は辛崎濱へをしまはしからめてよりそ寄たりける三左衛門尉是を見て町表へ打出一戦を決すへしとて五百餘騎はおしかくし殘る五百餘騎にて打て出よする敵を待にける朝倉式部大輔は其日の先陣にて三千餘騎を三段にくみおめきさけんで切てかゝる三左衛門尉は間近く敵をよせ鐵炮を打かくれば式部大輔が先勢一さへもさへす後へさつと引とれば三左衛門尉勝にのりめきさけんで追討に可討と追かゝる式部大輔は是を見てきたなし味方の兵

す、めやくと下知をなし式部大輔一番にす、みて突か、れは敵勢は敗北す其時三左衛門尉よき時分を見はからひ鎧を横たへ名乗かけ取て返せば味方も爰を先途と防ぎけれども馬手の藪陰の思ひよらざる方より隠し置し勢五百餘騎喚叫て切てか、れはさしもにいさむ朝倉勢我先にと敗北す式部大輔もうたるへう見えし處にからめ手へ押廻したる淺井か先勢淺見對馬守淺井玄蕃二千餘騎横鎧になり面もふらす切てか、れは是を見てかなはしと思ひければ城をさして引んとするに朝倉中務大輔山崎長門守阿波賀三郎荒手にて突か、る備前守も旗本を崩しか、れか、れと下知すれば人數ひしと付森は城際まで引のきしか城を付入にとられてはかなふましと思ひ切我等爰にて討死をこくへきを城中堅め給へと使を本城へ立敵の中へ面もふらす切入大勢を追崩し追なひけれとも味方の猛勢につ、まれ終に討れけるこそむさんなれ織田九郎青地駿河守森か郎等尾藤源内舍弟又八道家清十郎其弟助十郎等も枕をならへて討れにけり此道家と申兄弟は軍功度々そのかくれなき者にて信長卿より感狀等に預りし兵なりかくて朝倉淺井か勢森は討取其競ひを以て宇佐山の城へおしよせ既に二の丸迄攻取けるか武藤五郎左衛門尉肥田玄蕃允同彦右衛門尉楯籠り命を捨て防ぎ戦へはさうなく攻入事ならされは人數をさつと引取けるかくて宇佐山を押へ置同二十日に大津近邊放火して二十一日には醍醐山科邊に煙を揚山門へ引籠りて居たりける

信長卿大坂表を引取給ふ事 附淺井朝倉對陣の事

かくて信長卿は淺井朝倉叡山表に陣取先勢醍醐山科邊に煙をあくるよし攝津國中島へ聞え

ければ淺井朝倉か兵に帝都に煙をあけさせなは末代迄の耻辱なるへし然りといへど此地難所に川あれば敵の中を引退事かたかるへしとかく三好を御頼可被成と思召内縁を以て御頼被成被仰遣けるは某此地を引取候やうにいたされ候は、當家に對し永く難忘候御同心頼入と被仰入れければ三好此旨承天下を去ろしめさる、信長我等を頼むとの儀弓矢取ての面目なり心やすくのかせらるへき旨返事すれば信長卿不斜悦ひ申されけるは三好は心安くますましたれども野田大坂よりまたふへしとて殿を和田伊賀守柴田修理亮兩人に被仰付引給ふ敵此便りを幸と思ひ江口の渡しの舟を引一揆の者共雲霞の如くさしつとひ柴田か勢にひしと付喚叫て馳集る柴田取て返し蛛手十文字に追拂ひ二三度取てかへしければ一揆の者共はまたひ得ずして引ければ柴田御本陣へ引附けりかくて柴田修理亮信長卿の御前へ進み出申けるは御大將信長卿は大坂表にて討死し給ふよし京中の者共聞及以の外さばくよし承候間京へ御人數入られ御旗本をも町人共に御見せ被成候は、可然旨申上ければ信長卿聞召先一刻も早く敵の方へ向ふへし路中へんはくは臆して來る者と思ふへし柴田はほれたるかどを宣ひける柴田大に腹を立我若き時より數度の合戦に出あひて一度もほれたる事は候はず目の前にて度々の働き御目にかげ置候か早くも忘れ給ふものかな我等かほれたる事は四疊半の敷寄屋へ入茶をのむ事はほれ申候と申上る信長卿詞なくして京へも入らせ給はず直に大津へ打出給ふ柴田は京へ入今度信長卿は大坂表を引取朝倉淺井退治の爲に江州坂本へ驅向はせ給ふと觸まはり山中越に打出淺井朝倉か陣取たる坪笠山の青山の麓を旗

さし物をさしわけ信長卿の本陣へ引付しはあつはれ剛の者なりとてよめいてはめたりけるかくて信長卿は其夜は下坂本に陣を取て翌日二十五日には叡山の麓南谷香取屋敷に平手監將長谷川丹波守山田三左衛門不破河内守丸毛兵庫淺井新八丹羽源六水野大膳穴太村には佐久間右衛門尉津田東市佐佐内藏助塚本小大膳明智十兵衛苗木久兵衛村井民部丞進藤山城守後藤喜三郎多賀新右衛門尉梶原平次永井雅樂助種田助之丞佐藤六左衛門中條將監中村には柴田修理亮氏家卜全伊賀伊賀守稻葉伊豫守唐崎には織田大隅守津田太郎左衛門尉佐治八郎山岡對馬を入おかれ將軍塚には室町殿御本陣を居をかる志賀城守佐山二ヶ所には信長卿近習馬廻りにて守り居る又味方には古しへより寄手入かたき山なれば衆徒一統にかたらし山のつまりくゝに要害をかまへて楯籠る如此なれば敵百萬騎にて寄たり共一人も踏入事なるへからすとて丈夫にこそはおもはれければかくて雙方よりえきりに戦ふへきやうもあらされはにらみあひて居たりけるかはしくゝ所々にては若者共十騎二十騎つゝ切あひ討るゝもあり又討取もあり日々夜々の小せり合なり信長卿より忍ひを入僧坊に火をかけんとする事度ゆなりけれども其者はいつれも味方へ討取けりかくて信長卿難儀におよひ佐久間右衛門尉稻葉伊豫守を以山門の内縁を聞出し頼み給ふには今度信長卿へ與力し忠義をいたさんにおいては朝倉淺井か山門領十倍して領地あておこなふへし數年壇方のちなみもたしかたきによりて此方へ與力かなはずは雙方見除あるへし然る上に同心なきにおいては根本中堂山王の社を始め一字も不殘燒拂ひ僧徒一人も不殘誅伐すへしと再三内意をかよはせど

も僧徒金鐵の心にて淺井朝倉を見放すへからすとて一人も同心する者なし

坂井右近堅田を乗取又寺内を乗取事

十一月二十三日堅田の住人猪飼甚助馬場孫次郎居初又次郎彼等三人いひ合せ信長卿へ御味方に参り忠節可仕旨申上ければ信長卿御感悦不斜して褒美大分に被下ければ是に乗り誰ぞ御大將一人被下候は、我等とも随分粉骨を抽へしと申漸て人質をさし上候へは信長卿宗徒の人々をめしよせられ誰か堅田へ可指遣と宣へは海上を隔つといひ敵の圍へ入といひ御請申者一人もなし信長卿御覽ありさあらは鬪取にすへきと宣へは坂井右近進み出て加程の所へ向ひ候はん事安き事にては御座候へども若仕損し候へは忠義もいたつらになり其上敵勝る乗味方機をうしなはんも計かたくとためらひ申候某罷向ひくるしかるまじきにて候は、参るへしとぞ申ける信長卿不斜に思召急き可罷越と被仰付ければ右近御前を罷立堅田をさして急きけり相従ふ人々には伊賀伊賀守か郎等柔原平兵衛などゝいふ兵一千七百餘騎夜中に舟に取乗堅田へ漕着舟よりあかり所の住人共相語らひ朝倉淺井か兵糧奉行萬賄を仕者共百五六十騎籠り居たる寺内へおしよせおつとりまき攻入ける籠る兵共あはてさばく事限りなしされどもあけまほりをおろしまはしか間はさゝへけるに地下人共案内は知たり爰かしこより取入はふせくに力なく枕をならへて五十三騎を討れにける右近大きによりこひ信長卿へ注進すれば即坐に御感狀を被下ける面目たくひはなかりけり

淺井三代記第十五終

淺井三代記第十六

朝倉淺井堅田寺内を取返す事附坂井右近討死の事

斯而堅田の地下人井一統して信長卿の勢を引入淺井朝倉か役人共悉く討取旨朝井淺倉兩將の許へ注進有しかは味方の諸勢いろをうしなひあはて騒ぐ事おひたし淺井朝倉家老共を近付被申けるは東近江越前への通路を敵堅田にてとりきは誠に鳥ならてはかけりかたし兎やせん角やあらんと評議したまふに朝倉義景被申けるはとかく信長の本陣へ切入一戦をとくるか又は朽木越を可落かと被申ければ備前守長政の曰敵陣へ切入といふ共敵籠城したる數萬の勢なればやはか利有へしとも不覺又ぬけ道へまはるとも敵よも落さし追討にうたれ末代迄の悪名をとめむより明日は未明に堅田へ人數四五千計出し無二無三に一刻に責つふし坂井右近か首を刎んに何の子細候へきと被申ければ義景の家老朝倉式部大輔山崎長門守進出て長政の仰誠にゆしく御座候明日の御先は某等兩人可仕と申により評議一統してわけれは十一月廿四日に義景方には朝倉式部大夫山崎長門守を侍大將として三千餘騎淺井方には赤尾美作守淺井玄蕃亮侍大將として二千餘騎都合其勢五千餘騎なり淺井勢は朝倉勢の後陣也斯而三千の勢を三手に作り堅田へ押寄る坂井右近は是を見て壹千餘騎の勢を五百餘騎は引かへす殘る五百の勢にて堅田の町面へ討て出る越前勢五百計弓鐵炮を射かけ打かくれば右近も弓鐵炮を以あいしらふ越前勢敵を小勢成と勝にのりはや鎧を入面もふらす突懸る右近は本より功者也しばしさへ敵の色を見てかゝれくと下知す

れは右近か五百餘騎一度に撞と突かゝる越前勢引色に見えたりけるか山崎は是を見てきたなし味方の者共よ我一軍してみせんとて五百計おめきさけむてすめは右近此いきほひに突立られ一町計引退く跡をまたふて突かゝる右近能時分を引請取て返し火花を散して戦へは右近かかくし勢五百計撞と喚て眞黒にて成面もふらす突かゝる越前勢足をしどろにみたり既に崩れんとせし處に式部大輔は其を引なと云まゝに馬煙を立てかけ込は淺井か勢も備へて待て何にかせんとて相かゝりに突かゝるてき味方入違へ互に命も不惜たゝかへは右近は寺内へ引入むとする處を味方堀きは迄ひしと付寺内を付入にせんとせしを右近取て返し敵を四方へ追拂ひ其透に寺内へ懸入は朝倉淺井か兵とも寺内をおつ取巻よりは堀へひたくと飛込くと我先にと乗込は右近も大剛の兵なれば走り廻て下知すれ共敵は多勢味方は小勢叶はすして遂に討死したりける浦野源八父子坂井十介馬場居初もはしたなく働右近と同枕に打死す味方にも前波藤左衛門尉堀平右衛門尉中村木工之丞きらひやかに相働討死す是は朝倉か兵也淺井方には淺井甚七赤尾甚介田那部平内八木又八郎ゆしき働して討死す總して其時の責口にては敵味方にて寺内の堀は平地と成かくて義景長政寺内を取かへすといひ坂井右近討取事淺からさうし次第なりとて喜の事は限なし則堅田を拵て朝倉よりは堀江七郎平淺井よりは月个瀬若狹守を入をかる去程に信長卿は坂井右近討死の次第をきゝたまひわれらか命にかはるといひ數度の忠功報しかたしとて鎧の袖をぬらし給ふそ忝なき

信長與朝倉淺井和睦の事

斯而元龜元年の歳も極月にせまりければ雪いたく降積りぬれば敵味方の足輕せり合も止けれ共軍兵殊の外勇氣をつからし侍れば信長卿より御内意こそ侍りけめ室町殿時分をはかりたまひ信長も淺井朝倉も對陣につかるへし變を可入と思召雙方中和せしむへき趣信長卿の本へ仰こされければ本より信長卿は内通したまひける事なり其上森三左衛門尉坂井右近左右の臣は兩月の間にうたれぬ朝倉淺井は山門を城にかまへ陣取いきほひをなせは幸と思ひたまひとも角も御誼次第と御請申上させたまふゆへ淺井朝倉兩人の方へも將軍の御使として中和可仕旨被仰越ければ兩人右の趣承將軍の仰尤奉奉存候へ共信長卿はよく契約を違へ被申人の事にて御座候へは相心得難く奉存旨申上承引申さされ共御使再三に及び其上將軍義昭公御自身御出被成達て被仰付けるに長陣にやつかれけんやかて御請申上る將軍御説として向後よりしては互の領分へ手さし有間敷旨誓紙を取かはし和睦重て相調りけるそれよりして信長勢を引取たまへは朝倉淺井も諸勢悉く叡山面を引取ける其時淺井朝倉叡山にて對陣をはり越年して大坂野田福島といひ合せ後卷をせさする物ならはなんなく信長卿を討取へきものを兒童の様成淺き暖かなと京童は笑ひける扱信長卿は室町殿に御いとまこひしたまひて坂本を立て佐和山の麓鳥井本に着せたまへは丹羽五郎左衛門尉水野下野守御迎に罷出被申けるは今度は永々御對陣被成候之所に味方無恙渡らせたまひ朝倉淺井と御和睦被成候段目出度奉存旨申上ければ信長卿たはふれさせたまひ世間の世話にて

被仰けるは我等の無事は申侍サレマテの夜の歌なりと宣ひ打わらはせたまひや、有て丹羽五郎左衛門尉を近付潜に被仰付けるは汝は隨分智謀をめぐらし當城磯野丹波守を味方に引入可申と被仰置極月十日に岐阜に歸城したまひける

磯野丹波守佐和山城を開退事

斯而丹羽五郎左衛門尉内縁を以信長卿の仰の通を城中へ申入れ共丹波守も先同心せさりけるされ共此事度々におよへは員正か口も少やはらかに成にけるかゝりける處に信長卿元龜二年二月中旬に其勢二萬餘騎を引率し佐和山面へ發向し佐和山の城を幾重ともなく取卷たまひ責させたまふ磯野元來剛の者なれば敵近付は切拂ひ勇氣をはけましければたやすく可落とも見さりける丹波守員正たびく小谷へ後卷をこひけれと終に其沙汰あらされは員正か防く兵も勇氣いよいよおどろえければ丹波はよき時分と心得て員正か方へ申遣しけるは今度信長卿へ忠節したまは、ゆく末迄も可然候はん同心あれと申越員正心に思ふやう兎角當城を開渡小谷へつはみ味方の雌雄を可見届とおもひ丹羽に返事申けるは此方よりもたしか成人質を指上へし信長卿よりも慥なる人質たまはるにおいては當城をあげ渡すへしと申越ければ丹羽大によるこひ信長卿へ此旨申上れば信長卿不斜おほしめしあらは人質を可遣とて織田おきくを被遣ければ員正は男子壹人も持されは女子一人を指上佐和山をあげ渡し小谷をさして來りけるか長政内々磯野二心有よし聞たまひ磯野か人質老母を張付にかけ丁野山にさらし置小谷の内へ入されは己か知行處西近江高島郡へ引退き

ける此時取置たる人質おきく殿すくに養子に信長卿より申請たりける後織田七兵衛殿と申せしは此人質なり斯而木下藤吉郎秀吉丹羽五郎左衛門兩人として江北中大名小名によらず町人郷人によらずまいないをし引出物などをいたし侍には信長より本領安堵の御教書を取つかはしければ國中の者共なひかぬものはなかりける爰に米原太尾の城には中島宗左衛門尉楯籠りしか磯野佐和山をわけのけは己も大尾を開退き小谷をさしてひきこもる佐和山より一里計西淺妻といふ所に新庄駿河守貳百五十餘騎にて楯籠りしか小谷へ注進申けるは佐和山城磯野は信長卿へ城を開渡しければ當城無勢にてかゝはりかたし加勢を可被下と申越其儘降人と成信長卿の人数を引入る斯而信長卿は近江へ至り其間七八日の間二三个所の城手に入れば當春の首途よしとて佐和山の城には丹羽五郎左衛門に近邊五萬貫の所領を相そへ同廿六日に岐阜に歸城したまひける其後沙汰して申けるは今度は磯野を味方に可引入ためよ發向したまひぬると聞えける惣して時日をうつす其間に淺井か人持悉くみかたに引入へきどの手立とを聞えし

淺井軍評定之事

淺井備前守長政家老の者共を近付被申けるは去年信長にたしぬかれ中和せし事味方大につかれしゆへなれ共是大にあやまりなりと云ふと云ふと信長を可討手立有味方の人持共小谷近邊一里二里の間所々つまりくに要害をかまへ入置大坂顯如上人を頼江北三郡の本願寺下坊主共に一揆を催させ近所なれば堀か籠る本江の城を責さすへし其時横山に籠る木下

藤吉みつくへし其透に當城より軍兵一二千も出し責へし然者大形十に七八は責取へし其時信長即時に馳來虎御前か矢島野に本陣をすえらるへしさあらんにおいては當城ひそかに持かため打しつまつて寄る敵を待うくへし云からは此城を取まかるゝかさなくは陣取所々の小城を人数分して責らるへし其刻越前へ一左右して越前國中の軍兵を引牽し義景木之本邊へ出たまは、信長勢を四方八方より出合戦は、勝利有へしと被申ければ一座同音に尤よろしかるへしと決定すそれより越前へ使を立右の手立申入れれば尤可然とて重而日限相究使節は小谷へ歸りける長政よろこひにしへより有所の小城に普請等を申付人数分して籠られける一番に國友の要害には野村兵庫頭同肥後守を入をかる宮部の要害には宮部世上坊を入をかる月ヶ瀬の要害には月ヶ瀬播磨守子息若年なるにより伯父若狹守楯籠る山本の云ろには阿間淡路守今村掃部頭父は先年太尾うし安養寺三郎左衛門今井十兵衛先年切腹せし熊谷忠兵衛彌次郎彼等五人を籠をかる賤ヶ嵩の城には東野左馬之介西野壹岐守千田采女西山旦右衛門楯籠る雲雀山の要害には淺見大學之介八木與一左衛門楯籠る小谷山の焼尾丸には淺見對馬守を籠をかる小谷中の丸には淺井玄蕃亮三田村左衛門大夫大野木土佐守彼等三人をこめ置く丁野山には中島宗左衛門尉を籠りける是は敵を包打に可討との手立とを聞えける

淺井大坂顯如上人を頼一揆を催す事

去程に淺井備前守長政大坂へ以使札被申けるは我等領分北三郡の道場本へ被仰付一揆を被催候は、忝可存旨深く頼みて越れければ顯如上人幸と思召則顯如より御書をたまは

りければ長政よろこぶ事はかきりなし斯而越前と一揆と一圖にしめ合せ可責とて其日限を
まめられ長澤の福田寺へ彼顯如の御書を相渡すれよりして三郡の一向坊主我檀方共にふ
れければ我もくゝと進みたるしか堀次郎か楯籠りたる本江の城を可責とて箕浦の誓願寺
四千二百人先懸にて押寄新庄の金光寺二千餘人榎の乘願寺千五百人上坂順慶寺五百餘人ゆ
すきむらの清動寺木之本新敬坊いまた又右衛門の時此人々都合八千七百餘人後備へにひか
へたり尊照寺の稱名寺二千餘人唐川長照寺増田眞宗寺此三人は三番にひかへたり長澤の福
田寺四千五百餘人坤村の福照寺三千二百餘人は同勢なり其日の軍奉行は淺井七郎野村兵庫
頭中島日向守に仰付らる元龜二年五月六日の未明に堀か居城へ押寄四方町屋を焼拂ひ我先
にと責よせたり城中にも四方より弓鐵砲を放ちかくれども事どもせずおめきさけむて責か
くる秀吉は横山の城にいたまひしか堀か住所と其間わつか一里餘の事なればこのよしを見
て一揆は定て猛勢なるへし一手立して敵を追拂はんとて内々用意やしたりけんかみのほり
さし物なと少々拵日比なさけを懸置し百姓をやとひ越其者共に申付美濃海道筋の山の嶺に
立置我身は五百餘騎にてふきぬきののほりを立福田寺陣取たる小屋山甲山へ取登る斯而長
政は越前よりの義景出陣を待居けれ共時刻もうつり行は淺井玄蕃亮赤尾新兵衛を侍大將と
して一千餘騎横山の城へ押寄る横山の城は無勢なれば上を下へとかへしけるされども竹中
半兵衛物なれたる兵なれば走廻て下知をなす淺井勢いさみにいさんて責入は城中は無勢な
りはや惣構打破二九迄乗取敵本丸さして付入に切入んとせしを半兵衛取て返して追散す淺

井玄蕃亮一刻責にもめや者共と下知すれば野一色介七と名乗かけ加藤作内後云遠江守と渡し合
せ火花をちらしてたゝかひける介七ふみ込て打太刀にて作内かひさの口をそわつたりける
介七は首を取んとせし處に苗木左介と名乗かけ介七に飛かゝる介七えたりとて左介をひき
よせむすを組取てれさへ首を取此介七後には頼母之介と申ける其後青野合戦に大垣面にて
無比類働して討死をそしたりけるかくて本江一揆の者共秀吉加勢に來りたまうを岐阜より
信長進發にて先勢向ふとおもひ氣をうしなひ福田寺か人数はや裏崩れしてにけぬれば秀吉
は五百計さつと懸入四方八面に打破かけ通れば一揆の者ども一さへもさへすして散々
に敗北す武者す武者奉行の淺井七郎敵は小勢成をかへせくゝと冨れば上坂の順慶寺にい
味方の者共の働かなとて箕浦川を楯に取まはしか間はさへしか多良右近か郎等鎧を振て
馳來る順慶寺と仕合しか順慶寺かかたのはつれを一鎧突たりしか物の數どもせず飛かゝり
おしならへてむすくみ上を下へと取てかへす順慶寺組勝頓て首を取立あからんとせし所
を多良右近走かゝり順慶寺を一鎧に突伏せ首をかゝんとはしり寄順慶寺ねなから腰の刀に
て切ければ多良は薄手なれば終に首をそ取てんける木之本藤田又右衛門は深いりして敵に
取まかれしを追拂ひくゝ二三度取てかへし其をなんなく突抜箕浦の邊にて息つき居たりし
か林甚之丞と名乗かけ又右衛門に突かゝる其時又右衛門持たる鎧を取なをしまはらく戦ひ
けるか甚之丞かたゝ中を突通し田の中へはねたをすかゝりける所に香鳥介七と名乗又右衛
門とむすくみおさへて首を討たりける斯而秀吉はにくる一揆を追打に四方へさつと追拂

ひ横山さして引たまふ扱横山寄手の者共は敵不來先にもめやもの共すゝめや兵共と玄蕃身をもむて下知すれ共城中の兵必死非生と思ひ切防ければすゝみかねてそ居たりける秀吉は一揆のやつはら思ふまゝに討取追散しかけぬけ横山へ馳付給ふ寄手の者共秀吉の後へまはり給ふを見て勢を小谷へ引取ける此時竹中粉骨をぬき働しゆへ當城は落さるとて秀吉大によるこはに本江面にして討取たる一揆の耳鼻千八百信長へ進上せられしかは頓而感悦に預り給ふ秀吉其後近江の一向坊主にあひたまひて我五百の勢にて一千八百討取るとて御一代の御荒言とを聞えける

淺井朝倉を呼出すに不出事附信長卿江北へ押寄給ふ事

斯て淺井備前守長政は去る夏越前と示合一揆をもよをすといへども義景事の子細有之出張せざるゆへ味方の手立相違して立腹する事かきりなしかゝりける所に又近日信長卿江北發向のよし注進すれば越前へ使者を立今度は是非出張せらるへき旨申遣しければ早速可打立とかく契諾すそれゆへ長政は其手あてをそしたりけるかゝりし故信長卿は分國の人數をかりもよほし五万餘騎にて八月十六日に打立同十八日には坂田郡横山に陣取給ひ江北悉く焼拂ひ小谷をはたか城にすへきとて先山本の城には阿閉淡路守安養寺三郎左衛門今村掃部熊谷忠兵衛今井十兵衛彼等五人楯籠りければ此城と小谷の間をゝさへ置放火せしむへきとて柴田修理亮勝家佐久間右衛門尉市橋九郎左衛門などを宗徒の大將として四万餘騎にて小谷と山本のあはひ二里計の間を人數にて立切所々の要害共に手あてゝを申付上海

道筋曾禰村馬渡邊迄焼拂ひ翌日横山へ引とらんせし時淺井備前守は同姓七郎同玄蕃亮を侍大將として二千餘騎小谷の城よりおしいたす山本山の城よりも阿閉淡路守を初所々の小城より討て出る又江北所々の一揆共我をどらしと催して出れば信長卿も其日の殿ひ大事とやおもひ給ひけん柴田修理亮に原田備中をあひそへ弓鐵炮の者多く加勢被成諸勢引取給ふとひとしく淺井勢爰のつまりかしこの山合へ人數を引つゝみ切てかゝれば原田勢を一足もためす追散す淺井勢競ひをなし息をもつかすたゝかへは柴田か勢も敗北す勝家はを見て味方をのゝしり鍵を横たへ二三度返し合せ敵を突ゑりそけゝしけれ共味方事共せず十四五町もしたひ行備前守も雲雀山迄罷出敵味方の様子を見居たまひけるか味方深入してはあしかりなんとやおもはれけん使番を以はや引取れと下知すれば玄蕃尤とこゝろへ味方を引つれ小谷をさして引入れければ山本勢も上道筋へ引にけり此時柴田すてにあやうく見えけるか味方はやく引取故なんなく信長卿の御本陣へ引付けるもとより信長も殿ひ大事とや思ひたまひけん三度迄使番を以被仰付けるか其中に猪子兵介といふ者かけ引の體見はからまひ翌日犬上郡か佐和山の城にうつらせ給ひ近邊所々の殘徒共の城取可責取手分被仰付我身は佐和山に本陣をすえ給ふ

世上坊逆心之事

斯て秀吉宮部の城に楯籠る世上坊か方へ申遣しけるは汝は城にて本望をこけ給はむ事九牛

か一毛成へし信長卿の幕下に成給は、本領相違有へからず行末よろしかるへしと申越れければ世上坊同心して秀吉へ人質指遣し頓而信長の味方に參世上坊心に思ふやう御味方を申上るゑるしに近所國友の城野村肥後守同兵庫頭に一矢射て信長の御機嫌に可入とおもひ手勢二百餘騎にて國友面へ押出す肥後兵庫は是を見て己心替するのみならず剩へ當城へ勢を寄るはあますなもらすな討捕とて三百餘騎にて姉川をさつと打渡り世上坊に切てかゝるそれよりして宮部勢と國友勢と追つおはれつ戰ふたり國友勢つよくして宮部勢一二町引退く世上坊取て返し討死せんと切てかゝる國友勢此競ひに追立られ我先に敗北して川中迄追入れけるかゝりける所に富岡藤太郎取てかへし二つ玉の鐵炮にてねらひ打に打ければ世上坊か高もゝを打ぬき馬より下へとうと落る富岡飛かゝり首を取んとせし所に郎等の友田左近右衛門尉とつて返し富岡を突ゑりそけ主の世上坊をかたにかけゑりそかんせし所を國友勢追かくれば世上坊いかに友田汝はゑりそけ我は爰にて打死せん二人うたれて何かせん有ければ主を捨る法や候とてかたにひつかかけのきければそれよりして敵味方あひ引に引にけり

信長卿江北進發の事

斯而信長卿は今度小谷面へ押寄敵を防ぎ置虎御前山に向ひ城を取立御勢を入置小谷の士卒をつからせんと思召元龜三年三月五日に二萬餘騎の勢を引率し濃州岐阜を御立有翌日六日に横山の城に着陣したまひて柴田修理亮は山本の城をおさゆへし佐久間右衛門尉市橋九郎

左衛門尉丸毛兵庫頭彼等三人は小谷山と虎御前山との其間八町なれば其間へ人數をわりこみ立置へし木下藤吉郎は殘る勢を引具し虎御前山に要害をとり立へしと被仰付ける信長卿の本陣は矢島野にすえさせたまふ斯て佐久間右衛門佐小谷面へわりこみ備へを立んとせし時備前守長政は居城間近く敵に足たまりを拵させてはかなふましと思ひ二千餘騎にて小谷面谷より打て出佐久間か陣へ討手を揃へさしつめく射立切立ける佐久間はしか間はさゝへしか小谷勢案内はよくゑつたり爰かしこよりひらき合せて戰へは佐久間も本陣へ引取小谷勢跡を追てすゝみける長政の其日の先手は淺見對馬守なりけるか深入して大勢につゝまれあしかりなんと思ひ長政の本陣田山川へ引取ぬ又西の方山本の城よりも阿閉淡路守父子安養寺三郎左衛門尉熊谷忠兵衛一千餘騎にて討て出る國友の城よりも横鍵に突かゝれば信長卿の勢防きかねてを見えにける味方深入せしと人數さつと引取已々か城中へ入にける信長卿此由を見給ひて御旗本を崩し田川迄押出し給へ共淺井勢はや引取ければ可責入手立もなくして人數横山迄引取たまふ信長卿今度は何とか思案侍りけん同十一日に横山の城を御立有西近江志賀郡へ發向したまふかゝりける所に高島伊黒の城には淺井方より新庄法泉坊を入置けるか淺井に企逆心信長卿へ忠節可仕旨申上則人質を差上ければ信長御感被成頓而安堵の御教書をそくたされける

高島伊黒の城責取事

去程に伊黒の城主新庄法泉坊信長卿へ味方して近邊の傍はい共を押寄く責取亂入し家財

道具なんどをうはひ取けるか海津信濃守小谷に籠城して居たりけるに己か一家の者其妻子等迄おかし押なひくるの旨注進有ければ不安思ひ長政に右のむね申上ければ長政聞たまひて汝無念に思ふ段左至極せりまかりといへど海上をへたて人數を出すといひ當城のふもと皆敵なりいか、有へきと案し煩ひたまふされども海津達て討手を望みける故長政も又此法泉坊忽にすて置なは高島一郡を、しなひけ此方へもせいを可出急き責とるへしとて海津信濃守に淺見對馬守山田順哲齋赤尾與四郎日根野彌次右衛門尉子息彌太郎を相添られ其勢一千三百餘騎伊黒の城の討手として同四月十四日に小谷を出したまへは翌日海津に付日根野本より軍法は得たり一千三百を二手に作り一手は城の後へまはし置七百餘騎にて城中を取まかんとせし時法泉坊は是を見て其勢雜兵八百計の勢を三百は城中に残しをき五百の勢にて町面へ打て出る味方七百餘騎にて弓鐵炮を以て四方より射立打立しに法泉坊も射立打立防ぎけるか後には鎧おつとりと互に入亂れ追つおはれつた、かひける味方伊黒勢に切立られ我先にと敗北すまかつし所に伊黒勢勝にのり淺見か勢を追かくる跡に日根野はひかへしか二百計鬨を作りかけ、面もふらす切てかゝる法泉坊も火いつる程に戦ひけるに後へ廻し味方の勢ときを、と作り一度に塀際迄責寄れば法泉坊かなはしとや思ひけん城中さして引取る海津淺見日根野此競ひぬかさしと付いり二三の丸迄乗込ける既につめの城をも乗取へき所に法泉坊か家老堀江傳左衛門と云しものよき時分にふみ留り向ふ敵を追拂ひ門をかためてふせきけるそれよりして味方息をもつかす責たりけり城中にも爰を先途と防

きた、かへは日根郡淺見に向て申けるは此近所敵多し其上信長も京都に居給ふへし一刻に揉落すへし先我等は責口の様子見るへしとて裏手へ廻るとひとしく進めや兵のれや者どもと下知をして塀に手をかけ日根野父子乗込は赤尾美作守か子息加兵衛同新介後改赤尾伊豆守續てのりこめは味方の兵五百計我おとらしどのりこむたり城中の兵敵にまきれて落るもあり或はうたれて死るもあり暫時に城は乗取ぬされ共法泉坊は軍兵共の討る、透に何く共なく落うせぬ其時日根野彌太郎と敵數多きりふせ其身も討死したりける此日根野父子は美濃國齋藤右兵衛佐龍興か侍なりしか龍興岐阜退散の時より淺井か家に來りしなり赤尾新介もてき二騎討とり我身も深手負て今をかきりと臥居たりしか郎等二人馳來りかたに引懸退にけり斯て淺井か兵共大將の法泉坊は打もらせとも敵の首三百八十餘討取は味方も百七八十もうたれにける伊黒の城を破却して海津信濃は残りけるは高島郡の仕置のためなり扱小谷勢はさゝめき渡り歸陣して長政に此むね申上れば悦ぶ事は限なし

淺井三代記第十六終

淺井三代記卷第十七

信長卿重て江北發向附虎御前山に付城をとり立たまふ事

斯而備前守の信長卿大軍を催し又此面へ進發せらるゝ旨をき、越前朝倉左衛門太輔義景の本へ爲使節木村喜内之介淺井福壽庵を差遣申入けるは信長近日分國の士卒を引率し當城小谷へ押寄味方の勢を押へ置付城を相構可申の手立のよし儘に其聞え候今度は是非義景急き出張被成敵を深々と引入一戰をとけなは勝利うたかひあるまじきと被申越ければ義景けにもとやおもはれけん其方一左右次第諸勢を引率し可打立とかく相究使者を小谷へ被歸ける長政の使小谷へ至り義景今度はひつてう出馬可有と相見え申候と申上れば長政喜悅たくひなしさて信長卿は子息城之介殿具足初有て召つれさせたまひ御分國の諸勢を引率し同七月十九日に江州横山の城に着陣あれとも後陣は濃州關ヶ原面を引もきらす其時御父子の御勢五萬餘騎とを聞えける斯て信長卿柴田修理亮木下藤吉郎佐久間等を近付させたまひ宣ひけるは我當國へ度々出張すといへとも小谷を手いたく責る事なし今度は押寄可責とおもへ共此城たやすく落へからす其上淺井か侍歴々城郭をかまへ所々に有之也先近々付城を長政か居城の麓西南に當たる虎御前山に丈夫に拵置軍をのへ置敵をつからし秀吉に才覺いたさせ淺井か大名分の者共大分程味方に引入其上にて長政に腹切すへきはいかにと被仰ければ仰左可然と御請申上るさあらは人數組をし小谷の城山本の城所々取出の要害をおさゆへしとて同廿二日に柴田修理亮木下藤吉郎丹羽五郎左衛門尉蜂屋此人々を

宗徒の大將として其勢八千餘騎小谷と虎御前との間雲雀山に押上る丸毛兵庫頭市橋九郎左衛門尉水野下野守中川八郎右衛門四人は雲雀山の東山本山には池田庄三郎内藤庄介塚本小大膳不破河内守彼等四人は早水村の西の方に備へを立る虎御前山の城普請には江北にて御味方仕候者共に福富平左衛門尉佐々内藏之介奉行に被仰付御父子の旗本矢島の南の野に五段に備へさせ給ふ備前守長政此由見るよりも越前朝倉義景の許へ注進す義景如例今度も又のひくゝにを成にける長政身をもたへて被申けるは義景今少早く來らるゝ物ならはきやつはらに足はためさせし物をと胸ふくらしてを居給ひける斯て寄手の人々は味方をひしと押へ置普請を急きける程に虎御前山をなしく山の内八相山に付城悉く出來して虎御前山には木下藤吉郎秀吉八相山には柴田修理亮を籠おかれ人數横山へ引入んとし給ふ所へ越前義景二萬餘騎の勢にて同月晦日に田部山に着陣すはや先勢は小谷面に充々たり八相山に置れし柴田は小谷面へ一千計にて討て出弓鐵炮を放ちかくる義景の先勢朝倉修理太夫か者共も二百餘騎馬よりはらりと下り立切てかゝる木下藤吉郎も虎御前山より討て出柴田か後陣にひかへたり柴田一軍して越前勢を追立へしと思ひ眞黒に突かゝる朝倉修理亮山崎長門守一千計相續てすゝみにすゝんで切てかゝる其よりしてこふつこまれつ戦ひける柴田か後にひかへし藤吉郎一千餘騎にて嚏と突かゝれば越前勢此競ひに追立られ色めく所を朝倉式部太輔丁野山の方よりそこを引なといふまゝに二千計にておめきさけんて突懸るさしもに剛成柴田木下も越前勢雲霞のこどく馳付ければ人數さつと虎御前山さして引入ける越前勢も

長途につかれたる武者なれば深入すへからずとて式部大輔諸勢を引つれ小谷をさして打入ぬ信長卿一里計引給ふ所に越前勢小谷面へ馳付柴田木下鎧を入たるを聞給ひ池田稻葉に下知して追散せと被仰ければ承ると申て二千はかりにて馬煙を立て馳せ來る朝倉勢は我人數を打つれ小谷の東谷へおしまはし人數をかためて陣取ければ池田稻葉も矢鳥野にひかへたり信長此旨聞たまひ敵陣取なは早々勢を引とれと御使番を以被課越稻葉池田勢を横山へ引にけるその後十日計か間は互に陣をはりたまへ共足輕合戦もなかりけり信長卿被仰けるは虎御前山は敵合近ければ無勢にてかなふましとて佐久間右衛門尉を柴田木下に指加へてそ被諭ける斯て備前守長政義景と相談して被申けるは宮部世上坊か楯籠る宮部の要害は普請あらく敷して無勢なれば是を一責攻へしとて淺井長政侍大將には同姓七郎大野木土佐守朝倉義景侍大將には同姓式部大夫なり義景長政雙方の勢七千餘騎にて討て出ける虎御前山の敵をは押へ可申とて前波九郎兵衛尉富田彦右衛門二千餘にておさへをく宮部の城を幾重ともなく取巻喚叫て責入にけり世上坊も聞ゆる兵なれば走廻士卒の氣をはけましけるされ共猛勢にて責平押に押寄ければ惣構矢庭に打破り我先にとこみ入はか、はり難く見えし所に柴田木下は近所なれば佐久間を城中にのこし置敵不來西の方川毛村の方へ討ていて宮部を助來り味方後へまはりければ味方色めき立てさはきけるに柴田木下はおめきさけむて切てかゝる朝倉式部大輔は旗本六七町程引退き人數備へて待かくれば柴田木下もおなしく備へて居たりけるか既にその日も暮に及へはたかひに人數を引にける義景長政

相談して丁野山に要害をかまへ朝倉方よりは堀江甚介平泉寺玉泉坊淺井方よりは中島宗左衛門尉を籠をきける此丁野山は小谷山麓より八町西なり斯て敵味方矢鳥野を間にして陣を張けれども互に手さしもなくして八月十六日には信長横山をひき取たまへは淺井朝倉も淺井に加勢として齋藤刑部少輔は小森彦六左衛門西方院を侍大將として一千餘騎大嵩の城にのこしおかれ信長當國を引取たまふとひとしく朝倉も越國をさしてひきにけり其後虎御前と小谷山と敵味方の若者共掛をとりをかけ合ける信長方の若者共田川野迄來り躍りける其歌に曰淺井か城はちいさい城やあゝよい茶の子朝茶の子とらたひ躍りければ淺井か若者共返し歌に淺井か城を茶の子をしやる赤飯茶の子はひ茶の子とおとり次の躍信長方へ懸ける歌に信長殿は橋の下の土籠ひよつとて、ひつこみひよつとて、ひつこみも一度出たらくひをとるとかけあひける今に當國草苴童の口すさみなり

武田信玄より淺井方へ使を被越事

去程に武田信玄より日向源藤齋を使として淺井方へ被仰越けるは内々申合せ候通來春は美濃國へ亂入し織田上總介信長を追拂ひ都へ切のはるへく候間手前の居城隨分堅固に相守り可被申との書札到來して軍の手立など源藤齋と示合せ可申との事なれば長政父子のよろこひは不及申淺井か一家色をなをして喜ひける以前六七年さきより信玄都へ切入給ふ物ならは路次の使りを頼とこれ有に付長政も内々信玄に心入深かりしと聞えける源藤齋は十日計小谷に滞留して歸りける既に其歳もくれぬれば元龜四年三月中旬に武田信玄は一萬

二千の勢を引牽し上總之介信長の軍立を可_レ見届とて東美濃蟹の大寺にぞ着陣したまふ信長卿此注進を聞江州淺井か押へに被_レ置し衆の内柴田を呼取給ひ頓て二萬餘騎の勢にて懸むかひ給ふに信長柴田池田に下知せられけるに今度は武田とはしめての參會なれば弓矢を卒爾に取へからず懸引敵にまたかひて取行ふへしと被_レ課先一番の柴田修理之介内藤庄助二番は池田庄三郎稻葉伊豫守三番は氏家左京亮御旗本に兩脇備へをすえ給ふ信玄も馬場美濃守をめて宣ひけるは信長懸向ふと聞ゆ軍を卒爾にすへからず此信長は若年より軍に功有既に天下に旗を上し人なればあなとるへからず汝軍を能見届可_レ申とて下知せられ明日の先手は内藤修理亮に可_レ申付馬場美濃守はあにひかへ軍の下知をすへしと被_レ仰付けるわけ、れは互に勢をそなへたり信玄の備三段なり内藤修理亮五六十騎の勢を出せは柴田も當分程勢を出すか、りしほどに柴田二百騎出せは内藤も二百騎計出し合せ後には互にやりおつとりくおめきさけんてた、かふ馬場時分を見請一千騎計さつとかくれは信長卿先手無_レ心元や思はれけん柴田か陣へまされ入軍の下知をそし給ひける柴田甲州勢を引請備へを崩して懸んとせしを信長柴田を引つれ池田か備へ退き給へは甲州勢勝にのり内藤備へくつし懸むとせしを馬場内藤をいさめ爰は勢を引入る所なりとて乗返し味方をさつと引にけりその時信玄馬場か人數の引取時分圖に當りたると御感有ける扱信玄信長の軍立見届たり先今度は勢を引入重て出張すへきとて岩村田に要害をかまへ秋山伯耆守を籠置御馬甲府に入ければ信長も岐阜に歸城し給ひける

阿閉淡路守謀判之事

去間山本の城に楯籠る安養寺三郎左衛門尉は海手を可_レ防とて安養寺村へ引取り要害を構へ楯籠る熊谷忠兵衛尉も今西村へ引さかり要害を構安養寺と一所にうみ手を防かんため兩人共に長政か下知として己々か在所へ引さかりける其替りに西野壹岐守を入かへられける阿閉淡路守心におもふ様城中の加番今村掃部今井十兵衛西野壹岐守は心やすしとおもひ取とかく小谷の城は二三个月の内には落城すへしまた香の有内に信長卿へ御味方申命を全して榮華をきはむへきと覺悟し虎御前山の城番木下藤吉郎へ内通し己か家老加藤介兵衛後改を近付申けるは汝は信長卿の本へ罷越可_レ申入者本領に加増被_レ成においては御味方申備中上加番の者とも追出し可_レ申候條其時分御加勢可_レ被_レ下と申上へしと言含め遣しければ介兵衛は信長卿の本へ至右之趣申上れば信長よろこびたまふ事限りなし則此介兵衛に引出物なと被_レ下淡路守には本領に御加増被_レ成御教書を被_レ下けるかくて淡路守人數を催し三の丸と二の丸との間へ人數を立置以_レ使申けるは長政卿我々を信長卿に可_レ責討ためにや安養寺熊谷を引とらされしなり我等は今日よりは信長卿の御味方に可_レ參なり其上唯今木下藤吉郎當城請取に勢を被_レ出候也各も同心にて候哉若さもなき物ならば討果可_レ申ため我手勢を出し申也と申込みければ三人の者は是をき、其意に相隨ひ申度候得共我々者長政を見立可_レ申と返事す阿閉大に怒ていて物見せんといふまゝに人數をおしかけ揉にもむて責ければ今村西野今井も爰をせんと、切むすふ阿閉兵に下知して申けるは安養寺熊谷か後卷せぬ間

に責や者ともす、めや兵と一刻責に攻たりけるに秀吉此よしを聞手勢三百計にて虎御前より出し給へは三人の者共かなはしと思ひ阿閉に人質を取三の丸を開渡し小谷をさして落にけり備前守阿閉逆心の趣を聞既に人數を出し阿閉を可責とへうきせられけるか物頭共申けるは足本に敵を置ながら人數を出し取入る事おほつかなしと諫言すれば長政も胸ふくらしてそやめにける角て阿閉は三人の者共を追出し不淺喜ひ秀吉と相談して安養寺を可責とて阿閉案して居たりける秀吉其勢七百餘騎安養寺村へ押寄取まかむとせし所を三郎左衛門尉纒其勢四百計にて江きは迄打て出けるに秀吉の先勢は弓鐵炮を放ちかくる安養寺向ふ敵に相かまはず城中へさつと引しつまり切て居たりける秀吉是を見たまひて敵は小勢と見ゆるを押し込めもみむて見よと宣へは時を作り責入むと勇みければ此安養寺村と申は西の方は湖水面北は沼也一方口にして容易可責入様もなくして二時計か間はにらみあふて居たりける安養寺又二百計の勢を出し弓鐵炮を放ちかくれば秀吉の勢敵を引出可討とや思ひけん秀吉の先手のもの共三町計さつと引安養寺か勢既に追懸勝負を決せんとせし所を安養寺久左衛門尉卒爾成味方の者共はや引とれとて城中へ引取ければ秀吉も此城は急に落へからすとて人數を引具し虎御前へ引給ふ翌日信長卿の本へ秀吉卿より被仰越けるは阿閉は御味方に參淺井に敵の色を見せ加番の者共追出し候とお、せられければ信長卿被仰けるは淺井可討よきたよりなりとて御喜ひは限りなし

信長卿小谷面へ發向附淺見大學之助心替の事

斯而信長卿は京都成敗したまひて岐阜へ歸城し給ふ所に淺井か家の子淺見大學之助は雲雀山の城を預りて居たりしか義心忽にひるかへして信長卿の本へ潜に案内まふし上げるは我等淺井に内々恨候條今度此面へ御人數被寄候は、當城雲雀山へ御勢を引入小谷へのあん内可仕候と申越ければ信長卿御感有て急ぎ江北へ發向し淺井を責はすしとて中三日御滯留被成廻文等を被仰付同八日に手廻小姓衆計にて御立被成翌日九日に横山に着陣したまへは我もくと諸勢馳集る程に都合其勢六萬餘とを申けるか、りける所に雲雀山の要害に淺井方より兼て籠置し淺見大學之助信長へ以前より内通のうへなれば當城へ御人數可被下開渡し可申と申越ければ信長卿の織田一介瀧川丹羽に被仰付雲雀山の要害を受取へしとて被仰ける既に其夜もあけ、れば八月十日の未明に御本陣を矢島野にすえさせ給ひ柴田佐久間木下不破前田丸毛塚本淺井新八郎大寄村の西に人數段々に備へたりかくて丹羽瀧川織田一介は雲雀山へをし懸ければ備前守大學心替りといふ事夢にもしり給はされは後卷をすへしとて手勢二千計にて城下面谷に立置けるか雲雀山へ人數半分程引くると見るよりも備前守宣ひけるは大學之助心替りして敵を引入ると見えたり足本を敵に堅められては口惜かるへしわれ追下せ者共と下知すれば淺井七郎同石見守赤尾父子壹千餘騎にて喚叫て切てかゝる丹羽瀧川是を見て願ふ處の辛也備前守も此まきれに討留へきと面もふらす切てかゝる七郎赤尾か兵もこふつこまれつ火出る程た、かひけるか佐佐前田不破三人横鎧に馳來る長政此由を見るよりも猛勢の中へ切込跡をまきられてはいか、と思ひ追拂ひ引取へしと

て備前守旗本を崩しか、れ、と下知すれば淺井か兵無二無三に切てか、れは雲雀山の人
數なんなく追拂ひ長坂引取むとせし處を柴田木下敵にかまはずしてはとへ廻横鍵にか、ら
んとせしを備前守是を見て馬煙を立て引給ふ谷口の切通迄敵たひ來難義に及へは長政は
爰そよき打死處なりと宣へは淺井か手廻の者共我も、と三百計取てかへし命を捨て戦ひ
け、故寄手猛勢なりとは申せ共切通より内へ一人もいれさりける此時西野五左衛門尉布施
小左衛門尉箕浦五兵衛尾山彦三兩森彌九郎長澤權助東野與一横山和泉守同孫次郎千田新四
郎躰留り手柄あく迄して打死をとくれは長政其ひまに城中へ乗込給ひける其時日根野彌次
右衛門長政に向ひ大に怒て申けるは日比軍の道能御存の上にて今日の武者出しおそらくは
御諷成へしとて再三にいましめける

木下藤吉郎丁野要害攻取事

斯て信長卿矢島より虎御前の要害へ入せたまひ秀吉卿を近付宣ひけるは汝大將にて丁野山
に楯籠る中島宗左衛門を可責と下知せられければ畏候と御請申上らる信長不破河内守丸
毛兵庫守塚本小大膳堀か家老樋口三郎兵衛多賀新左衛門山崎源太左衛門彼等を相添られけ
る秀吉其日の已の刻計より息をもくれす一日一夜もみにもむて攻給へは城中殊の外よりは
一命を御助被下に於ては越前の御案内可申上と平泉寺玉泉坊堀江甚介久保田助十郎三人
の者共申上ければ秀吉此旨を聞城中さへ開渡すにおいては命は相違有ましとて城をうけ取
不破丸毛に相渡し給ひける中島宗左衛門は辛き命を助り小谷へまのひ入にける月个瀬の城

に楯こもる月个瀬若狭守も我勢計にては當城か、はりかたし御加勢可被下旨小谷へ申遣
しければ兎角城をわけ小各へ可籠との義に付風雨はけしき夜城を忍ひ出小谷へ籠城した
りける信長卿柴田佐久間木下を召て宣ひけるは大嵩の北山田村へわり込淺井と越前義景と
の通路を取切可申と被仰付けければ畏り候と也頓て人數組を被仰付けけるは當國案内しる
へとして阿閉淡路守多賀新左衛門山崎源太左衛門樋口三郎兵衛磯野丹波守か與力の者共を
柴田木下に相そへられ山田村へわり込陣取ける

淺井三代記卷第十七終

淺井三代記卷第十八

越前朝倉義景小谷面へ出張の事

去程に淺井長政は信長卿に城中取つめられ味方残りすくなに心替して有ければ越前へ此旨注進再三なり義景此由を聞淺井に力を付むとて二萬餘騎の勢を引率し同十日に江州に至り木之本田神山を本陣として田部山に先手同姓式部大夫陣取ければ信長御覽して義景此面へ出たるを向陣を可取と被仰ければ柴田修理亮佐久間右衛門尉稻葉伊豫守高月村に向ひ陣を張にけるかくて小谷を取卷たる人々も丁野山虎御前山迄引にける木下藤吉郎秀吉卿は信長卿の前に進み出て被申けるは馬上山に取出を拵朝倉式部大夫と對陣をばり可申はいか、思召候哉と有ければ信長大に御感被成我等も左様に思ふなり誰をか大將に可遣やと思案する所にいしくも申たる物かな汝馳付可申と有ければ畏候と御請申上馬上山さして馳向ふ相從ふ人々には江北にて降人の衆樋口三郎兵衛多賀新左衛門尉山崎源太左衛門尉阿閉淡路守此等を宗徒の人々として三千五百餘騎にて馳向ひたまふ式部大輔も田部山より人數をおろし雨森川をへたて、互に弓鐵炮を射懸うちかけ相戦ふ秀吉卿はかねて手早き大將なれば其隙に要害あらましに取立本陣を馬上山にすえ足輕せり合毎日なり又上海道筋高月村の方も義景勢物部なはてをへたて、追つ返しつ相戦ふされ共互に勝負はなかりけりかゝる所に朝倉の侍前羽九郎兵衛父子富田彦右衛門尉戸田與次郎毛屋猪之助六合信長卿の方へ以内縁御味方申上越前への御案内可仕候條所領安堵被成へしと申込ければ汝等神妙成申

分なりすこしも如在有ましと被仰ければ信長卿の勢の中へ切入と見えしか頓て幕下に屬しける去程に信長卿の勢と朝倉か勢と東は雨森川原にて戦ふ西は物部村邊にて追つおはれつ戦ふたり其時信長卿の本陣は虎御前にすえられ二三日か間は武者烟を立てて責あひける

小谷大嵩の城没落之事

大嵩の城には越前より合力勢として侍大將には齋藤刑部少小林彦六左衛門西方院彼等三人籠置ける二の丸には淺井内井口越前守千田采女正三の丸焼尾といふ所に淺井侍大將淺見對馬守を籠をかれけるか對馬守信長卿の御味方と罷成忠節可仕とて敵の勢を三の丸へ引入ければ信長卿大によるこひたまひ同十三日の夜佐々藏之助前田又左衛門蜂屋瀧川彦右衛門市橋九郎左衛門尉を宗徒の侍大將として大嵩を七重八重におつ取卷時を噂とあくれば城中には井口越前守千田采女正走廻て下知をなす所に本丸にこれ有し齋藤刑部小林彦六左衛門西方院初の程は相共に敵を防ぐと見えしか井口か勢の中へ弓鐵炮を放ちかくれば城中上を下へと騒つ、井口も千田も命計を助り下野守久政の丸へにけ込けるゆへ信長卿より人數を入置淺井父子か居城を目の下に見下し勇にいさむて責たまへるも容易落へしとも見えさりける朝倉式部大輔と木下藤吉郎秀吉と馬上面にてせり合けるか淺井か城中に心替の侍多の由を聞式部大夫も秀吉のもとへ内通してさまて弓もひかさりける義景敵味方の軍の様子を見て此面を夜中に引拂ひ越前へ可引籠とやおもひけむ八月十八日の子の刻計に引取ける

信長卿越前より御歸陣之事 附小谷の城中へ腰を入らるゝ事

斯て信長卿は越前朝倉御退治被成加賀の國の繪圖を委仕差上可申と前羽に被仰付此前羽九郎兵衛を櫻田播磨守に改め則越前守護所を被仰付豊原の城を被下置大野城をは朝倉式部大夫に被仰付富田彦右衛門には府中の城をくたされ諸事國の仕置等三人相談して可仕旨被仰付八月廿五日に江州虎御前山に歸陣したまひて淺井父子か居城責手くを被仰付又小谷を幾重ともなく取まかせたまふ淺井下野守久政か丸と子息備前守長政か丸との間中の丸といふ所に淺井七郎同立蕃亮三田村左衛門大輔大野本土佐守を籠置けるか誠に命すてかたくや思ひけん一命御助被下様に達て御佗言申上ればさあらの先丸を請取へしとて木下藤吉郎を入置たまひ以御使番諸勢に被仰付けるは諸卒取巻敵をもらさるやうにかため此方より一左右せぬ間には責へからすをせつけられけるか長政の妻おいち殿助よひ出したくや思召けむ御信實にてや有けん不破河内守をめして被仰付けるは汝は案内をこひ長政か許へ行可申様は其方數年一戰に及ふ事も越前朝倉か故なり義景の討捕ぬ今は長政に遺恨なし當城を開渡すへし以來如在には存ましきと可申と御謔有ければ畏て河内守長政か城中へ入右之趣申入ければ長政聞たまひ被申けるは信長卿思召入有かたくは存候得共如此成果何を花香になからふへきた討死をこくへきなり御前よきに頼と申て一向承引申さるりき河内守立歸此旨角と申上れば信長重て被仰けるは長政それは我等か空言にて申と存るか今迄は其方の命今より後は我等か命なれば以來忠節を致し可被申大和國一國あておこなふへしと被仰越けれ共長政終に承引せずされとも長政の士卒共此

旨を聞き是はよき慶を入給ふに御承引あれかしといはぬ者はなかりけりそれ故城中の持口も油斷す廿六日の夜長政の菩提坊主雄山和尚と申僧を被頼小谷の奥曲谷の石切に申付石塔を切寄せられ徳勝寺殿天英宗清大居士と長政の改名をふり付其石塔の後を窪め長政自筆を以て願書をかき籠給ふ其意趣はまれさりける角て廿七日の未明に籠城の侍共を呼集め導師雄山をたせれき石塔の後に長政座し諸士の焼香をそうけられける武者共辭退すれ共達てと望みけるゆゑ各焼香をそまたりけるそれより其石塔を木村久太郎に城中を去のひいたし竹生島より八町東の沖中へ去つめられければそれより城中心一筋に成討死を心懸ける

信長卿の許へ長政妻をまくらる事

廿八日の巳の刻計に信長より又右之趣達て被仰越ければ淺井信長卿の御使河内守に對面して今度貴殿御取持世々未來難忘は存すれと當城にて尋常に腹を切可申といひ放ちてをかへされける其後御前をめされ被申けるは汝は信長の娘なれば何の子細も候まし信長の許へ送るへし若汝なからへて残りなは菩提をとふて得さすへしと名残を惜まれければ是は仰共覺え候はす諸共に同道にと社心かけつれ我等一人世に存へあれこそ淺井か女房なと人々に後指をさされむ事も口惜かるへした害してたへとそ宣ひける淺井重て被申けるは其方の宣ふ事も理りにては候得共娘共も女子の事なれば信長さして恨みはあらし若も助けあかれは我等のなからん跡迄も菩提をとふて得さすへし我今花のやう成姫共を害せん事も不便也理をまけてのかれよかしと再三に宣へは北方此旨を聞請させ給ひける此時御子

五人有内三人は女子二人は男子なり嫡男を萬福丸と申けるを木村喜内之介を相添被_レ仰付_レけるは當國はまる者多し越前敦賀郡にゑる人あれは彼者許に去のひ居て此若か成人を見立てたへとのたまひ城中を廿八日の夜中に去のひいたさるゝ壹人の男子は當年五月生れ給ひしを是は當國福田寺にとらせよとて乳人に小川傳四郎と中島左近あひそへ福田寺の本へ志のひ落蘆原に舟をうかへ忍ひてこそは置にける姫君三人北方に女佐の臣藤掛參河守を相そへ信長の許へ被_レ送ける信長卿北方を取かへし不_レ斜_レよるこひ織田上野守によきにいたはるへしとて預置る此小谷の北方は後に柴田に被_レ下柴田没落の時自害す此時又姫君達は柴田方より秀吉卿の許へ送りける一人は秀吉卿の妻と成秀頼卿の御袋一人は相國秀忠公の御臺大融院殿家光公の御袋一人は若狹宰相高次の妻と成給ふ

淺井下野守久政切腹の事

去程に信長卿は小谷の北方を取かへし不_レ斜_レよるこひ淺井は城を枕とし腹を切へきと覺悟をすゑけると見えたり此上なれば一刻にもみ落すへしとて京極つふら尾といふ所へのほらせたまひ惣軍勢に下知したまひけるは平責に攻淺井父子に腹切すへしと被_レ仰ければ承候と申もはてす四方七重に廻つて関を作り喚叫て責けるは天地もくつるかと思敷城中には中の丸まで敵を引入ければかゝはりかたく見えければ共城中の兵命もをします四方かけ廻防ける此時下野守の丸には雜兵八百計も籠りけるか寄手廿八日未の刻より夜の中共いはす廿九日の午の刻迄揉にもひて攻たりけれ共城中死を定めし所に柴田城中は無勢成を乗や兵と下

知すれば軍兵共屏に手をかけ乗込_レひた_レと打入ければ下野守は井口越前守をめされ今去はらく雜人の立いらさるやうに防きたひ候得腹切へしと被_レ仰ければ井口越前守赤尾與四郎千田采女正承候とて走廻防ける下野守は盃いたせ福壽庵と被_レ仰ければ日比たしなみ置たる小筒を取出す久政盃を取上させたまふ所に森本村鶴松太夫と申舞まふ者候ひけるか進出て申ける我身不肖成者とはまふせとも御なさせ深くしていつも御相伴ははつれ不_レ申候今何をばつれ可_レ申候やとまやくに立ける久政盃を三度迄かたふけ福壽庵にさしたまへは福壽庵鶴松に盃をとらせけるさて久政腹を切たまへは福壽庵介錯して其刀にて福壽庵心元に指立れば鶴松介錯をして我等は同じ座敷にては恐れありとて一段下の椽へ飛下り腹かき切てうせにける脇坂久左衛門も久政の御とも心かけて居たりけるに敵城中へ亂れ入を去はし防きて居たりけるか久政御自害を無_レ心元_レもひ内へかけ入見てあれははや御自害と聞己も腹をかき切御供をまふしける

淺井長政最後之事

去程に長政は妻子共をそ_レと相かたつけ給へは今は心にかゝる事なし花やかに軍すへしとて淺井石見守赤尾美作守同與七郎西野壹岐守彼等四人の者共に宣ひけるは今ははや心にかゝる事なし切て出一軍せんとて手廻小姓五百計にて討て出たまふ長政其日の裳束には黒糸綴の鎧に金襴の袈裟をかけ朱柄の長刀をふつて門をひらき切て出たまへは寄手我討取高名せんとて猛勢の中に引包む長政の勢五百計一足もひかすあたるを幸と切伏せ追ま

くりたまへは寄手猛勢なりと申せとも一町面崩れ散々はつと引ければ丸の中へを引ける信長卿是を御覽してよきつがひに敵切て出づるに討もらしぬる事の残多さよ重て切て出なは生捕にせよや兵と被仰ければ柴田木下承と申て黒烟を立て責ければ本丸計に責よせたりけれども城中の兵誰助り申さんといふ者一人もあらされは寄手塀へ乗むとすればはね落し突落しける程に長政の丸の中へは敵一人も入さりける斯て廿九日の夜に入ければ寄手少休息をしたりけるに長政其夜は並居て酒を吞たまふあけは九月朔日の事なるに又四方より息をもくれす責たりける長政手廻小姓にむかひ問給ひけるは親下野守殿の御手は如何御入候そ何成ゆかせたまふと有ければ昨日廿九日に御自害被成しと承り候と申上れば長政聞たまひ我夢計もあらざるなり今は何をか待へき父の弔合戦をなさんとて九月朔日の已の刻計に門をひらき二百計にて切ていてたまひ猛勢の中へ面もふらす切入四方八面にはたらし敵何程といふ數をあらす切伏く一足もひかす相戦ふ事高祖のいきほひもかくこそあらめとあられたりかゝりける所に木下柴田前田佐々此人々長政か働くにかまはずして跡へ廻り丸の内を取切は長政かなはしと思ひ引返し給ふもはや其時味方残すくなに討取られわつか手廻の勢五六十に成けるか我丸の内へ懸入むとせし所を木下柴田か兵稻麻竹葦におつ取巻長政本より剛將なればむらかれる敵の中を一文字にかけちらし丸の中へかけ入らんとする所を敵門内をはや堅めつれば我詰め城の左脇に赤尾美作守屋形有けるか其中へかけ入たまふ敵相續き込來る所を淺井石見守赤尾美作守同新兵衛なと爰に有とて踏留り相戦ふ

老武者とはいひなから好敵數多討取しか四方よりつゞまれ三人なから生捕れてそ行にける長政は美作守か家へ入けるに寄手其まゝ込入んとせしを淺井か小姓共に淺井おきく脇坂佐介なとをはしめたれかれといふ者共四角八面に戦ひ防さける其時長政も又立出長刀を以四方を拂ひたまへは敵も流石に入さりけり淺井日向守長政を引取御介錯可仕と申ければ心得たりとて頓て御腹めされける日向守も頓て錯介仕る長政満る年は二十九をしまぬ者はなかりける則日向守も腹かさ切て伏たりける中島新兵衛同九郎次郎木村太郎次郎木村與次淺井おきく脇坂左介並居てはらを切よける誠に此長政十六より武將を取一度もにふき事あらさりけるか最後のきは迄かく手はやく御腹めされし事古今まれ成剛將なりとて敵も味方も感しける信長卿御にくみや深かりけんこの長政の首と義景の首とを肉をさらし取朱ぬりに被成安土にて其翌年より正月の御禮に參上せらるゝ大名衆へ御盃の上に御肴にそ出にける斯て信長卿生捕來りし石見守美作守を御前へめされ被仰けるは汝等か所存として長政に逆心いさせ數年某にはねををらせつるにくき者共成と被仰ければ石見守雜言して申けるは淺井は信長の様成表裏の大將にてなきゆゑに如此成果申候と申上れば汝生捕にあふ程の侍として表裏を能存たるよとて鑓石つきを以頂を三ツ迄うたせたまへは石見申けるはそれこそよき大將の仕わざ成へしおしめ置し者打たまひ御腹いさせ給ふかと種々雜言を申ける信長卿さゝかねさせたまひ頓て打てたまふ又美作に向て宣ひけるは汝は若時より鬼神の様にさこえける兵なるか何とおくれ候哉と被仰ければとかく老まう仕候と

計にて御いとまを被望ける其時信長卿被仰けるは汝は老し者の儀なり汝かせかれ新兵衛は助置我取立て可遣と宣へは美作新兵衛にむかひ汝殿にたまはれてわるひれなと申ければ老めか我空言をいふとおもふかと打わらはせたまひ新兵衛を助おかれ後迄なからへほまれ有りて美作守を頼て許したまひけり

信長卿降人の沙汰おいち殿を抜萬福丸を生害し給事

信長卿其日は小谷に滞留有て淺井か降人共の御沙汰なされける淺井七郎同玄蕃亮大野木土佐守三田村左衛門大夫は長政一門成に落城さはの謀叛見苦しき心底なり諸侍のみせしめせんとて則誅罰したまひけるさて長政か北方おいち殿を近付させたまひ宣ひけるは長政は男子を一人持とさく是は何方に居候哉若ながらへてあるならば女子共と一所にそたて置長政かあとをつかせ可申と心なふ被課ければおいち殿はしめの程は深くつゝませたまひ何と成行申候も不存候と被仰ければおいとよ其義に非す長政こそかたきなれ比子共は我等か爲には近きみるいの事なればなけかしく思ふにより扱汝にとふ也と被仰ければ女性心のあさましさは御眞實そと心得たまひ何とやらん聞つる事も御座候か越前の國敦賀の脇にあるへ有其方に木村喜内之介といふ淺井か小姓あかりか預り居たるとき、申候と被仰ければ信長卿さては問ふとしたると悦びたまひ迎に可遣候間汝文してよひよせと宣へは心得申候とて北の方喜内之介か方へ念比に被遣ければ喜内之介承引いたさす害して捨申候と返事す其後又北の方信長卿よきにいたはり可申との仰なり喜内之介心得かたくはお

もへ共とてもまれたる上なればとて萬福丸の供いたし九月三日に江州木之本に着ければ秀吉中にて心得萬福丸を請取信長卿に此由被仰上ければ汝其子を申指にしてさらせよとて申指にしてさらしけるあはれなりし事共なり當歳の若は有やなしやをふる者なければ一人は残りける

信長卿江北仕置事

信長卿淺井か侍降人と成り忠節をはけます者共を呼出し所領を被下ける磯野丹波守には高島一郡を下されぬ阿閉淡路守には伊香郡一郡を給はり堀次郎いまた幼少たるにより家臣樋口三郎兵衛に坂田郡半郡を被下扱木下藤吉郎秀吉には今度のほねをり分淺からすとて江北の守護所と被成小谷の城に淺井郡に坂田郡半分犬上郡を被下ける秀吉小谷は小勢にては守りかたしとて今濱へ城をうつし名を改め長濱と付たまふ其後江州の諸牢人爰かしこにて一揆を催し國あつかならねは秀吉卿信長卿へ御訴訟被仰上けるは京極武藏守高秀の子共潜にかくれ居ると聞えたり此者共御呼出しなされ世に立給はれば此國は治るへしと被仰上ければ尤なりとて各御よひ出し有ける一人は若狭高次一人は丹後守これゆゑ江北の侍の心もやすんじおたやかに治りける

此書は何人の著したるやを知らずと雖も江北淺井家三代の興廢を詳記せり今再版に臨み
東京帝國圖書館本を以て再訂せり

近藤 瓶城

淺井三代記卷第十八大尾

朝倉始末記序

蓋惟死生有命。天皆賦之。禍福無門。人悉招之。孰得容刁於其間哉。故善神先知之。惡神
先必知之。神者誰。是天也。豈不可戒懼之。古人所謂。國家將興。必有禎祥。國家將亡。必有
妖孽者。俺今獲映。看之於朝倉氏之首尾。曩歲表米親王孝德天皇子也擊賊之日。投命粉骨能攘寇。
遂祝鰻魚之着。舟腹而爲。實者是非。國家將興之禎祥也。義景不崇。義昭之來于越前。匪
徒與淺井聯膈而抗。衡乎信長而已。坐任軍於諸兵。以不自顧戰事者。是非國家將亡
之妖孽也。自荒島表米末也始領。但馬國朝來郡アサカ。磯主自荒島六代之孫也改氏朝倉。高濤自磯主十代之孫也大振射
豬之譽。廣景自高濤八代之孫也越前黑丸城。高景廣高子也父子賜等持院之諱。敏景自高濤六代之孫也
門初并治越前一州以降。雖累世傳美譽。而不墜家聲。爲義景自敏景五代之孫也魯猷而又不
淑。一朝頽破。殄九百餘年之系者。悼惜何事外之。吁嗟。夫禹湯之創業於夏殷也。桀紂貪戾。而
歛覆其祖勳。文武之開基於豐鄩也。幽厲暴逆。而遂誠其王威者。比之於義景之事蹟。則雖
鼻祖能垂裕后昆。嗣子却不堪幹。蠱者倭漢一同之談也而已。故今輯彼家記。而加耳食口
碑於所其不足。絕筆於義景。以稱朝倉始末記者。素志不重于唱其初中全盛之時。而專
起自着。眼於義景受無後之罪也。看者厥思焉。

朝倉始末記
卷第一
淺倉家由來之事
越前加賀騷亂起之事
高田專修寺大谷本願寺開基前後附加賀富樫滅亡事
加賀能登越中凶賊亂入越前事
貞景逝去附下間筑前斬獲加州波左谷若松坊主事
朝倉教景進發加州附加州牢人落越前來事
六角少弼退治山科本願寺附朝倉教景逝去并唐船着越前三國事
朝倉太郎左衛門入道宗滴進發加州事
宗滴昔年發回諸國事
敷地菅生合戰并敵敗軍事
宗滴依病氣歸越前并宗滴死去事
山崎新左衛門吉家向安宅事

朝倉始末記總目

卷第一

淺倉家由來之事

越前國敦賀軍并朝倉孫五郎景總出奔之事

卷第二

越前加賀騷亂起之事

高田專修寺大谷本願寺開基前後附加賀富樫滅亡事

加賀能登越中凶賊亂入越前事

越前加賀一揆蜂起附帝釋堂怨靈事

貞景逝去附下間筑前斬獲加州波左谷若松坊主事

朝倉教景進發加州附加州牢人落越前來事

六角少弼退治山科本願寺附朝倉教景逝去并唐船着越前三國事

卷第三

朝倉太郎左衛門入道宗滴進發加州事

加州江沼郡三城沒落事

宗滴昔年發回諸國事

加州一揆抱多勢寄來事

敷地菅生合戰并敵敗軍事

龍力崎宮千代自害事

宗滴依病氣歸越前并宗滴死去事

朝倉右兵衛尉景高代宗滴趣加州事

山崎新左衛門吉家向安宅事

大館氏自京下越加和睦事

卷第四

義昭公下向越前事

堀江依謀叛之讒流浪事

義昭公自敦賀移一乘附密遊義景屋形事

義景母儀任二位尼付義昭公見南陽寺之糸櫻事

義昭公被爲成于朝倉屋形次第御能之事

義景嫡子逝去附義昭公移美濃事

卷第五

義景北方之事

義景信長不和之事

鐘ヶ崎姉川志賀合戰之事

朝倉家士大將死去之事

織田信長公江州北郡虎御前山拵城事

虎御前之城へ忍入小屋放火之事

義景敦賀郡へ進發之事

義景田神山陣替之事附刀根坂合戰事

印牧被生捕被誅事附朝倉彦四郎首之事

卷第六

義景飯陣并開一乘之谷給事

兒ヶ淵由來之事

大野道行之事

平泉寺衆徒心替之事

一乘之谷放火之事

信長公越前之府中へ着陣之事

義景陣所へ式部大輔押寄事

於大野義景生害之事

信長勢大野寄來事

高德院若上御曹司於歸里刺殺事

鳥居與七母之事

義景姬君被預福岡之事

越前侍信長公へ出禮事附淺井父子生害之事

卷第七

信長公越前江州守護代置給事

越前侍皆上洛事并名字被替事

富田孫六桂田退治之事

富田越前國討捕振威勢之事

一揆高田仙福寺へ寄事

從加州一揆之大將ヲ呼事

毛屋増井討捕之事

土橋式部大輔平泉寺エ落退事

富田與一揆合戰之事并富田孫六討死之事

國中一揆募事

金津溝江館一揆等攻寄事

杉補和談之扱事并溝江父子生害事

平泉寺退治之事

卷第八

一揆等平泉寺攻落事並衆徒討死之事

土橋式部大輔一揆郷人頭ニ被捕事

平泉寺院主御坊火中へ飛入失命之事

波多野千能丸ト申兒之事

玉泉坊誅伐之事

朝倉兵庫助城沒落之事

阿閉淡路守楯籠木ノ目城攻落事

上方勢下向ヲ聞所々構城之事

從大坂本願寺越前國ニ守護職居置事并本覺寺一揆等成敗之事

一揆與大將合戰之事

信長公越前へ發向之事

出ニ萬死ニ得ニ一生ニ事

越前國高田門徒繁昌之事

坊主一揆等悉ク被レ殺事

一揆大將下間筑後ヲ討捕事

朝倉始末記卷第一

朝倉家由來之事

情往古ヲ考フルニ孝德天皇ノ皇子表米親王ト申セシハ曩歲異賊襲來ノ時其ノ子荒島ノ王ト
 共ニ詔ヲ蒙テ但馬ノ海ニ出一戰敵ヲ靡ケテ歸京ノ時叡感殊ニ甚ク但馬ノ國朝倉郡大領トシ
 テ始テ日下部ノ姓ヲ賜リケル其苗裔朝倉太郎大夫高濑ニ八代ノ後胤朝倉孫右衛門廣景ト
 云人アリ建武年中マテ數代但馬ノ國ニ居住セリ其比天下大ニ亂レ國々所々或ハ公家或ハ武
 家ト立分レテ合戰止時ナシ正慶二年四月下旬源ノ尊氏公丹波國篠村ニ御着ノ時孫右衛門尉
 廣景モ足利武衛高經ノ手ニ屬シ出陣其後曆應元年越前國ニ於テ新田左中將義貞朝臣與ニ高
 經ニ合戰今茲閏七月二日高經擊義貞越前國中ヲ治給ヒ即廣景ヲ常國坂南郡黑丸城ニ居ヘ置
 給フカ故ニ黑丸右衛門尉廣景入道ト號ス武勇智謀ハ其家ナレハ云ニヤハ及フ外ニハ兼五常
 行ヲ守リ内ニハ堅ク佛神ノ靈ヲ信シ康永元年壬午ニ始テ建ニ立安居弘祥寺ニ貞和三年丁亥ニ
 再詣營北庄神明廟ノ時々ノ參詣不レ怠供佛祭神尤嚴重也文和元年壬辰二月廿九日九十八歲
 ニ卒去法名空海覺性ト申ケル其子彦三郎正景正和三年甲寅近江國ニ誕生ノ中比孫右衛
 門ト名乗ル文和四年二月十五日尊氏公與南帝戰洛陽東寺南大門ノ時正景特ニ勇戰ノ大
 ニ芳野ノ三萬兵ヲ敗ニ依テ將軍御感悅ノ餘即席其母衣ニ高ノ字ヲ直書シ給ヒケレハ是ヨリ
 正景ヲ改メテ遠江守高景ト名乗ル其後貞治五年十一月六日源義詮公ヨリ越前ノ良地七ヶ所
 ヲ拜領ニテ誠ニ由々シカリケル威勢也應安五年五月二日五十九歲ニ卒去法名德巖宗祐ト

號ス其子孫次郎曆應二年己卯ニ誕生ノ中比孫右衛門ト名乗ル文和四年二月十五日京軍ノ時十七歳ニ父高景ト共ニ忠戰他ニ超ケレハ尊氏公賞美ノ餘リ父ト一所ニ氏ノ字ヲ直書シ給ヘルニ依テ此以後美作守氏景ト名乗ル寔ニ凡俗若輩ノ身ナカラ武威ノ巨功ニ依テ父子相並シテ大樹ノ御賞翫ニ預レル事哀レ浮世ノ面目又ハ末世ノ美談哉ト羨サルハナカリケリ應永十一年十二月廿八日六十六歳ニテ逝去大功宗勳ト諡ス氏景ノ舍弟阿波賀但馬守茂景向駿河守久景三段崎彈正忠弼景何レモ子孫相續ス其嫡子又太郎貞景延文三年戊戌ニ生レテ中比孫右衛門後ハ下野守ト名乗ル永享八年閏五月十六日七十九歳ニテ不祿戒名大心宗忠其弟東郷下總守中島周防守景康トテ二人アリ其家嫡小太郎教景康曆二年庚申ニ生レテ中比孫右衛門後美作守ト號ス尤武勇ノ譽レアル人也普光院義教ノ御時鎌倉ノ公方持氏京都ヲ輕シメ給フニ依テ義教此ヲ督タダタメ永享十一年小笠原信濃守政康今川上總介範忠武田太郎信重等ヲ追討使ニ下サレシ時教景ハ從來斯波ノ被官タリシカレ武勇ノ譽レ有ルカ爲ニ辱クモ討手ノ台命承リ三士ト共ニ下向ノ終ニ持氏父子ヲ討取リ又其後結城七郎氏朝ト云シ者持氏ノ御子春王丸ヲ取立申サントテ日光山ヨリ迎ヒ取リ下野國結城ニ楯籠リケル程ニ教景又將軍ノ命ヲ蒙リ結城ニ發向メ合戰數年ニ及シカ嘉吉元年四月辛酉六月二十四日氏朝持朝父子ヲ討取テ遂ニ城ヲ攻破リ剩サヘ春王安王ヲ生捕上洛アリシニ依テ義教公御感悅甚クテ御諱ノ字ヲ下サレケレハ此ヨリコソ教景トハ名乗ケレ寬正四年七月十九日八十四歳ニテ逝去法名心月宗覺其弟北ノ庄遠江守頼景トテ越前足羽郡ニ在城シテ子孫相續セリトカヤ教景ノ嫡子孫次郎家景應永九年壬午

ニ生レテ中比孫右衛門後下野守ト號ス或ハ爲景トモ名乗トナン寶徳二年十二月廿日ニ他界享年四十九固山宗堅ト諡ス舍弟鳥羽豐後守將景モ子孫同相續ス家景ノ子三人嫡子小太郎敏景正長元年戊申四月十九日ニ生レテ中比孫右衛門後彈正左衛門ト號ス次男與三左衛門經景ハ越前大野ノ城ニ居シ三男遠江守景冬ハ同ク敦賀ノ城ニ居ス抑此敏景ハ幼童ノ時ヨリ才智人ニ勝レテ曉ク二六時中ニ心ヲ怠ラス晝ハ藝士ヲ集メテ弓馬軍法ノ奧義ヲ評シ夜ハ達人ヲ招テ儒佛歌道ノ至論ヲ探ラレシカハ家中良卑ノ老若マテ邪念ハ更ニ無リケリ年長給フニ從テ智仁勇ノ三徳ヲ備ヘ一豆ノ食ヲ得テモ掌ヲ連テ士ト共ニ食之一樽ノ酒ヲ受テモ流レヲ濺テ卒ト均ク飲之夙興夜寢克勵衆吮シ癘哀死愛士ラレケル程ニ諸人歸之事ハ只火ノ乾ハケルニ付キ水ノ下レルニ入ルニモ異ナラスアツハレ此君ノ壽ハ彭祖王母カ如クニテ大國ノ主共成給ヒ又ハ天下ノ政ヲモ執リ給ヘカシト上下願ハヌ者ハナカリケリ然ル間主從魚水ノ思ヒニテ假令如何ナル義アリモ身ヲ捨忠ヲ重ンナトカ粉骨セサラント各勇ミ合ケル程ニ敏景ノ威勢ニハ靡ヌ草木モ無リケリ是ハ扱ヲキ共比敏景ノ主君斯波ノ治部大輔義健ノ御子千世徳丸不慮ニ早世シ給ヒケレハ武衛家斷絶スルニヨリ各寄合大野修理大夫持種ノ御子左兵衛ノ督義敏ヲ申請ケテ斯波ノ跡ヲノ續セケル然ル所ニ家老織田彈正忠増澤甲斐守二宮左近將監舍弟駿河守并千福中務少輔等如何ナル子細ニテカ義敏ヲ嫌ヒ義政將軍ニ訟ヘテ義敏ヲ追出シ澁川左兵衛尉義紀ノ御子義廉ヲ養子ニシテ斯波治部大輔トソ申ケル其後義敏以伊勢伊勢守貞親室町殿へ歸參ノ託言申サレケルニ即御赦免アリシカハ文正元年四月上洛致

サレケル所ニ増澤二宮千福等討シクヤ思ヒケン謀ヲ廻ラノ義敏ヲ襲撃義政公甚々御腹立ノ
餘リ敏景ニ命ヲ増澤以下ノ者共ヲ急可ニ誅戮旨御教書下リケル程ニ敏景仰ヲ承リ諸軍勢ヲ
引卒シテ粉骨セラレケル故ニ長祿二年ノ春ヨリ同三年五月十三日マテ敦賀郡ニヲヒテ廿一
ケ度ノ合戦有寛正元年二月廿一日安波賀城戸口合戦同八月十一日和田軍同三年八月廿四日
鯖江新庄ノ合戦同五年八月八日檜山蓮浦合戦同六年正月十八日杣山合戦殿下桶田波着岡保
ノ合戦ニ甲斐中務ヲ討取リ文正元年七月廿三日大野井野ニ於テ二宮左近將監同駿河守ヲ攻
討テ武命天下ニ施セリ扱又應仁元年十一月朔日斯波義廉當國ニ出張シテ軍始リ同ク二年七
月十六日本郷ノ一戰翌十七日清水山合戦同八月廿八日志原合戦度々ノ軍ニ至ルマテ敏景悉
ク勝利ヲ得テ公方ノ御感狀ヲ受給フ就中杣山合戦ノ始末ヲ考フルニ増澤甚々豪強ニテ勝負イ
ツトモ見ヘサリケレハ敏景此度ハ有無ノ雌雄ヲ決セントテ寛正六年乙酉正月月中旬黒丸ヨリ
多勢ヲ率テ出給フ出陣ノ刻脇本ノ近邊白清水ノ邊リニテ出家一人來リケルカ敏景ヲ奉見
脇ヘ立寄禮ヲ作シテソ居タリケル敏景見給ヒ何坊主ソ所ハイツクソト尋ラレケレハ當國萱
谷村ニ積善寺ト申時宗ノ僧ナリト答フ然ハ連歌達者タルヘシ出陣ノコトフキ一句在之間
敷ナト宣ヘハ御言葉ノ内ヨリトリアヘス

朝風ニモマレテ落ルカイテ哉

ト仕リケレハ敏景一段御感ニテ頓テ目出度歸陣アルヘシトテ馬ヲ早メテ打レケリ斯テ杣山
近ク成リシカハ東西南北エ手配リシテ彼此レト各攻口ヲ請取馬ヲ川ヘ浸ヤト打入レ流ヲ切

テ向ノ岸ヘ驅上螺鐘ヲ鳴シ揉ニモンテソ攻ニケル半時餘リハ迭ニ命ヲ捨テ戦シカトモ敵モ
流石ノ勇士ニテ能要害ニ籠リケレハ味方ノ勢モ疲レタリ此上ハ即時ノ勝負ハ叶フマシ只緩
々ト攻ヘシトテ一里計引取遠卷ニコソセラレケレ其比敏景ノ御内ニ堀江七郎景用トテ武勇
ノ士アリケルカ隠レナキ連歌ノ上手ナリケレハ敏景彼ヲ召レテイサヤ陣旅ノ物サヒシキニ
連歌興行然ルヘシ味方悠々トスルナラハ敵定テ機ヲ撓ヘシ左アラハ明朝不曉ニ寄テ勝負ヲ
一戦ニ決スヘシ景用發句ヲ仕レトアリシカハ堀江畏リ候乍去御前ニ遊ハサルヘクヤ候ラン
但シ彼法師ノ仕タル發句殊ニ目出度候ヘハ是ヲヤ用サセ給フヘキト申ケレハ此義尤トテ各
列座斯テ五十員計ユキテ

鶉ニ交ル水鳥ノ聲

ト云句有ケレハ是難句トテ各付煩ヒテソ見ヘニケル此時敵ヨリ物見ヲ立味方連歌ノ體ヲ見
テ甲斐守カ云ケルハ敏景神智妙慮ノ大將ナレハ悠々タル爲體是只事ニヨモ非シ味方ニ飽マ
テ油斷サセ無備ヲ攻ンノ謀カト覺テアリ然レハ彼勝兵之術ハ密察敵人之機ニ而速乘其利復
疾撃其不意ト云ヘル者加様ノ時ニテ有ルヘケレハ今夜逆寄シ敵ヲ一時ニ討捕ラントテ究
竟ノ兵數百騎勝リ立テソ打出ケル敵方騷動スル體ヲ怪ミ番ノ者其告ケ來ルヤカテ物見ヲ遣
ス所ニ夜討ノ者間近ク此方ヘ來ル由ヲ申ス敏景聞タマヒ左アラハ急キ追散ラサン誰渠斯セ
ヨナト下知シ給フ所ニ堀江景用進出若輩ノ拙身憚多候ヘトモ仰付ラル、ニ於ハ辱カル可ト
申乞テソ出ラレケル左アラハ何レモ騷アルマシ勿論物勢出ヘカラス若殿原ノミ打出ヨサノ

ミノ事モ候ハシナト下知シテ胴ヲ提ケ肩ニ懸レハ胃ヲ取テ戴セ忍ノ緒ヲシムル間ニ弓ヲ張テソワタシケル斯ル隙ナキ折ナカラ右ノ難句ヲ吟シカケテソ付ニケル

澤沼ノホトリカツノ野ト成リテ

ト云捨テ、打出樊噲關羽ヲモアサムク程ノ景用ナレハ夜討ノ奴原ト火出ル計ニ責戰テ頸四ツ五ツ討捕數多ノ敵ニ手ヲ負セ御方モ七八騎薄手ハ少々負ヒケレトモ終ニハ敵ヲ追崩シテ逐北コト頻リナレハ或ハ勢盡或ハ手負ノ事ナレハ過半ハ川ヘ流レ死シテ北散者ハ稀レナリタリ景用本陣ニカヘリケレハ敏景大ニ褒美シ若年ノ至功尤諸士ノ手本タルヘシトテ即感狀タヒケレハ景用謹ンテ頂戴全ク拙士ノ微忠ニアラス偏ニ君ノ御猛威ニ依リタリト功ヲ辭シテソ立ニケル斯テ又右ノ百員繼吟シ滿散一兩日諸勢ノ疲ヲモ休セテ敏景仰ケルハ明日未明ニ敵城ヘ取懸クヘシ今度ノ一戰肝要ナレハ各々至功ヲ勵ツ、人馬アヤマチセヌ様ニ河ヲ大事ト心得ヨ淺ク思テ怪我スルナ敵破ラントセハ破ラレテ早々跡ヲ塞ケ轡ヲ雙ヘテ懸ラハ引退テ敵ノ馬ノ足疲ラカセヨ討者ニ成テ一騎合ニ懸ラハアヒノ策ヲ打テ推モデリニ射テ落セ敵疲レスト見ハ荒手ヲ替テ討スヘシ餘リ近寄ツテ敵ニ組ルナ引共味方ヲ見放スナト手段數多ニ下知セラレ若又各存ル子細モ有ルナラハマツスクニ可申ト宣ヒケレハ築山ノ某ト云老武者進出テ申ケルハ先日ニ替テ先河ヲ大事ニ存候此間ノ暖氣ニ峯々ハ谷々ノ雪消テ漲ル水岸ヲ洗其上思フニハ不似敵ノ要害殊ノ外堅固ナリ斯ル山川嶮難ノ地ナレハ人馬ノ懸引モ不輒候古人モ天ノ時ハ不如地利ト候ヘハ今度ノ一戰一旦御延引候テ持楯昇楯數多作セ其外攻

支度ヲモ能取繕ヒ水ノ落足ヲモ待給ヒテ取懸給フヘキニヤ但老後ノ弱言ニモヤ思召レ候ラント云ケレハ敏景聞給ヒ尤ノ諫言神妙ニ覺ヘ候乍去地利不如人和ト云ヘハ各志ヲタニ一ツニノ戰ヲ決セハ此程ノ節所ハナシカハ物數ナルヘキ其上又善攝生者陸行不遇兕虎入軍不被甲兵呪無所投其角虎無所措其爪兵無所害其刃杯共候ヘハ強ニ節所ヲ忌ヘキニシモアラス是非某カ運ニ任セテ雌雄ヲ見此銳氣不退内ニイサ打立ト宣ヘハ承リ候トテ東雲暉明各小屋ヲ打出川端ヘ押寄せテ見ケレハ存ノ外ナル洪水ニテ白浪天ヲ浸ケリ諸勢淺瀬ヲ窺ヒ何クヲヤ渡ラント暫猶預シケル所ニ敏景乗替ノ馬ノ内ニ老馬アリケルカ此馬俄ニ狂ヒ出テ手ニモ不堪手綱ヲ引切り馳メクリ半段計川下ヨリ川ヘ飛入湍テ落瀬杭ヲ淺々ト打渡リ河原面ニ驅上テ身振ヒソソ立タリケル諸勢是ヲ見テ老馬道ヲ知トハ是ナルヘシソレノト云ヨリ早ク馬ヲ入レサシモ漲ル早河ヲ眞一文字ニ馳上喚キ叫ンテ敵城ヘ推寄ル敵モ流石ノ勇士共ナレハ揉合ノ火華ヲ散シテ相戰フ程ニ太刀鏑音矢叫ノ聲誠ニ山河モ崩ルカト鳴止ム隙ハ無リケリ去程ニ互ノ討死數シラス袖山河原尺地ナク數千ノ死骸敷滿テ駒ノ蹄モ自在ナラネハ流血淋漓テ河ニ入白浪忽色變テ時ナラス紅葉ヲ流ス如ク也數度ノ合戰ニ敵ノ軍兵大方被討捕殘少ナニ成リケレハ潛魚ノ水ヲ離レ窮鳥ノ翼ヲ鍛シ如クニテ殿下桶田ヘ引退ク所ヲ同五月十六日ニ押シ寄せテ合戰斜メ成リケレハ又甲斐守討負テ敗北前後ヲ争ヒツ、彼着岡保ニ立忍フ所ヲ同閏五月十五日又攻詰テ戰ヒケレハ今ハ何トモ叶フマシ是迄ナリト云儘ニ増澤甲斐守兄弟千福中務少輔等悉ク討死シケレハ朝倉敏景凱歌ヲ上サセ目出度馬ヲソ

入ラレケル家中ノ上下ニ至ルマテ手負ヘ云ニ及ハス死人モ多ク有リケレトモ各身ノ困窮ヲ忘レテ佳運ノ良將カナ盛威ノ尊主カナ是偏ニ我君正道ノ致ス所ナリト敏景ノ事ヲノミ互ニ感シ合ヒケレハ傍ヨリ或老人ヨロホヒ出テ云ケルハ各々ニ當家ノ先祖ヲ語テ聞セ申サン往昔天智天皇ノ御宇異國ノ兵舟吾朝ヘ攻來其時元祖表米ノ宮勅ヲ受テ數萬ノ軍勢ヲ率シ但馬國ノ海上ニテ合戦シ給ヒシ時俄ニ大風吹來リ諸ノ兵船悉ク覆シテ軍兵イクラ共ナク底ノ水層ト成ニケリ中ニモ表米ノ宮ノ被召タル御舟計ハ無恙シテ本ノ汀ニ着給フ宮奇異ノ思ヲナシテ其船ヲ御覽有ケレハ舟腹ニ鮑餘多付テアリ宮仰ケルハ多ノ船ノ其中ニ吾舟一艘破損セサル事此鮑ノ助ニ依テナリトテ其鮑ヲ一ツ取ラセテ能々見給ヘハ貝ノ中ニ彌陀ノ三尊歷然ト顯レテ在ケリ宮左モコソト三度頂戴有ツテ隨喜ノ涙ヲ流シ寔ニ是佛神ノ擁護タルヘシ自今以後吾子孫タル者ハ鮑ヲ不可食トテ即是ヲ錦ノ袋ニ納給ヘリ斯テ此佛力ヲ信感シテ今度ノ一戦ニ利アラン事ヲ掌ニ握タマヒ殘卒ヲ集メ勇兵ヲ倍メ又大洋ヲ推渡リ終ニ夷敵ヲ攻退ケタマヒケリ因茲鮑貝當家數代ノ尊崇ニテ今ニ相傳シ給フ也今思ヒ合スルニ此度袖山ノ軍ニモ昔似タル事コソアレアノ比那河ト申ハ新道河能美河ノ落合ト云折シモ山々谷々ノ雪消ヘ水モ漲リテ蒼波白泡汀ヲ洗ヒ常ノ淺瀬モ深淵ト成テ誠ニ鳥ナラテハ通ヘシトモ見サリシニ人々橫帯ノ濕ル不濕間ニテ忽ニ打越ヘ小長ナル馬トモ、鎧モ不濕驅渡シケル事共ハ只尋常トヤ思スラン河上ヨリ大石巨木流集彼瀬ニ落留リタル其上ニ舊冬ヨリ谷ヲ埋タル落葉積塵堰留テ陸地ノ如ク成ニケリ古ヘ燕丹歸國ノ時楚橋落テ惱レシニ諸ノ龜共集ツ、甲ヲ並ヘ

テ渡セシモ左コソト思知レタリ其ハ有情ノ龜成リシカ是ハ非情ノ木石ニカ、ル不思議ノ有ツルハ是八幡ノ加護ナラスヤサレハ昔ノ表米ハ鮑貝ニ御舟ヲ助ラレテ終ニ異賊ヲ攻退ケ今敏景ハ老馬ニ淺瀬ヲ導レテ忽強敵ヲ打亡サル是ヲ見彼ヲ窺フニ主君敏景ハ朝倉中興其タメニ表米ノ宮ノ再誕疑アルマシト言フ盡シテ語リケレハ滿座ノ諸人感シツ、扱ハ故アル事共哉當家ニ鮑ヲ尊テ食シ給ハヌ事ノ由今コソ思知ラレタリ誠ニ敏景ハ直成人ニテハヨモマサシト貴賤舌ヲ振ハサ、ルハ无リケリ去程ニ慈照院義政公ハ敏景ノ行跡并ニ今度ノ始末トモ一方ナラス思召即文明三年五月廿一日越前一國始テ敏景ニ賜リツ、御朱印頂戴有ケレハ同名被官下々ニ至迄日出度御連ノ程ヤトテ千秋萬歲祝サルハ无リケリ斯テ敏景堀江七郎景用ヲ召シ様々至懇ノ御事ニテ今度夜討等之勳功トモヲ仰立ラレ即三千貫ノ地ヲ賜フ其外ノ諸侍ニ評判品ヲ盡シ功ノ上下ヲ究メツ、或ハ倍地加祿或ハ馬太刀金銀珠玉絹帛等恩賞數ヲ盡サレケル程ニ群臣彌命ヲ輕ンシ義ヲ重ンシテ忝主君カナ有難キ時世カナト懷隨恰モ骨節ノ屈伸スルニ異ナラス萱谷村ノ積善寺ヲモ召出サレ先日首途發句ノイミシサ當家ノ識文祝ハントテ三百貫ノ地ヲ賜フ其ヨリ黒丸ノ館ヲ改テ足羽南郡一乘ノ谷ニ始テ城郭ヲ築ツ、繁昌申モ愚ナリ然レモ金殿玉樓ノ飾リナク朱薨綠瓦ノ費モセス家中良卑ノ差別ナク專奢侈ナカレトノミ政道アリ依之御家督氏景ヘモ萬端心持以下ノ條々ヲ被示置曰

一於朝倉之家宿老ヲ不可定其身ノ器用忠節ニヨリ可申之事

一代々持來候杯トテ無器用ノ人ニ圍并ニ奉行職被預問敷事

- 一 天下雖爲靜謐遠近ノ諸國ニ置目付常可被爲窺其風儀之事
- 一 名作ノ刀脇指サノミ被好問敷候其故ハ假令萬疋ノ太刀ヲ持タリ共百疋ノ鎧百丁ニハ勝レ間敷候然レハ萬疋ヲ以テ百疋ノ鎧ヲ百丁求メ百人ニ被持候ハ一方ハ可相防事
- 一 從京都四座之猿樂等切々呼下見物被好問敷候其價ヲ以國ノ猿樂ノ内器用ナラン者ヲ上仕舞ヲモ被爲習候者末々迄可爲嘉樂事
- 一 於城内夜能可爲無用事
- 一 侍之役ナルトテ伊達白川へ使者ヲ立能馬鷹ナト被求間敷候自然他所ヨリノ到來ハ格別ニ候其レモ三ヶ年過キハ他家へ可被遣長持スレハ必後悔出來候事
- 一 朝倉名字中ヲ初年ノ始ノ出仕表着可爲布子候并各同名定紋ヲ付サセラルヘク候分限有トテ衣裳ヲ結構セラレ候者國ノ端々ノ侍色ヲ好ミフキノ、キタル所へ此體ニテハ出ニクキ杯トテ構虛病ヲ一年不出二年出仕不致ハ後ニハ朝倉前ニ伺公ノ者可被少候事
- 一 家中諸奉公ノ内假令不器量無朝榜ニ候トモ一心健固ノ輩ニハ別ノ可被加愛憐候但懦弱ノ族タリト云共容儀押立出群ノ者ハ尤可然供使之用候ノ條是又被空捨間敷候雙方不足ノ輩ハ介抱甚可爲無益事
- 一 無奉公ノ者ト奉公ノ族ト同譽益ハレ候テハ奉公ノ人イカヲカ勇可有事
- 一 サノミ事闕候ハスハ他國ノ牢人杯ニ右筆サセラル間敷事
- 一 僧俗共ニ能藝一手アラン者他家へ被越間敷候但身ノ能ヲノミ本トシテ無奉公ナラン

輩ハ無曲候事

- 一 可勝合戰可取城攻等ノ時吉日ヲ選ヒ方角ヲ考ヘテ時日ヲ移ス事甚口惜候如何ニ能日ナルトテ大風ニ舟ヲ出シ大勢ニ獨向ハ、不可有其甲斐候假令難所惡日タリ共虛實ヲ密々ニ奇正ヲ整ヘ臨機應變ノ謀ヲ本トセハ必可被得勝利之事
- 一 一年中ニ三ヶ度計器用正直ナラン者ニ申付國ヲ廻ラセ四民諸口ノ唱ヘヲ聞其沙汰ヲ可被改候少々形ヲ引替テ自身巡檢モ可然候事
- 一 當家壘館ノ外必國中ニ城郭ヲ構サセラル間敷候惣ノ大身ノ輩ヲハ悉ク一乘ノ谷へ引越シメテ其郷其村ニハ只代官下司ノミ可被居置事
- 一 神社佛閣并町屋等ヲ通ラレン時ハ少々馬ヲ留テ奇麗ナルヲハ聊稱美シ破損セルヲハ稍惠憐ノ詞ヲモ加ラレ候ハ、至ラヌ者共ハ御詞ノ懸リタル杯トテ歡拊ニ堪スノ惡キヲハ早ク改メ能ハ彌可相嗜候乎然ハ造作モ不入ノ國ヲ見事ニ持成事モ專可依主君之一心候事
- 一 諸沙汰直奏ノ時理非少モ被曲間敷候若役人等私ヲ致スノ旨被聞及候ハ、堅ク可被處同罪之事
- 右ノ條々克々服膺シ晝夜相勤メテ永ク子孫ニ胎厥セラルヘク候諸事内方ヲ謹厚ニ沙汰シ候ヘハ他國ノ惡黨ハ邪魔セヌモノ也平生猥シキ所ト知ラレ候ヘハ必ス他家ヨリ手ヲ入ル、モノニテ候或ル僧ノ物語セラレシハ人ノ主君ハ不動愛染ノ如クナルヘシ其故ハ不動ノ劔ヲ提ク愛染ノ弓ヲ携フルヤ全ク切ニ非ス射ニ非ス偏ニ惡魔降伏ノ爲ノミニシテ内ニハ慈悲專ラ

深重也人ノ主モ如此能政ヲ本トシ刑罰ヲ末トシテ扱能者ヲハ勸惡者ヲハ懲シメ理非曲直ヲ平ニノ一殺多生ノ法ヲ行ヘシ是コソ慈悲ノ殺生トハ云ヘケレト也誠哉人主タル者假令聖賢ノ書ヲ口ニ誦シ多少ノ藝ヲ身ニ熟スト云共一心偏屈ニシテハ萬事不可然候論語杯ニ君子不重則不威ト有テ見テ偏ニ重キ計ト心得テハ甚惡シカルヘク候可重可輕モ時節事宜ニ依テ其振舞肝要也此條々大方ニ思レテハ無益候入道一孤半身ニテ不思議ニ國ヲ取ヨリ以來晝夜怠ラス工夫致シ或時ハ境内ノ宗匠ヲ集メ或時ハ諸國ノ名人ヲ招テ其語ヲ耳ニテサメ其事ヲ心ニ味ヘテ今ニ如此ニ候相構テ子々孫々ニ至ル迄此條書ヲ克提任メ八幡ノ氏神ノ御教ト被思候者輕クモ朝倉ノ名字可令相續乎於末々諸事吾儘ニ被振舞候者必ス後悔可任之候事仍如件云々文明十三年辛丑七月廿六日五十四歳ニシテ捐館法名英林宗雄上下取分惜哀ケルトカヤ抑彼堀江七郎景用ト申ハ利仁將軍ノ苗裔叙用後胤ニシテ齋藤ノ正統ナルカイツノ比ヨリカ越前國坂北郡堀江庄ニ居住セラレケルニ依テ在名ヲ取テ代々堀江トコソ申ケレ殊ニ此景用ハ虵身ノ子ナレハ如何様只者ニテハ有マシトソ人々怪合ニケル其由來ヲ尋ルニ父景經笛ノ土手タリシカ或夜人里遠キ嶋カ繩手ヘ出テ笛ヲ吹ケルニ年ノ程二八計ノ女容顏美麗世ニ勝レ傍モ輝計成カ來テ用有リケニ立徘徊フ堀江何者トソ問ケレハ苦シカラサル者ソトヨ我モ由有ル身ナレ其父母ニハ後ツ、持方ナキ孤ノ思ヲ碎ク空瀬見ヨルヘ定マ浮身ナレハ誘フ水アラハイツクヘ共存スル也兼テヨリ聞及參ラセ候ヘ共晝ハ人目ノ面ハユケレハ今夜思ヒノ末トケテ笛ヲカコトニ參リタリ此上ハ兎モ角モ情ヲ頼奉ルト最神妙ニ聞ヘシカハ堀江モ岩

本ニ非レハ具ノ我屋ニ立飯起臥心ヲ付ケルカ如何様故アル者ト打見ヘテ物毎優ニヤサシク有シカハ後ニハ夫婦ノ好ヲナス去程ニ彼女申ケルハ我既ニ懷妊シテ月モ漸重レハ新ク産所ヲ立タマヘカシ堀江聞テ何ノ憚ル事アラン只是ニテト有ケレ共女重テ思フ子細ノ候ヘハ産所ヲ如何ニモ太ク選シ四方ヘ板ヲ決入透間少モナキ様ニ其廻リニハ柵振セテ人ノ通ノナキ様ニ被仰付候ヘシ只今迄ノ御情ニ望テ叶ヘテタヒ給ヘ我身空ク成速モ身ニニサヘ成ナラハ浮世ノ妄執殘ルマシ産子男子ニテ候ハ、此旗ヲ母カ記念ニ見セテタベ此紋ハ我カ父ノ家ニ傳リテ霞ノ旗ト申ス也此旗タニ指スナレハ如何ナル強敵ニ向フ共利ヲ不得ト云事有ルマシトテ虵ノ目ハツ付タル旗ヲ出メ堀江ニ渡シヌ女子ニテ侍ラハ肌ノ守ヲトラスヘシナト涙ヲ流シ云ケレハ景經無臈ハ思ケレモ年月馴來シ妻ノ事ナレハ望ニ任セテ産所ヲ別ニシツラヒケリ斯テ彼ノ女月モ滿心モ常ナラテハ我ハ産所ニ入候也今ヨリ七日ノ内ハ必人ヲ寄給フヘカラス人音モ近クハ叶候マシ平産致シ候ハ、内ヨリ案内可申トテ其身計ソ入ニケ 堀江世ニ替リタル様子ナリトテ最不審ニ思七日ヲ待カネ六日ト云シ夜ニ入テ潜ニ忍ヒ寄雖ニテ板ヲ揉アケテ内ノ體ヲ見タリケレハ世ニ冷マシキ大虵眼ハ日月鱗ハ星ノ如クニ輝ケルカ鐵ノ角ヲ振立紅ノ舌ヲ出シテ赤子ノ鱗ヲ舐リ落ト見ヘテ身ノ毛モヨ整ツ計ナリシカ外ヨリ見ルトヤ知リタリケン彌眼ヲ見開キ大キニ怒ル體ニテ天地モ割ル計ニ鳴動シ忽チ産所ヲ踏破テ行方不知失ニケリ其跡ヲ見レハ玉ノ様成男子アリ此子如何様餘人ニ替リ脇下ニ鱗三枚有リタルカ無程成長シ景用トソ名乗ケリ依之堀江家督可取子ハ必ス鱗三ツ有其外ノ庶子タル

者ハ又アザノ如クナル鱗ノ驗シアリトカヤ然ル間彼景用ハ幼少ヨリ才智人ニ勝レテ連歌殊ニ器用成ケレハ敏景愛憐不斜去程ニ景用十三歳ノ比敏景連歌興行有ヘシトテ都ヨリ華ノ本ヲ呼下ツレ饗應品ヲ盡シテ仰ケルハ七郎ト云侍童連歌器用ニハ候ヘ共若輩ト云ヒ邊人ト云ヤワカ左迄ノ事ヤ有ヘキ乍去發句望レ候テ惡ハ不及云ニ假令能トモ批言ヲ打テ難シラレ候ヘト有ケレハ宗匠畏テ伺候ス家中老若ノ數輩且ハ馳走ノタメ且ハ聽聞ノタメトテ武ヲ接テ參列ス去程ニ景用出席敏景仰ニ宗匠ケルハ近日連歌可令興行ノ間今日發句所望トアリ宗匠仰畏リ候乍去景用ノ吟聲華洛ニ鳴先是ヲ承リ候ハント迭ノ辭讓決セス敏景左アラハ若輩ノ景用兎角ハ華ノ本ノ下知ニ隨ヒ候ヘト仰ケレハ景用畏リ折シモ冬ノ事ナレハ

冬ノ田ニ水ノ種マク霞哉

ト仕リケレハ華ノ本手ヲ打即席ト云ヒ奇妙ト云ヒ兎角申スニ及ハレス古今ノ上手ナルヘシト大ニ賞翫シケルカ少シ難シ度事侍リ水ノ種トハ如何様成ヘキト有シカハ堀江答ヘケルハ御不審ノ條尤ニ候加様ノ類古來ヨリ連歌ニ申傳ル事ト相見ヘ候ヘ共我等如キ者猶以不審難晴候ツルニ斯ル名人ニ邂逅シテ幸ニ寸胸ノ疑ヲ晴シ申度候然レハ古ヘヨリ言ノ華心ノ種ナト申傳ヘ候事ハ如何ハンヘラント問ケレハ華ノ本是ヲ聞尤理ニツマリ候トテ彌褒美シケレハ一座ノ老若モ興ニス入ニケル華ノ本申ケルハ加様ノ類ヒ不審ノ立事マテハ無ク候ヘ共尤名譽ノ七郎殿トハ承リツレ共若輩ノ事ニ候ヘハ連歌ノ長ヲ試カ爲加様ニ申懸候キ末代ハ知ラレス前代ハ承及ハヌ名人ニテ候ト敏景ヘ申上ケ一同ニ感シ合テソ立ニケル斯テ華ノ本ハ

三ヶ月ノ逗留ニテ度々連歌興行有ケレハ最早御暇トアリシ時敏景仰ラレケルハ七郎京ヘ上スヘシ宗匠ニテ連歌指南シ上手ニナシテ給レト有リシカハ宗匠堅ク領掌ニテ左有ラハ京都ヘノ土産ニトテ越前ノ名物錦蠟燭奉書紙并金銀多賜テ頓テ都ヘ飯ケリ去程ニ七郎十五歳ノ時敏景京ヘ上サレケレハ即華ノ本京中ノ歌人ニ廻文シテ田舎ヨリ若輩ナル連歌ノ達者上洛トアリケレハ珍敷事ヨトテ各會合連歌興行ニテ七郎ヘ發句所望ノ時七郎堅ク辭セラレケレ共高座ノ頻リニ懇望アルケレハ七郎

交リテ萩ノ聲アル薄哉

ト云々京中ノ達人等各名譽ト感シケリ斯テ百員興行アリ其内ノ句ニ

姿ニモ似ヌ心成リケリ

ト云前句ニ七郎

フクロウノ華ニ一夜ノ宿借リテ

ト付ク又

右モ左モ袖ハヌレケリ

ト云前句ニ

浦遠ク鹽汲海士ノ肩替テ

トソ付タリケル末ノ世ニハイサシラス當代ニテハ京田舎共ニ斯ル名句ハヨモ非シト感セヌ者ハナカリケリ斯テ一兩年在京ノ連歌ノ功モ少々積ケル折節七郎思レケルハ何レノ道ニテ

モ名人ニ成テ悪キ事ハ有マシケレ共我弓馬ノ家ニ生レテ家ノ業ヲ捨ルハ甚本意ナシ古キ辭ニ切而學者如旭日出光老而學者如秉燭夜行ト云ヒ又ハ一生ノ計事ハ在幼稚幼稚不學老後悔云ヘハ只若年ニ飯國センニハシカシ殊ニ主君敏景常ニ武道ヲ好ミタマフ餘リニコソ歌道杯モ少シハ翫ヒ給フナレトテ其旨趣敏景ヘ委ク中上ケ親父堀江景經ヘモ申越サレケレハ鬼モ角モト被免ケル程ニ在京ノ間親ミ深カリシ旁ヘハ其レノニ倍別ノ頓テ國ヘソ飯ケル是レヨリシテ景用諸道ヲ抛弓馬ノ稽古ノミニシテ終ニ武勇ヲ顯セリ

敏景ノ子息孫次郎氏景ハ長祿三年乙卯四月五日ニ誕生後孫右衛門ト號ス幼少ノ時ヨリモ器量骨柄人ニ勝レ長ケ高ク色黒ク尤太ク逞ク諸事壯年ノ如クニテ日ニ添月ニ増シ智謀無雙ナリケレハ文明三年六月九日東山殿ヨリ北陸道可切開トノ上意ニテ御劔ヲ被下加賀能登越中其外北陸道ノ餘黨等頗ル討平ケテ天下ニ名ヲ揚ケ給ヒヌ守國僅ニ六年文明十八年七月三日廿八歳ニテ卒去子春宗孝ト戒名ス舍弟數輩次郎左衛門景明同孫五郎景總是レハ後ニ上京シ細川政元ニ隨テ彈正忠元景ト改ム同小太郎教景早世同孫七時景同孫九郎景儀後左衛門尉ト號ス同太郎左衛門教景入道トテアリ此人ハ武勇知謀專ラ世ニ超ヘ給フニヨリ朝倉金吾トテ英林ノ末子ナレ共其名天下ニ隱レナシ弘治元年九月八日七十九歳ニテ死去法名照葉宗滴ト申ケリ氏景ノ子孫次郎貞景文明五年癸巳二月五日誕生後彈正左衛門ト號ス長亨元年丁未九月十二日近江守護佐々木大膳太夫高賴將軍義尚公ニ背テ逆心シ終ニ賊徒ヲ馳セ集メテ御敵ノ色ヲ揚ケレハ將軍兵ヲ帥テ自坂本出陣高賴モ亦勢多ノ邊ニ屯シテ彌猛威ヲ振ヒケル程

ニ將軍越前ヘ御使ヲ下サレ急江州ヘ馳來テ凶賊退治有ヘシトノ鈞命荐ナリケレハ貞景仰ヲ承リ長亨元年九月下旬數萬兵ヲ引率テ江州ニ亂レ入り在々所々ヲ放火シ合戰粉骨セラレケレハ賊黨忽敗北シテ死亡スル者數知ラス高賴今ハ叶ハシト遂ニ跡ヲ暗マシテ甲賀山ニ逃入ケル將軍ハ江州鉤ノ里ニ陣取セ給ケルカ貞景ヲ召レテ今度無類ノ大勳功更ニ謝スルニ所ナシ吾儕カ爲ニハ舟霖ノ忠臣天下ノ爲ニハ鹽梅ノ良將トモ若ル人ヲヤ云ヘケン早歸國シテ休息有レト惻篤品ヲ盡サレケレハ貞景面目施シテ即歸陣セラレケリ天晴由々敷武功ヤト上下感羨シケルトカヤ永正九年三月廿九日四十歳ニテ卒去天澤宗清ト諡ス其嫡子孫次郎孝景明應二年癸丑十一月廿二日ニ誕生後又彈正左衛門ト名乗ル舍弟ハ右兵衛大夫景高ト號ス永正九年壬申三月義植將軍江州ヘ發向シテ佐々木氏綱ト合戰止時ナシ然處ニ將軍遂ニ敗績シテ甲賀山ヘ出奔氏綱勝ニ乗ツテ將軍ヲ追圍事稻麻ノ如シ孝景越前ニテ此事ヲ聞此度忠義ヲ立スンハ先祖ノ佳名却テ空シカルヘシトテ永正十年三月下旬猛軍ヲ引進發シテ大ニ佐々木ト競争ス氏綱一戰ニ利ヲ失テ忽勢州ヘ敗北スルカ故ニ同年五月三日將軍既ニ飯京孝景ヲ召シテ今般絶倫ノ至忠拔萃ノ巨功多謝甚慶何者カ又々其右ニ出シ是ソ我輩カ股肱腹心タルヘケレト深ク感賞シ給ヒツ、同十三年六月五日白傘袋并毛氈ノ鞍覆ヲ御免セラレテ歸陣アル其後大永七年十一月十九日公方義晴公ノ御爲ニ三好薩摩守長基ト京都ニ戰ヒ終ニ是ヲ打破テ三好カ一族其外阿波勢以下ヲ悉ク攻亡ス又細川高國ト桂川ニテ合戰ノ時モ孝景大ニ勝利ヲ得テ公方ノ御感狀ヲ受ケ給ヒ享祿元年五月廿五日既ニ御相伴衆ニ成リ給フ此外數度ノ忠

功無雙タルニ依テ將軍家ノ御賞翫不斜シテ天文四年卯月廿二日ニ塗輿御免成リケリ由ヤシカリケル譽レトカヤ天文十七年三月廿二日五十六歳ニシテ他界法名大岫宗淳其子孫次郎延景天文二年癸巳九月廿四日ニ誕生同廿一年六月十六日公方義輝ヨリ左衛門督ニ任セラレ御諱ノ字ヲ賜ツテ義景ト改號ス天正元年癸酉八月廿日織田信長ニ攻ツメラレ越前大野ノ奥ニシテ其臣朝倉式部大輔ニ逆殺セラレテ當系終ニ絶亡ス享年四十一トカヤ吁夫表米ヨリ以來百葉傳嗣ノ朝倉家只一代ニ盡失シテ英林ヨリ下ツカタ數世繁茂ノ一乘カ谷忽于暫時ニ荒廢セシ事共ハ盛者必衰ノ世ノ倣ヒトハ云ヒナカラウタテカリケル分野ナリ

越前國敦賀軍并朝倉孫五郎景總出奔之事

爰ニ朝倉敏景英林ノ子孫五郎景總俄ニ越前ヲ去テ他國セラレシ始ヲ尋ルニ景總ノ弟ニ小太郎敦景ト云シ人はハ舍弟ナカラモ本腹ナルカ故ニ每事座上セラレ殊ニ親父敏景ノ愛子ナリシカハ兄弟ノ中カ常ニ不和ナリケルカ文明十五年七月十三日相撲ノ場ニテ景總忽敦景ヲ殺シ終ニ宅良ノ慈眼寺ヘカケ入り遁世ノ年月ヲ被送ケルカ敦景母儀五位ノ尼公ノ憤リ甚シキニ依テ景總不得已當國ヲ出都ニ上テ細川政元大心院ニ被出ケレハ既ニ對面響應由々敷即朝倉彈正忠元景ト號シ威勢尤盛ン也其比英林ノ舍弟ニ敦賀ノ郡司朝倉遠江守景冬トテ大剛ノ勇士アリ人トナリ豪俠ニシテ甚タ輕捷成リケレハ在京ノ時ハ京童共朝倉ノ小天狗ト申シケル沒後子息孫四郎景豐相續景豐ハ即彈正ノ忠元景ノ賀也時ニ鳥羽右馬助勝蓮華又太郎堀江中務丞景用朝倉太郎左衛門敦景此等ハ皆遠州ノ婿也景豐斯ル縁者ヲヤ頼敷被思ケン嫡家貞

景ニ對シテ潛ニ謀叛ノ企有リトソ聞ヘシ其比太郎左衛門敦景モ如何ナル子細ヤ有ケン龍興寺ヘ馳入テ出家遁世シ宗滴沙彌ト號シツ、蟄居セラレ候ヒシカ熟ヤ被思ケルハ縱令山々ノ怨アリトテモ惣領ニ對シテ逆意スヘキニ非ストテ夜中ニ一乘ヘ上テ貞景ヘ直ニ可申入子細有之由被達ケレハ貞景宣ヒケル様ハ寺籠リスル者カ夜中ニ來ル事コソ不審ナレトテ用心緊ナカラ對面有リケレハ敦景少モ不臆我身ノ悔謝述終テ後貞景ノ前近居寄テ孫四郎隱謀ノ義且彈正忠近日敦賀ヘ可有出張旨具披露セラレケレハ貞景驚キ即出陣ノ趣ヲ夜中ニ相觸レ文龜三年四月三日貞景數千騎ヲ卒ノ自出馬即日敦賀ニ着陣城ノ四面ヲ取卷ヒテ俄鯨波ヲ上ケレハ城中斯時節敵ノ寄來ラントハ夢ニモ不知シテ折節無勢成リケレハ以ノ外ニソ周章ケル去レ共一騎當千ノ兵トモ籠リケル程ニシハシハ支ヘテ猛勢下火ヲ散シテソ戰ヒケル富森父子モ切テ出討死ス去程ニ景豐頼敷思ハレシ敦景ハ來ラス其外ノ縁族モ同心ナクシテ皆寄手ノ大將ナリト聞ヘケレハ大ニ力ヲ失ヒ向ニ諸卒被申ケルハ我レハ今籠ニ入ル鳥網ニ懸レル魚ノ如シ各我レト同ク討死シテモ何カセン降人ヲハヨモ切ラシ蚤々出テ命ヲツケ若又我ニ志ノ輩ハ涯分禦箭仕レ其間ニ自害セン但シ我レヨリ先ニ各切腹有ヘカラス我既ニ亡ナハ急キ城ニ火ヲ放チ死骸ヲ火中ニ燒捨テ其後各腹切ヘシ相搆テ蓬ヒシテ後代マテニ笑ルナト細々ト云含暫ク看經務メツ、庭前ノ四本懸リノ木ヲ削リ最後ノ辭世ヲソ書レケレ

二十餘年樂

邪正何有隔

電光石火中

皆是本來空

ト書テ腹十文字ニ搔切テ朝ノ露トソ消ニケル即貞景彼要害ヲ破却シテ翌日飯陣セラレケリ
 其比彈正忠ハ江州南郡ニ出陣シテヲハシケルカ隱謀外ニ泄者必敗ト云ヘリ急キ敦賀ヘ打チ
 立ントテ軍勢船ニ取乘飛立様ニ被急ケレ共連ノ末ノ悲シサハ北風頻リニ吹荒テ船モサナカ
 ラ遅々シケル程ニ敦賀落居ノ翌日漸海津ニ着ニケリ落人來テ孫四郎生害ノ爲體委語リケレ
 ハ元景武キ武士ナレトモ荐ニ涙ヲ流シツ、微運ノ我等カ有様哉耳目ノ如ク頼ミツル景豊サ
 ヘモ如此ニ成果又今又京都ニ立飯ンモ無面目所詮越前ニ亂レ入心ノ儘一戰シテ腹ヲ切ント
 被申シヲ相隨者共様々申留メケレハ江州ヨリ飛驒越ヘニ加州ヘ廻リ行キ武衛ノ一家并ニ増
 澤二宮等ノ末葉ヲ催ソ其勢一萬八千人永正元年八月六日越前國坪江上郷ヘ打出テ飯塚御簾
 尾頭破上引田下引田其外所々ニ陣ヲ居ヘケレハ同ク十六日貞景長崎ヘ出馬ノ合戰セラレケ
 ルカ敵勢サノミ墓ヤシキ事ヲモ爲出サス剩ヘ彈正忠宗ト被頼ケル堀江兵庫金井大和守父子
 モ十九日ニ討死ス日比ハ鬼五郎ト云ハレシ元景モ惣領家ノ威ニヤ壓レケン又ハ運命盡ヌル
 カ何ノ手痛キ事モ无ク同九月十三日ノ夜ヤミノト引退ケケルカ翌年彌生ノ比ヨリモ能州
 ハル木ノ齋藤カ館ニシテ華吹風ノ心地シテ同卯月四日終ニ無墓成リ給フサセル禍モナカリ
 シニ舍弟敦景ヲ殺シ且又惣領ニ對シテ不儀ノ謀叛ヲ企テラレシカハ天罰遞カタクシテカ、
 ル自滅ヲ招ケルカトモ訝ラル彼殺レ人者必死傷レ人者必刑ト云ヘル古キ言ノ葉實ニモト思知
 テレタリ斯テ貞景今度成功ノ族ニハ重賞被宛行モアリソレノニ詞ヲ懸ラル、モアリ取分
 ケ敦景入道宗滴ヲハ忠武兼備ノ臣ト感シタマヒテ即敦賀ノ郡司ニソ成レケル 卷一終

朝倉始末記卷第二

越前加賀騷亂起事

越前加賀相並ヒテ從來善隣ノ好ミ篤ク互ヒノ政法正クテ民和シ國モ穩ニ雨塊ヲ穿テハ風モ
 音セヌ世ナリシニ近來如何ナル時節ニヤ兩國吳越ノ思ヒヲ合ンテ越前國司ハ加賀ヲ滅シテ
 取ントシ加賀ノ主從ハ越前ヲ伐テ并ントス如此ノ戰爭年ヲ累テ已サリシカハ親ノ敵ト成子
 ノ讐ト成共ニ天ヲ戴ク事ヲ忍ヒ得ス國ノ煩ヒ世ノ騷キ淺間敷カリシ有様也其濫觴ヲ尋ヌル
 ニ偏ニ本願寺ノ念佛宗ヨリ事起レリ哀シキカナヤ佛法ノ大魔武士ノ怨敵何事カ其過之抑前
 ノ越前ノ國主武衛ノ時代既ニ畢テ朝倉彈正左衛門敏景公當國草創ノ時文明三年本願寺ノ蓮
 如上人當國ニ駕來告崎ト云フ在所ヲ請フテ始テ道場ヲ建立セリ門人御山下號シ諸國ノ四民
 參詣恭敬ノ群集スル事夥シ加之和田ニ本覺寺藤島ニ超勝寺荒川ニ興行寺宇坂ニ本向寺久末
 ニ照嚴寺其外所々ノ末弟マテ蓮如ノ下向ニ威ヲマシテ繁昌前代未聞也是ソ即チ後代ノ禍ノ
 根トハ成ニケリ其比加州ノ守護富樫ノ介政親ノ晩年ニ彼國ノ士民等彌陀專念ノ仰信ヲ宗ト
 ノ高田本願ノ兩寺ヲ處々ニ立置キツ、日夜參詣禮拜隙モナカリシカ何ノ比ヨリカ兩宗互ニ
 法ノ淺深ヲ爭ヒ寺ノ本末ヲ論シ每座讚歎最負ニ及ヒケル條終ニ鉾楯ノ端トナリ雙方既ニ合
 戰ヲ挑ケル所ニ富樫此旨聞給ヒ天下難事ハ必作於易天下難事凡起於小ナレハ是ソ一揆
 ノ基ヒナラン早々國ヲ靜ントテ折節在京ナリシカハ俄ニ都ヲ打立テ長亨元年十二月廿四日
 加州ニ歸リ給ヒケリ

高田專修寺大谷本願寺開基前後加州富樫滅亡事

斯ヲ兩宗富樫ヲ待請ケ、レハ國主ノ裁判ニテ其優劣ヲ決セントテ既ニ訴訟ニ及ヒケル所ニ富樫仰ケルハ宗旨ノ淺深ハ知ラネハ開基ノ前後ハ分明ナリ夫高田ハ往年親鸞聖人六角堂救世菩薩ノ告命ニ依テ坂東修行ニ趣ク時嘉祿二年下野國芳賀郡大内ノ庄高田ト云在所ニテ始テ專修寺ヲ建立セリ斯テ廿年ノ寒暑ヲ經其後歸洛アツテ弘長二年遷化ナリ其後大谷ノ墳墓ヲ毀テ文永九年始テ本願寺ヲ造立ス此ノ外口谷ノ佛光寺江州野須郡木部ニ錦織寺又相州常州ニモ親鸞一派ノ寺アリ是等廿四輩ノ庶流ニシテ正ク聖人開基ノ地ハ下野ノ高田計トカヤ乍去何レモ一師同趣ノ真宗ナレハ法ノ淺深ヨモアラシ自今以後兩宗自法愛染故毀皆他人法ノ我慢ヲスキト振リ捨テツ、自己ノ修行ヲ克練テ迭ニ和セヨトアリケレハ本願寺ノ門類最不安思ヒ此上ハ力ナシ富樫殿コソ法敵ナレトテ長享二年戊申加賀ハ云ニ不及能登越中其外諸國ノ類葉等ニ廻文約束相極メ同年五月下旬ニ一揆悉ク加州石川郡ニ打臨高尾城ニ推寄テ晝夜數日火水ニナレト攻ケル程ニ富樫既ニ討負ケテ六月九日遂生害シ給ヒマ諒ニ窮鼠嚙貓ト云ハ斯ル事ヲヤ申スヘキ去程ニ越前ノ堀江中務景用ハ富樫ト一生ナリケレハ加州ノ亂ヲ救ンタメ英林ノ舍弟ナル慈親院光政ニ得其意ヲ佐野南保志比笠松ヲ引率シテ都合其勢二千餘騎江沼郡マテ打入ト云ヘトモ富樫既ニ生害ニテ高尾モ落城ト聞ヘケレハ景用案ニ相違シテアキレテ扣シ所ニ江沼一揆蜂起シテ願正入道ヲ大將トシ敷地福田ノ諸勢都合五千餘騎ニテ推寄セケル程ニ景用待請ケ橘口ニテ大ニ合戰シテ敵數百人討捕堀江モ手勢少ク討セテ相

引ニソシタリケル其後一揆ノ健民等高田ノ寺々へ攻入り宗門ヲ替サセテ皆本願寺ニソ成シニケル違變ニ及フ寺々ヲハ佛閣悉ク燒失シ漸坊主ト命ヲ赦シテ彼方此方へ追放ス元來加賀能登越中大半ハ高田門徒ナリケレトモ本願寺ノ門類各志ヲ一ニシテ凡テ己カ宗旨ニ攻伏スルノミナラフ剩國主ノ富樫マテヲ護ニ生害セシメツル大逆ノ程コソ不當ナレ然者彼浪散ノ坊主ハ國々へ行ントテツフヤキコトノ殊勝ナル或ル僧ノ云ヒケルハ世ハ末世ニ及フトテモ斯ル佛敵法敵ノ謾ニ滔物カハ國中高田ノ僧俗ヲ擊シヘタクノミナラス或ハ無數ノ伽藍精舍ヲ俄ニ燒失シ或ハ無雙ノ畫像木佛ヲ悉水沒センハウタテカリケル形勢ナリ往時敏達天皇ノ御宇十四年守屋ノ大臣ト云ヒシ者聖德太子ノ敵トナリ佛經堂塔僧尼等ヲ焚滅セシ昔ヨリ九百餘歲カ其間カ、ル哀ハ聞觸スナト云ヒケレハ又或僧ハ今度既ニ法ノ淺深寺ノ本末ナトヲ對決シ公儀ニテモ負テコソ浮世ノ恨モ有ヘケレ斯ル惡行ノ一揆原ニ出相フテ數代ノ國主富樫殿サヘ果給ヒマ抑此富樫介政親ト申ハ利仁將軍ノ後胤トシ北斗七星ノ化現トカヤ武勇智謀超世其隱レナキ大將タモ亡ヒ給ヘル時代ナリ吾々理運ノ上ナレハ今此段ニ成ルトテモ恨ル所更ニナシ皆是時刻ト思フヘシ法華ハ三界無安猶如火宅苦充滿甚可怖畏ニ試レヌ我カ宗依經淨土三部ノ妙典ニハ有田憂田有宅憂宅牛馬六畜奴婢錢財衣食什物復共憂之ト説レテ八苦充滿ノ娑婆界ナレハ何ヲカ歎キ申スヘキ一所不住ノ身ト成テ樹下石上ニ生ヲ寄セ呼吸ノ息ノ有程ハ一心不亂ニ念佛シ頓テ淨土ニ至ンニハ何ノ不足ノ有ヘキノヤ南無阿彌陀佛彌陀佛トテ足ニ任セテ行モ有毎日五人七人宛國ヲ出ヌハ无リケリ各一揆ニ一味シテ宗

門ヲタニ替ナハ共ニ安樂ナルヘキニ大伽藍共ヲ打捨テ栖居馴レタル國里ヲ燒野カ原ト見ナシツ、何クニ頼ノ有トモナク浮レ出タル心ノ内實ニ哀ニソ覺エタル傍ノ人ノ語シハ本ヨリモ思ヒ入タル信淳己カ寺法ヲ不枉シテ身ヲモ浮世モ捨タルハ是ツ真ノ道人ヨ維摩經ニ深信堅固猶如金剛ト説レ親鸞聖人モ又金剛堅固ノ信心ト宣シモ此人々ノ事ナルヘシト譽ル人モ多カリテ去程ニ高田坊主皆散リ々ニ成ケレハ加賀一國ハ悉ク本願寺ノ仕配ニテ一揆ノ領トソ成ニケル依之加州ノ一揆等逆威ノ餘リ荐ニ徒黨ヲ結ヒツ、一天四海ヲ皆我宗旨ニ成サントテ先越中ヲ討半ラテ能登ノ國マテ攻從ヘケル程ニ諸將牢人シ給ヒテ畠山修理太夫ハ江州余吳ノ庄ニ立忍ヒ温井備中守ハ越前堀江ノ館ニ蟄居ナリ諒ニ僅ノ年月ニ加賀能登越中マテ手ニ入レシ一揆ノ所爲ソ奇怪ナル尙モ奢ノ餘リニヤ越前ノ國ヲ討ントテ廻文委細ニ認テ諸國ノ門徒ニソ遣シケル

加賀能登越中ノ凶賊亂入越前事

去程ニ惡政ハ生惡氣惡氣ハ生災異ト云ヘハ諸國ノ惡徒不移時日馳集加賀ノ一揆ニ合掌ノ都合其勢三十萬永正三年七月十七日越前國ヘ打越ヘ九頭龍河北在々所々ヲ放火ノ兵庫長崎邊ノ村々里々ニソ陣ヲ取ル洪波壑ニ振トキハ川ニ閑ナル鱗ナク驚颯野ヲ拂フトキハ林ニ靜カナル枝ナシトテ國中ハ云ニ及ハス近國隣郡ニ至ルマテ騷カヌ所ソ无リケル爰ニ高田門流風尾村勝鬘寺明秀ハ小和田本流院ヘ一光越ニ馳來テ御聞モ候ヤ加州ノ一揆等大軍ヲ催シテ當國ヘ攻メ入ル由其陰レナク候一宗ノ寺々ヘ急キ打立テ屋形ノ味方仕ルヘキ旨早々廻

文ナサルヘシトソ申ケル真孝聞テ思ヒ寄ラサル事ソカシ我輩ハ佛法紹隆ノ爲ニコソ本寺ヨリハ下サレタレ加州ノ惡徒攻來ルトテ柔和ノ身トシテ武士ヲ立テナシカハ鬪諍死亡ニ及フヘキヤト事モナケニ申サレケレハ明秀押返ノ尤謂レアル御理リニテ候乍去此一揆ノ根本ト申ハ本願寺ノ一黨高田宗ヲ責討テ我カ宗門ニナサンタメ加州一國ノミナラス能登越中マテ攻靡ヒケ其猛威ノアマリニテ當國ヘモ改入ルナリ然レハ我カ宗ノ大敵ニアラスヤ沙門トハ申ナカラ貴僧ハ眞佛上人ノ苗裔ナレハ柏原天皇ノ末孫鎮守府ノ將軍常陸ノ大掾國香ノ後胤下野國司大内氏ニテマシマサスヤ野僧モ長井ノ齋藤別當實盛カ弟齋藤三郎實員カ子次郎實秀ト云ヒシ者ヨリ傳レリ其子細ハ壽永二年ノ六月ニ平家ノ味方申テ加州篠原ニテ實盛討死シテ後子生國ナレハ越前ノ今北東ノ郡トカヤ南井村ニ蟄居シテ其孫實明ト云シ者舊年文永元年顯智上人ノ回國修行ノ折節ニ避世發心セシメツ、唯明ト名ヲ付テ勝鬘寺ヲ建立ス然ハ我等モ鎮守府ノ將軍利仁ノ後苗ナリ其外折立稱名寺ト申ハ佐々木ノ四郎カ子孫ナリ彼四郎高綱ハ源ノ賴朝公ノ御方トシテ豆州杉山ノ合戰又ハ宇治川ノ先陣等數度ノ高名ニ依テ北陸道ノ管領ヲ給リケレトモ不足ノ所存アルニヨリ只遁世ニハシカシトテ高野山ニ引籠リ柴ノ庵ニ栖ニケルトソ其子左衛門尉重高ハ牢々ノ身ト成テ越前ニアリケルカ其孫五郎時高ト云シ者顯智ノ教化ニ隨テ光實ト名ヲ付テ稱名寺ヲ立トカヤ高綱カ曾孫ニテ高ノ字代々通字ナレハ後ニハ高實ト假名ス扱聖德寺ト申ハ相州土屋ノ小次郎カ子孫ノ立シ寺也彼土屋ノ小次郎義清ハ土屋ノ三郎宗遠カ養子眞父ハ三浦岡崎ノ四郎義實カ次男眞田與市義忠カ弟也建保

元年五月三日和田左衛門尉義盛カ謀叛ノ時一族タレハ同心シテ鎌倉ニ於テ合戦スト云ヘ凡各敗北スルニヨリ義清モ自害セリ其子兵衛尉義則ハ越前ニ流浪シテ坂北郡木戸ノ庄ニ栖居ケリ其子次郎義種ト云シ者是モ顯智上人ノ圓福道場ニ滞留シ說法度生頻リニテ草木モナヒク計リナレハ度々歩ミヲ運ヒツ、剃髮染衣ノ身ト成テ西妙ト改名シ大野郡味見ノ谷トテフカキ山奥ニ引込テ聖徳寺ヲ建立セリ彼圓福道場ト申ハ齋藤氏遠貞ト云ヒシ人世間ノ無常ヲ觀シツ、自自導ト名乗ツテ律宗ニ皈伏シ螢ヲ聚メ雪ヲ積ミ學文怠ラサリケレハ智行兼テ相備リ三國ノ湊ニアリケルカ曩祖親鸞聖人ノ越後ノ國ヘ左遷ノ時不慮ニ面謁ノ事アリテ彼カ念佛ノ法門ヲ立所ニ受得シ即師資ノ禮ヲトケ慶良ト改名シ越後マテ見送リテ常隨給仕ヲ相勤メ其後國ニ立皈リ湊ハ事ノシシ閑所ニ居ヲ占ントテ加戸ト云山里ニ圓福寺ヲ立ツトカヤ此外新郷專光寺ハ願明ノ建立友兼專福寺ハ專性ノ開基ニテ皆由緒アル者共也委細申セハ事長シ丹ハ可磨而不可奪其色蘭ハ可燃而不可滅其香玉可碎而不可改其白金ハ可銷而不易其剛ト先言ニモ相見ヘ候如何ニ沙門ノ身乍ラモ本性ハ忘ルヘカラス何レ一口ハ防クヘシ佛陀ニ魔怨降伏ノタメシアリ聖徳太子モ佛法建立ノ爲ナレハ守屋退治ノ其例アリ我カ破滅セントスル一揆共ヲ攻討コソ佛法紹隆タルヘケレ只早々ト諫メケレハ眞孝モ理ニフレテ急キ廻文觸流シツ、其身モ頓テ出陣ノ支度速カナリ其比越前ノ守護朝倉ノ彈正左衛門尉貞景當方大事ノ合戦ナリトテ一家同名召集メテ僉議評定區ナリ時ニ朝倉大郎左衛門教景ハ敦賀ヨリモ打テ出テ府中表ノ坊主共一揆同意ノ由ナリトテ大鹽ノ圓官寺石田ノ西光

寺等彼是餘ニ生捕ツテ一乘ヘ引レケレハ貞景怡悅極リナシ斯テ久末ノ照嚴寺荒川ノ興行寺其外名アル坊主共ヲ此彼コヨリ召捕ツテ皆籠者ヲソセサケル去程ニ一揆退治ノ大將ニハ教景下知ヲ承リ手勢其外引具メ打立レケル人々ニハ齋藤民部ノ丞前波藤右衛門同七郎右衛門上田中村吉川等其外三段崎衆小林衆ヲ始トシ足輕大將ニハ高間杉本以下都合其勢五千餘騎藤島ニ打立陣ヲ取鳴鹿表ヘハ朝倉與惣右衛門景職大將賜ツテ魚住帶刀左衛門窪田黨島田黨岡田安一佐野南保志比笠松ノ精兵等三千八百引率ノ志比ノ河涯ニ陣ヲ取ル爰ニ又當國高田ノ諸坊主ハ先年加州騷亂以後賊徒ニ鬱憤最深シ殊ニ是ハ朝倉屋形ノ御大事ト云ヒ本流院ノ廻文ト云旁以一勢出サテハ叫マシトテ大小ノ高田宗一族門弟引集メ加勢ノタメト號シツ、北ノ庄ニ來會シケレハ三門徒ノ寺々ヲモ相加テ可然ト大將ノ下知ニヨリ即三門徒ヲ入マセテ松本口ヲソ壁メケル高木口ヘハ河北ノ諸勢勝蓮華右京ノ進堀江石見守景實武曾深町向ヒ伊勢細呂木并光林房印牧鳥居河合以下都合四千六百餘騎九頭龍ノ河涯ニ陣ヲ居ヘ中角ノ渡ノ受手ニハ山崎長門守カ嫡子小次郎ト云シ者其比ハ遁世ノ祖桂ト號セシ隱僧ヲ各主將トカシツキツ、相隨ヘル人々ニハ中村五郎右衛門神九郎左衛門半田次郎兵衛江守新保ヲ先トメ都合其勢三千餘騎我劣ラシト發足メ黒丸村ヲ陣所トス此手ヘ寄スル敵ニハ加州能美郡ノ軍兵并ニ越前一揆ノ惡黨等以上五萬七千人ヨシノ死メ水底ノ魚ノ腹ニハ葬ラル共キタナク逃テ後ノ世ノ人ノ口ニハ落シトテ馬ヲ川ヘ打入レテ各手綱ヲ取カハシ浮ヌ沈ヌ渡シケリ山崎祖桂ハ是ヲ見テ是非ニ手ヲ一軍シ名ヲ後代ニ留ントテ比ハ八月二日寅ノ刻ヨリ黒丸ヲ

出一陣ニ進ツ、寄スル敵ヲ待懸ケル所ニ敵方ヨリ火威ノ鎧ニ金磨ノ腹卷シテ連錢馳ノ馬ニ乗ツタル武者一騎河合藤八郎ト名乗テ真先ニ驅ケ出ル祖桂モ思ヒ儲ケシ事ナレハ合ヒ驅リニ莅テ逸ニ馬ヨリ飛テ下リ洪波ヲタ、ミ殘華ヲ亂シ八華形ヤ十文字ニ力ヲ盡シ手ヲ碎キ半時イラツテ戰ヒシガ藤八何トカシタリケン太刀鐔本ヨリ打折ツテ既ニ除ントシタリシヲ祖桂得タリト云儘ニ組臥細頸討チ落シテ太刀ニ懸テソ上リケル二番ニ財町ノ山本圓正ト名乗テ黒絲威ノ鎧ヲ着馳駁ナル馬ノ太ク逞キニ乗テ驅出ル味方ヨリ中村五郎右衛門ト名乗リカケ柵ノ中ヨリ渡リ合セテ追ツ返シ遂ニ圓正カ首取テ我本陣ヘソ販ケル是ヲ軍ノ始トシ雙方共ニ入亂火花ヲ散シテ戰シカ江守新保中村モ能者餘多討取テ分捕數ヲソ盡シケル敵モ流石ニ義ヲ耻テ是ヲ最後ト戰ヒシカトモ時ノ間ニ兩大將ヲ討タセシカハ大ニ辟易シテソ見ヘケル扱又九頭龍口ヘ向フ敵ハ江沼郡ノ軍兵ニ能美郡ノ勢ヲ入交テ黒瀬藤兵衛小杉新八郎松永平左衛門湯淺九郎兵衛其外越中ノ大坊主安養寺瑞泉寺越前所々ノ牢人等都合八萬八千人一面ニ馬ノ頭ヲ立テ並ヘテ同時ニ川ヘ打浸シ馬筏ヲ組ンテソ渡シケル越前勢ハ高木ノ要害ニ楯籠リ此レソ大事ノ合戰トテ寄來ル敵ヲ待ケル所ニ寄手ノ陣ヨリ六尺有餘ノ法師武者小櫻威シノ鎧着テ鴉毛ノ馬ニ乗タルカ真先ニ驅出名乗リケルハ是コソ音ニ聞ヘシ増澤甲斐守カ子ニ法華院トハ我コト也昔時我父討死ノ後孤ノ便リナサニ力ヲ及ハス法師ノ姿ト成タルナリ近年北國ニテ我等カ一類甚タ多ク滅亡ス願ハ我々モ尸ヲ當國ニ曝シ怨ヲ泉下ニ晴ント思フナリ朝倉方ニ我ト思フ輩ハ出合討捕テ高名セヨトソ喚リケル然所ニ福岡七郎兵衛進ミ

向テ云ケルハ蟻螂ハ車轍ニ當テ長臂ヲ賴ミ飛蛾ハ燭ニ趣テ死禍ヲ甘ト云ヘリ優モ出ラレ候物カナトテ打物ヒラメカイテ切テ懸レハ向フ太刀ヲ受流シテ弓手ニ相着ケ馬手ニナシ四方八面十文字ニ半時計リ戰ヒシカ何トカシケン法華院ハ右ノ肩先ヘ太刀打コマレテ疼處ヲ推懸ケ終ニ頸ヲゾ取ニケル此ヲ始トシテ大勢ノ敵味方火花ヲ散シ入レ亂レテ是ヲ先途トシ戰ヒケル又鳴鹿口ニハ景職ノ同勢安田岡田佐野南保ノ武士其外諸方ノ加勢共鏃ヲ揃テ控タリ寄手ノ方ニハ河北勢山一番里一番ノ者尾石黒孫左衛門正末上坂與惣兵衛并ニ越前ノ超勝寺本向寺ヲ大將トシテ加賀越前ノ一揆原都合五萬五千三百人稻麻竹葦ニ寄來ル敵軍多シト申セトモサシモ名ヲ得シ鳴鹿川漲リ落ル大河ニテ岩壁屏風ノ如クナレハ左右ナク渡サン様モナク兩陣互ニ相ヒ支矢軍ノミニテ空ク時ヲソ移シケル中ノ郷ノ渡ハハ加州石川郡ノ一揆勢河合藤左衛門宣久洲崎和泉入道慶覺同十郎左衛門久吉蕪木入道常專出口ノ齋藤藤墳二ツ木木越ノ先德寺磯部ノ坊主能登ノ國ニハ一ノ宮ノ大坊主鈴ノ三崎ノ鬼次郎越前一揆ノ大將ニハ和田ノ本覺寺細野ノ惡源次穂田田所河口ノ庄ニハ本庄ノ郷ノ有未定友等都合十萬八千人胃ノ星ヲ耀馬ノ首ヲ連宛物ノ具ノ影ハ日ニヒラメキ旗戈ノ光ハ天ニ飄ヘル地ヲ響タル鯨波ノ聲山ヲ動ス矢咄ノ音上ハ有頂ノ空下ハ奈落ノ底迄モ聞エツヘクソ覺エケル去程ニ教景ハ上田前波三段崎當間等ノ人々ヲ招キ集メテ宣ヒケルハ敵ハ元來多勢ニテ思ノ外ノ猛威ナリ彼若大波ヲ打セテ河ヲ越ハ味方僅ノ小勢ニテ驅向ン事カタガルヘシ只此方ヨリ河ヲ越敵ヲ不意ニ陥テ追散サント有ケレハ各異儀區々ナリシ所ニ南方ヨリ洗皮ノ鎧ヲ着黒ノ馬ニ乘

タル武者一騎鞭鎧ヲ合セテ馳來ルカ尙モ堪兼笠ヲ揚テ招ケル程ニ教景モ不審ニ思ヒ馬打セテ驅向ヒケレハ一乘ノ使節小泉四郎右衛門ナリケルカ大音上ケ云様ハ敵猛勢タルヘケレハ河渡サセテ惡カルヘシ是非ニ於テ此方ヨリ遮リ河ヲ可被越ト貞景ヨリノ御使ナリトアリケレハ教景尤ト請給フ去ハニヤ漢高三尺ノ劔ヲ占テ坐ナカラ四海ヲ治ムトハカ、ル事ヲヤ申スヘキ良君籌ヲ帷幄ノ中ニ廻セハ忠臣勝ヲ千里ノ外ニ決シナントテ上下一度ニ感シツ、五千餘騎ノ兵共河原表ニ打出ケレハ大將教景旆推取大音聲ニテ下知スル様騎馬ノ武者ハ河上ヲ渡テ漲ル水ヲ防セヨ左右ノ鎧ヲ踏スカシテ馬ニハ強ク水ニハ弱ク當ルヘシ步武者ヲ下手ニ成シテ手ニ手ヲ取り組前後左右ヲ示シ合セテ渡ヘシ流ル者ヲハ弓弛ヲ出テ取付セ綿嚙取テ引立ヨ水ノ逆卷所ヲハ大石アリト心得テ馬ヲ引除渡スヘシ向ノ岸近ハ一面ニ轡ヲ雙ヘツ、魚鱗ニ作テ向ヘシト飽マテ下知ヲ觸流シ大將馬ヲ打入ケレハ數千人ノ兵共我劣シト打浸々渡ス程ニサシモニ早キ大河ナレトモ一文字ニ颯ト馳上ケ喚キ叫ンテ攻寄ケレハ敵ハ大ニ驚天シテ不覺一町計ソ退キケル教景コノ由見ヨリモ兼テ期シタル事ナレハ時ハ能キソト云儘ニ一騎當千ノ兵共ヲエリキツテ多勢ノ中ヲ驅刻々々前後左右ヨリ操ケレハ敵軍一崩々ル、カト見エシニ取テモ不返シテ右往左往ニ成ニケリ去程ニ中郷口ノ敵敗北スト聞エシカハ諸口一度ニクツレ立テ我先ニトソ落行ケル折シモ殘暑酷シキニ多勢ノ人馬土ヲ蹴立テ馳ケレハ天常闇ノ如クニテ敵モ味方モ見エ分カス先ヘ散リ行ク落人ハ跡ヨリ逃ル味方ヲモ敵ノ追ソト心得テ或ハ馬ヲ乗倒シ或ハ橋ヨリ堰落シ彌カ上ニ伏重ツテ所々ノ河ヲソ埋ニケル敵

軍始メテ寄シ時ハ三十萬騎ト聞エシカ既ニ敗北スル時ハ十萬騎ニモ不足ケリ斯テ味方ノ兵共聲ヲ揃ヘテ凱歌シ喜ヒ勇ンテ歸リケレハ貞景頓テ出給ヒ教景ニ對面シ大儀早速ノ勳功偏ニ貴邊ノ忠戰ニ依ルト大ニ御褒美アリケレハ教景謹テ平伏シ御諒有難候乍去今度ノ一戰全ク愚臣カ力ニ非ス從來君ノ御威光ナリ國司ノ德運ノ冥慮ニ叶フニ非スハ臣等尺寸ノ謀ニテ目ニ餘ル大敵ヲ爭テカ退ケ申ヘキヤト堅ク謙讓アリケレハ各是ヲソ感シケル其後貞景諸勢ノ上下ヲ召集メ軍功ノ優劣濃カニ穿鑿シテ賞罰心ヲ盡サレケリ中ニモ金吾教景ヘハ今度ノ大功謝スルニ餘リアリ誠ニ武門ノ眉目當家ノ綱領タルヘシト御自筆ノ感狀ニ色々ノ重器等ヲ取揃ヘテソ給リケルアツハレ君々タリ臣々タリケル振舞哉ト舉世申合ケルトカヤ斯テ吉崎ノ道場ヲ始メ和田本覺寺藤島超勝寺久末照嚴寺荒川興行寺宇坂本向寺以下本願寺ノ末流國中居住ノ寺々ヲ悉ク破却シテ門徒類葉ヲ追放シ農工商ニ至ルマテ彼ノ法歸依ノ族ヲハ所領資財モロ共ニ皆沒收トソ聞エケル

越前加賀ノ一揆蜂起附釋堂怨靈之事

去程ニ越前一揆ヘ宇人原過ニシ秋ノ合戰ニ國中ヲ追拂ハレ我カ身一ツノ住家ナク加州ノ邊ニ立隱レテ暫ク逼塞シタリケルカ時々評定シケル様イサヤ越前ニ乱入り豊原寺ヲ討捕テ河ヨリ北ヲ進退センイツレモ此儀尤トテ同年十月十日餘多ノ勢ヲ引具シテ越前ノ國堂前口文珠堂口ヘ打出ル越前ヨリノ討手ニハ西谷ノ明王院同玉養坊圓鏡坊華藏院ノ荒三位西方院ノ天狗二位同ク行泉坊大善院ノ鬼式部同ク圓了坊中方山伏其外扈從小法師等我モト驅向

フ扱北ノ庄ヨリノ大將ニハ朝倉土佐守諸軍勢ヲ引率シ豊原口ニ進發シテ卯ノ刻ヨリ申ノ刻
 マテ火華ヲ散シテ戦ヒケレハ一揆大ニ敗北シテ手負死人ハ數不知討洩サレタル凶賊等辛キ
 命ヲ助ツ、這々加賀ヘソ逃行ケル斯テ西谷ノ明王院真先ニ口驅合セテ高名シタリ恩賞ニ河
 口ノ庄新郷ノ公文村ヲソ給リケル同四年八月上旬越前牢人本覺寺超勝寺其外ノ諸坊主等能
 登越中ヲ催シテ又越前ヘ入國ノ義本願寺ヘシキリニ訴訟シケレトモ曾テ承引ナカリケル所
 ニ加州石川郡ノ立任ト云シ者越前ヘ出張シテ是非ニ支配ヲセハヤトテ一揆原ヲ驅催フシ八
 月廿八日ニ越前ノ國坂北ノ郡坪江ノ郷帝釋堂口ヘ打出ル其時本覺寺向諸卒下知シケルハ敵
 方ヘ懸ル足ハ極樂淨土ヘ參ト思ヒ引ク足ハ無間地獄ノ底ニ沈ト思ヒ切テ一足モ不可退ト有
 ケレハ諸勢仰ニヤ及ト領掌シテソ出タリケル去程ニ越前勢モ雲霞ノ如ク打立テ敵ヲ中ニ取
 リ圍ミ火水ニナレト改ケレハ本覺寺超勝寺其外加州ノ一揆原散々ニ討成サレテ皆我先ニト
 落テ行ケレトモ立任カ勢計リハ一足モ退ソカテ三百餘人枕ヲ雙ヘテ討死ス誠ニ凡下ト云ナ
 カラ約ヲ不背カ討死シケルソ比ナキサシモ下知セシ本覺寺ハ教化ノコトハ相違ニテ真先ニ
 逃テ飯リケレハ立任カ女房布施物様々持參シテ坊主ヲ見テ臥轉愁歎スル事无限其時本覺寺
 三衣ヲ着シ殊勝顔ニテ教訓シケレハ偕老同穴ノ契深ク鴛鴦比翼ノ昵ヒ盡セヌ中ナレハ歎ハ
 實モ理ナリ乍去人八苦ノ其ノ中ニ愛別離苦怨憎會苦トテ種々ノ苦アルナレハ今更歎クモ愚
 カナリ只人ハ老若男女諸共ニ後生ニ過タル大事ナシ立任事心安思ハレヨ往生ノ快樂ハ何ノ
 疑候ヘキ其上ヘ愚僧カ請經シテ追善誠ヲ抽ヘケレハ成佛手ニ取ル如クナリト最殊勝ケニ述

ヘケレハ女房聞テサレハコソトヨ立任ハ貴僧ノ教ヲ得心シ一足モ不退シテ討死ヲ遂シ者ニ
 テ候ヘハ後生頼モ敷覺候乍去思ノ外ニ御僧ノサシモ誓ヒシ甲斐ナクテ味方ノ敗レヲ見捨ツ
 ヲ是マテ逃延給ヒヌレハ必定無間地獄ヘソ落サセ給ハシ痛シサニ不覺ノ涙ヲ流シ候ト諒シ
 ヤカニ云ヒケレハ坊主面目ヲ失ヒテ時ナラヌ顔ニ紅葉ヲ散ツ、無言ニコソハ成ニケレ扱モ
 今度討死セシ立任以下ノ亡魂トモ依ヘキ方ヤ無リケン中有ニ迷フト覺シクテ軍サ散シテ三
 十日計リ以後帝釋堂邊ノ村里ニ化生ノ者出來ツ、人ヲ惱シケルトカヤ或ル夜家ノ門ヲホト
 〱ト扣ク程ニ亭主誰ソト出ケレハ頸モナキ觸ノ色ノ白キカ四五人來ル程ニ是ハト膽ヲ
 消シケルカ重テ姿ヲ見ントスレハ消ヤトシテ不覽ケリ又或夜色青ヤトシタル首カ窓ノ中ニ
 顔ヲ指入レテニツコト笑フ間家ノ女旁アツト云テ立ヌレハ搔キ消ス様ニ失ニケリ毎夜如是
 アリケレハ里ノ者共恐懼戸ヲ閉テ窓ヲ塞キツ、終夜不寢シテコソ居タリケレ又或日暮レ方
 ニ御簾ノ尾ノ僧三人連ニテ帝釋堂ノ路ヲ通りケレハ雲上二三里カ間ニ軍兵嚴シク出浮ヒ稻
 麻ノ如ク見エタルカ大音上ケテ云様ハ朝倉増澤兩家ノ合戦ニ死セシ者并ニ近年討レシ亡魂
 足雙方噴毒ノ忘執ユヘ各修理道ニ墮罪ノ流轉生死ノ旗戈ヲ指シ邪見放逸ノ鎧ヲ着散亂龜動
 ノ劍ヲ擎テ晝夜隙无ク攻戰フ其苦患幾計ノヤト喚テ二三萬人同時ニ関ノ聲ヲ上楯ノハナヲ
 並ヘテ合戦スル音影シクソ聞エケル又暫クアリテ傘程ナル光物一二百計リ飛來リケルカ其
 跡ニ恐シケナル鬼形ノ者雲ノ旗手ニ浮ヒ出テ雖遭大苦ノ荒馬ニ災難障得ノ轡噴毒強盛ノ焰
 ヲ吐テ馳來ル程ニ只今我カ身ノ上ヘ落カ、ル様ニ覺ケレハ彼僧膽魂モ身ニ添テワナメキ寺

へ走歸リ惘然トシテ物知ル事モ无リシカ其後人心地出來テ委シク彼趣ヲソ語ケル又小雨ナ
ト降り風冷シク雲閉テ雷電ト怒號スル時ハ帝釋堂ノ近邊ハ晝モ合戦スル音ノ聞フルナト、
流布シケレハ増信上人興行ニテ豊原寺ノ衆僧ヲ催シ帝釋堂ニテ晝夜追善勤行シ法華經ヲ讀
誦シ卒都婆ヲ立テ様々廻向有ケレハ其翌日ヨリトキノ聲モ止苦患ノ音モ靜ヌトソ聞エケル
去ハニヤ作善讀經塔婆修造ノ功德ニ依テ修羅モ分怒ノ意ヲ和ケ亡靈モ佛果ニ至ル事有難ト
ソ申ケル國主貞景此旨ヲ聞給ヒテ討死シタリシ亡魂ノ菩提ヲ弔テ得サセントテ翌年阿婆賀
ニ經堂ヲ建立シ過分ノ親達寄ラレテ毎年四月十七日ヨリ廿六日マテ百十人ノ僧ヲ集メテ法
華經千部ヲ讀誦セシメ給ヒシカ今ニ至テ不斷トカヤ誠ニ是現世安穩後生善所ノ靈經ニテ治
世安民諸願隨意ノ要文タルカ故ナルヘシ物シテ此貞景ノ御代ニハ善根多被成タリ洛陽清水
寺ニ新觀音堂ヲ建立シテ灯明田迄寄進シタマヒタリケルカ今ニ於テ都鄙參詣ノ輩ハ朝倉堂
トソ云合ヒケル昔日越前平泉寺ノ神事ニ三所ノ張山トテ山ヲ拵ル事アリ是ハ國中有徳ナル
百姓等始テ入道スル時ニ山張役トテ金銀多ク出シケリ此山ヲ可張分限ナキ者ハ起請ヲ書テ
撃ケルカ若虚言アレハ忽ニ滅絶スルトソ聞エケル斯ル役儀モ末世ニハ有徳ナル土民モ不可
有トテ貞景大野郡ニ過分ノ張山料ヲ寄附シ給ヒヌレハ今ハ百姓ノ山張役モナカリケリ又南
陽寺ノ佛殿并ニ方丈モ此代ニ再興シ給ヘリ扱亦貞景ノ御代ニハ今度ノ一揆ノミナラス難儀
ナリツル合戦共度々アリト申セ凡早速勝利ヲ得給ヒテ國中安全ナリシ事生得強運ノ致所去
ナカラ偏ニ仁君徳政ノ驗シナリトソ人々申合ニケル

貞景逝去附下間筑前斬獲加州波左谷若松坊主事

夫生者必滅ハ人間常俗ナレハ釋尊既ニ雙樹ノ哀ミヲ殘シ會者定離ハ浮世凡ノ理リナレハ天
人猶五衰ノ苦ミヲ傳フルニテ古今世間ニ公道タルハ只此無常ノ風ナルヘシ永正九年三月廿
五日貞景鷹野ニ出給ヒシカ路次ヨリ煩ヒ付給ヒテ忽チ逝去シ給ヒヌ享年四十歳貴賤上下諸
共ニ父母ヲ失フ心地シテ歎カヌ者ハ无リケリ嫡領孝景先考ヲ追祭センカ爲一寺ヲ建立シ給
ヒテ天澤寺トソ名付ラル是即貞景逝去ノ所トカヤ扱モ越加ハ亂ノ後貞景ノ御代ヨリ國堺ニ
新關スニ番士ヲ置テ旅客ヲ選ヒ又海上ノ押ヘニハ堀江景實宇野新左衛門ヲ警固トシテ船ノ
通路ヲ留ツ、北陸道ノ往還ハ不通ニコソハナリニケレ去間京都諸方ノ商人以下甚々難儀ニ
及フ旨室町殿聞シ召シテ孝景ヘ御教書アリ永正十六年四月下旬上使伊勢守貞陸御書ヲ帶シ
テ下ラレケレハ孝景府中マテ出向ツテ上使ニ對面シ給ヒヌ斯テ孝景御書ニ隨ヒ上使ニ應シ
海陸ノ關ヲ破ツテ路次ヲハ通サセ給ヒケレ凡越加ノ和睦ハ无リケリ然凡兩國事ノ子細无ク
干戈ヲ戢弓矢ヲ伏テ暫シハ無事ニ治リケリ斯リケル所ニ山科本願寺ノ内ニ下間筑前并舍弟
民部少輔ト云者有テ甚々驕リヲ極メツ、御供衆ニマテ成リケルカ猶大官高位ヲ望ミ天下ノ
武士ヲ攻メ亡シテ本願寺ノ上人ヲ天子トシ我身ハ將軍ト仰レテ四海ヲ呑ント企テケルカ先
加州ニ下着シテ三ノ山ノ坊主其外四郡ノ長共ニ潜ニ是ヲ議シケレハ三山ノ坊主申ケルハ夫
日本秋津島ハ天神七代終テ天照太神此國ヲ受ケ繼テ始テ地居シ給シヨリ以來百生鎮護ノ御
誓甚以テ深キ故皇家ノ胤ニ非レハ即位禪受其例ナシ扱又天兒屋根ノ御事ハ申モ中々愚ナリ

舊年天孫降臨ノ時股肱ノ臣ニテ天降四海ノ權ヲ取り給ヒシカ其後春日大明神ト顯サセ給ヒ
 ツ、三笠ノ山ニ跡ヲ垂テ護王護國ノ尊神タリ今吾朝ニカシツクナル攝關大臣ノ御家ハ皆彼
 流ヲ受給ヒテナヘテナラサルナレハ兎角申スニ及レズ其上異朝ニハ三公非其人則三光
 爲之失明トテ三台ト名付ラレ又本朝ノ古ヘハ師範一人儀形四海臧ナレハ無其人則
 闕義ナリトテ則闕ノ官トモ申ストカヤ斯ル故アル官職ヲ凡夫ノ身トシテ望ン事天ノ尤モ恐
 シヤ唐土人ノ詞ニモ所_レ天之不_レ與者必有_レ禍而無_レ福貪_レ財忘_レ善如_レ吞_レ釣魚_レ侈而惡_レ德好_レ惡
 如_レ踐_レ劍_レ虎_レト承ル親鸞聖人ノ教ニモ鼻ノ脛短ト云ヘ凡續之則憂シ鶴ノ脛長シト云ヘ凡斷
 之則悲_レ長短トモニ性ナレハ長モ斷ル處ニ非ス短モ又續處ニ非スト云ヘリ是則他ノ物ヲ不
 取自物ヲ不_レ惜マシテ邪僻貪欲ナサシトノ御禁ニテ候ハスヤ加之我法ヲ一向宗ト號スルハ
 何ノ爲ニテ候ソヤ諸ノ雜行雜念振捨テ無智ノ尼入道ニ等ク一向入_レ念佛三昧_レ愚癡ノ凡夫ヲ
 救ハン爲_レ法ナルニ何事ニ依テカ武士ノ分國ヲ押領シ合戰ヲ旨トシテ鬪爭斬獲ニハ及ヘキ
 ソヤ吾儕ハサラニ不能_レ分別_レ候間御返事難_レ申候ト道理ヲ盡シテ云ケレハ四郡ノ長トモ河
 合洲崎以下モ皆此義ニソ同シケル其時筑前本覺寺超勝寺等異口同音ニ云ケレハ上人ノ御意
 ナラハ縱令海ヲ山ニナセ山ヲ海ニナセトノ義ナリトモ如何カハ背申サルヘキ鐵鐘ノ響モ撞
 サレハ鏘ス玉琴ノ調モ觸サレハ聲セストカヤ君王ノ勢ヒモ人力ナクハ如何セン是故ニ主ニ
 事リ師ヲ敬ノ道ハ只隨心代命ヲ本トセリ今マ各左様ノ心ハ露ナクテ人ニ大事ヲ語ラセツ、
 一向受_レ御返事_レハ以_レ外ノ奇怪ナリ此上ハ別ナル事モ候ハス各即法敵ナリト大ニ怒テ立ケ

ルカ時ヲ移シテ叶ハシトテ即日ニ勢揃先波左谷ヘ推寄テ御堂客殿膳所樓門中門以下一字モ
 不_レ殘燒拂ヒ御坊ヲ始メトシテ悉刺殺シ即石川郡ヘ押寄若松ノ寺内ヲ放火シテ御坊ヲ生虜
 山科ヘソ上セケル其ヨリ以來大一揆小一揆トテ合戰度々ニ及シカ長方遂ニ討負テ河合洲崎
 上坂山本河原組ノ大將以下能登越中ヘソ退ケル然トモ江沼郡ハ尙无事ナリケル所ニ本覺寺
 超勝寺以下能美石川ノ小一揆七千餘騎ヲ引率シテ八月十七日_(享祿四)山田ノ坊主黑瀬ノ覺道
 寺ヲ退治ノ爲ニ寄來ル由聞ヘケレハ江沼郡ノ軍兵共月津口ヘ馳セ向ヒ三千餘騎ヲ三手ニ分
 ケテ一手ハ東方ヨリ敵ヲ山手ニ受テ驅ケ出テ一手ハ西ノ濱手ヨリ魚鱗ニ作テ進行キ一手ハ
 大手ノ松ノ影ヨリ鶴翼共ニ立テ開合ス寄手ハ從來多勢ニテハ有ケレ凡陣ノ張様四度路ニテ
 却テ敗レヌヘウツ見エタリケル黑瀬ノ軍兵是ヲ見テ三方ヨリ時ノ聲ヲ作り懸喚キ叫ンテ戰
 ヒケルカ超勝寺舍弟坊主ソ追ツ取り籠テ擊チケレハ諸手一度ニ敗北ノ四方ヘナタレ落ケル
 ヲ追討ニスル程ニ七百餘人カ頸切り懸ケテ皆本陣ヘソ販リケル山田ノ坊主黑瀬ノ覺道圓鏡
 以下初度ノ合戰ニ討勝テ勢モイサミテ見エケル始終如何ト思ヒケン頻リニ越前ヘ援兵ヲソ
 乞ニケル

淺倉教景進_レ發_レ州_レ附加州牢人落_レ越前_レ來事

去程ニ孝景サラハ加勢ヲ遣スヘシ先ツ堀江左衛門三郎景忠ニ命セラル景忠大將承テ宗徒ノ
 兵三百餘騎ヲ引率シ享祿四年八月十九日越前ヲ打立テ既ニ加州營生村ニ陣取リケル所ニ江
 沼郡ノ一揆蜂起シテ大勢不意ニ向フトキユヘシカハ景忠モ心得テ馬ニ鞍ヲ置物ノ具シメ諸

軍勢下知整へ敵今ヤ寄スルトテ用心嚴シク聞エケリ同ク廿二日朝倉金吾教景子息孫九郎景紀父子共ニ大將ニテ都合其勢八千餘騎加州へ打越へ敷地菅生村ニ陣取給ヒケレハ江沼郡ノ者共ハ早同志トソ見エニケル九月五日午ノ刻ニ教景敷地菅生ヲ打立テ本折へ陣替セラレケル處ニ能登越中ノ諸勢モ教景へ同心シテ加州牢人河合洲ノ崎等ヲ引具シ畠山修理ノ太夫一家トシテ遊佐神保温井以下越中勢モ打立テ河北堺ニ陣ヲ取十月廿六日越前大將教景ハ今湊川ヲ越ヘントテ勢汰シ子ノ刻ヨリ本折ヲ打立テ河原面ニ出ケレハ向ヒノ岸ニハ敵四五千騎壘楯ヲ衡並ヘテ一面ニ扣ヘタリ山崎櫻井中村堀江詫美溝江以下是ヲ見テ吾劣ラシト一度ニ河へ打浸リ馬筏ヲ組ミ喚キ叫ンテ打浸シ敵ヲ屑トモセスシテ向ノ岸ニ驅上ケル程ニ加州ノ者トモ一支モセス馬物具ヲ打捨テ蜘蛛ノ子ヲ散スカ如ク逃行キケルヲ越前勢追ツ懸ケ々々討程ニ敵ノ頸七八百計切懸ケテ石川郡番田土室藤塚所々ヲ燒拂フ其時立任組ノ者共ハ同心ノ内通ニヨリ一勢傍へ引退テ軍ノ様ヲソ見居タリケル斯テ其日モ暮ケレハ討取シ首共ヲ教景實檢シ給ヒ川向ノ敵堺ニ懸サセツ、勝鬨囂ト上ケサセテ寺井ノ陣ニ飯ラレケレハ山崎新左衛門ハ今湊ニソ陣取ケル同ク廿八日ニ大雨頻ニ降りケレハ今湊川水増シテ洋々タル巨海ノ如ク成ケレハ河伯モ迷ヒヌヘクソ見エタリケル抑此河ハ白山一ノ瀬ノ下ニシテ山々谷々ノ流レ集ル大河ナレハ如何ニ剛ナル越前勢モ今日ハ川ヲ越サシトテ石川河北ノ者共合掌シテ立任カ在所ヲソ攻タリケル教景此由聞給ヒテ足輕七八百餘急船ニテ渡サレシカ共立任組ノ勢共散々ニ討成レシ崩レ口ニ行合フテ河岸ニテ戰フ者モアリ或ハ河ヲ游カテテ流レテ死

スル者モアリ教景モ河岸マテ打出テ頻ニ鬨揚ラレケレハ流石難所ノ大河ナレハ左右ナク越サノ様コソ无リケレ爰ニ神波新左衛門進出テ申ケルハ此河ノ事ハ敵能案内者ニテ候ヘハ此所ニテ鬨ヲ上ケラレ候共敵ヨモ驚キ候マシ哀上ノ淺瀬へ御廻有テ川ヲ越ラルヘウモヤ候ラント云ケレハ實モトヤ思ハレケン諸勢ヲ下知シテ皆上ノ瀬ヨリソ渡サレケルサレハ敵軍ハ既ニ引タル跡ナレハ六日ノ菖蒲會ニテハ有ケレ共當方ノ足輕共立任組ノ者共コソ是ニ機ヲ得テ難ナク引取ケルトカヤ翌日敵方ノ奴原ハ昨日打取ル首共ニ先日味方ヨリ懸タル頸共取集メ昨日越前勢ト合戦シテ打取ル首ト號シ何共知レヌ首共ニ然ルヘキ越前士ノ名字名乗ヲ書付テ能登越中ノ陣ニソ懸タリケル下勢ハコレヲ見テアハヤ越前勢コソ勝利ヲ失ヒヌルハトテ大ニ謀ク氣色ヲ見テ坊主方ニハ悦ヒツ、時コソヨケレト云儘同廿九日石川河北兩郡ノ者共ヲ引率シテ能越ノ陣へ攻懸ケレハ下勢モ爰ヲ先途ト戰ヒケレ終ニ討負テ能越ノ大將大隅遊佐神保三宅温井備中守父子三人此等ヲ始メテ越中勢其外加州牢人河合洲崎以下譽レヲ得タル軍兵等悉ク討死シ僅ニ討漏サレタル者共ハ這々能越ヘソ退キケル斯リケル所ニ越前ノ大將教景ハ湊川ニ舟橋ヲ懸テ諸勢ヲ安ク渡サントテ寺井ノ三堂山ニテ大綱打セテ御座シケルカ下口ニ大烟ヲ立昇リケルヲ見給ヒテ何事ヤラント不審シ給フ處ニ各々申サレケルハ別ニ何事カ候ヘキ如何様此烟ハ能越ノ軍兵攻上ルカト覺候明日ハ下勢ニ御對面最目出度ト云ケレハ教景聞給ヒテイヤトヨ左ニテハ有ヘカラス能越ノ軍勢ノ責上ル煙ナラハ次第ニ近ク燒ケ上ルヘキニ此ハ引カヘ次第ニ遠ク燒下ル間能越ノ軍兵必定討負タリト覺ル也日モ

既ニ暮方ナレハ先ツ飯陣シテ各々休マレ候ヘトテ人數ヲ打入レ給フ處夜半計ニ大手ノ籌所
 へ女房一人來テ文ヲ警テ云ケルハ是ハ河原四郎左衛門カ女房ノモトヨリ參テ候此文急キ四
 郎左衛門ニ參セテ給リ候ヘト云ケレハ番ノ者トモ請取テ急キ大將ニソ參セケル教景文ヲ開
 テ見給ヘハ今日巳ノ刻下口ニ於テ合戰始ルノ處ニ能越ノ諸勢悉ク討負ケ散リノニ落行キ
 候然レハ上郡下郡一統ニ蜂起シテ其口ヘ推寄セ取リ籠テ責ムヘキ由ノ評議アリ其心得ヲ
 可レ被レ成トソ書タリケル教景サレハコソ今朝ノ燒ケ様最不審ニ思ヒシ處ニ扱ハ下勢ノ敗北
 ニテ有ケルソヤ左アラハ暫クモ滯留不可然トテ十一月二日ニ陳中へ觸レサセ明日ハ原モ
 カ口ヲ攻ヘキ也各々丑ノ刻ニ勢揃シ寅ノ刻ニ打立ヘシ相極メテ中路下路二手ニ分テソ引レ
 タル此旨越前へ注進致サレケル所ニ孝景馬ヲ可レ被レ出サ由早速被レ仰下シカハ教景モ敷地
 菅生ニ陣居テ國守ノ出馬ヲ待ルヘシトノ儀ナリケレモ靡キ立タル勢ナレハ是ヲ耳ニモ聞キ
 入テ皆越前ニ引ケレハ教景モ力及ハヌ次第トテ同夕七日遂ニ飯陣セラレケリ然ル所ニ加州
 三ノ山ノ大坊主四郡ノ長十方黒瀬ノ藤兵衛福田ノ竹大夫築山ノ一ツ針能美郡ニハ松永平左
 衛門隅田六郎右衛門湯淺九郎兵衛金子小杉小松ノ道秀藤塚ノ二木出口ノ齋藤安宅ノ今井藤
 右衛門以下二十餘人教景ニ相隨テソ來リケル又翌年天文元年三月下旬能越へ退タル牢人ノ
 内玄任カ子ノ次郎左衛門ヲ始トソ河合カ嫡男某并ニ洲ノ崎孫四郎上坂與惣右衛門土田山本
 ノ一族等ヲ二百餘人ト聞シカ是亦教景ノアトヲ慕フテ來リケル程ニ教景屋形へ披露有テ二
 千餘貫ヲ毎年ニ配當成セ給ヒケリ其後加州牢人一統ニ教景ヲ以テ入國ノ儀ヲ訴訟シケレト

モ孝景領掌无リケレハ斯テモ始終歴カタシトテ天文二年八月廿日ニ牢人共又加州江沼郡へ
 打入テ曾宇直下村ニ陣取ル處ニ能美石川兩郡ノ者共推寄セテ取卷キ大將ノ黒瀬五郎兵衛ヲ
 撃チ其外名アル輩ヲ十餘人討取ケレハ牢人共力及ハテ引退ク同三年九月牢人共又越前ノ國
 牛ノ屋ヲ陣所トシテ加州上郡へ日々足輕ヲソ出ケル斯リケル處ニ黒瀬左近四郎ハ何トカ思
 ヒケン出陣スル體ニテ忽チ裏カヘリ風谷ヲ經テ加州へ越ケル程ニ牢人共大ニ手ヲ失テ皆散
 リ々々ニ成行キケル

六角少弼退治山科本願寺 附朝倉孝景逝去 并唐船着越前三國湊事

去程ニ江州佐々木彈正少弼定頼ハ法華宗同事ニ山科本願寺ヲ攻ントテ數百餘騎ヲ催シテ
 晝夜急ニ操ケレハ上人モコラヘ難クヤ思ハレケン潜カニ忍ヒテ大坂ヘヨソ落ラレケレ誠ニ
 天道ハ虧盈地道ハ變盈トハ此事ヲヤ申スヘキ阿房宮カト疑ヒシ寺モ瞬餘ノ烟ト成王公伯
 ニモ准シ榮モ炊衷ノ夢ト消エテ草ハ無情ノ春ニ傲レハ雨ハ懷古ノ涙ヲ添フ昔ニ易ラヌ物
 トテハ梢ノ嵐雲間ノ月其レタニイト、物スコク行衛モ知ヌ旅人マテモ餘所ノ袂ヲシホリケ
 リ昔日惡事ヲ企シ下間兄弟ノ者共モ程ナク亡ヒ失セニケリ電光朝露石ノ火ノ化ナル浮世ニ
 生ヲ得テ風前ノ燈ヒ水上ノ泡ニ齊キ身ヲ忘上ナキ欲ヲ遂ントテ永キ世マテニ惡名ヲ殘ス事
 コソ耻ケレ彼ノ身ノ危依勢過ト云ヒ置シモ實ニ理ト知ラレタリ時ニ天文十七年三月廿二
 日申刻孝景波着寺へ參詣有リケルカ下向ノ路次ニテ頓カニ逝去シ給ヒケリ生年五十六歲誠
 ニ是レ浮世ノ憑スクナキハ水上ノ萍ノ波ニ隨テ去カ如ク此身ノ定ナキ事ハ樹頭ノ華ノ風ニ

伴ツテ散ニ似タリトハ此事ヲヤ申スヘキ歎キテモ尙ヲ餘リアリタルコトモナリ不_レ得_レ已葬
 禮執行アリケルカ嫡領左衛門督延景喪主ト成給ヒテ追薦申モ思カナリ頓テ一字ヲ造立シ道
 號大岫宗淳居士改メテ性安寺トソ申シケル凡ソ此孝景ハ佛法信仰篤有シカハ諸方ニ寺舎ヲ
 立ラレツ、叡山ニモ佛宇建立多カリケリ惣シテ此御代ニハ官位昇進ノミナラス將軍家ノ御
 相伴衆ニマテ成給ヒシ事偏ニ孝景ノ御威光トコソ聞エケレ賢息延景ハ細川右京兆ノ智ナリ
 シカ果報イミシクマシマセハ萬端先代ニ彌増テソ覺エケル義輝將軍御賞統ノ餘リニ御相伴
 衆ニ成サセラレ殊ニ御諱ノ字ヲ拜領ニテ延景ヲ改メテ義景ト名乗ラレシカハ時ノ面目世ノ
 聞エ類少フ見エニケリ斯リケル所ニ天文廿年七月廿一日越前三國ノ津ヘ唐船渡テ同ク廿五
 日ニ湊ヘ入ル唐人其數百廿人船頭ハ南山ト號シ胸ギ船頭ハ清山ト云シカ小谷六郎左衛門ト
 云者ノ家ヲ宿所トス近國遠郷ノ僧俗男女諸共ニ異朝ノ事ヲ聞ントテ踵ヲ繼テコソリケレハ
 國ノ賑ヒ限リナシ去程ニ商賈ノ旅客ニ紅袖ヲ浦ノ嵐ニ翻ヘセハ見物ノ貴賤ハ彩縫ヲ澳ノ潮
 ニ濕セリ抑昔ヨリ當津ヘ唐舟着岸ノ事并ニ此繁昌モ稀レナリケルトソ申ケル

朝倉始末記第二終

朝倉始末記卷第三

朝倉太郎左衛門入道宗滴進發加州事

朝倉金吾教景入道宗滴齡既傾ケレ武畧ノ道ヲ不_レ捨_レ朝暮心ニ憤被_レ思ケルハ四海ノ錯亂
 鎮テ以テ國家ノ泰平ヲ致スハ元是武將ノ籌ヨリ成ルナレハ一人賞_レ其德_レ則黍民歸_レ其威_レト
 云者豈不_レ思_レ之然近年加州ノ土民等本願寺ヲ語セ武士ノ國ヲ押領_レ恣ニ逆威ヲ振フ有様ハ
 千古未聞ノ暴惡カナ是只佛法ノ怨敵ノミニ非ス兼テハ又害_レ君敗_レ國ノ兇賊ナリ今若彼ヲ絶
 スンハ誰カハ誅伐スヘキトテ内々義景ヘ申サレケルハ加州ハ是父祖代々ノ敵國ナリ彼ヲ其
 儘捨_レカ_レン事誘_レ天下ニ得_レノミカ殊父祖_レアリ_ホ黄泉ノ苦ニ汚_レ歎キアリ將又先年某彼國ノ湊
 川ヲ越テ石川郡マテ攻入候ヒシ所思ノ外ニ能登越中ノ軍兵討負_レ敗北ノ條力不_レ及愚老カ
 人馬ヲ入事鬱念此事ニ候ナリ然レハ愚老カ薄命ノ内ニ安否ヲ遂シメ給ヘト一度ハ歎キ一度
 ハ忿言ヲ盡_レ申サレケレハ義景打領_レキ尤理ト覺候間諸卒ニ申觸ルヘシトテ即多勢ヲ附給フ
 因_レ茲弘治元七年月廿一日宗滴加州ヘ進發シ給フ七十九歳ノ大將古今無雙ナリトソ皆人申
 合ニケル此日金津マテ着陣廿二日ニ橋ノ上一夜逗留アツテ廿三日ニ加州ヘ打入四方ノ體ヲ
 見給ヘハ津葉南郷千崎マテニ悉ク城ヲ堅メ敵七八千騎ニテソ楯籠リケル味方モ勢ヲ三手ニ
 分ツテ押ケルカ玄蕃助景連ハ面モフラス津葉ノ城ヘソ攻入ケル斯リケル所ニ松尾龍崎眞先
 キ懸テ戰ヒ木戸際ニテ敵ト引組刺違テソ死ニケル城中ニハ是ヲ見テ高檣ヨリ指下シテ散々
 ニ射ケレ_レ半田源左衛門新保彌三郎究竟ノ兵凡五十餘人入替々々不_レ惜_レ身命逆_レ茂木ヲ切

破り喚キ叫ンテ責入リツ、骸ハ路徑ニ曝トモ名ハ人口ニ落サシト互ニ一足モ不引攻上ツ
 テ敵十四人討捕ケレハ城主不叶トヤ思ケン希有ニシテ搦手ヨリ引退ク南郷ノ城ニハ黒瀬
 掃部ヲ大將トシテ同手ノ者三千餘騎其外近郷ノ一揆等數百楯籠リケルカ彼勢ニ辟易シテ與
 カタクヤ思ヒケン大將掃部ハ山中へ退ケレハ藤丸新助等ハ横北指テソ引ニケル千崎ノ城ニ
 ハ菅波尾坂ノ兵トモ并ニ瀉山津ノ大家震橋ノ帶刀以下三千餘人籠リケルカ矢先ヲ揃テ寄ス
 ル敵ヲソ待懸ル越前勢是ヲ見テ只一息ニ踏破レト聲々ニ言リツ、我先ニト推寄ル中ニモ福
 岡五郎右衛門カ其日ノ出立殊ニ勝テハナヤカナリ白星ノ三枚冑ニ金龍ノ鍔形打タルヲ猪頸
 ニ着ナシ銀子磨ノ腹卷ニ金作りノ太刀ヲハキ本總藤ノ弓ノ真中握リ如何ニモ黒ク逞キ三寸
 餘ノ大馬ニ金具ニ家ノ紋入タル鞍ヲ置キ千崎ノ城へ真先ニ驅ケ上ケ大音聲ニテ呼リケルハ
 朝倉義景ノ内ニ名ヲ得タル福岡五郎右衛門尉吉澄トハ我カ事ナリ今日軍ノ先驅ケシタ名ヲ
 後代ニ留ント思ヒ設ケテ出タルナリ但シ加州ノ一揆原數ニモ足ス雜人等ト無益詞ヲ通ス
 事所存ノ外ニハ思ヘ凡好々ソレモ力ナシ我ト思ハン者トモハ城ノ逆茂木取退ケ木戸ヲ開テ
 出合ツ、福岡カ手ナミノ程ヲ見ヨヤトテ城ヲ睨ンテ控タリ城ノ内ニハ是ヲ見テサシテ由ア
 ル大將トモ見ス又普通ノ男ニモ非ス行衛モシラヌ不敵者ニ跳合命ヲ捨テ何カセン只置テ事
 ノ様ヲ見ヨヤトテ鳴ヲ靜テ音モセス吉澄大キニ腹ヲ立是程ニ大音上テ呼ルニ一返答ニモ
 不_レ及シテ矢ノ一筋ヲモ射出サヌハ城中ノ一揆原ニ臆病神ノ付タルカサラスハ我ヲ侮カ其
 儀ナラハ手ナミノ程ヲ見セントテ急キ馬ヨリ飛テ下リ木戸堀ヲ切落サントスル所瀉山津ノ

大助手勢十騎計ニテ木戸ヲ開テ切テ出テ吉澄ヲ追取り廻シテ戦ヒケルニ吉澄少モ騒ス物々
 シヤト旬ル詞ノ下ヨリモ真先ニ進タル武者ノ細頸ヲチウニ打落シ反タル太刀ヲ押直テソ立
 タリケル敵ノ兵是ヲ見テ呼切タリヤ若侍其ヲ引ナト云フ儘ニ我モ_レト飛掛テ無スト組上
 ヲ下ヘト返ス所ヲ大助カ手ノ者三三人落重リ終ニ吉澄カ頸取テ城ノ中ヘソ懸入リケル越前
 勢是ヲ見テ今ハイツカ期スヘキト獅子奮迅ノ牙ヲ嚙一千餘騎面モ振ス命モ惜ス鳴聲ヲ擧テ
 攻入ケル程ニ城兵大キニ崩レテ騒ケレハ城ノ大將叶ハシトヤ思ヒケン搦手ノ木戸ヲ開キ高
 塚震橋ヲ指テソ落行ケル僅一日ノ間ニ三箇ノ要害ハラ_レト落ケレハ大將ヲ始トシ諸勢大
 ニ歡拵シテ一度ニ凱歌ヲ擧ニケリ然ル所ニ堀江中務丞景忠手勢一千餘騎ヲ率シ熊坂奥ノ屋
 ヲ放火シテ山路ヨリ大聖寺ノ搦手ヘ向ヒケルカ其勢所々ニ馳セ散ツテ舍弟左京進伯父駿河
 守同左馬助堺藤兵衛同帶刀左衛門彼是僅ニ廿四五人真先ニ八ツ蛇ノ目ノ旗指セテ小松原ヨ
 リ出ケレハ大聖寺ノ城ニ楯籠タル一揆六七百人搦手ヨリ引退クカ四五町先ニ見エケル間景
 忠イサ掛テ討捕ヘシト被_レ申ケレハ各云様ハ敵ハ目ニ餘ル多勢ナルニ味方ハ僅ノ小勢ニテ
 跡ニ續ク勢モナシ敵若シ取テ返シ戦フ者ナラハ一々ニ討ルヘシ只後ノ山ニ取り上リテ諸勢
 ヲ相待ルヘウモヤ候ト云ケレハ景忠聞テイヤ_レ其義ニ及フナラハ堀江ヨソ敵ヲ見懸ケ逃
 タレト後日評判通ルマシ景忠ニ於テハ一足モ引ヘラカスト云儘ニ長刀ヲ膝ニノセ下リソ敷
 テコソ待懸ケレ其時二十餘人ノ者共モ力不_レ及各鍵フスマヲ造テ扣ヘケルカ誠ニ一人モ生
 テ返ラント思フ氣色ハ无リケリ然レハ敵敢テ近付スシテ次第ニ遠ク成リケレハ景忠目ノ前

ナル敵ヲ空ク通シタルコソ口惜ケレトテ肺肝ヲ焦メ怒ケリソレヨリ大將宗滴ハ猫香山ニ陣取給ヘハ堀江ハ右ノ上ナル山ニソ陣取タル此日大將實檢ノ頸數都合六十七御方ノ討死二十三人ナリ明ル廿四日總軍寅ノ刻ヨリ打立先江沼郡ヲ放火ノ諸勢ハ敷地菅生ニ列張シ宗滴ハ敷地ノ山ニ陣取シケレハ朝倉玄蕃助福岡三郎右衛門ハ菅生口藏谷衆ハ大聖寺武曾深町ハ大久村ニソ扣ヘケル然ル所ニ越前ヨリ高田坊主本流院松樹院稱名寺仙福寺其外何レモ一宗ノ寺勢ヲ驅催フシ都合其勢三千餘人黒烟ヲ立テ馳來リ御後ヲ黒メ申スヘキ由申ケレハ大將教景對面アツテ各是マテノ志誠以テ神妙ノ至ニ覺エ候乍去是程ノ一揆原ニサシテ寺勢ヲ頼ニ及ハス只各ハ早速歸國可レ然トアリケレハ本流院眞孝松樹院宅如申サレケルハ事新キ申事ナカラ我輩累世御國端ニ地ヲ占テ屋形ノ恩惠忘得ス其上當國ノ一揆原先年我等カ一宗ヲ悉ク追散シ能登越中マテノ宗旨ヲタヤシ候事定テ聞召及給フラメ彼ト云此ト云一ツハ屋形ニ報恩ノ爲一ツハ宗旨ノ耻ヲモ清メ申サン覺悟ナリ何方ニテモ一方ハ是非承リ候ヘシト旨ヲ放テ申サレケレハ教景笑ヲ含ツ、此上ハ兎モ角モ和僧ノ心ニ任ルヘシトソ宣ケル斯テ各宗滴ニ申サレケルハ此所ニテ日數ヲ送給ハン事不可レ然ル覺候哀レ何方ヘモ陣ヲ移サレ候ハンヤトアリケレハ宗滴宣ヒケルハイヤトヨ我此所ニ久敷在陣スルナラハ定メテ敵馬ノ鞍ヲモ脱セス晝夜甲冑ヲ帶レツ、我勢今ヤ寄來トカタ津ヲ呑テ可有カ途ニ待ワシ氣疲レハ敵ハサマテノ事ナシイサ逆寄ノ寄ントテ必ス爰ニ來ヘシ其時敵ヲ僞リ引出シ思圖ニ引受ツ、四郡者共ヲ居ナカラ討捕候ヘシト事モナケニ宣ヒケレハ此儀尤ト同心スル族モアリ手取足

モ我一人持タルヤウノ仰カナト笑者モ多カリケリ其中ニモ心アル者共ノ云ケレハ此宗滴ハ從來知謀無雙ニシテ天下ニ名高キ良將ナレハ若年ヨリ諸國へ出陣アリシカトモ數戰ノ中ニ終ニ不覺ヲ取給ス去ル永正十四年ニ若州ノ逸見氏俄ニ武田殿ニ意替シテ丹後ノ延永源六ト云シ者ヲ語ヒ八千餘騎ニテ若州へ攻入シカハ其比霜臺孝景武田大膳大夫ノ智ナリシ故ニ加勢ノ事申シ越シケレハ即教景大將トシ若州へ進發アリケル所ニ延永其勢ニ恐レテ一戰ニ不及忽引退テ丹後ノ國加佐ノ郡庫橋ノ城ニ楯籠ケルヲ教景續テ攻入り即城ノ四面ヲ取圍ミ息ヲモ繼セス採ニモンテ攻ラレケレハ源六終ニ降參シ死ヲ遁レテソ出ニケル其時源六分ケ迷フ庫橋山ノ雲露ニ心淺クモ出ル月哉

ト詠シテ頓テ城ヲ渡シケル程ニ忽城ヲ破却シ伽佐郡打捕ツテ武田方ヘソ出サレケル又大永五年五月上旬江州ノ六角方淺井備前守ヲ退治セントスルノ時淺井方ヨリ一乘ノ谷へ使者ヲ以テ幕下ニ屬スヘキ旨堅ク申スニ依テ即孝景ヨリ加勢ノタメニ教景江州北郡へ進發有テ淺井カ城ノ大手ノ山ニ陣取ラレケレハ六角方不叶シテ終ニ引返シケル程ニ同ク九月ニ教景モ又飯陣ナリ其時ノ陣所ヲ今ニ金吾嶽ト申トカヤ同七年細川右京兆晴元ト讚岐ノ摠明殿ト家督ノ爭有テ三好氏四國ノ勢ヲ引率ノ京都へ攻上ケレハ晴元ハ公方義晴公ヲ具足シ奉ツテ東坂本へ動坐有リシカ其後可有御入洛ニ依テ孝景へ加勢ノ事被仰下ケル間即教景父子義晴公御入洛ノ御供申シ上京ノ刻鹽ノ小路泉乘寺口ニ於テ四國衆并遊佐ノ彈正等ト合戰アリシ時前波手崩テ臼井兵部丞託美宗節鳥居與七十七歳ニテ多勢ト戰ヒ數ケ所疵ヲ蒙テ討死

ス其外佐々布光林坊同主日連坊同左京ノ進井上又八教景ノ外衆ニハ大瀬渡邊山本長谷川等皆一騎當千ノ兵共ナレハ自ラ敵ニ當ル事十々度陣ヲ破ル事六々度火花ヲ散シ戰ヲ終ニ各々同シ枕ニ討レケリ此時ノ味方討死百人餘然レトモ朝倉孫五郎景紀ハ敵ヲ野々宮マテ追懸遂ニ軍ニ打勝テ遊佐弼正カ頸ヲハ梅ノ某是ヲ切り岡部新五郎カ頸ヲハ神波小四郎宗知是ヲ取タリケリ是ノミナラス三好方并遊佐カ勢ノ頸都合百五十餘ノ討捕リケル其比京童ノ落書ニ

哀レヤナミヨシ刀モサキ折レテ直高キ鎧ハ金吾ナリケリ

野々宮ノ森ノ木ノ葉ト散ル遊佐ヲ討捕リヌルハ九郎判官トカヤ就中大將教景ハ自弓ヲツ取テ敵十餘人矢庭ニ討落シ遂ニ勝鬨上ケサセツ、悦勇シク飯ラレシカ頓テ公方ノ御威狀ヲソ受ラレケル天文十三年尾張ノ國織田彈正忠信秀濃州ヘ可攻入由ヲ聞テ齋藤山城守義龍ヨリ越前ヘ加勢ノ事ヲ被申ケル間同キ八月十二日ニ教景一乘ヲ打立篠俣越ニ掛ツテ大河原板取ヲ歷岐阜ヘ發向ノ義龍ニ力ヲ合途彈正忠ヲ追拂テ何ンナク飯陣セラレケリ從來宗滴ノ威勢堅キヲ破ルハ樊噲鴻門ノ怒リヲ壓利ヲ摧ハ項王垓下勢モ越ツヘシ其レノミナラズ或ハ庭前ニ鷹ノ時ヲ構雌雄ヲ今子ヲ成セ或ハ鮭ノ鱒ヲ泉楮ニ入レ寒温ヲ考湯ヲ入テ悉ク魚トナサシムルノ類不可勝計古キ詞ニ賢者知事未然智者避危於未兆明者視物於無形聽者聽音於無聲トカヤ傳シカ如ク智仁勇ノ三能ヲ備ヘテ無隱名將ナレハ何様此所ニ逗留シ給フモナトカ其故ナカルヘキナト人々申合ケル所ニ案ノ如ク加州四郡ノ者共敵今ヤ寄來ルト甲冑ヲタニモ不脱シテ秋ノ夜ノ長キニモ聊カ睡

ル事モナク十四五日カ間晝夜用心シタリケルカ勇氣渡レテ申ケルハ思フニハ不似敵小勢ナレハコソ數日ヲ經テモ攻寄サレ只此方ヨリ打寄打散シテ可退ト云ケレハ各其義尤ナリトテ八月十一日會合シテ議シケルハ十三日ハ先師證如上人御名日殊更今月ハ御正月ナレハ是ヲ吉日トシテ諸國ノ門徒四方ヨリ同時ニ打立テ懸ルヘシ先大手ヘハ本覺寺ヲ大將ニテ蕪ヲ木洲ノ崎窪田河合立任十人衆并石川勢ニテ向ヘシ扱濱ノ手ヘハ超勝寺ヲ先トシテ河北郡小原高坂山一番里一番ノ者共右橋口ヘハ江沼郡里瀬熊坂尾坂藤丸柴山衆可相向ト内談ノ十二日ノ午ノ刻ニ打立其夜ハ山々ニ遠籌ヲソ燒ニケル越前武者是ヲ見テスハヤ敵コソ打出タレトテ悅合フ事限ナシ更行儘ニ東南ヲ見レハ尾俣山代葛谷横北松山ニ梨黒谷枇谷坂下モ小杉四十九日柏野ヤ九谷ノ奥山輪方嵩大土原ノ山マテモ只白晝ノ如クナリ扱西北ヲ詠ムレハ小鹽橋立田尻浦宮地篠原小鹽辻野田潮津瀉山津ニ新保柴山佐比糴火安宅ノ濱ニ燒籌ハ萬灯會ニモ不異惣シテ能美石川ノ山々マテモ籌セサルハ无リケリ人々アラ夥シヤト伺リケレハ堀江中務丞景忠トリアヘス

彌陀ノ誓ヒ頼ム坊主ノ篝リ火ハ四十八ニハ過サラマシラ

ト一首ノ狂歌ヲ戲レケレハ滿座興ニ入テソ笑ケル明レハ十三日ノ卯ノ刻計ニ朝倉方ノ陣所濱ノ手ノ山ニ武者十人計冑ノ星ヲ輝シテソ見エニケル宗滴是ヲ見給テ萩原八郎右衛門宗俊ヲ以テ諸手ノ足輕二三百人西ノ鷹尾ノ高山ヘ遣スヘシ敵タトヒ攻上ルト云トモ山六七分ニ上ルマテハ味方少モ働クヘカラス八分ニ登ラハ一タヒニ颯ト擊ツテ懸ルヘシ定テ敵ハ多勢

タルヘシ味方ハ山ノ頂ニ一面ニ立并ンテ圓形雁行ニ陣ヲ張猛勢ニ見ユル様ニ計ルヘシトテ足輕トモヲ遣ハサレケルカ尙無覺束トテ宗滴モ續テ進出テラレケレハ味方千萬騎ヨリ勝レテ頼敷コソ覺エケレ去程ニ敵ノ大將超勝寺ハ都合其勢二萬五千餘鎧ノ袖ヲ連子ツ、吾レモト攻登リケルヲ味方ノ兵兼テ期シタル事ナレハ少モ不騷敵ノ息ヲ疲カシテ思フ圖ニ上ル比一度ニ噓ト切懸ケレハ敵一支モサ、ヘスシテ悉ク谷底ヘ崩レ落チケルヲ味方ノ兵ノ透間モアラス鳴聲ヲ舉テ追ケルカ朝倉次郎左衛門景尙真先ニ進ンテ好キ敵ト引組ミ押ヘテ頸ヲハ取ツタリケレトモ味方ニモ亦朝倉孫六景冬即時ニソコニテ討レニケリ折シモ小雨ソホフリ朝露深ク立籠テ敵モ味方モワカサリケルニ敗軍ノ一揆原逃ル味方ヲ敵ノ追フソト心得テ馬物具ヲモ脱捨テツ、一足モ逃伸ヒントハシケレハ返シ合セテ戰フ者ハナカリケル程ニ或ハ高岸ヨリ馬ヲ馳セ落シテ微塵ニ成テ死スルモアリ或ハ敵ニ追詰メラレテ其儘討ル者モアリ超勝寺馬ノ足ヲ立直シ々々飯セヤ兵共ト荐リニ下知シケレハ大勢ノ引立タル癖ナレハ一返シモ返サスシテ二萬五千ノ兵共或ハ船ニ乗り損シテ其儘船ヲ乘リ沈或ハ安宅ノ橋ノ危ヲモ不顧イヤカ上ニ馳セ重リ人馬トモ墮落サレテ死スルモアリ無慚ト云モ愚カナリ宗滴此由見給テ濱ノ手ノ軍ハ如期ナレトモ大手ノ合戰無覺束トテ急キ馳飯リツ、敷地ノ山ヘ打上ツテ見給ヘハ案ノ如ク敵ノ大將本覺寺并ニ洲崎ノ蕪ヲ木ヲ始トシテ石川郡ノ坊主共都合其勢五萬余人勇懸ツテ寄來ル其時堀江中務丞景忠ハ濱手ノ山路ヨリ下リケルヲ大將急キ使者ヲ立テ早々勢ヲ柵ノ内ヘ入レ候ヘトアリケレハ景忠即木戸ノ内ヘソ入りニ

ケル敵ハ此由見ルヨリモ引退クト心得テ前後左右ヨリ競懸ツテ追ケレハ柵ノ内ナル兵トモソ、口浮キ立ツ心地シテ天神堂マテ引タリケリ大將腹ヲ居カテ惡シ蓬シ返セ辰セト牙ヲ嚙テ下知セラレケレハ堀江聞モ敢ス木戸口ヨリ嘯ト取テ返シテ大勢ノ中ヘ驅ケ入り縦様横様蜘蛛モ手十文字八ツ華形ニ打破テ手下ニ四五人切臥セタル時ニ郎等堺民部左衛門實清神波新七郎忠成續テ折合ヒ好武者ト引組ンテ各々頸ヲソ取ツタリケル黒坂勘解由左衛門景久是モ續テ切テ出テ節繩目ノ鎧ニ四方白ノ冑着タル武者ニ渡リ合ヒ暫コラヘテ戰ケルカ何トカシケン黒坂ハ膝ヲ割レテ辟易ケレハ敵走リ懸リ無手ト組ンテ推臥セントスル所ヲ黒坂違ヒ様ニ敵ノ高髀薙テ終ニ頸ヲソ取ニケル其外中村五郎右衛門前波彌四郎半田又八并ニ鳥居八代是皆一騎當千ノ兵ナレハ我劣シト取テ返シテ各々高名ヲソ極メケル溝江河内守父子モ木戸ヲ開テ切テ出多勢ノ中ヘ驅入テ兩人共ニ分取り餘多スルヲ見テ魚住出雲伊勢向セノ殿原何レモ手垂レノ精兵ナリケレハ指詰引詰散々ニ射ケル矢ニ敵勢コラヘ難クヤ思ヒケン後陣俄カニ裏崩レテ前陣死ニ逃ケレハ或ハ河ヘ馳セ入り或ハ池ヘ飛込テ死亡スル者數不知扱又菅生口ヘハ小原高坂其外河北一郡ノ者共都合一萬三千餘人打莅ミ亂株逆茂木引破ツテ既ニ攻メ入ラントセシ程ニ城中是ニ騷テ森吉政桑原藤島等走り渡リ土小間櫓ノ上ヨリ射ケル矢ニ敵軍少シ疼ンテ見エケレハ玄蕃ノ助景津馬ヲ進メテ下知シケル間福岡三郎右衛門吉清モ陣所ヨリ馬ヲ早メテ虎口ヘ打出テケル所ニ大町左馬助兄弟郎等五人一番ニ切テ出テ大音上テ云ケルハ愚人ハ鏡ヲ以面ヲ繕ヒ君子ハ友ヲ以テ心ヲ清ムトカヤ汝等ガ爲ニハ好敵ソ

我討トメテ譽ニセヨコヲ引ナト云儘ニ一文字ニ打テ懸レハ寄手ノ大將是ヲ見テ加程ノ小勢ニテ旬ルハ一定奇兵ヲ勝テ大勢ノ中ヲ驅ケ破リ好キ大將ト引組ンテ勝負ヲ決セン爲ナルヘシ思ヒ切タル小勢ヲ一息ニ討ントスレハ必恠俄ヲ得事アリ如何ニモ敵ヲ受ケテ荒手ヲ替ヘ取り籠メテ討テト下知シケレハ大町少モ猶豫セス皆弓矢捨テ打物ハカリ振カサシテ眞シクラニ切テソ懸リケル小原一族五百餘人兼テ謀リシ事ナレハ少モ手向フ事モナク左右ヘ颯ト分レツ中ヲアケテソ通シケル大町此中ニ大將ヤ有ルラント葉武者共ニハ目モ懸ス乘リ越々見ケレトモ思フ敵ニモ逢サリケレハ又南ナル河岸ニ二百騎計^本タル中ヘ驅入ツ、七華八列ニ切り亂シ終ニ好兵ト刺交ヘ落重テソ失ニケル菅生只如此火花ヲ散シテ戰ヒケレトモ大手ノ寄手悉ク敗軍シテ我レ先キニト落行ケレハ此口モタマリ得ス終ニ崩レテ逃ケル間景連頓テ木戸ヲ開テ驅出ツ、川崎山代マテソ追レケル右橋口ニハ江沼郡ノ者共八千計南郷ノ城ニ居タリケルカ諸手ノ崩レテ逃ヲ見テ叶シトヤ思ケン^是モ山中指テソ落行ケル大聖寺ノ勢右橋口ノ勢共悉ク打出テ追懸ハ過半ハ討ヘキ物ヲト後悔スレトモ甲斐モナシ去程ニ大將永追無用ナリトテ相圖ノ鐘ヲ鳴シ給ヘハ諸勢悉ク引返シツ、我モくト頸ヲ持テソ來リケル其日實檢ノ頸數都合六百八十餘其外ノ手負死人ハ其數更ニ知ラサリケレ去レハ古ノ實盛ハ一度鬢髮ヲ墨ニ染テ美譽ヲ篠原ノ池ノ塘ニ留メ置キ今ノ宗滴ハ二度ヒ強敵ヲ討亡シテ勇名ヲ敷地ノ山ノ頂ニコソ上ラレケレ然ハ實盛ニハ杏ニ超エタル大將哉トソ人々申合ニケル爰ニ又物ノ哀ヲ留メシハ龍崎宮千代トテ生年十六歳ニ成ケルカ父ハ去月廿三日津葉ノ城

ノ先驅シテ討レケレハ親ト一所ニ討死セサル事ヲ無念ニ思今度ノ軍ニハ好兵ト組ンテ死スルカ不然ハ多勢ノ中ニ討死シテ名ヲ後代ニ留ント思極テ居ケレトモ若輩ノ哀サハ猛勢ニ隔ラレ初終心ニ任セス此度ノ合戰ニモサセル高名ナカリケリ宮千代心思様角テ故郷ニ歸ナハ諸人ニ面ヲ曝シツ、後指ヲサ、レン事永ク弓矢ノ瑕ナルヘシ身ハ一代名ハ末代ト聞ナレハ軍功ヲコソ勤メストモ自害ニ耻ヲ雪ント只一筋ニ思切リ親類知音ノ方々ヘモ形見ノ文ヲ書留メ墨紙ヲ取出シテ一首角ソ聞エケル

子ヲ思フ闇ニ迷フナ待テ暫死出ノ山路ヲ共ニ越エナン

是ヲ辭世ノ名殘ニテ筆ヲ擲捨腹搔切テ北枕ニソ臥ニケル大將ハ申ニ及ハス是ヲ見聞ク諸軍勢比類ナキ所存哉トテ袖ヲシホリツ、惜マヌ人ハ无リケリ口々娑婆世界ノ形勢ヲ觀スルニ電光石火ノ内乍ラ有爲轉變ノ理リヲハ誰レカハ遁レ果ツヘキナレハ王母カ三千年ノ絳桃モ終ニハ暮春ノ風ニ落彭祖カ七百歳ノ金菊モ猶ホ寒天ノ日ニ萎ムトカヤ生死無常ハ世ノ俗驚ヘキニハアラテトモ大將宗滴八月十五日ノ晚ヨリ俄ニ病ヲ受給ヒテ寢膳不例ナリケレハ越前ノ屋形大ニ氣遣ハセ給ヒ良醫日々ニ馳下テ療養術ヲ盡シケレハ藥力驗シ無ク病惱次第ニ重リケレハ屋形哀セ給ヒ定テ今度ノ辛苦タルヘキ間大將并ニ諸勢モ一ト先休息セシムヘシトテ朝倉右兵衛尉景高父子其勢二千餘騎名代ニ打立ツテ敷地ノ岡ニソ陣取リケリ其外山崎新左衛門吉家二千餘騎ニテ敷地ノ西ノ山ニ居陣シ印牧丹後守ハ三百餘騎ニテ萱生村ニ出張シ佐々布光林坊ハ百餘騎ニテ岡ノ山ニ陣ヲ居大野勢一千餘騎ハ菅生口ノ東ノ方ニソ陣取ケ

ル角テ宗滴越前ニ飯陣アリケレハ諸勢右橋ノ邊マテ送り進セテ軍兵凡ノ悲歎始皇沙丘ニ崩シテ漢楚機ニ乗セシ事ヲ悲シミ孔明籌筆死吳魏便ヲ得ン事ヲ愁ルカ如シ案ノ如ク藥瞑眩セスノ九月八日終一乘ニ逝去シ給ヒケレハ屋形ノ御歎ハ申ニ及ス國中ノ騷事唯夕是レ五更ニ灯キエテ破窓ノ雨ニ向ヒ中流ニ楫ヲ失テ孤舟ノ浪ニ漂カ如シ斯テ九月中旬景高大將トシテ那谷粟津所々ヲ放火シケレハ敵軍何トカ思ヒケン出合者モ无リケリ同十月山崎新左衛門ハ安宅ノ邊ヲ燒ントテ夜半ノ比手勢計ニテ出ケルカ山崎肥前守眞先ニ進出馬ヲ安宅ノ川ヘ打入テ向ノ方ヲ見渡セハ水上掛橋波左谷今井河所々大河ノ流ナリ殊更篠原ノ池ノ塘モ近ケレハ東岸西岸ノ柳遅速ハアレ茂リ合吹來風ノ音荒ク瀬杭大キニ瀧成テ逆卷水モ尙早ク蒼波白泡森々トシテ底ノ深サモ見ユ分ス剩河ノ面ニ亂株逆茂木打並テ上下ニハ大綱小綱ヲ網ノ如クニ張懸ケレハ如何ナル天魔波旬モ輒ク可渡様ナカリケレハ邪ニ渡懸テ皆流セハ却テ後ノ世ノ笑草トモ成ヌヘシ只引返シ給ヘト云ケレハ吉家實トヤ思ハレケン皆打連テ歸リケル所ニ敵兵少々追懸ツ、鰐淵已下三三人討捕テソ歸リケル斯リシ後ハ迭ニ勝負モ決セスシテ空ク月日ヲ送ケリ比ハ神無月末方越路ノ冬モ五カエリ物冷シキ雪ノ天イト、哀レノ數添テ寂寥サノ餘リニ人々打出四方氣色ヲ詠レハ東ハ遠山渺々トシテ雪ニ磨ケル月ノ影猶白山モ冷ク住ウカレタル赤土生ノ小屋馴テ住サヘイト、タニ心ヲ碎ク折ナルニ況ヤ陣旅ノ假屋ノ内檐モ籬子モ風吹通ス鎧ノ袖杜重子タル薄氷峯風(風雪歎)ニ成ヌレハ往還ノ人モ稀ナリタリ西ハ滄海漫々トシテ沖漕船ノ楫ヲタニ遠ノ浦々荒増リ立來ル波ノ哀レ實ニ友喚千鳥心

シテ見景聞品一トシテ心ヲ傷シメスト云事ナシ維レ月日モトヨリ我ヲ待サル俗ニテ西馳東走スル内二年ハホトナク越ニケリ時ニ弘治二年ノ春京都ヨリ大館氏御教書帶シテ下向アリ其御内書ノ詞ニ

先度以晴元如申遣立置人數先急度可召返於存分者以兩様之内可申聞本願寺不能承引者重而出勢事可任義景心中候被仰暖刻及一戰不慮之儀出來者互不可意趣止候歟併存天下ノ爲候者此時同心可爲神妙候猶義堅可申也

弘治二年三月廿九日

朝倉左衛門督殿へ

斯テ越加和睦ノアツカヒ既ニ成ケレハ大將右兵衛尉景高ハ諸軍勢ヲ引具シテ弘治二年四月廿一日一乘ヘコソ歸ラレケレ其後加州ヨリ四郡ノ惣代官トシテ窪田肥前守ト云シ者屋形ヘ御禮ニ參リケレハ様々響應シテ歸サレケル程ニ兩國終無事ニシテ安泰ノ時トソ成ニケル

義景於越前東東郷大窪ノ濱見犬追物事

夫催興ハ必春ノ朝ノ海邊ニ有寄思ハ定テ秋ノ夕ヘノ峯頭ニ有トカヤ今ヤ春既去テ秋未タ來子トモ幸世靜ニ國治レル時ナレハ空ク過スヘカラストテ朝倉左衛門督義景ハ永祿四年四月六日東東ノ郷大窪ノ濱ニテ犬追物ヲソ見給ヒケル御供人數一萬餘人見物ノ貴賤不知其數馬場ノ廣ハ方八町ニソ被構ケル四月四日義景先一乘ヲ御出アツテ龍興寺ニ一宿シ五日系崎寺ニ參詣シ給テ寺中ノ坊ニ宿セラレケレハ諸大名以下ノ御供衆ハ皆近邊ノ村々ニ宿ヲソ

取タリケル奉行朝倉玄蕃ノ助景連ハ河尻ノ道場ニ被_レ居ケルカ次日屋形へ出仕有ケル其体アタリヲ拂テ見ニケリ先弓取三十人一樣ニ金熨付ノ腰刀指セ次ニ太刀帶三十人皆葵ノ金鏢打芝曳モ悉ク金ヲ以テ打延タリ我身ハ左リ折ノ烏帽子ニカチンノ素袍袴着テ驛ノ行騰シ太ク逞シキ驛馬ニ家ノ紋ヲ金貝ニ摺タル金覆輪ノ鞍ヲ置厚總ノ鞍懸テ乗タリケルカ弓手妻手ニ思々ノ裝束シタル殿原百餘人二行ニ連テ前後ニ立テ其次ニ白柄ノ長刀其次銀金貝ノ鎧三十本都合其勢五百餘人マタホノ暗キ早朝ニ濱邊ヲ狹シト歩セテ屋形ノ旅館へ參ラレタリ又兎鳥前ヨリ雜人原笠ノ端ヲナラヘテ推シ合動搖スル聲夥シク聞エシカハ何様是ハ屋形ノ御出カト思所ニ左ハナクソ小林新助ナリ真先ニ墓目ヲ荷ハセ其次弓取太刀帶四五十人中間小者ハ黒梅ノ帷子ニ大筋ヲ金箔ニテ磨キタルヲ着前後左右ノ侍アタリヲ輝シ我カ身ハ烏帽子ニ淺黄ノ素袍袴夏毛ノ鹿ノ行騰シ月毛ノ馬ニ欸冬色ノ厚總懸テユラリト乘リ長刀手鎧ニハ鹽干潟ノ捨テ小舟ヲ南嶽ニテ打付タルヲ二十挺持都合三百餘人馬ヲ靜メテ出仕スル其次朝倉右兵衛尉景高左右ノ太刀帶前後ノ諸侍綺羅殊更ニ美々敷シテ手鎧長刀金銀ヲチリハメタル者都合其勢五百餘人列ヲ正シテ通りケリ其次ニ朝倉次郎左衛門景尙同與七景友何レモ劣ラヌ裝束ニテ上下二三百人閑ニウツテ通ケル良暫クシテ羅衣細袖アタリヲ拂テ途挾ク花鬘雲鬘ツラ香シク匂シカ屋形ノ出御ト覺シテ弓取太刀帶金銀ヲ鏤扈從馬廻リ紅紫ノ飄シ諸々ノ紋ツケテ着タル雜色小者二百餘人二行ニ分チ前後ヲ纏テ連レリ其外外様ノ面々モ今日ヲ晴トシ出立タル駿馬天ニ嘶ハ奇犬華ニ吠テ歩セテ分野誠ニ由々敷見ケルカ都合其

勢一千餘騎屋形ヲ守護シテ通りケリ其次ニ前波左衛門五郎景當衣裳華ヤカニ刷宿鶴毛ノ馬ノ五藏太ニシテ尾髮飽マテ尋常ナルニ梨地蒔繪シタル金覆輪ノ鞍ヲ置我身輕クニ打乗リツ、上下五百餘人鳴リヲ靜テ通ケリ同九郎兵衛吉繼福岡三郎右衛門吉清堀平右衛門吉重山崎七郎左衛門其外魚住詫美櫻井齋藤窪田ノ某等并ニ射手組ノ面々或不_レ劣ト出立ツテ二百騎三百騎打連々々葛ノ粉ヲ打タル如クニテ引モ絶セス通りケリ加之近邊ノ諸大名或ハ禮義ノ爲或見物ノ爲群聚スル人多カリケリ義景ハ即假屋へ入セ給セテ裝束ヲ成レツ、屋形ノ外ニハ家ノ紋三木鼠ノ幕ヲ打廻シ内ニハ磨付ノ屏風一雙被_レ立タリ馬場ハ方八町ニ構テメクリヲハ鎧長刀持タル中間小者ニテ人牆ニセラレケレハ秋ノ野ニ尾花ノ靡ク風情ニテ目ヲ驚サヌハ無リケリ抑々今日ノ檢見ハ屋形喚次ハ神助六ニテ日記ヲハ拇ノ三郎右衛門吉仍假屋ノ内ニテソ付タリケル凡此濱ノ犬追物ハ舊年源ノ賴朝公鎌倉由井ノ濱ニテ被_レ遊タルト聞シモ是ニハ不過トソ見ニケルサレハ見物ノ老若貴賤モ千歳ヲ述ル心地シテ雲上ノ天人モ讚歎ノ唇ヲ動シ海中ノ龍神モ隨喜ノ耳ヲ聳カト覺ツ、海上俄ニ風替テ激浪濤々トシテ汀ヲ洗ヒ驟雨霏々トシテ袖ヲ濡ケル間此日ハ犬百匹ニテ先ツ御馬ヲ入ラレケルカ明ル七日ニモ雨尙晴サリケレハ八日ニ犬ヲノ射サセラレケル扱九日ニハ浦々ノ船ヲ寄蟹ヲ集テ海中ノ貝海松ナトヲ取ラセラレ終日船遊ヒシ給ツ、翌日一乘ヘソ御飯アリケル寔ニ由々敷カリケル戲樂カナト人々申台ヒニケリ

義景於一乘阿波賀原催曲水詩歌事

弘治五年八月上旬ノ比大覺寺殿京ヨリ一乘ヘソ下向シ給ヒケル屋形悃篤シテ様々饗應給ケルカ秋來旅泊ノ愁襟ヲモ慰參センカタメ又ハ易遷ノ時難過ノ友ナレハ君臣詠詩歌ヲ其懷ヲ述ントテ水石ノ勝地ヲ求給ヒケルカ八月廿一日遂ニ一乘ノ阿波賀河原ニシテ曲水ノ宴ヲソ催サレケル從來曲水ハ上巳ノ遊ト申セ凡臨時ノ賞玩尙珍ク聞ケリ先其御人數ニハ大覺寺殿義俊四辻大納言秀遠同ク息中將公遠飛鳥井中納言雅教同息少將雅敦大膳ノ大夫俊直朝倉左衛門督義景同九郎左衛門景紀同五番ノ助景連同中務景恒松林院鷹瑳ト云周筮周伊月鎔澄藏主宗澄知玉永能覺阿聖澤經王寺日尙豐將監親秋半井禪佐同佐馬ノ助明宗同治部明名大日三郎左衛門景秀曾我兵部入道宗譽前波九郎兵衛吉繼堀平右衛門吉重母ノ三郎右衛門吉仍云々連座ノ詩歌少々記之曰

早涼至

朝倉義景

花流ス昔ヲ汲テ山水ノ一葉ヲ誘フ秋ノ涼シサ

四辻秀遠

女郎花

手ニ取ラハ名ニヤ立ナン女郎花ウツロフ水ニ浮フ盃

聖澤

初鴈似字

新鴈成行字々連 秋風萬里夕陽邊

旅翰影映芙蓉錦 恰似同文詩一篇

朝倉景紀

嶺月

諸越ノ遠キ影ヲモ手ニ取ルヤ嶺ヲ浮フル月ノ盃

庭前萩

俊直

秋風ノ吹初シヨリ置ク露ハ千種ナカラモ庭ノ萩原

林葉漸黃

月鎔

葉葉漸黃秋樹陰 停車留馬不堪吟

曉來露若爲霜去 鴉外夕陽紅滿林

紅葉帶霜

飛鳥井雅教

露時雨染モ分シヲウスクコク紅葉ニトクル霜ノ下紐

菊

大覺寺義俊

流レ來ル菊ノ盃トリノ袖ノ薰リモ花ノ下水

菊延齡

知玉

群賢相集宴江頭 曲水流觴採菊游

華作莊周大椿去 一枝上置八千秋

寄空戀

四辻公遠

空ニノミアコカレ果ル心ヲヤ待トル月ニ慰テ見シ

寄衣戀

曾我宗譽

漏サシトツム涙ノカラ衣朽ナン後ヤサテ如何ニセン

水郷鷺

拇吉仍

鷺ノ居ル蘆邊涼シキ柳陰コノ川ツラニ浮フ三島江

寄雲戀

飛鳥井雅敦

打ナヒク物トハナシニ白雲ノ八重ニ重ル我カ思カナ

深夜鹿

朝倉景連

秋山ヲ夜深ニ出テ鹿ノ鳴麓ノ原ニ妻ヤ籠レル

寄煙戀

豐親秋

人知レヌ煙ヲ富士ニマガヘテモ猶餘リアル思ヒ成ケリ

秋夕

半井禪佐

夕暮ノ習ヨ如何ニ物思ハヌ袖タニカ、ル秋ノ涙ハ

泊雨滴

宗澄

旅泊誰言思萬里

蓬窓和雨一吟澁

滴聲喚醒客船夢

何管寒山半夜鐘

寄淚戀

周伊

ヨシサラハ其夜ノ夢ノ形見ソト思フ袂モウキ涙哉

深夜月

大目景秀

我ナラテ又問人モ嵐吹太山ノ月ヨ哀レ伴ヘ

月前虫

覺阿

風渡ル野原ノ草ニ露散テ月ニサヤケキ虫ノ聲哉

寄俤戀

半井明宗

現カト驚クハ又思寢ノ夢ノ枕ニ通フ面影

浦擣衣

永能

浦風ノ吹越磯ノ苦ヤカタ夜寒ニ成リヌ衣打聲

寄鶴祝

鷹瑳

白鶴聲清聞九天

遐齡正好祝安全

十州三島入君手

千歲仙禽在御前

此外ノ詩歌トモ多ケレハ略之斯御遊宴モ近頃ハ絶々ニテ最珍シキ折ナリケレハ尊卑各々榮
頤シテ羅衣ヲ薰烟ニ焦シ縑素互ニ探題シテ輕袖ヲ晴嵐ニ翻シツ、横朔等七步ノ才見テ譽レ
ヲ揚ル人モアリ或ハ鼻吟未了ニテ手先遮ル族モアリ或ハ詩歌ノ句ニ漏レテ罰盃ヲ受トヨム
モアリ上中下ニ至マテ思心ノ底意ナク此君千代ト仰ツ、様少キ壯遊トコソ聞ケレ

朝倉始末記三終

朝倉始末記卷第四

義昭公下 向越前事

永祿九年丙寅九月ノ末源義昭公不慮ニ朝倉左衛門督義景ヲ頼給ヒテ越前國へ御下向アリシ
 由來ヲ委尋ヌルニ前大樹萬松院殿ニ御曹司三人御座シケリ第一ハ都ノ御所ニテ義輝公ト申
 セシカ御他界以後ハ光源院殿トソ申ケル第二ハ奈良一乘院ニ入セ給ヒテ覺慶ト申ケリ是義
 昭公御事ナリ第三ハ北山鹿苑院ニ御座ソ周高トソ申ケル此光源院殿ノ御代ニ天下ノ武士多
 ク官位ヲ歷進シテ御威光殊ニ高カリケリ去程ニ越後ノ長尾ハ彈正ノ少弼ニ任シテ御相伴衆
 ニソ被成ケル阿波ノ三好氏モ本ハ細川家ノ郎等タリシヲ修理ノ大夫ニ任シテ御相伴衆ニ
 召加ヘラル、ノミナラス猛威次第ニ秀出ソ五畿内ヲコソ治メケレ爰ニ松永彈正ト云者アリ
 本ハ名モナキ者ナリシカ三好ニ隨逐ソイツトナク勢ヲ得遂ニ大和山城ノ守護職トナリ奈良
 ノ多門山ヲ城郭ニ構テ南都京都ノ成敗ヲ司リケルカ修理大夫モ老衰シ子息筑前守義長モ早
 世シケル程ニ十河氏ノ子ヲ取立テ三好ニナシ左京大夫義繼ト號シツ、松永洛中ヲ恣ニ進退
 シテ思ノ儘ニ振舞ケリ然ル間君ヲ失ナヒ奉テ萬端我意ニ任ントヤ思ケン異ナル事モ御座シ
 マサ、リシニ潜カニ三好ヲ勸メツ、左京大夫義繼并ニ松永カ嫡子右衛門佐久通兩大將トシ
 テ一萬兵ヲ引率シ永祿八年五月十九日清水詣ニ事寄セテマタ夜ノ深キニ何トハ不知洛陽
 東山ノ御所ニソ推寄ケル頃ハ畿内暫無爲ニシテ御用心モ可有折ナラ子ハ當番ノ外伺公
 ノ武士無リケル程ニ凶徒思フ圖ニ攻入テ義輝公不慮ニ御生害成サレケリ北山ニマシ〜ケ

ル鹿苑院殿へモ平田和泉ト云者ヲ指越方便ツ、遂ニ惠比須川ニテ擊奉ケリ加ノ南都一乘
 院ニ御座有ケル覺慶ヲモ失ヒ奉ラント風聞頻ナリシカハ一ト先奈良ヲ落テ還俗シ兄ノ敵ヲ
 討ントテ御名ヲ義昭ト改メテ一乘院ヲ出給ヒ近江國甲賀郡和田和泉守秀盛カ館へ入セ給ヒ
 テ其レヨリ同國矢島ノ郷へ被移御座ヲ今茲ノ八月ヨリ翌年ノ秋マテ御滯座被成佐々木左
 京大夫義賢入道承禎ヲ御頼アリケレトモ三好退治ノ義難叶ノ由ヲ申ケル剩へ心替ノ旨仄
 聞エケル間義昭公力ヲ及ハセ給ハス若狹守護武田大膳大夫義統御縁者タルニ依テ彼ノ館へ
 御遷座ナル武田隨分崇敬不斜ケレトモ若狹ハ分内狹フシテ計畧ヲ廻シ御本意ヲ被達セ事
 難成カリケレハ越前ノ朝倉義景ハ武田ト縁者ナレハトテ大館治部大輔晴忠ヲ以御頼被成
 度旨一乘ノ谷へ被仰セ遣ハサレケル處ニ義景畏テ承凶徒退治ノ儀奉得其意趣キ御請ヲ申
 サレ即朝倉孫八郎景鏡ヲ爲御迎被指越ケル程ニ義昭公御感餘リニ先孫八郎ヲ式部大輔ニ
 ソ成レケル去程ニ永祿九年丙寅九月晦日義昭公若狹ヨリ朝倉九郎左衛門景紀入道伊冊カ敦
 賀城へソ御座ヲ移サレケル御供ノ人々ニハ京極近江守仁木伊賀守義政武田大膳大夫義統大
 館治部大輔晴忠同伊豫守同佐渡守上野陸奥守信忠一色播磨守晴家同松丸同式部大輔藤長佐
 々木治部少輔高成和田伊賀守同雅樂頭飯河山城守同肥後守丹波勘解由左衛門尉同丹後守大
 月治部少輔伊勢宮千代三淵大和守舍弟細川兵部大輔牧島孫六郎曾我兵庫助野瀬丹波守沼田
 彌十郎杉原長盛以下トソ聞エケル斯テ早々一乘へ御座ヲ移サレ度思召レケレトモ例年ヨリ
 モ寒氣甚シク荒血山木ノ目峠莫大ノ深雪ニテ人馬ノ通路絶へケレハ九郎左衛門申シケルハ

今冬ハ是非當地ニテ御越年成サレ來春雪消テ後御遷座宜カルヘシト頻ニ奉レ留ニ依テ義昭
公其意ニ任給フ處ニ永祿十年ノ三月又不慮ニ加州ノ一揆等堀江中務丞景忠ヲ語ヒ蜂起スル
由ニテ國中騷動不レ斜間事靜テ後一乘ノ谷ヘ入御可レ有ルトテ同年十月マテ其儘敦賀ノ城ニ
ソマシ〜ケル

堀江依謀叛 讒流流浪ノ事

去程ニ永祿十年ノ春ノ頃堀江左衛門三郎景實加州一揆ノ奴原ヲ語ヒテ謀叛ノ由何トナク風
説類ナリケレハ義景大ニ怒リ給ヒ言語道斷曲事ノ次第カナ其義ナラハ早々踏ツフシ候ヘト
テ魚住備後守景固山崎長門守吉家兩人ニ被レ仰付ケル間同三月十八日兩大將二千餘騎ヲ引
率シテ金津ノ所司代堀江河内入道カ館ニソ着陣ス堀江父子是ヲ聞テ不レ思寄事ナレトモ今
ハ遁ヌ所ナリトテ諸勢ニ觸レ廻ソ着到ヲ付ケレハ一千餘騎ト記シタリ左アラハ三百餘騎ハ
上番ノ森村ノ間ニ可レ隠又二百騎ハ上番ヨリ二三町取出谷島村ノ前ニテ寄ル敵ヲ待請テ戰
ヘ其時敵ノ機ヲ窺テ森村ノ伏兵一度ニ突出テ一方ヲ破ルヘシ然ラハ我カ旗本ノ者共敵ノ本
陣ヘ無二無三ニ切り懸テ是非ニ大將ヲ討捕ルヘシ若又敵多勢ニテ競ヒ懸ハ味方弱々ト會釋
テ態ト虎口ヲ引退ケ敵乘レ勝追懸ハ森村ノ伏兵能キ圖ヲ計テ驅出ヨ其時我幡本ヨリ揉合セ
テ追取籠一人モ不レ泄討捕テ佛徳寺ノ前ナル辻ノ橋ノ落江ヲ埋ヨト下地セラレケレハ諸勢
尤ト肯ツ、弓矢取命ヲ奉主人ヘ何レモ同事ト云ナカラ景忠景實ノ重恩ヲハ今此時ニ不レ報
ハ末代マテノ耻辱ナリ各絶命此度ソト義心鐵石ノ如ニシテ夜半ヨリ打出ツ、寄來ル敵ヲ今

ヤ〜ト待懸タリ然處ニ魚住山崎ノ兩將ヨリ物見ヲ遣シ彼三百計ノ勢ヲ見テ評議シケルハ
假令俄ノ事ナリトモ堀江カ勢一千人ハ有ヘキニ是ハ餘リノ無勢ナリ如何様コレハ推量スル
ニ殘ル人數ヲハ向ノ森村ノ間ニ伏置テ小勢ト見セ味方ヲ偽引出シテ取籠討ン謀ト覺エタリ
其義ナラハ味方モ術ヲ設ヘシ先一陣ニ五百騎計リ打出テ敵ト手痛ク可レ戰二陣ニ六七百騎
計リ東前寺ノ森ヲ楯ニ取下リ敷テ鍵袞ヲツクリ敵ノ知ヌ様ニ靜リ返ツテ可レ相待敵若引退
クトモ勝ニ乘テ永追ヒスナ敵又緊ク突懸ラハ我兵左右ヘ颯ト引テ旗本ノ兩脇ヲ可レ守左ア
ラハ敵軍味方弱シト心得テ勇ミ進テ進懸ヘシ其時荒手ノ二陣揉合セテ一騎モ不レ殘討捕ヘ
シト法令ヲ究ツ、翌曉霞ヲ分ケテ打出タリ双方互ニ知ツ知レツ智謀深キ大將ノ三段宛ニ備
テ睨合ケル有様ハサナカラ龍虎ノ戰モ斯ヤト思遣レタリ角テ巳ノ刻比ヨリ敵十人足輕ヲ出
セハ味方モ十人出シ廿人出セハ味方モ廿人出シテ矢軍鐵砲軍有ケルカ其後屋形勢誰カシ某
ト名乗出テ打物ニ成ケレハ堀江カ宗徒ノ侍ニ堀江左馬助同下野守同市右衛門堺圖書神波七
兵衛野尻與三左衛門北村次郎左衛門等皆は一騎當千ノ者共也ケレハ面モ不レ振命モ不レ惜爰
ヲ先途ト攻戰ケル處ニ左衛門三郎景實平侍ニ出立ツ、十文字鍵ヲツ取テ被レ出ケレハ平田
禾右衛門ト云者は見テ以ノ外御事哉大將ハ左ヘセヌ物ニテ御座候ソトテ押隔々々留ケレト
モイヤ〜若キ者ノ事大レハ望所ノ幸ナルソ手涯ノ程ヲ見ヨヤトテ眞シクラニ驅出テ向敵
ヲ突臥々々押テ頭ヲ取セラレシハ其數更ニ無ケリ然處ニ寄手ニ螺ヲ立ケレハ兼テ相圖ヤナ
シ置ケン諸勢左右ヘ颯ト分レテ引ケルニ老功ノ武者ト覺敷テ左右ニ騎馬二人ツ、驅廻々々

輪乘ヲ成ツ、引纏テ退シ程ニ村鳥ノ渡ルカ如ク一人モ不殘引ニケリ堀江カ勢勝ニ乘テ追懸ルカト思シニ左ハナクシテ森ノ二陣へ早馬ヲ立ケル間森ノ中ニ大鼓ノ音ノ始リケレバ堀江カ勢モ一度ニ颯ト引タリケリ景忠ハ春日ノ庭ニテ牀机ニ腰カケ頭實檢ヲセラレケルカ討捕頭都合九十七當方ノ討死平野四郎兵衛堺彦右衛門ヲ始トシ三十二人ト記シケリ去程ニ屋形ノ兩大將モ打寄ツ、斯テハ始終勝負如何可有ト詮議區ナリケル處ニ溝江河内入道進出テ申シケルハ堀江父子元來智謀ノ者ナレハ小勢ノ人數ヲモ早晚モ持成候故只尋常ノ軍シテハ中々勝利ヲ不可得某愚案ヲ巡スニ上番ノ森ノ勢ヲ堀江カ城へ追入レテ森ヲ此方ヨリ奪ヒ取り候ハ、東南西ノ三方ヨリ多勢ヲ以テ堀江カ館へ押寄テ悉後ノ河へ追込コト案ノ内ニ覺へ候間今夜ヨリ轟根上ノ方へ勢ヲ廻シ明日未明ニ又取懸テ前後ヨリ揉合センニ森ノ勢ヨモ敗軍セスト云事有マシ其時大軍一度ニ噓ト付入ラハ落城不可有疑ト手ニ取様ニ云シカハ兩大將ヲ始トシ諸軍勢ニ至ルマテ異口同音ニ斯義尤可然トテ勇ニ進テ見ケル處ニ義景ノ母公ハ武田中務大輔ノ息女ナリ又小和田本流院眞孝内室堀江中務景忠内室モ共ニ武田ノ息女ニテ三兄弟ト聞エケリ殊ニ景忠ノ息女ハ本流院二代ノ室ナリ右左遁レヌ所ナレハ叶ハヌマテモ眞孝一乘へ馳參シテ景忠父子全無科趣ヲ申歎テ可見トテ武田中務大輔ト諸凡ニ一乘へ馳上リ涙流シテ申サレケルハ抑今度堀江父子カ野心ノ義努々露屢程モ跡形ナキ義ニ候へル増ルヲ妬俗ヒニテ諸人謀叛ト讒ヌレハ御腹立ハ無餘義御道理トコソ存シ候乍去景忠父子ニ於テ聊モ腹黒ナラサル子細ヲハ中務モ眞孝モ恐ラクハ起請ヲ以テ可申上候然レ

ハ罪ノ疑シキヲハ惟ヲ輕シ功ノ疑シキヲハ惟ヲ重ストヤラン云ル先言ヲ思召合サレテ哀御宥免候へカシ其上屋形ノ御爲ニモ乍憚リ御縁者ノ列ヲモ汚候上ハ何カ苦シフ候へキ一命ノ事ハ是非ニ兩人へ下シ給リ候へシ左タニ候ハ、御腹居ニハ堀江父子早速山ヲ越サスト義景ノ母儀諸凡ニ涙ヲ垂テ被申ケレハ義景モ理ニ折テ此上ハ右モ左モ計ヒ給ヘト有シカハ兩人謹テ拜謝シ忝ト悅頓テ兩大將へノ御判ヲ頂戴シ御使者ト三人打連テ金津ヘトコソ急レケレ斯テ金津ニ着シカハ御使ト中務ハ堀江カ館ニ入テ景固吉家ニ對面シ御判ヲ渡ン件ノ旨ヲ申聞ケ諸軍勢へ觸サセテ急歸陣ヲ催サル扱眞孝法師ハ本庄ヘト急キ堀江カ館ニ入テ身ニ代ヘテ申開キ和談ノ扱ヒ調ヘタルカ仕付ノ爲ニ早々他國シ給ヘト有リケレハ堀江大ニ腹立シテ我不義ノ罪有テ斯ル恩ニモ預ハコソ悅シクモ存ヘケレ身ニ侵ス科ナクテ無實ノ讒ニ沈ム事運命トハ云ナカラ返々モ口惜ケレ此濫觴ヲ按スルニ偏ニ朝倉孫八郎カ所爲ニ疑フ處ナシ景鏡元來不道第一ノ男ナレハ常々我勢ヲ妬ミツルニ頃日義昭公ノ御懇意ニテ式部大輔ニ任セラレ義景ノ前ハ云ニ不及國中ノ貴賤ニ被仰テ靡ヌ草木モ無儘ニ爲タリ顔ニテ景忠謀叛ト觸レケレハ諸榜輩ノ一同シヌルハ無カ人間萬事皆命數ト云ナカラ口惜キハ只屋形ノ御計ニテ留タリ譜代相傳ノ主君ト云殊ニハ外戚ノ好ミモシルキ事ナレハ罪ノ實否ヲモ自身糺明シ給テコソ君臣ノ義モ立ヘキニ何ソヤ彼ノ言甲斐ナキ鴟鴞鳥鳶ノ奴原ニ國ノ大事ヲ打任セテ二心ナキ忠臣ヲモ加様ニ亡シ給事生前死後ノ無念ナレ是カヤ古キ詞ニ叢蘭欲茂秋風敗之日月欲明浮雲掩之人君欲正佞臣妨之トハ今コソ思ヒ知ラレタリ頃ハ彌生ノ空

ラナカラ迎モ此身ハ理木ノ花咲春ニモ逢ハコソ堀江ガ最後ノ思出ニ秘術ヲ盡シ戰ハ、義景馬ヲ不被出ト云事不可有其旗本へ怨ミノ矢一筋射込ツ、陣中ニ驅入テ尸ヲ戰場ニ曝シト聲アラ、ケ被呵ケレモ眞孝存ニ申サレケルハ左様ノ存念ヘ以テノ外ノ不覺ナリ景忠父子露程モ身ニ誤ノナキ旨ヲハ中務殿愚僧諸トモニ隨分申シテ候ヘハ屋形モキ、ワケ給ヒタリ此ハ當座仕付ナレハヤハカ飯國ノホトアルヘキ無詮自心ノ怨ノ故ニソノ身ヲ敗ルノミナラス餘多ノ士卒ヲ損セン事後生ノ罪モ恐シ、只人ハ他ノ善惡ヲ振舞ツ、身ヲ立テ道ヲ全シテ主君ノ大事ヲ相守コソ君臣爲臣ノ遺法ニシテ且ツハ縁者一家ノ甲斐モ候ヘケレ早ヤ館ヲ御開キ可然愚僧サイワイニ小和田ヲヒキコシ加戸圓福寺ニウツリ居候ヘハ今日ハアレマデ御越候ヘト様ノニナタメ申サレケル程ニ堀江モ岩木ニ非サレハ此上ハカナシツラハ合戰ヲ止ヘントテ諸軍勢ヲ召集テ名殘ノ暇ヲ出シツ、其身モ他國アルヘキナレハ如何ニモ小勢可然ト身ニ代ラヌ者ヘカリ上下七十餘人ニテ直井繩手ヘ打上リ加戸寺ヘ入給テ其日ハ此ニ逗留アリ翌日廿日本流院眞孝朝餉能々取繕即同道ニテ北潟ニ懸ツテ吉崎龜島ヲ經テ加賀國ヲ打越ヘテ能登國ヘソ退レケル眞孝モ暫ク此ニ留リツ、堀江父子ノ有様ヲ能見届テソ飯ラレケル從來外戚ノユカリアリトハ云ナカラス頼母舖心底ハ武士モ耻ヘキ始末カナトラ世ノ人悉感シケルトソ聞エシ

義昭公自敦賀移一乘附密遊義景屋形事

斯テ國中騷動モ漸ク靜ケル程ニ義昭公一乘ノ谷ヘ入御可被成トテ永祿十年十月廿一日敦

賀ヲ御出有府中龍門寺ヘ入給ヒ暫御休息マシマシテ其日ノ亥ノ刻一乘安養寺ニ着御ナリ朝倉中務丞景恒路次マテ御迎ニ出ツ同廿三日義景御禮ニ被參其體誠ニ京都全盛ノ時管領出仕ノ儀式ニモ劣ルマシク聞エケル先ツ一刻計リ前ニ朝倉式部大輔景鏡鳥帽子直垂ニテ參ス是ハ御案内ノタメトソ良有テ義景裝束正シテ騎馬三人ヲ召具セラル朝倉出雲守前波藤右衛門山崎長門守何レモ鳥帽子素袍ヲ着シテ供セラル頓テ御所ニテ三献ノ御祝儀有ケルカ御相伴ハ仁木義將朝倉義景計リニテ式部大輔ハ御縁ニソ伺公セラレケル其後義昭公越加和睦ノ義ヲ被仰出ケル間義景不_レ及_レ異儀去程ニ同十二月十二日ニ加州ヨリ杉浦カ息人質トシテ一乘阿波賀ニソ來居リケル義昭公宣ヒケルハ兩國和睦ノ其上ハ何ノ隔カ有ヘキノ壘寨ノ有レハコソ種々ノ違變モ出來ヌレ急キ是ヲ燒拂ヘトテ同十五日加州諸城ノ内加賀ノ方ノ柏野杉山兩城越前方ノ黒谷檜ノ屋大聖寺三城ヲ悉ク放火仰付ラレシカハ是ヨリシテ北陸道ノ往還自在ニ成ニケリ同廿五日義昭公始テ朝倉ノ屋形ヘ御成リ有リケルカ未征夷將軍ノ職ニモ備リ給ハチハ饗應儀式結構必ス無用タルヘシト堅仰セ下サレシカハ密々ノ御成リトソ聞エケル去レテ辻堅メノ次第献々ノ御進物何レモ式正ノ御成リニ不_レ異シテ十一献マテソ奉リケル御相伴ハ仁木義政朝倉義景計リナリ義景先ツ御成リノ御禮トシテ助吉ノ太刀一腰ヲ捧給フ其後御盃始リシカハ義景進上ノ品々初献御太刀一腰 經家御馬一疋 鶴毛三献香合 金絲花御盆一枚 堆紅花鳥 五献御太刀一腰 光忠御腰物 信_二七献三物御太刀一腰 一文字御腹卷一領 此時義景御劍御腰物拜領ノ御禮トシテ御太刀一腰 眞綱奉ラル九献御太刀一腰 長光此時御立有

テ於御座敷御繪一幅舞臺御盆一枚堆紅義景ノ御子息ヨリ御太刀一腰康光御馬一疋黒毛同御盃頂戴ノ御禮トシテ御太刀一腰長光扱又御劔御馬拜領ノ御禮トシテ御太刀一腰光旨進上セラル斯時義昭公朝倉九郎左衛門入道伊冊ニ頭巾ヲ御免アリケレハ其御禮トシテ青銅一萬疋ヲ献上ス子息中務大輔其外朝倉孫三郎景健以下ノ一門各御縁ニ伺公ス中ニモ朝倉式部大輔景鏡ハ其伊冊ト座論ニ依テ此席ニ不列云々

斯テ義昭公御機嫌能終夜ノ遊興ナシ給ヒテ翌朝辰ノ刻ニ御歸トソ聞エケル

義景母儀任二位尼附義昭公見南陽寺系櫻事
永祿十一年三月八日義昭公義景ノ母儀ヲ獎テ二位ノ尼ニ任セラル是ハ武田中務大輔ノ息女ナリ將軍家即彼尼公ノ宅ヘ御成有ツテ終日終夜ノ遊宴アリ辻堅メ御門役甚嚴ク沙汰シケリ其夜折シモ雨降テ警固ノ面々モ皆紅袖ヲ濡ケル初獻ノ進物益香合三獻建蓋同臺五獻香爐御盆一枚七獻十帖一面九獻酒器十一獻練貫十面白綿十地進上也服部彦次郎并一若大夫等御能ヲ勤ケル斯テ終夜ノ宴過テ翌朝辰ノ刻ニ還御也ケル爰ニ朝倉屋形ノ良ニ美景無双ノ名境南陽寺ト號スルアリ地形從來幽奇ニシカハ繁榮尤盛ナリ加_レ之庭前ニ系櫻アリ麗華爛熳トシテ恰モ大真カ笑ヲ含ミ濃香芬芳トシテ常ニ西施カ匂ヲ留シカ時シモ三月下旬開敷ノ最中ナリケレハ義昭公高駕ヲ扞テ終日御遊覽被_レ成ル_レ諸臣ト_レニ倭歌ヲ催サレシ其列ニハ仁木義政朝倉義景大館治部大輔晴忠上野陸奥守信忠一色播磨守晴家同式部大輔藤長佐々木治部少輔高成武田治部少輔信堅伊勢宮千代大館中務少輔信實武田刑部大

輔一色四郎秋教三淵彌四郎秋家一色三郎秋成相原長盛上野中務少輔秀政飯河信堅安藏々人泰識以下系櫻ノ題ヲ賜テ各一首ヲ連ネケリ今其和歌ヲ舉テ曰ク

源義昭公

諸_レ月ニ月モ忘ルナイト櫻年ノ緒長キ契ト思ハ_レ

仁木義政

永キ日モ覺エス暮ル夜ヲ懸テ飽ヌハ花ノ系櫻哉

喝食明慶

夕月夜暫シ休ヘイト櫻花ハ斜ニムスホウレ宛

一色藤長

人傳ハ物カハ懸ルイト櫻イト咲花ニ春ノ夜ノ月

一色晴家

専女_本ノ手引系櫻ヲ見ル我サヘニ心ミダレツ

一色秋教

花盛サラマ草木モ系櫻系ヨリ懸テ匂フ春風

佐々木高成

櫻花枝モタワハニ系ハヘテ木ノ間洩來ル春ノ夜ノ月

大館信實

夕月夜ホタク庭ノイト櫻イト、色香モ殊更ニコソ

大館晴忠

歸ルサヲ何トユウヘノ月ノ影イト、色添花ノ木ノ本

武田信堅

打ハヘテ風ニカタヨルイト櫻コヤサヲ姫ノ花ノ衣カ

上野信忠

折ヲ得テ今日咲花ハ君カ爲今一入ノ色ヤソヘケン

梶原長盛

今ソ知ル柳カ枝モ梅カ香モ願ヒ悔シキ糸櫻カナ

伊勢宮千代

夕風ノ薫レル袖ノ月懸テ靡ク櫻ノ花ノ木ノ本

上野秀政

香計ハ結ヒ留メヨイト櫻乱テ花ハ散盡ストモ

朝倉義景

君カ代ノ時ニ相逢イトサクラ最モ賢キ今日ノ言ノ葉

此外供奉ノ輩雖各有倭歌事繁ケレハ先其一ニヲ記ノミ

義昭公被爲成于朝倉屋形次第附御能事

同年四月上旬二條ノ關白晴良公義昭公ヲ御見廻トシテ都ヨリ密ニ越前國ヘ御下向有ケリ去
 ニ依テ國主義景關白殿御馳走ノ爲メ且ハ義昭公御慰ノ爲ニトテ同五月十七日御成ヲソ申請
 ラレケル日限既ニ極リケレハ義景荐ニ催促ノ至極ノ設ヲ致サレケリ先御門役ノ次第西ノ門
 ニハ山内九里北ノ門ニハ諏訪神左衛門近藤中門ニハ大日備中守窪田左近將監同辻固ノ次第
 大橋ノ通ニ魚住備後守柳ノ馬場ニ青木隼人佐坂野ノ小路ニ櫻井新左衛門上波ノ橋ノ通ニ氏
 家左近將監遊樂寺ノ前ニ山崎小五郎三輪ノ小路ニ眞柄備中守笠間ノ小路ニ眞柄左馬助川合
 虎福魚住前ニ富田民部丞魚住彦四郎前ニ北村平次左衛門河原前ニ杉若藤左衛門木戸ノ本ニ
 福岡智千世詫美前ニ佐々布光林坊齋藤前ニ佐々布左京亮小林三郎次郎前ニ千秋因幡守同左
 京亮クラカリ谷ニ堀平右衛門森前ニ瓜生孫六同孫四郎等各々綺羅ヲ瑩テ勤番ス遠近ノ貴賤
 關白將軍同途ノ御成拜ントテ傍ラニ伏シ巷タニ滿テ頓首膝行今日ヲ晴トソ見エニケル出御
 ハ十七日ノ午ノ刻ニ極リケル程ニ二條殿先御出有ケルカ御裝束ハ紋紗ノ狩衣ノ御袖ニ金ノ
 紋アリケルニ空色ノ指貫ノ藤ノ丸ノ御紋縫タルヲ被召テ御立烏帽子ヲ被着ケルカ御輿ノ
 前後三十四人頓テ朝倉ノ館ヘ入セ給テ表ノ南戸ニソ御座ケル扱義昭公出御ノ少シ御先ヘ仁
 木一色以下ノ面々二十餘人列ヲ正シテ參ラル、其次ニ義昭公通ラセ給フ御裝束ハ白キ帷子
 ニ香ノ直垂ヲ着セラレ立烏帽子召レツ、金作リノ御腰物ヲ携ヘ給フ御劔ハ上野陸奥守信忠
 持參仕ラル御先ヘ騎馬衆六人御走衆六人御輿ノ左右ニ諸侍同朋衆其外御小人以下ニ至マテ
 都合百餘人前後ヲ圍ンテ守護シツ、御輿ノ翠簾ヲ下シテ通ラセ給フ既屋形ニ著御義景謁見

畢テ後公方端ノ座^本頁馬ノ間ニテ或三獻ヲ始給フ御荷用ヘ大館上野一色朝倉計也各白太刀ニ
 テ御禮有テ後御杯頂戴三獻相過テ御馬進上ノ時義景并公方衆何レモ射場ニ伺候侍御馬牽ル
 ノ節御簾上テ義昭公立ナカラニ御馬ヲ御覽セラレ其後奥ノ座敷十二間ヘ成セラレケルカ
 御縁ヘ大館罷出テ請申サレケル間即二條殿モ件ノ座敷ヘ入ラセ給ツ、御座ノ内ニハ義昭公
 二條殿并仁木朝倉四人ナリ斯テ御杯始リシカハ義景義昭公ヘ進上ノ品々初獻御太刀一腰眞
 守御馬一疋^{河原毛} 朝倉式部大輔景鏡取次御次ノ間ヨリ義景請取テ直ニ進上小袖ハ朝倉次郎
 一腰秀次御小袖十重練貫引合十帖太刀朝倉孫三郎御次迄持參義景直ニ進上小袖ハ朝倉次郎
 左衛門持參大館晴忠請取テ披露引合ハ朝倉出雲守持參ニテ是モ大館披露ナリ三獻ノ後朝倉
 一門ノ面々御馬太刀ニテ謁見ノ次第一番朝倉式部大輔二番朝倉孫三郎三番朝倉次郎左衛門
 四番朝倉孫六郎五番同修理亮同掃部助同出雲守次鳥羽右馬助同次郎右衛門同小三郎向駿河
 守三段崎權守溝江大炊助同三郎右衛門同左近衛門也四獻之時大館樂屋ヘ行テ御能可始由ヲ
 申サル斯テ御能始リシカハ義昭公御簾ヲ揚サセ給テ二條殿ト^凡ニ御見物也役者ノ次第翁ハ
 鷺田センサイハ小泉新七郎サンハサハ梅新次郎ゾ仕ケル大夫ハ服部彦次郎脇ハ三輪次郎右
 衛門神主權少輔福岡四郎右衛門ツレハ半田源左衛門小泉彌七郎笛ハ青木七郎三郎千秋又三
 郎阿波賀藤四郎小鼓ハ前波五郎右衛門大鼓ハ上田六郎兵衛太鼓服部兵部丞此外齋藤與七郎
 櫻井新三郎氏家彌三井ニ金山藤林壁田山本千秋上野森宮石藤田古澤ノ某等各藝ヲソ盡ケル
 五獻香合^{堆紅紋} 御盆一枚^{堆紅紋} 伊勢宮千代披露ス六獻七獻御太刀一腰清綱御腹卷一領三

物前ヲ一色式部少輔後ヲ一色播磨守持テ披露ス八獻御銚子一色播磨守御提子上野陸奥守ナ
 リ二條殿聞召ル、時仁木義政御肴ヲ參セラル即件ノ御盆ヲ義政頂戴其後時忠義景次第ニ頂
 戴セラル次ニ孫三郎次郎右衛門等被^{罷出} 九獻御銚子一色式部少輔御提子一色播磨守ナリ
 進物紅ノ糸十斤盆一枚桂章地紅四角紋樓閣ナリ人形ノアル盆ニスハ大館持參ノ披露セラ
 ル十獻御銚子義景御加ヘ仁木義政ナリ義昭公聞召ル、二條殿御肴ヲ進セラル其後二條殿聞
 召レテ義政ニ指セラル即御肴ヲ下サレ又義景ヘ遣サレテ御肴ヲ出サル其後義昭公別座ヘ御
 移リ二條殿モ御座ヲ立セ給ヒケル程ニ義景又御酌ニテ御供衆御部屋衆御走衆其外悉御通有
 之朝倉ノ同名式部太輔孫三郎次郎左衛門等皆御通參ラル十一獻御太刀一腰眞長御腰物^{秋廣}
 進上十二獻御銚子上野陸奥守信忠御加ヘハ大館治部太輔晴忠二條殿被^{聞召} 時義景御肴ヲ
 參セラル其後義昭公御受仁木御肴ヲ奉ラル義昭公件ノ御盆ヲ義景ヘ下サレテ手ツカラ御肴
 フ賜フ十三獻御繪一對^{皇帝筆山} 御盆一枚^{堆紅紋} 并金銀百両盆ニ居テ進上十四獻十五獻沈
 香ノホタ御盆一枚^{堆紅紋} 三ツホシノ御盆臺參ル義昭公聞召時義景御肴ヲ獻セラル其後二
 條殿被^{聞召} 此時先御馬太刀ニテ御禮申上タル朝倉ノ一族ニ御盆ヲ下サル十六獻十七獻御
 太刀一腰御物也谷丸ト號ス其時義景モ亦御劔拜領アリケレハ其御禮トシテ又御太刀一腰雲
 生獻上アリ次ニ義景ノ子息阿君殿モ亦御太刀一腰助定御馬一疋^{鶴毛} 指上ラル其後朝倉家來
 ノ輩御馬太刀ニテ御禮申上タル次第前波藤右衛門魚住備後守櫻井新左衛門青木隼人佐詫美
 越後守山崎長門守何レモ十二間ノサイノ内ニテ拜謁シ奉ル件ノ折紙ヲハ大館持參シテソ波

露致レケル次ニ御縁ニテ仁木朝倉大館上野何レモ順ノ舞ヲ初ラル此間ニ條殿ノ御盃ヲ義昭
 公聞召レ御盃ヲ置セラレテ義景ヘ重テ舞ヲ御所望アリ扱彼御盃ヲ二條殿ヘ返サセ給フ是ヨ
 リ又次第ニ舞ル、人々ハ一色式部少輔同播磨守佐々木治部少輔武田治部少輔同刑部大輔伊
 勢宮千代等各曲ヲソ盡サレケル斯テ夜明方ニ成シカハ義昭公ノ御盃ヲ義景頂戴自御肴マテ
 下サレテ御酒宴ハ既ニ止ニケリ義景翌十八日ノ朝餉能ニ取繕ハレシカハ二條殿モ義昭公モ
 御機嫌殊ニ宜テ巳ノ刻ニ各還御被レ成シカ義昭公ハ御輿ノ翠簾ヲ左右トモニ打上テ通セ給
 シカハ道俗貴賤又辻々ニ充滿シテ手ヲ合テソ拜ケル斯リシカハ義景モ又早速御所ニ伺公シ
 御禮懇ニ盡シテ歸ラレケリ同廿日義景又改テ公方家ノ人々ヲ招請セラル其列ニハ仁木細川
 一色大館上野佐々木武田伊勢三淵杉原飯川安藏此人々ヲ初トシ今度御成供奉ノ輩ヲ悉ク饗
 應シテ叮嚀ヲ盡サレツ、一若太夫ニ能ヲ仰付ラレテ終日ノ興ヲ催サレケリ同月ノ下旬ニ條
 殿朝倉ノ館ヘ御成アリ是ハ御上洛ノ御暇乞トソ聞シ六月廿二日義昭公ヘ義景ヲ被レ召ケル
 當日ハ近九ニ一鷹司ノ外公方家ヘ被召事ハ雖無之別儀ヲ以テ如是即服部彦次郎ニ御能ナ
 ト仰付ラレテ奔走尤美盡サセ給フサレ其比都ヨリ毒藥下リケル由世上ニ取沙汰アリケレ
 ハ小大トナク用心アツテ互ニ心ヲ置レケル程ニ御酒宴モ興ナクシテ早速相濟ケル由申合ケ
 リ

義景嫡子逝去付義昭公移美濃事

頃日ノ御遊覽モ皆是同治天下平ナルノ驗ナリトテ里閭ノ民マテ悉悅合ケル折節有爲轉變ノ

俗ヒトテ踟躕ニタモ堪カタキ義景ノ歎ソ不慮ニ出來ケル其故ハ六月廿五日屋形ノ一子阿君
 殿ノ御乳ノ人忽頓死シケルカ毒害ノ由ヲソ人々申合ケル其乳味ヲ香給ル故カ同日ノ暮程ヨ
 リ阿君殿頻ニ病腦シ給ケル間谷中妙功奇譽ノ名醫秘術ヲ盡テ配劑心底ヲ振ヒ靈驗智能ノ高
 僧肝膽ヲ碎テ祈念身ノ毛ヲヨタチケレ佛神ノ惠モ更ニ夏ノ日ノ光程ナク暮果テ淺茅生ノ
 末葉ノ露ト諸ルニ遂ニ空ク消給ケレハ國中ノ老若五更ニ燈盡キ中流ニ舟ヲ失フ心地ソ御内
 外様ノ大名小名愁涙ヲ浸シツ、餘所ノ哀ヲ催ケリ父義景ハ天ニ叫地ニ轉テ目モ異竹ノフシ
 沈ミ末ノ世マテモ頼少ク思連テ歎セ給フ御有様譬ソ方モナカリケリ誠ニ國々ノ尊神奇佛ニ
 祈ツ、四十ニ及テ儲給ヘル男子ナレハ優曇華ノ開キ出タル風情ニテ荒キ風ニモ當テマシト
 明暮心ヲ盡サレシニ若ル不思議ノ別ニ逢給ヘハ悶給モ理ナリ御乳親ノ福岡石見守モ哀ミノ
 餘リニ元結切涙ヲ流テ申ケルハ過シ初春ノ頃色能梅花ノ進ケレハ長ヤカニ取セ給ヒ其花ヲ
 御乳ノ人ノ鬢ノ髮ニ指セ給ケルヲ某梅花ヲ折テ頭ニ挿ト申ス詩ノ意ヲハ誰カ致參セテ候ソ
 ト戯レ申ケレハ何心モナク打咲セ給ケル御容顏ヲ夢ニモ爭テカ見奉ヘキ哀カナヤ嬋娟タル
 花月ノ御姿優艶ナリシ金玉ノ御聲ヲ一現ニモ扱如何ハ留申ヘキトアコカレケルソ哀ナル又
 御守ノ堀平右衛門モ髮切寺ニ馳入テ搔口說申ケルハ年來膝ノ上ノ御眠ノ御容止朝夕抓撫參
 セツル翠ノ髮ノ御風情蓬鷄竹馬ノ御戲ニ至マテイツノ世ニカハ忘ルヘキ冥途如何ナル極ソ
 ヤ紫鷲ノ翅モ至ル事アタハスシテ愁歎ノ劍ハ空ク腸ヲ斷チ戀慕ノ涙ハ徒ニ面ヲ洗フ計ナリ
 淺猿キ浮世カナトテ忽ニ倒臥テ歎焦レシ有様ヲ見人ハ申ニ及ス聞人々ニ至マテ實理ノ至極

トテ餘所ノ缺ヲシホリケリ抑此毒害ノ事如何ナル人ノ所行ソト尋ルニ阿君殿ノ御乳ノ人ノ乳既ニカレテ垂サリケル程ニ時々ヲサシカ乳ヲ進ケルニ此乳ヲ吞給テ御機嫌モ能最健ニ成セ給シカハ此乳コソ若君ニ能フサイタルナト人々申ケル間彼女房思ケルハ所詮御乳ノ人々ニ殺ナハ我其役ニ備ラン事疑ナシ左アラハ此身ノ榮花ハ云ニ及ス子孫眷屬ノ行末マテモ然ルヘシト思フ心ヲ種トシテヲサシカ所爲トソ聞ヘケル誠ニ無_レ慕女ノシハサカナト貴賤ナヘテ悪_ク者ハナカリケリ去程ニ義景彼夫婦其外若君ニ奉公ノ女房四五人ヲ搦捕神前ニ於テ湯起請ヲ取スヘシトテ新ニ釜ヲ塗ツ、炭薪ヲ以テ燒立サセ給ケレハ黒烟天ニ鬩テ湧上ル湯ノ音ハサナカラ怒濤ノ岸打響ニ不_レ異即彼女房共ヲ引出シ警固ノ武士共立並テ棒ヲ振揚早々取レト無下ニ責ケル有様ハ譬ハ熾熱地獄ノ罪人ヲ獄卒共カ寄集リ鐵棒ヲ以テ呵責_スランモ是ニハ過シト恐クテ身ノ毛モ墜計ナリ案ノ如ク彼ヲサシカ禍一定ニテヤ有ケン忽ニ其手燒テ絶入ケレハ扱コソ科ハ顯レタル大逆罪ノ者ナレハ末代ノ見懲ニ猶々キヤツラ責ヨトテ日々夜々ニ水火ノ責ヲ成レツ、彼夫婦ハ云ニ及ス其末々ノ部類マテモ尋求テ亡サレシハ理トハ云ナカラ無慙ナリケル事其ナリ去程ニ義昭公ハ情々案給フ様我暫越前ニ滯座スト云ヘトモ年不慮ノ騷動ノミニテ國家モイマタ平治セス況ヤ又思ノ外ナル義景ノ愁傷サハモ出來ヌレハ彼ト云此ト云義景力ニテノ御上洛ハ叶マシトヤ思召レケン内々尾州ノ織田上總介信長ト仰合レツ、一先美濃國へ御遷座アルヘキニソ極ケル抑此信長ト申ハ先祖ハ武衛ノ家臣ニテ越前ノ人ナリシカ中比尾張ニ移住シテ四人ノ奉行ニ備シ其隨一ノ子孫ナリ信長ノ代ニ

至テ彌猛威ヲ振ツ、座ナカラ尾州ヲ討從ヘ剩濃州マテヲ切取兩國ヲ并吞シテ勢益募シカハ義昭公御頼有タルモ理トコソ聞エケレ義景モ再三留マテマツラルト云_レ是非御越可_レ被_レ成トノ旨ニテ今茲永祿十一年戊辰七月下旬既ニ一乘ノ谷ヲ出御アリシカハ義景モ力及給ス此上ハサラハトテ路次マテ御供申サルヘキニ相定ラレケレ此間ノ歎モ未盡サルニ所勞ノ心地モ重カリケレハ其サヘ叶カタシトテ同名中務大輔景恒家ノ子前波藤右衛門景定ニ仰テ江州境マテ送奉セラル兩人命ヲ蒙テ景恒カ勢二千餘騎今日ヲ晴ト出立ツ、前後ヲ圍テ御供ス然處ニ信長ノ使不破河内守并ニ江州小谷ノ城守淺井備前守二千餘騎ニテ餘吳ノ庄マテ御迎ニ馳參ケル間景恒景定モ是ヨリ御暇賜テ歸リケリ斯テ七月廿五日既濃州ニ着給シカハ信長ノ計トシテ立正寺へ入參セテ晝夜警固シ奉リ同廿七日信長岐阜ヨリ出仕ニテ義昭公へ謁見シ給ケルカ國綱ノ御太刀一振葦毛御馬一疋御鎧二両沈香一折縮百端鳥目千貫進上セラレ其外御供ノ人々ニモ無_レ殘所_レ執行レテ諸事ノ談合占給ヒツ、頓テ歸城シ給ヒケリ

朝倉始末記卷第四終

朝倉始末記卷第五

義景北方之事

去程ニ左衛門督義景ハ性安寺宗淳居士之一子母公ハ武田中務大輔之息女也親父宗淳願ニ逝去之後義景相續テ越前ヲ治給フ志學之比ヨリ文武ニ心ヲ入レラレ其比天下ニ名ヲ得タル里瑞軒ト云シ文者ヲ扶助シテ螢雪之學ヲ專ニ被成ケル故ニ文道碩才也弓法ハ小笠原ノ一流ヲ被窮歌道ハ二條淨光院其外京都公家達相傳アリシ故ニ諸道ニ不暗因茲禪律顯密ノ寺院ニ至ルマテ互ニ時ヲ得萬民ノ悦ヒ德ニ歸シ警ノ形ニ至マテ御屋形トコソ敬ヒケレ北ノ御方ハ細川右京亮息女ニテヲハセシカ女子一人産給ヒテ早世也其後近衛殿之御息女ヲ迎ヘ給フ容色無雙ニシテ天桃之春ノ園ニ綻ル粧ヒ深ソ垂柳之風ヲ含メル御形寔ニ西施モ面ヲ耻昭君モ鏡ヲ掩ルルナレハ義景定テ非類思召年來相馴給共御懷妊之體モ見エサセ不給故家督可接子息无シテハ如何可有ト内々思ヒ給フ處ニ鞍谷殿ノ類葉ニ小宰相之局ト申ケル女房母公之方ニ御座セシヲ一度ヒ御覽シ初テヨリ他異ナル御志有テ密ニ被召出福岡石見守處ニ置給フニ姫君二人若君一人出來給フ然ハ近衛殿之姫君ハ義景之省モ三秋之森ノ梢ノ葉ノ如ク日々ニ薄ク成シカハ一生空ク鴛鴦ノカタラヒ無シテ宮中ノ窓ニ向ヒ春之日ノ難暮ヲ歎キ秋ノ夜ノ長キ恨ニ沈ミ給ヒ金屋ニ無人皎々タル殘ノ灯之壁ニ背タル影薰籠ニ香消テ蕭蕭タル暗雨之窓ヲ打聲物毎ニ皆御涙ヲ添ル媒トソ成リケル然ニ召仕之下女共互ニ妬ミ相ヲ北之御方局ヲ呪咀被成ケルト專ラ風聞シケレハ義景是ヲ聞召レテ無情北ノ御方ヲ京都ヘ

送り返サセ給ヒ其御座有ケル所之地マテモ堀捨テ新敷土ヲ運入サセ新殿ヲ被立御局ヲ移シ居ヘテ御上之間トソ申ケル斯テ御寵愛不斜處ニ翌年三月下旬ニ花吹風ノ心地シテ終ニ無墓成給フ然則義景愁傷無限見エサセ給ヒケル處ニ諸侍御心ヲ慰メ奉ン爲ニ濱之犬追物或ハ曲水宴ナト催シ其後義昭公就ニ御下向ニ遊覽共モ多カリシ處ニ又不慮ニ一子阿君殿死去シ給ヒケレハ義景仰天臥地ニ目モ吳竹之打シホレ末ノ世トテモ憑少ク思食連子給御袖之露乾ク間モナク老生不定ノ此世生キ甲斐ナキ我身分國之政道モ今ハ由ナシトテ一族老臣ニモ對面ナク籠居シ給ヒ長老達ヲ請待シ入參ニ關ラコヘクワラナトユルサレ朝暮主禪シテソ御座シケル或時義景墨繪ニ牛ヲ書タル扇子ヲ以テ心月寺財應ト申和尚ニ向テ扇子ハ進スル牛ヲハ此方ヘトアリケレハ和尚其扇子ヲ把テ地ヲ叩テ叱ト言フ 義景曰未來早々歸シ給ヘ和尚云任足走過シタリ追尋シ給ヘ義景曰看時不見暗昏々黒漆桶裏ニ盛黒汁和尚曰由背覺不見迷則方寸千里ノ外覺ル則十方一心ノ中ト云ヘリ其時義景和尚ヲ拜シ給ヘリ又或時財應扇子繪ニ帆懸船ノ有ヲ出シ向義景此船ハ何地ヘ着キ申ン哉ト有リケレハ義景其扇子ヲ返テ此ウラヘ着候ト答給ヒケレハ和尚答話如順水ト義景ヲ拜シ被申ケリ其外問答ナト度々有之長老衆モ不及言句ト也斯ケレハ老臣等申ケルハ近年打續御愛妻ニ後サセ給ヒ殊更一子之御別レ御愁傷モ理也朝倉當國ニ相續スル事廣景ヨリ以來タ十一代也然ニ今後代ニ養子ヲ立ン事モ心憂カルヘシ御家督接セ給フ御息ナクテハ難叶其上憂思ヲ忘ルハ人ニ過タル事ハナシトテ容色ノ人ヲ尋ケル裡ニ彼ハ誰殿ノ妹是ハ某シノ娘也トテ來リ聚ル事

只三千ノ宮女之如シ其中ニ齋藤兵部少輔ノ息女小少將殿ト申被寄御意即諏訪之谷ニ新屋形ヲ立置給リ此女性紅顏翠黛人之眼ヲ迷スノミナラス好言令色心ヲ悅シメシカハ義景御寵愛甚シテ別レシ人之面影ハ夢ニモ不見成ニケリ角テ年月ヲ經シカハ若君ヲ誕生アリ是ヲ愛王丸殿ト申ケル然ニ女房達數多被召仕ケル中ニモ小太夫殿式部卿殿宮内卿殿ナト、テ並居テ御前ノ評定國中ノ公事沙汰マテモ女房衆ノ取扱ト成テ與方ノ御口入トタニ云ヒケレハ無忠ニ賞ヲ與ヘ奉行モ理有ヲ非トシ飽マテ榮耀ヲ極メ金殿樓閣薨ヲ並テ造立シ玉床ニ丹青ヲ盡シテ畫キ垣ニハ金華ヲ懸扉ニ水精ヲ磨キ席ニハ錦上ニ華ヲ敷キ綾羅錦繡ヲ身ニ纏ヒ蘭麝ノ匂ヒ空ニ滿テ餘薰山谷ニ餘レリ寔ニ飲食ニ至ルマテ善盡シ美盡シ晝夜宴ヲナシ横笛太鼓歌舞ヲ業トシ永夜ヲ短トス秦ノ始皇唐ノ玄宗ノ驕モ是ニハ過シトソ見エタリケル去ハ鴉鷄晨鳴則家盡ル相也ト古賢ノ云モ誠ニ傾城傾國之乱今ニ有ヌト覺エテ淺増シカリシ事也

義景信長不和之事

爰ニ永祿十一年九月中旬ニ尾州之主織田彈正忠信長公義昭公御座ノ御供被申上洛アリ不日ニ御敵ヲ平ケ靜テ於五畿内ニ威ヲ振ヒ諸國ノ武士ヲ京都ニ被召上然者則朝倉左衛門督義景モ早々可致上洛ノ旨被成御教書ヲ因茲一族老臣ヲ集テ此旨可有如何ト各異見ヲ被問ケルニ朝倉土佐守景行思案シテ被申ケル是ハ公方ノ上意ニテハ有ヘカラス御當家累代大國ヲ受領被成剩ヘ加州半國於江州者北ハ姊川ヲ境ヒ西ハ衣川マテ治給其上若

州武田大膳大夫義統御旗本ナレハ旁御威勢強クマシマセハ信長後難ヲ存知公方ヲス、メ斯ル御教書ヲナシ若シ上洛アラハ國ヲ奪ン謀可レ仕ト覺候間上洛被成間敷キトノ御返狀可レ然候ト詞ヲ放ツテ被申ケレハ何モ此儀尤ト同シケルニ依テ義景終ニ上京無カリケリ

鐘ヶ崎姊川志賀合戰之事

元龜元年四月廿五日寺田采女正カ居城敦賀郡手筒山之城ヲ俄ニ信長攻落シ翌日朝倉中務大輔景恒カ居城鐘ヶ崎ヘ押シ寄セ揉ニ揉テソ責タリケル此景恒ハ朝倉金吾教景カ孫九郎左衛門カ子ナレハ少モ不レ騷人數ノ手配ノ爰ヲ先途ト防キ戰フ處ニ義景此事ヲ聞給ヒテ敵ヲ住國ヘ入レ一日モ可ニ措置ニ非ス急キ發向シテ悉ク討捕ルヘシトテ軍勢ノ手分ヲソ仕給ヒケル朝倉式部大輔景鏡千餘騎ニテ大野ノ城ニ被指置穴馬篠保ヲ指塞ク溝江大炊允長逸七百餘騎ニテ金津之城ニ在テ下口ヲ警固ス黒坂備中守五百餘騎長崎ニ居住シテ竹田風谷ヲ守セケル朝倉兵庫助景綱五百餘騎織田ノ城ヨリ河野口ヘ向ン櫻井新左衛門七百餘騎鰐淵將監三百餘騎各杉津口ヘ向朝倉出雲守景盛千餘騎三段崎權頭五百餘騎虎杖椿井ヲ經テ淺井備前守長政カ勢ト同シ柳ヶ瀬ヨリ疋壇口ヘ可レ向ト定印牧孫六左衛門六百餘騎^{是迄都合}ニテ木ノ目崎ノ上ナル鉢伏セノ要害ヲソカタメケル義景二十七日ノ早朝一乘之谷ヲ打立給フ一ノ先山崎長門守吉家二千餘騎詵美越後守二千餘騎河合安藝守二千餘騎朝倉土佐守景行二千餘騎魚住備後守景固千餘騎二ノ先朝倉孫三郎景健千五百餘騎梅ノ三郎右衛門吉仍千餘騎朝倉掃部助景氏八百餘騎鳥羽右馬助八百餘騎勝蓮華近江守七百餘騎義景旗本三千八百餘騎脇備鳥

井兵庫景近五百餘騎山崎肥前守二百餘騎高橋新介五百餘騎加藤新三郎百五十騎後備小林三郎次郎古隆五百餘騎窪田左近將監七百餘騎青木隼人正五百餘騎一色治部大輔五百餘騎富田孫六長秀千餘騎是迄都合二萬二千五百人一乘谷爲留守居ト武田中務大輔齋藤兵部少輔都合二萬餘騎被殘置ケル斯ヲ廿八日巳ノ刻敦賀へ着陣也信長此由ヲ聞給ヒテ朝倉勢ハ地戰ナレハ對陣中々可難叶其上淺井ハ義景旗下ナレハ定テ後詰スヘシ左アラハ可爲難儀トテ早々引取給フ處ヲ越前勢是ヲ見テアマスナモラスナトテ時ノ聲ヲ作り懸テ追懸ルト云へ共信長ナヒキ立タル事ナレハ流石ノ勇士共ナレモ一返モ不返吾レ先ニトソ逃上リケルヲ追詰々々首數千三百五十三討捕勝鬨ヲ取り行ヒ御仕置堅ク被仰付即飯陣シ給ヒケリ同六月廿八日江州姊川合戰ニモ味方河ヲ被越遂合戰信長公敗北也同勢之家康五千餘之備依堅ニ信長公漸漸存命ニシテ岐阜へ逃入給ヒケリ其後西近江ヨリ寄來ントシ給フニ依テ同九月十九日義景ノ爲先手ト朝倉孫三郎景健山崎長門守吉家志賀郡於坂本及合戰信長公ノ舍弟織田九郎信治大陽寺右馬助景春ト云者討捕リ并森三左衛門尉可成石田十藏討取其外尾藤源内同又八以下七百五十餘人討捕リ同十一月十六日義景發向比叡山上坂本干野仰木雄琴苗鹿之五ヶ處ニ居陣有リ信長公志賀宇佐山ニ出張シ魚鱗鶴翼之連陣ニテ決雌雄處堅田ノ城ノ大將織田甲斐守坂井右近安藤右衛門尉武藤美作守桑原平兵衛等ヲ始テ一千五百八十三人討捕義景於坂本頸實檢在之既此時信長公ノ一命危カリケル處ニ掛マクモ忝モ蒙勅命同將軍之以御下知信長公數逆起請文ヲ書給ヒ十二月十三日ニ令和睦自他國マシマシケリ

朝倉家士大將死去之事

去程ニ榮ル者ハ必衰へ生ル者ハ必滅ル俗ナレハ朝倉可レ亡時節也ト見エテ近年同名被官共或ハ病死シ或ハ討死シテ家運危事不可言先ツ右兵衛尉景高カ嫡子次男一年之内ニ二人ナカラ死去セラレケルカ其後景高モ死去ニテ末子孫三郎一人殘命ス九郎左衛門景紀カ嫡男四郎左衛門景境ハ加州出勢之時大將景高ト相論シテ自害シ舍弟中務大輔景恒モ死去ナリシカ父景紀モ程ナク卒去セラレケリ堀江左衛門三郎景忠ハ義景ノ勘氣ヲ蒙テ能登ノ國ニ立忍ヒ伊勢左衛門太郎景茂ハ過酒シテ不慮ニ醉死シケレハ國モ漸アサマニテ人々只薄氷ヲ踏心地ノミセリ其外玄蕃助景連同次郎左衛門景高前波藤右衛門景定小林備中守窪田九郎右衛門黒坂備中守以下千騎二千騎引廻スホトノ者共悉ク死亡シテ纔ニ若輩ノ佞人ハラニノミ世ヲ任シ給ヒシカハ有功之者ニ不恩賞有罪者ヲモ不誅伐奢リヲ極メ欲ヲ縱ニシ己ヲ強シ君ヲ弱メテ終ニ國ノ禍ヲ招ケリ吁悲哉日月明ナレモ浮雲隱レ之池水清ケレトモ淤泥濁レ之誠其則不遠ト云ヘヤノミ

織田信長公江州北郡虎御前山ニ拵レ城之事

去程ニ彈正忠信長公江州北郡淺井長政カ城ノ前ナル虎御前山ヲ城郭ニ拵ラル、由淺井方ヨリ急々注進シケル間先一勢可レ被遣トテ元龜三年七月中旬朝倉式部大輔景鏡五千餘騎打立淺井カ城小谷ニ着陣也同七月廿四日ニ義景一乘ヨリ進發有リ其人々ニハ同名孫三郎景健同三郎景胤同權守道景其外魚住前波山崎鳥井櫻井齋藤都合三萬二千餘騎トソ聞エケル先敦賀

郡ニ着陣同廿八日ニ江州柳ヶ瀬村ニ陣取ラル此日大風吹諸之大本悉ク折レタヲル間陣小屋
モ破損シケリ同八月三日ニ淺井城ノ大手ナル大嶽ニ義景居陣アリ諸軍勢近邊ノ山峰ヲ要害
ニ構テ楯籠ル然處ニ信長公濃州尾州江州南方諸卒都合八萬餘騎先陣已ニ虎御前山ニ着ハ後
陣ハ未濃州垂井赤坂ニ支ヘタリ信長公ハ一日引キ後レテソ向ヒ給ヒケル旗ノ影天ニ漂散シ
刃ノ光雲ニ照耀ス其行粧ヲ見目ヲ驚ス次第也斯テ諸大名鎧ノ袖冑ノ星ヲ耀テ馳ニ向虎御前
山ニ晝夜矢軍鐵炮軍在レ之誠ニ龍虎之戰トソ見エニケル斯リケル所ニ同九月十日信長公麓ニ
下リ給ヒケレハ義景モ麓ニ控テ互ニ足輕ヲ出シ雙方鯨波響ニ天地ニ須彌之八萬由旬モ此時ク
スレヌヘクソ聞エケル今日定テ尋常ナル合戰可レ有ト思フ處ニ朝倉方ヨリ唯一騎馳出テ長崎
大乘坊ト名乗テ如何ニモシテ大將信長公ヲ射落テ恩賞蒙ント思テ小墓ヲ楯ニ取リ忍ヒケル
カ敵方ヨリ武者折合テ散々ニ射ケル程ニ長崎カ思慮相違ノケリ日モ暮方ニ成リケレハ其日
モ合戰ハ無リケリ然處ニ翌日前波九郎兵衛吉繼父子二騎打行テ白晝ニ敵城ニ相向ヒ諸鎧ヲ
打テ行程ニ諸人此者ハ義景勘氣之身ナレハ一忠節シテ蒙ニ赦免ト存シ向フカト思處ニ左ハ
ナクシテ虎御前ノ城ヘソ驅入ケル然者則信長公不レ斜怡悅アリ吉繼ニ御對面有テ恩賞ノ事
ハ於越前可レ被ニ宛行ト也抑此吉繼義景ノ勘氣ヲ蒙タリケル由來ヲ悉ク尋ルニ去年三月下
旬ニ義景爲ニ鵜鷹逍遙ニ篠尾邊ニ出給ヒ傍ノ高處ニ下居テ一献ノ酒宴アリシヲ吉繼遲參トヤ
思ヒケン急キ馬上ニ通リケル晚日義景歸城シ給ヒ今日ノ九郎兵衛カ乘打爲體言語道斷曲事
也トテ勘道被レ成ケリ種々以ニ好縁ニ數度雖ニ詔言會テ承引シ給ハス此陣ニ罷立テ頻リニ訴訟

シケレモ終ニ無赦免故ニ敵方ヘ驅行ケル實ニヤ帝範ニ不レ以一惡忘其善勿以少瑕掩其
功諫則惡不レ恐ト云事今コソ思ヒ知タレ斯テ吉繼敵方ヘ屬スル事案内者ナル故ニ當分殊外
弱リ也ト云處ニ又四五日有テ富田孫六長秀騎馬三人打行テ敵城ヘ走入ル其三人者富田并毛
屋猪助増井甚内是等也日比長秀義理正シ代々武功佳名ヲ得他ニモ異見ヲ加ヘシ者ナレモ今
更如レ此文選ノ語ニモ勁松ハ彰歲寒貞臣ハ見國之危トカヤ主君之一大事ヲ可レ守折節ハ心
替スル事天運程モ如何ト怪合ケリ去ハ朝倉方ハ每度合戰ハ利運也ト見エケレモ敵方ノ人ハ
不來當方ノ者拔行ク事是非直事也軍ニ无財則城ヲ不持軍ニ無賞士不來香餌ノ下ニハ必
有懸魚重賞ノ下ニハ必有勇夫ト云ヘリ是併重賞ノ無キ驗也ト申處ニ池田隼人助信長公ヘ
内通仕ケルハ今夜此方城中ニ狼烟ヲ揚ヘシ其火ヲ相圖ニ大嶽ノ城ヘ向ヒ給フヘシトテ譜代
ノ悴者ヲ遣シケレハ彼者敵方ヘハ不レ行義景ヘ此旨ヲ悉ク訴ヘケレハ即時ニ人數ヲ以テ池
田カ陣所ヘ押寄セ搦捕テ翌日頸ヲ刎テ軍門ニソ懸ケラレケル子息六歳ニ成ケルヲ越前ヨリ
喚ヒ上謀反ノ者ハ根ヲタチ葉ヲカラスヘシト宣ヒテ同ク頸ヲ切テ父ト共ニソ被レ懸ケル

虎御前山ノ城ニ忍入小屋放火之事

斯ル所同十月中旬ニ朝倉出雲守カ被官人竹内三助并上村内藏助ト云者アリ彼兩人申ケルハ
數月越前勢集リ居テシカノト城ヲモ不レ被攻只徒ニ月日ヲ送ル事更ニ無詮去來我等敵ノ
城ヲ燒落ン若シ燒落シタランニハ古今無雙ニシテ忠ハ萬人之上タルヘシ今夜風雨ノマキレ
ニ城中ヘ忍入燒落テ天下ノ人ニ目ヲ覺サセント云テ只二人敵方ノ小屋ノ外ニ宵ヨリ着テ堀

二三間堀入暫ク休テ内ノ體ヲ聞ニ夜廻ノ過リケル其跡ニ着テ先ツ城中ノ案内ヲ見本丸ノ方
 へ行處ニ有ル役所ノ者はヲ聞付テ夜中ニ足音シテ潜ニ通ルハ怪キ者哉誰ソト問ヒケレハ三
 助取アヘス是ハ木ノ下藤吉カ中間ニテ候カ今夜餘ニ風雨激クシテ物騒敷候間夜討ヤ忍ヒ入
 候ハント存テ夜廻リ仕候ト答ケレハ實ニモト言フ音シテ又問事モ無リケリ兩人ノ者サノミ
 永居ハ無益也ト思テ風面ナル小屋ニ火ヲ懸レハ城中ノ者共スハヤ夜討入タリトテ追手搦手
 悉ク騒立テ敵味方鬨ヲ合テ喚キ叫フ響天地振動ス彼兩人之者以前ノ堀ノ破間ヨリ拔出本ノ
 陣處ニ歸リケル其時越前勢淺井勢モ攻入ナラハ虎御前山之城モ可レ落物ヲト皆人々申合ケ
 ル斯リケレハ竹内上村カ忠節拔羣也ケル程ニ義景過分ニ恩賞アルヘキト思慮ニサマテノ褒
 美無リケリ先言ニモ有レ功無賞則善ヲ不勤ト有レハ以後忠功ノ者不可有ト諸人怪ミ不レ思
 ハ無リケリサレハ敵方ノ陣屋七百餘焼亡スル程ニ頓テ小屋ヲ被レ懸カト思フ處ニ虎御前山
 ヨリ三河村宮部ノ田中島ヲモ不レ言堀ヲホリ土居ヲ築其上ニ高堀ヲ付ケル間是ハ如何成事
 ソト人々不審スル處ニ同十六日ノ白晝ニ濃州へ歸陣シ給ヒケル越前勢内々敵退ハ跡ヲ可レ
 慕ナト云シカ高堀ノ陰ヨリ被レ退ケルヲモ不知シテ敵ノ人音ハ何事ソヤト云テ越前勢ハ居
 タリケル斯テ虎御前山ノ城守ニ木下藤吉郎磯野丹波以下五千餘騎ニテ堅メサセ信長公ハ歸
 陣被レ成ケレハ其後ハ雙方行モナクシテ徒ニ日ヲ送リケリ義景モ大嶽ノ城丁野ノ城ニ番勢
 置キ同十一月三日ニ歸陣被レ成ケリ

義景敦賀ニ進發之事

天正元年三月上旬ニ信長公京都へ上洛之由歸エケレハ定テ歸洛ノ砌若州ヨリ敦賀郡へ相向
 ヒ給事モヤ侍ラントテ江州田子左近兵衛尉方ヨリ注進スル間三月十一日義景敦賀へ出陣ナ
 リ同四月中旬ニ山崎長門守吉家魚住備後守景固以下三千餘騎指向日若州へ打莅ンテ粟屋カ
 城之近邊麥ヲ薙セ苗代ヲカヘサセ近里ヲ放火シテ佐柿ノ城之北ニ有中山ト云處ニ城ヲ構テ
 越前勢番手ニ抱サセ義景同五月十日ニ一乘ノ谷へ歸陣有リケリ如レ斯年々四五度出陣スル
 程ニ諸卒疲勞シ倦テ世ヲ秋風ノ心地シテ思之露モ重ク民ノ草葉モ枯々ニ野モセニスタク虫
 ノ音モ歎ノ色ヲ顯ス處ニ同七月上旬江州西地出子左近兵衛氏久所ヨリ若州三方之寶仙坊俄
 ニ心替シテ信長公へ内通仕リケル間早々先ツ一勢可被レ成御合力ニ戰事ハ拙者涯分仕リ打
 散シ候へシト飛脚到來之間先山崎長門守吉家河合安藝守其外中郡之諸侍都合其勢三千餘騎
 打立テ江州西北ヨリ責寄スレハ三方之城中ヨリモ即足輕ヲ打出テ雙方矢軍在レ之日モ暮方
 ニ成ケル間吉家ハ敵之向ノ城山ニ對陣取テソ居タリケル斯リケル所ニ淺井長政方ヨリ信長
 横山表へ打出給フ由飛脚追々到來之間先ツ式部大輔景鏡可有出陣旨義景宣ヒケル所ニ所
 勞以ノ外ナル由ニテ不罷立魚住備後守ハ此間江州丁野之城之番手ニ有ケル條人馬ヲ可レ疲
 トテ是モ不罷立間義景自身國中ノ諸勢ヲ引率ノ同七月十七日ニ被レ成ニ進發ケルカ母義高
 徳院殿ニ暇乞之タメニ參セ給ヒ即三獻相過テ立歸セ給フ其御形何トヤラン無ニ本意ニ様ニ見
 エサセ給ケル程ニ人々申ケルハ是ハ假染ナカラモ他國へ御出張之事ナレハ悲涙之御氣色モ
 寔理也サレハ古語ニモ父母ニ朝夕雖レ非ト去則可致愁歎思敢テ莫欲忿怒顔ト云へリ是併

孝行之至也トソ申合ケル斯テ高德院モ御名残り惜ケナル體ニテ立歸セ給フ行粧ヲ遙ニ御覽
 ノ扱モト計之御聲カスカニ言葉モナク打臥シ給ヒヌ女房達並居テ座ニ泣聲ノミ聞エケル
 程ニ御供之侍立歸テ是ハ何事ニテ候ソ御門出テ惡敷候トソ申ケル尼公宣ケルハ前々ノ出陣
 ニ替テ何トモ名殘惜覺候トツツヤハ供御ヲモ召レサリケリ上臈ノ御方被申ケルハ去ハ
 悲ノ至テ悲敷ハ老テ子ニヲクレ恨テモ猶恨敷ハ盛ニソ夫ニヲクル程ノ愁ナシトハ申セ共
 其レハ死ソ別ルノ御事はハ目出度御出陣也左様ニ餘リ御歎候ヘハ屋形之御門出忌々敷候
 早々供御ヲ聞召セトソ申サレケル去程ニ義景出御十七日府中ニ一宿有翌日敦賀ニ着陣有テ
 安養寺ニ暫ク滯留被成ケリ然處ニ八月上旬ニ不慮ノ一大事コソ出來タレ淺井方之要害山
 本山之城主阿間淡路守并燒尾之城主淺井見馬守月ヶ瀨之城主等信長公ヨリ黃金過分ニ取テ
 忽ニ鬪リ屬敵因茲淺井方ヨリ注進敷波ヲ打テ一刻モ早速ニ此表ヘ可有御進發由ヲ告
 タリケル然則同六日ニ義景江州柳ヶ瀨村ヘ出張可有之所ニ各々諫申ケルハ雖在愚慮憚
 今度御出馬之事可有御遠慮事歟既信長大軍ヲ催テ寄來ラレ候當方ハ一向勢微ニシテ殊ニ
 柳ヶ瀨村ハ後ニ大山ヲアフテ前ハ何モ淺間ナル所タリシニ柵ノ一重モ不結シテ野陣ヲ取
 テ候ハ、若敵責メ懸リ當方一合戰仕損スル程ナラハ悉ク討レ候シ淺井城ノ事ハ數年拵タル
 要害ニテ有間信長勢モ輒ク不可攻落若攻落ノ敵馳來リナハ於當津一合戰被成ヘウモヤ
 候ト再三被申ケル處ニ鳥居高橋申ケルハ合戰ノ勝負必シモ大勢ニヨラサル事也先異國ニ
 ハ漢之高祖榮陽之圍ヲ出シ時ハ纔廿八騎ニ成テ候ヒシニ遂ニ項羽カ百萬騎ニ打勝テ天下ヲ

保テ候キ我朝ニハ右大將賴朝卿土肥ノ杉山ノ合戰ニ討負テ伏木之中ニ陰レ給ヒシ時ハ纔ニ
 七騎ニ成テ候ヒシカニ遂ニ平家ノ一類ヲ滅ノ累代久ク政將ノ位ニ付給ヒ候ハスヤ只速ニ御
 出馬候ヘト申ケル間左ノミ不_レ及_レ異儀同八月六日ニ江州北軍ヘ進發シ給ヒケル去ハニヤ漢
 書ニ國ヲ任_レ賢必治リ任_レ不賢必亂ト云ヘリ是レ誠ニ朝倉家ノ運盡ンスル先表ナリ然ニ何ク
 死_レ不_レ知女房白糸ヲ戴キ箒番衆ノ處ヘ來テ申ス様ハ明日之義景江州エ御越候ナラハ必定難
 ニ相ヒ給ヘシ御出馬之事御無用也ト氣比大明神ヨリノ御使ニ參タリ我名ハ小天ト申者也此
 由早々屋形ヘ申サセ給ヘト云ヘハ番衆聞テ打咲テ如何ナル戲者ナレハ無_レ筋事ヲ云ソトテ
 取上ル人モ更ニ無シ良暫ク在テ彼女房搔消様ニ失セタリケリ葛藁樵ノ詞マテモ不可_レ默止
 ト云シハ是也頓テ披露スルナラハ思慮可_レ有物ヲト後悔スレ_レ无_レ益然則西地ヘ越ケル諸勢
 山崎長門守以下モ北郡ヘ馳向ヒケル山崎ハ寶仙坊ヲ宥テ人質ヲ取テ來リ志津カ嶽之城エ居
 陣シ候ヒケリ

義景田神山エ陣替之事刀根合戰之事

同八月十日信長公大嶽ノ城丁野ノ城可_レ被攻ノ由其聞エ有リ因_レ茲義景柳ヶ瀨村ヨリ田神山
 へ陣替有リ其時大嶽ノ番手勢ニハ小林彦六左衛門齋藤刑部少輔豐原寺西方院以下五六百計
 也丁野ノ城番手ニハ中島宗左衛門平泉寺寶光院以下是等六七百ニハ不_レ過ケリ同十三日之
 夜風雨頻リニテ物騒敷ニ雷電之光夥ノ雷既ニ福岡小屋ニ落ル其夜信長公ノ軍勢打立テ大嶽
 之城ヘ責上リ堀ニ重切リ破リ今一重ニナレハ小林齋藤モ腹ヲキラントスル處ニ前波九郎兵

衛關ヲ扣テ申ケルハ小林殿齋藤殿御入候カ前波吉繼カ參テ候是程ニ攻破ラレ候上ハ只降參有テ退給ヘ御身上ノ事拙者路次之警固仕ヘキ間苦敷カルマシク候ト誠無レ僞申ケル程ニ小林齋藤モトヤセン角ヤアラマシト思ケレモイヤノ此段ニテ夜ノ中ニ自害シテ無レ詮モ只死ヲ全ノ尋常ニ討死スヘシト云合テ頓テ城ヲソ出ニケル同夜丁野ノ城ヲモ敵四五千計ニテ取卷緊ク攻懸ケル城中ヨリモ弓鐵炮頻ニ射出ノ不惜身命ヲ戰フ處ニ寄手ヨリ僧ヲ寶光院ヘ遣シテ唯早速ニ降參有テ御退候ヘシ恩賞之事以後貴坊御望次第可レ被_レ出ト無_レ豫儀申ケル程ニ城中ノ者共只今死セン命ヲ遁ル、程ニ悦テ急テ城ヲソ立出ケル然者田神山之諸勢城ニ烟ノ昇ヲ見テ騷立可_レ戰様モ無カリケル間各ノ談合アリ此山ト申ニ柵ノ一重モ不_レ結シテ何ヲ便ニ抱ヘ可_レ申哉只今夜中ニ御退候ヘト申ケル程ニ同十三日ノ夜義景田神山之陣ヲ引レケル斯テ幕直ニ敦賀ヘ被_レ退物ナラハ少モ苦敷カルマシキヲ運ノ盡ヌル故カ又柳ヶ瀬村ニ并居テ談合アリ其時山崎長門守吉家進出テ申ケルハ今度當國ヘ御進發ノ事偏當家運命盡可_レ滅亡ニ瑞相ニテ御座候古語ニモ人ト而無_レ遠慮者近憂又君德アルモ惟レ臣不德モ惟臣候誠哉此言人々罷在ト云ヘモ任_レ血氣ノ勇不_レ加_レ諫言事無_レ是非次第ナリ愚臣敦賀表ニ居候者涯分可_レ申留處ニ如_レ此出張シ河合安藝守ニテ西地ヘ罷向ヒ候キ情敵ノ大將信長方之行跡ヲ傳ヘ承リ候ニ智略無雙ニシテ堅破利ヲ摧事於_レ異國ノ者項王ノ威ニ勝レ弓箭ヲ取テノ武略ハ本朝ニハ源義經木曾義仲楠正成ニモ越ヘタリ故ニ國ヲ被_レ討取_レ候事及_レ甘_レ國ニ定テ勢ハ如_レ雲霞_レ候ヘシ果報イミシキ事ハ四海ヲ掌ニ握給ヒシ賴朝公尊氏公ニモ不_レ劣加_レ之大將ヲ論程ノ

智謀拔羣ノ勇臣數多アリ先柴田修理亮丹羽五郎左衛門尉安藤伊賀守木下藤吉郎明智日向守此等之輩ハ樊噲張良ヲ欺_レ程ノ者モ也然ニ當方ハ僅ニ無_レ勢也菴虎口一旦可_レ抱者モハ或ハ討死シテ無_レ云甲斐殘黨葉武者集居タルトテモ向_レ此大敵戰_レ候ハ_レ事由々敷大事也同ク捨_レンスル命ヲ於_レ我國可_レ然節所ヘ引籠_レリ繼ヒ大軍強敵寄來ルモ時節ヲ伺ヒ驅ケ出シ合戰スヘシ若シ討負ルモ君臣諸モ相ヒ果候、キニ阿ノ淺井ニ勾引セラレテ譜代ノ住國ヲ打捨テ何クトモ不_レ知野原ニ闇々ト討死ノ屍ヲ曝_レン事口惜次第ニテ候ハスヤ定テ敵早々足壇口ヲ取_レリ猛勢跡ヲ慕ヘ候ヘシ吉家父子殿拂ヒ可_レ仕トテ立出テ今夜一定討死セント思フテ古歌ナカラ

古郷ニ今宵計ノ命トモシラテヤ人ノ我ヲ待ラン

ト云ヘリ爰ニ詫美越後守ハ僧落ナレハ詩一首綴テ石上ニ書置ケリ
萬恨千愁有_レ慕然 誰圖今夜溺黃泉 古郷公莫成愁淚 屍曝戰場野外邊

斯リケル處ニ朝倉掃部助進ミ出テ定テ夜モ更候ラン先ツ足壇ノ城迄御退キ候ヘト申ケレハ尤也トテ義景出御有テ馬ニ乘給ヘハ右往左往ニ騷立テ下人ハ主人ヲ捨テ子ハ親ヲ捨テ親ハ子ヲ捨テ我先々々トソ退キケル此間雨降リタル路ナレハ坂ハ足モタマラス谷ハ深泥ナレハ鎧ノ毛モ見エス泥ニ塗テ足跛友具足ニ貫テ蜘蛛子ヲ散スカ如ニテ其路五六里カ間馬物具捨タル事足ノ踏處無リケリ軍ノ習勝ニ乘ル時ハ鼠モ虎ト成リ利ヲ失フ時ハ虎モ鼠ト見ユル者ナレハ草木ノ陰モ怖敷メシトロモトロニ退ケリ斯リケル處ニ信長公敵コソ唯今退クト覺タ

レ急キ打立追懸討捕レ人々ト下知仕給フ自身馬ヲ早メ烟嵐ヲ捲テ被押寄既刀根坂ニテ追
 着跡ヨリヒタ切ニツ切臥セケル退ク者凡敵ニ後ヲ不被伐ト路ノ危キヲモ不厭疋壇ヲ指テ
 引退山崎長門守吉家父子飯セヤ兵共ト馬足ヲ立直シ々々下知シケレ凡大勢引立タル事ナレ
 ハ一返モ不返只我先ニト山ノ嶮岨ヲ不言馳重リケル間或ハ谷へ堰落サレ或ハ高岸ヨリ馬
 フ馳倒シテ其マ、被討者モアリ只馬物具ヲ打捨テ逃延ントハスレトモ返合セ戰ントスル
 者ハ無リケリ夜モ明方ニ成リケレハ長門守吉家子息小次郎朝倉掃部助多勢カ中へ驅入十文
 字ニ驅破リ巴ノ字ニ追ヒ廻シ四方ヲ拂テ八面ニ當リ追眞縵リ返シ合セ疋壇迄ノ間ニ五六度
 戰ヒケレハ勇氣既ニ疲レ果テ、皆討死セラレケル其人々ニハ山崎長門守吉家同子息小次郎
 同七郎左衛門吉延同肥前守其弟珠寶坊御和田三郎左衛門同清左衛門吉次鰐淵將監吉廣神九
 郎兵衛吉久山内彌五左衛門壁田圖書吉澄同七郎吉房清水三郎左衛門岩崎宗左衛門増井五郎
 左衛門木田宗兵衛宗俊田房十郎左衛門秀勝西島彦五郎吉尙鳥井與七十九歳悉ク敵ト引組々
 々刺違テ尸ハ軍門ニ曝スト云ヘ凡名ハ古今無雙ノ功ニ殘セリ去程ニ朝倉三郎景胤同孫三郎
 景健夜モホノト明ハ一合戰セントテ駒引返セハ朝倉彦四郎河合安藝守詫美越後守其外
 宗徒ノ人々續テ返シ合敵ニ三百騎カ中へ魚鱗ニ成テ驅入東西南北へ破テ通り四方八面ヲ切
 テ廻ル程ニ寄手ノ大軍モ驅立ラレテ前田佐々福富ナトモ宜々ニ成處ニ木下藤吉郎五百騎計
 ニテ折合皆悉ク討捕ケル其人々ニハ朝倉治部大輔同彦四郎同土佐守同掃部助河合安藝守一
 色治部大輔詫美越後守窪田將監細呂木治部少部伊藤九郎兵衛中村五郎右衛門同三郎兵衛同

新兵衛長崎大乘坊引壇六郎三郎小泉四郎左衛門神波宮内助溝江左馬允青木隼人佐并右兵衛
 大輔龍興此仁ハ美濃之國主タリト云ヘトモ信長ニ國ヲ奪ハレ縁者ノ好タルニヨリ義景ヲ頼
 ミテ越前ニ御座シケルカ願フ處ノ幸ナルトテ今度ノ陣ニ進發シ討レ給フコソ無慚ナレ如
 レ此五十人餘討死ス然ニ朝倉孫三郎景健同三郎景胤虎口ヲ破テ打通リ義景一處ニ成テ引レ
 ケル處ニ義景引返テ於ニ軍中ニ腹ヲ切テ屍ヲ戰場ニ捨ント宣ヒケルヲ鳥井高橋御馬ノ左右
 ニスカツテ爲將道當ニ先ツ治心ヲ泰山崩ニ於前ニ而色不戀麋鹿興ニ於左ニ而目不瞬然後可
 以制利害可以待敵先言ニモ御座候先ツ木ノ目ノ城マテ御退被レ成彼處ニテ殘勢ヲ揃可レ被
 レ成ニ一戰ニト申ケル程ニ彼峰ニ着陣有テ諸勢ヲ聚メ此處ニテ可レ防ト宣フ處ニ朝倉兵庫助申
 ケルハ我等ハ何疋不能分別候トテ馬引寄セ打乗テ行キケレハ諸卒モ悉退散シケル程ニ義
 景可レ被レ防様モナクシテ唯五六騎ニテ漸府中マテ退キ給ヒ十五日ニ府中ヲ出御有テ一乘へ
 ト急キ給ヘトモ此ニ三日馬ヲモ爾々ト不レ飼カ故ニ歩兼シヲ漸ニ引立テ策ヲ打其日晚景ニ
 谷ヘソ着給ヒケル

印牧被ニ生捕被レ誅事并朝倉彦四郎頸之事

去程ニ天正元年八月十三日義景江州敗軍ノ時究竟ノ兵共ヲ討捕テ信長公喜悅ノ眉ヲ開給ヒ
 即分捕生捕ノ實檢可レ被レ成トテ前波富田皆降人ヲ呼出テ名字ヲ吟味セラル前波案内者成カ
 故ニ何モ紛ル、所ハ無リケリ然ニ印牧彌六左衛門尉何トカシタリケン生捕リト成テ引出サ
 レケレハ信長公是ハ何者ソト問給フ前波是ハ印牧ト申者ニテ御座候ト答信長公是ハ聞及タ

ル者也何トシタレハ其體ニハ成タルソト宣ヘハ印牧申ス様未明ヨリ二三度返合前田佐々福
 富杯ト手痛ク戦ヒ勇氣疲テ候ヘハ薄手ヲ負テ候痛手ニテハヲハセテトモイトフ草臥テ候ヘ
 ハ十方ニ暮テ如レ件耻ヲ曝候ト申信長公左コソ尤ナレ死罪ヲ可レ免早々繩ヲトキ候ヘト宣フ
 印牧聞テ御赦免先以忝候雖レ然我譜代朝倉家ニ致奉公殊ニ國中奉行ノ其名ヲ汚シタル者ニ
 テ御座候蒙御免許ヲ存命仕非レ可レ保千年萬年齡萬事ハ皆空ニシテ一生ハ夢ノタハフレ也
 唯疾々誅ノ給ヒ候ヘト申ス吉繼聞テ御説御僞リハ候ハシ本領ノ事モ更ニ別義ハ有間敷キ只
 畏テ忝ト可レ被レ申ト云ヘハ印牧聞テ大ノ眼ヲ見出シ吉繼ヲ屹ト睨ミ見苦ヤ和殿モ朝倉譜代
 ノ者ソカシ殊更義景厚キ恩賞ヲ受シ身也去年コソ勘氣ヲ蒙リタレ賢人不レ事ニ君トコソ云
 ヘ忽ニ其忘ニ恩顧ニ今更信長殿ニ屬スル事人ニテハ無キソ各唯御恩ニハ一刻モ疾ク頭ヲ刎テ
 可レ給ト不惜身命申ケレハ此上ハ不及沙汰ニトテ河原ヘ引出テ切ントスレハ印牧申セシ
 ハ弓取程ノ者ヲ討捨ニスル法ヤアル腹ヲ伐ント云テ脇指ヲ乞フ即脇差ヲ出シケレハ腹十文
 字ニ搔切ワタヲツカント四方ヘナケ早々ト云ヘハ太刀取り頓テ頸ヲ討落シケリ去ハ生スル
 者ハ必滅スル習トハ誰モ知レトモ其期ニ至テハ迷フ者成ニアハレ惜キ侍哉勇士タラン者ハ
 唯角コソアラマホシケレト印牧カ心中譽ヌ人コソ無リケレ
 爰又犬間源三郎長吉ト云者頸一提來テ庭ニ置ク信長公是ハ何者ソト問給ハ前波噫无慙ヤ是
 朝倉同名童名ハ權守トテ今年十六歳ニ成候定テ彦四郎ト申ラントテ涙ヲハラノト流ス
 信長公近ク持來リ候ヘト宣給ヒ彼貌ヲツクノト御覽ノ扱モ生ヲ替タル面影サヘ無類也増

テ存命ノ容顏何計ソヤ想像テ哀ナリ其方此仁ヲ生捕テ來ナラハ可レ畏忠節ナルヘキヲ情モ
 無ク害スル者哉惣ノ物ノ哀ヲ不知唯不レ異木石汝心中不レ頼敷當座ニ誅スヘケレトモ時之
 戦功ヲ黙止スニ似タリ今日ヨリ對面叶フマシト宣ヒケル古語ニモ無情者ハ不知父恩
 無情者ハ不知君恩ト云ヘリ信長公此意ヲ以テ犬間ヲ勘當被成ケルカト云ヘル人々侍リ
 ケル諸侍立寄テ此頸ヲ見ルニ警ノ句ヒ芬々ト丹華ノ唇鮮ニ三春花ヲ細雨洒似タリ生ヲ替
 タル眉目サヘ風ニ順フ海棠ノ眠レル花ノ如ク也トテ人々涙ヲ催サヌハ無リケリ然者則信長
 公僧衆ヲ請シテ近邊ノ野邊ニテ葬禮ヲソ被成ケル誠ニ仁義ノ良將哉ト人皆感シ奉リケリ

淺倉始末記第五卷終

朝倉始末記第六

義景歸陣并開谷給事

斯テ義景十五日館へ入セ給へ先々ノ歸陣ニ引替リ殿中蕭條寂寞トシテ紅顔如レ華ノ成シ上蘆達モ一朝ノ嵐ニ誘ル心地シテ涙ニ袖ヲシホリ御殿ニ入セ給フヲモ昔ノ形勢ハ更ニ無シ林頭ニ星ヲ列シ武士老臣モ被レ掩滿天ノ雲ニ伺公ノ人獨リモ無リケレハ世上ノ事何トカ成ヌラント可レ被尋問便モナシ抑何事ナレハ是程マテ佛神ニモ放サレテ淺猿カリツル憂身ナル哉ト前業ノ程モ拙ク想像給ヒ世ノ中何ニ付テモ憑ミ少ク思給フ處ニ式部太輔鳥居高橋參ケレハ宣ヒケルハ我運命既ニ盡テ此躬ニ成事は全ク戰ノ咎ニアラス天我ヲ亡セツ然者明日ニモ信長寄來ラハ陣中へ驅入尸ヲ軍門ニ曝シ恨ヲ再生ニ可レ報トテ越前ノ重器ヲ取集メ悉燒捨ント仕給ヒ又愛王丸殿トテ今年四歳ニ成給フ最愛ノ一子ヲ呼ヒ出シ給ヒテ御膝ノ上ニ置レ汝未幼稚ナレハ我ニ死ヲクレテ敵ニ生捕レ憂目ヲ見セン事モ可レ被心憂若亦我爲敵討死ノ汝ヨリ先ニ立タハ生前ノ思ヒ難レ忍然者汝ヲ先キ立テ心安思置キ明日ノ軍ニ討死シテ黃泉ノ苔ノ下三途ノ河ノ底マテモ父子ノ恩愛ヲ捨テシト思フトテ左ノ袖ニ涙ヲ拭ヒ右ノ手ニ刀ヲ提テ子息ノ害ヲ進メ給フ時鳥居前ニ進出テ申ケルハ生ヲ全フシテ命ヲ待事ハ遠クシテ難ク死ヲ輕クシテ節ニ臨ム事ハ而シテ安シ先暫ク御家ノ重器ヲ燒拂ヒ給ハス若君ヲ殺シ給フ事ヲ留マラセ給ヒ何方ニテモ可然節處へ御退有テ敗軍ノ士卒ヲ被集一戰可被遊齊晉七十度ノ戰ニ重耳更ニ勝事無リシカトモ遂ニ齊境ノ戰ニ打勝テ文公國ヲ保テリ萬死ヲ

遁テ一生ヲ得百度負テ一戰ニ利有ハ合戰ノ習ニテ御座候ト申ケレハ義景左ニ不レ及ト宣ヒケレレ鳥居高橋式部大輔モ一同ニ申ケレハ左アラハ加州ヲ後ニシテ豊原寺へ退候へト宣ヒケルヲ式部大輔被レ申ケルハ只大野へ御退可然哉彼所ハ山中深ク其上平泉寺味方申程ナラハ信長勢モ輒ク攻入候マシト申ケル程ニ向後ノ事諸事式部大輔ニ任スヘシト宣ヒテ同八月十六日大野郡へ退キ給フヘキニ定リケレハ谷中老若男女貴賤上下泣キ悲ミ上へ下へ捫擇シ皮籠櫃ヲカツキ子ヲ逆ニ負ヒ手ヲ引キ腰ヲ推シ右往左往ニ走リ行キ東西南北へ馳走シ逃行ク形勢目モアテラレス周章スル事詞モ更ニ不レ被レ及斯ル處ニ樂山清左衛門トテ老士アリケルカ女房ニ向テ申ケルハ我レ事ノ様子ヲ案スルニ朝倉當國ヲ治給ヒテ今五代ニ至テ安然ナルカ中則傾月盈則欠ルト周易ニ言ヘル理リ也某不肖ノ身也ト云ヘレ武恩ヲ蒙テ齡已ニ七旬ニ及ヒ今ヨリ後存命タリト云レ指タル思ヒ出モ無キ身愁ニ長生ノ武運傾ン事ヲ見ンモ老後ノ恨臨終ノ耻トモ可レ成リヌ御邊モ出サセ給ヘトテ我カ妻女ト又十歳ニ成ル男子ヲ引行テ川邊へ立出テ淵ヲ尋ネソヒエタル岸壁ニ居並テ西ニ向テ手ヲアハセ暫ク念佛シテヌケハ玉散ル計ナル脇手ヲ以テ女房ヲ刺殺シ川へ撞落シ又小兒ヲモ刺殺シ頓テ淵へ撞落シ扱我カ腹十文字ニ搔切テ即川へ飛入り親子三人諸尸ニ底ノ水屑ト成ニケリ然ニ此小兒容顏美麗世ニ勝レアタリモカ、ヤク計ナレハ見ル人不レ及レ申ニ聞ク人々ニ至ルマテ哀レナリケル次第カナト袖ヲシホラヌハ無カリケリ故ニ此淵ヲハ兒カ淵トソ人皆云ヒ合ヒケリ角テ此一乗ノ谷ト申ハ文明三年ニ朝倉英林宗雄居士當國ヲ討捕給ヒシヨリ以來タ一百餘歳靜謐ナリケル

處ナレハ金銀珠玉ハ不及申種々ノ繪賛財寶充滿ノ青蚨幾萬貫ト云事ヲ知ラズ藏々ニ詰置
シヲモ打捨テ、出給ヒケリ去ハ古語ニ上主ハ以賢爲寶以珠玉不爲寶珠玉多ハ生災能積
而能散スヘシト云ヘリ實ナル哉此言ハ然モ御内外様ノ人々モ悉ク退散シケル程ニ大野ハ御
供侍ニハ櫻井新左衛門平井三位父子三人築山小五郎藤田忠左衛門加藤新三郎鳥井兵庫助高
橋新助山内七郎左衛門父子扱ハ式部大輔景鏡也御曹司ハ一刻計リ先ニ御出アリ供人ニハ齋
藤兵部少輔同新三郎小川三郎左衛門父子同六郎左衛門半田宗兵衛父子三人今度源三郎九津
見清右衛門西山僧眞勝計召具セリ高德院殿ノ御供ニハ窪田新右衛門中村平五郎石來民部丞
上田五郎左衛門鳥津此人々計也サラハ重代ノ御式具并朝倉家ノ重寶共ヲ具スヘシト撰集
メケルニサシモ當家代々尊崇ノ炮貝其外朝日夕日ノ二ツノ鏡モ失ニケルコソ不思議ナレ同
十六日巳ノ刻ニ御館ヲ御出有テ氏神赤淵大明神へ御社參アリ靜ニ啓白シ給ヒテ數代當社ニ
頭ヲ傾ケ雖年久今ハ家運盡テ牢々ノ體ト成リ一度此所へ可立還モ不決定レハ今ヲ限リノ
參詣トコソ覺エ候トテ御涙セキアヘサセ給ハス抑此御神ハ元來但馬國ヨリ當所へ移シ奉レ
リ當初朝倉太郎大夫高清代ニ當テ平家ノ依爲ニ味賴朝公ヨリ本領沒收セラル因茲鎌倉へ
下テ本領安堵ノ旨ヲ歎キ申ト云ヘモ更ニ無御承引ノ空ク年月ヲ送リケル處ニ於下野國大
剛強ノ白猪有テ人民ヲ惱スノ間近隣ノ武士彼レヲ留ントスレモ不叶切テ人ヲ損サスノ間
鎌倉へ訴訟申ケル其時博士ニ仰テ占アリ博士申ケルハ是ハ關東ノ手柄ニハ難レ及關西ヨリ
來タル武士ノ中精兵ノ輩ニ可被仰付ト申ケル依去其仁ヲ選レケルニ但馬國ヨリ爲ニ訴

訟來リタル朝倉高濤ニ勝ル兵アルマシト僉議事窮ケリ其比高濤モ氏神赤淵大明神ヨリ彼
ノ白猪ヲ可平由依蒙靈夢即御請ヲ申下野ノ國ニ馳下リ忽猛猪ヲ射留ラレケル因茲賴朝
卿ヨリ但馬國本領安堵ノ御教書ヲ給リ子孫相續有テ今於越前之國ニモ此明神ヲ尊崇シ給ヒ
ケレハ今一入義景モ名殘惜ク被思召金銀寶物共ヲ神前ニ捧ケ給ヒテ時刻移レハ其レヨリ
モ御馬ニ被召テ安波賀ノ村モ餘所ニ見テ何クヲ指テ行ク道ノホウキヤ谷ノ憂キ思ヒ殊ニ
暴風ノ身ニシミテ名ニシ逢タル鳴ル瀧忘ナラネハ見モ分ヌ田尻ノ村ノ細道ニ折レ臥ス草ノ
露涙濕タル袖ノ打續急ク宇坂ヤ市波ノ音モ鳴瀨ヤ小和清ソモ淺谷ト聞シカト漲ル河ノ底深
ミ渡ノ舟モ鳥ニ着ク憂モツラキモ堺寺百本繪戶縫原ヤ早大宮ト聞カラニ辨才天ヲ伏拜ミ熊
野堂ニ詣テツ、其里人ヲ近付テ緣起ヲ聞ハ殊勝ナル其古モ義經ノ北國下向ノ折節モ此ノ御
社へ入り給ヒ一夜ヲ明シ給シニ其夜大雪降り積ト當權現ノ靈夢ニテ櫓ヲ與ヒタヒ給ヒ輒里
ニ出給フ其時ヨリモ此堂ヲ櫓堂ト云トカヤ吾ニモ利生御座頓テ運ヲ開ント深ク祈誓シ給ヒ
テ諏訪ノ社ヲ伏拜ミ其立去テスコノト憂月ニ懸ル秤リ石坂ノ峠モ打越テ坂戸ノ村ノ夕煙
心細モ打詠メ近フ見シモ今ハ唯イヤ耻ケ敷鏡山曇テ見エヌ戌山ヤ下村ヲ馬手ニ見テ亥山ノ
城ハ是カトヨ洞雲寺ニハ夜ニ入テ戌ノ刻ニツ着給フ然ハ先平泉寺ノ大衆ノ意ヲ窮爲可被
御覽ニ書狀ヲ被遣ケル

態ト一筆令啓達候仍於江州北表ニ及ニ合戰候所不慮ニ東方ノ士卒令敗北之條至此
郡聚殘黨重而可勵一戰ヲ然者貴寺之一統廻壽策被抽忠功者宜依恩賞望者也誠

惶謹言

元龜四年可然

天正元年八月十八日

朝倉左衛門督義景判

平泉寺

衆徒中

如斯ノ書狀ニ黄金名筆ノ繪讚相副へ被遣ケリ然者則一山ノ大衆僉義シテ云ク此條可有如
何篇目ソヤ義景ニ可被成同心事尤以本意也數代ノ國主ノ忘恩願致別心天ノ照覽難量
雖然義景同心スルナラハ信長公明日ニモ攻寄可有破却ト思案半ノ處ニ若大衆申ケルハ義
景是程マテ運命盡果給ヒケル間二度ヒ世ヲ開キケン事難有リ後日ノ不可及沙汰急キ各
々打立テ義景御陣所ノ近邊ヲ放火シテ信長公ト同心ノ驗シヲ見セ給ヘト無情ク申ケル此
義各尤也トテ使者未飯ニ大衆打立テ近里ヲ放火セリ斯リケル處ニ式部大輔景鏡ヨリ平泉
寺へ立使者前々某對義景意恨在之條屬敵滿山速ニ景鏡ニ可被成御同心ト云々

一乘谷中放火之事

斯リケル處ニ十八日ノ未明ヨリ廿日ニ至ルマテ一乘ノ谷中屋形ヲ始トシテ館々家々佛閣僧
坊一字モ不殘放火シテ灰燼ト成テ後其跡ヲ見レハ守家ノ雞犬悉ク飛失テ寒鴉閃々トシテ
前山ニ去リ名ノミ殘レル狗ノ馬場春風ノ音ニ剪庭前ノ樹根ヲ副リ殘ス柳ノ馬場路ハ草葉ノ
打茂リ門板橋取放レ鐘ノ響モ絶音ス扱又篠ノ小篠ヲ分ケ入テ見レハ古ノ鶴ノ間猿猴ノ間
數寄ノ座敷ノ跡ヤラン草茫々トシテ蕪芝蘭茂合ヒ郊原寂寞トシテソコモ知ラヌ傍ニ奇巖奇

石峙テ細雨斜ニ降り洒回祿ノ餘烟僅ニ殘リ園ノ樹モ春ヲ忘ル、風情ニテ色香モ見エス梅カ
枝南殿ニ詠花輩ヲ華ハ春毎句へ不飯東樓ニ翫月與秋來レモ身ハ何方ニ去ヌ感哉譬ハ吳
王滅ノ後姑蘇臺ノ露滾々タリ秦皇去テ咸陽宮之烟行々タリ誠目前ニカ、ル不思議ヲ見ル事
ヨト如何ナル賤男賤女マテモ袂ヲ不濕ト云事ナシ先年義昭御成有テ南陽寺ノ糸櫻ヲ御覽
シテ御歌ヲ被遊ケル

諸トモニ月モ忘ルナ糸櫻年ノ緒長キ契リト思ハ、ト御詠アレハ義景

君カ代ノ時ニ相ヒ逢フ糸櫻イトモ賢キ今日ノ言ノ葉ト詠セラレケル事モ昔シ語リニ早
ヤ成リテ南陽寺モ亡ヒ失セ糸櫻モ今ハナシ朝夕門外ニ紅往紫來袂ヲ連テ勝遊シ春秋恍頭ニ
詠花月歌舞ヲセシ恩愛ノ昔ノ朋顔花忽ニ盡テ何ノ處ニカ去ソ又酒宴榮樂ノ鼓ノ聲ハ松風ノ
音トナリ宮殿樓閣ハ邯鄲一炊ノ夢ト醒テ跡モナシ戀ヘトモ願ヘモ甲斐モナク唯野蛩ノ音ヲ
而已獨リ啼アカシケリ

信長公越前府中へ御着陣之事

去程ニ魚住備後守景固ハ江州中ノ河内口ニ敵ノ爲ニ押勢義景被指置ケルカ忽ニ心違シ敵ニ
屬ノ嫡男彦二郎ヲ敦賀へ遣シ信長公ニ申ケルハ義景ハ十六日ニ人數漸二三十騎計ニテ大野
郡へ被落候式部大輔モ不致同心平泉寺ノ大衆モ一味不仕左様ニ御座候へハ國中ニ御敵
ハ一人モ無御座候急キ先ツ府中表へ可被成御進發申ケル因茲信長公同十九日府中ニ着
陣アリ其粧ヒ天ヲ響シ地ヲ動シ大軍猛卒催シ來シ有様古今無雙ノ御威勢前代未聞ノ形勢也